

2021 年度 博士論文

カメラによって選手・競技会場・都市景観を映し出す
五輪景観の構想・計画・実現の経緯に関する研究
—ロンドン 2012 年大会を事例として—

RESEARCH ON PROCESS OF CONCEPT, PLANNING AND IMPLEMENTATION OF
OLYMPIC-SCAPE, IMAGE OF ATHLETES, COMPETITION VENUES AND CITYSCAPES
BROADCASTED BY CAMERAS
-Case study of London Olympic games 2012-

東京都立大学大学院
都市環境科学研究科
観光科学域

17942402 山嵯一也
指導教員 岡村 祐
2022 年 3 月

要旨

五輪は世界が注目するスポーツの祭典であると同時に、開催都市・国の文化を世界に発信する貴重な機会でもある。しかし、都市インフラの整備や大会後の施設維持管理などにかかる莫大な費用を理由に、近年多くの都市が招致を断念する傾向が見られる。しかし、テレビ放映権料が高騰していることから分かります、五輪競技の映像コンテンツとしての価値は依然と高く、国際五輪委員会(IOC)は、映像を意識した五輪を推進するべく、2001年に大会の映像を統括するオリンピック放送機構(OBS)を設立し、オンライン上の独自チャンネル(五輪チャンネル)を開設している。2012年に開催されたロンドン五輪は、このIOCの思惑を巧みに取り込んだ五輪招致計画を立案し、実現させた。それは、市内東部ストラトフォード地区をメインパークとする再開発と共に、市街地の広場や公園を会場とし、そこに仮設競技会場を設置し、競技の背景に都市景観を取り込み、テレビ映像を通じて世界中にロンドンの都市環境や文化を発信するというものであった。

そこで、本研究では、ロンドンの都市空間の構造と「五輪景観」との対応関係や、関係者の役割に着目し、ロンドン五輪における大会招致から実施のプロセスのなかで、いかにして「五輪景観」という概念が生み出され、競技会場の計画・設計、そしてテレビ放映のなかでそれが実現していったのかを明らかにする。なお、主な研究方法としては、五輪関係者へのインタビュー調査や計画・設計図書の解読である。

以上の背景を踏まえ、本研究ではロンドン五輪の競技会場を研究対象として、選手、競技会場、都市景観の各要素をテレビカメラによって重層的に映し出す映像を「五輪景観」と定義した。これまで、五輪の開催計画や競技会場の計画・設計に関して、都市(再)開発と五輪との関係性(ニリオ, 2015 や Nimmo 他, 2011)や仮設競技会場の有用性(Bulley 他, 2015 や Epstein 他, 2011)などの視点からの研究はあったが、周辺環境・景観を取り込むための建築計画・設計上の技術や、五輪招致・開催計画立案から競技会場の計画・設計、そしてカメラポジション・カメラワークの決定に至る一連のプロセスに着目した研究はなく、ここに本研究の新規性を見出すことができる。また、IOCが定める競技会場設計に関する「テクニカルマニュアル」においても、上記の視点は欠落しており、実務的にも本研究の有用性は示唆される。

第2章では、本研究の目的を達成するために必要な「五輪景観」という概念の定義と研究における位置付けを整理し、調査事例となる五輪景観を生み出す競技会場の抽出を行う。

その前提として、まず、景観研究(特に借景研究)における五輪景観の位置付けを整理する。次に、様々な周辺都市環境との調和を実現している競技施設の実例を挙げ、空間的構造を概観する。これらを踏まえ、公式記録動画等において、背景に都市景観を取り込んだ競技会場は 15 事例確認されたが、このうち当該景観が既存のロンドン眺望保全計画において保全対象となっている、すなわち都市の歴史的・文化的価値が認められる「五輪景観」に相当するものは、7 競技会場(8 競技)であった。アリーナ競技会場から都市景観を映し出すものを「シーン型五輪景観」とし、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場と、グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)がこれに該当する。また、市街地を競技会場とし、選手の背景に都市景観を映し出す「シークエンス型五輪景観」とし、代表例としてグリニッジ・パーク馬術競技会場(クロスカントリー競技)と市街地マラソン競技会場がこれに該当する。

第3章では、大会招致から実施計画立案の段階において、「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトがいかんして生まれ、それがロンドン五輪における各競技会場においてどのように反映されたのかを、過去の五輪大会との比較や、ロンドン五輪の全 36 箇所の競技会場の特徴把握から解明した。招致検討期間と招致活動期間において、英国五輪協会の命をうけ、元ホッケー英国五輪代表選手であったデイビッド・ルッカーズ(David Luckers)はロンドン市における五輪開催の実現可能性の検討を開始し、大会コンセプトとメインパークとなる敷地選定を行った。最終的にはロンドン東部ストラトフォード地区の再開発計画に、五輪計画を重ねる形で採用された。並行して、五輪開催による費用対効果の検証において、観光促進を掲げ、観光政策を推進する政府の招致への支援を受ける。それに伴い、「都市景観を映し出す五輪」という具体的なコンセプトが固まっていく。さらに、招致活動が進むにつれて、市内ランドマークを競技器具として見立てた招致ポスターや市内を東西に流れるテムズ川を模した招致ロゴなども作成され、このコンセプトを体現した。

第4章では、「シーン型五輪景観」に該当する五輪競技会場の計画から実現に至る経緯において、開催都市ロンドンや競技団体、そして建築設計関係者が、敷地の空間的特性や周辺の都市景観をいかに読み取り、それを競技会場の建築計画・設計のなかで、いかに「五輪景観」を生み出したのかを明らかにした。前提として、ロンドンでは、観客に見せ

るべき、あるいは世界に発信すべき、開催都市の歴史や文化を象徴する都市景観の価値が共有され、保全されていた。また、このような景観を望む視点場が、競技場の面積要件を満たす程度の敷地規模を持つ公園や広場であった。これは、まさに中心部に大規模な公園・緑地を有し、都市保全に取り組んできたロンドンの強みであったと言える。その上で、計画検討期間や招致活動期間に、都市景観を映し出す五輪という大会コンセプトの構想とそれを具現化するための競技会場敷地の選定を行った。そして、招致活動期間には招致委員会や建築事務所によって競技会場の周辺都市景観のランドマークへの指向性を持った観客席の形状や配置といった建築計画・設計レベルでの工夫が行われた。

第5章では、競技する選手と競技会場の背景に映し出された都市景観について、カメラがどこから、どのようにして映し出したのか、公式記録動画におけるカメラポジションとカメラワークの調査・分析から解明する。その際、借景技法によって景観を繋ぐという社会的意義の観点から五輪景観の構造を読み解く。招致計画期間から開催準備期間にかけて、五輪景観を生み出す競技会場という構想を具現化するために OBS と設計事務所が調整し、カメラポジションとカメラワークを計画していた。様々な競技特性の映像に対して異なるカメラワークで競技する選手とその背景の都市景観を映し出していた。

シーン型五輪景観（ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技等）は、アリーナ内にカメラを設置し、アリーナ内にある様々なカメラポジションのカメラをスイッチングしつつ、それぞれのカメラも様々な角度（ロー&ハイアングル、上空から）から競技する選手と背景の都市景観を映し出した。選手に近い場所のローアングルからカメラが見上げることで、都市のスカイラインを重層的に映し出した。逆に、競技会場の上空に張ったケーブルに吊るしたカメラからは、競技する選手と競技会場を周辺都市景観の中で俯瞰的に映し出した。

他方、シーケンス型五輪景観（市街地マラソン競技会場等）では、市街地中心部を競技会場として、バイク等の車両が競技する選手と並走しながら、背景の都市景観を次々と映し出す映像となった。加えて、コース沿いに設置した定点カメラは動きのある競技選手を捉え、次々スイッチングしていく。これにより、選手の背景にある都市景観が次々と場面転換する映像となる。競技会場が周回コースならば、選手が何度も同じ場所を通過するため、周辺都市景観を映し出す機会が増える。しかも選手が先頭集団、後続集団など分散れば、さらに映し出す機会は増えることになる。これはスポーツのライブ中継という不

確定要素の多い撮影条件を補完することになる。

第6章では、前章までの知見を踏まえて、五輪の招致から開催、そして競技実施のプロセスにおいて、どの段階で、誰が、何をすべきであるかという要領で、「五輪景観」の創出・発信のための計画プロセスを整理した。

開催約15年前から、ロンドンにおける五輪開催の可能性について英国五輪委員会が主導し、検討を開始し、その計画検討期間において既に、開催都市であるロンドンの資産である「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトが構想されていた。つづく開催約9年前からの招致活動期間に招致委員会が設立されると、策定した招致計画のなかで、大会コンセプトを具現化するための競技会場の敷地が選定された。世界文化遺産である王立公園(グリニッジ・パーク馬術競技会場)やセキュリティの厳しい首相官邸裏の広場(ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場)を敷地とする競技会場は、招致計画の目玉となった。招致成功後、開催約7年前からの開催準備期間に入ると、競技会場の形状とその配置の検討を開始した。各敷地内における規模などの制約から観客席の一部を開放もしくは低層化したことで、都市景観への指向性を持つ形状になり、都市を見せるコンセプトがより明確化した。他にも競技会場敷地において直面する現実的な課題を踏まえ、組織委員会は常に代替地を視野に入れながら計画を進めていた。逆に、「都市景観を映し出す五輪」の実現に向けて、映し出される周辺都市景観に魅力が欠けているという理由で、開催の約2年前に、市内東部のメインスタジアムをゴールとするコースから市内中心部を周回するコースへと変更した市街地マラソン競技会場の例もある。開催の約1年前からの競技会場建設期間になると、競技会場敷地のある各行政区から建築許可の申請および承認されるなどの連携とともに、敷地となる公園や広場などは多くの市民が日常的に活用しているので、住民説明会などでの丁寧なコミュニケーションが不可欠となる。また、日常的に様々なイベントが開催されるなか、敷地とその周辺を建設現場として使用するには、夜間での作業などを視野に入れるなど、開幕直前の限られた時間で建設する必要がある。そして、五輪開幕後の大会開催時期には、五輪競技中継という、不確定要素の多いスポーツ中継において、競技する選手の背景に都市景観を映し出すために、その不確定要素の軽減が重要となる。そのために、繰り返し競技や、周回コースを設定することで、異なる選手や異なるプレーを映しながらも、その背景には周辺都市景観を映し出す機メインスタジアム時に、競技会場の観客席の形状を開放もしくは一部低層化し、開催都市の象徴と

なるランドマークへ指向性のある配置にしたことで、競技中継でありながら、都市景観を映し出す機会を増やした。

第7章では、本研究の結論を以下のように整理した。まず、ロンドン五輪では、その五輪招致を目指す都市（ロンドン市）と国（英国政府）の五輪委員会が立案する招致計画において、「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトが共有され、これが、大会招致や競技会場の選定から計画・設計（とりわけ観客席の配置や形状）、そしてカメラポジション・カメラワークの設定に至るまで、一貫通貫していたことで、各計画プロセスにおける各関係者の拠り所となった。くわえて、招致の早い段階から広場や公園、そして眺望景観など都市空間の構造の特徴を読み込み、それを競技会場のナカに設置したカメラで、競技する選手の背景にあるソトの都市景観を映し出す各競技会場の計画・設計に活かした。そして、最後に、開催都市の象徴的な景観を取り込んだ注目度の高い映像としての「五輪景観」が、とくにマイナー競技や、都市文化のなかで育まれてきたアーバンスポーツ等の新競技の普及促進という点において、今後有用性が増してくることを展望した。

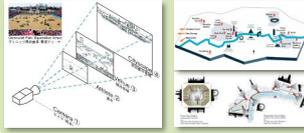
以下に、五輪景観景観ダイアグラムを中心とした本研究の流れを展望する。調査分析の章である3, 4, 5章の中で、3章で大会コンセプト立案の経緯を解明し、4章と5章で競技会場の計画・設計論とカメラポジションとカメラワークを分析する。

序章

研究背景：
五輪の現代的課題、映像五輪、
そしてロンドン五輪2012



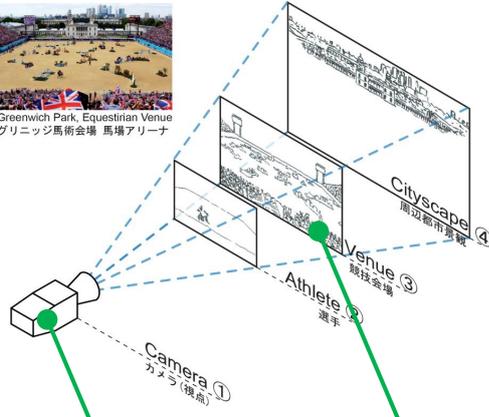
研究目的：
競技会場の背景に都市景観を
見せるコンセプトの立案方法と
競技会場の計画・設計の解明



2章

既往研究：
建築計画、景観研究、都市計画、
メディア研究分野(五輪景観の構
成要素に対応)を整理

五輪景観ダイアグラム



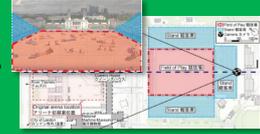
5章
五輪景観を
映し出す
カメラポジションと
カメラワーク論



3章

大会コンセプト立案と五
輪景観を生み出す競技
会場の抽出

4章
競技会場
建築計画・
設計論



6章

考察:「五輪景
観」の計画プロ
セスを一気通
貫に考察

7章

結論:五輪招致か
ら実施の過程の
各時期の重要事
項を整理



図0 本研究の流れ

目次

要旨	3
1. 序論	16
1.1. 研究背景	16
1.1.1. 五輪招致・開催をめぐる現代的課題	16
1.1.2. 五輪における映像コンテンツの重要性	20
1.1.3. 五輪開催の現代的意義	27
1.1.4. 2012年ロンドンオリンピック	32
1.2. 研究目的	54
1.3. 研究対象	58
1.4. 既往研究のレビュー	59
1.4.1. 五輪競技会場の建築計画・設計（建築計画研究分野）	59
1.4.2. 五輪と都市景観（景観研究分野）	59
1.4.3. 五輪開催と都市計画・開発（都市計画分野）	60
1.4.4. 五輪とメディア（メディア研究分野）	60
1.4.5. 本研究の新規性	61
2. 五輪景観の定義と類型、および五輪景観を生み出す競技会場の抽出	76
2.1. 景観研究における五輪景観の位置付け	76
2.1.1. 借景研究における五輪景観の位置付け	78
2.2. 周辺都市環境と調和する競技施設の空間的構造の傾向	81
2.3. 五輪景観の定義と本研究における位置付け	85
2.3.1. 五輪景観の定義と構成要素	86
2.3.2. 五輪景観の本研究における位置付け	87
2.4. 五輪景観の分類_シーン型とシークエンス型	89
2.5. 「都市景観を映し出す競技会場」から「五輪景観を生み出す競技会場」への抽出	93
3. 五輪景観を生み出す競技会場に至る大会コンセプトの立案とその変遷	108
3.1. はじめに	108
3.2. 過去の五輪との比較から見るロンドン五輪の競技会場の特徴	110
3.3. 都市景観を映し出す五輪コンセプト立案経緯	113

4.	五輪景観を生み出す競技会場の敷地選定と観客席のデザイン	132
4.1.	はじめに	132
4.1.1.	競技会場計画の実現・経緯と関係者の関わりを解明する理由	134
4.1.2.	競技会場の構成要素と建築計画・設計の論点	137
4.2.	研究対象事例の抽出	139
4.3.	事例調査1__グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)	141
4.3.1.	五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造	141
4.3.2.	五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯	143
4.3.3.	五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置	145
4.4.	事例調査2__ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場	146
4.4.1.	五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造	146
4.4.2.	五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯	148
4.4.3.	五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置	150
4.5.	小結	151
5.	五輪景観を生み出す競技会場のカメラポジションとカメラワーク	160
5.1.	はじめに	160
5.1.1.	五輪競技会場とカメラポジションの関係性とその変化	162
5.1.2.	個人が主体的に五輪を視聴する環境構築__五輪チャンネル	164
5.2.	借景構造から読み解く五輪景観	166
5.2.1.	借景は内部と外部環境と繋ぐ社会的行為	166
5.2.2.	五輪景観が借景の景観構造によって繋ぐもの	169
5.3.	研究事例対象の抽出	171
5.4.	カメラポジションとカメラワーク	173
5.5.	事例調査1__ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場	177
5.5.1.	競技と競技会場の特性	177
5.5.2.	調査結果および考察	178
5.6.	事例調査2__市街地マラソン競技会場	182
5.6.1.	競技と競技会場の特性	182
5.6.2.	調査結果および考察	183
5.7.	事例調査3__グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技、クロスカントリー競	

技)	190
5.7.1.	競技と競技会場の特性 _____ 190
5.7.2.	調査結果および考察 _____ 193
5.8.	小結 _____ 196
6.	五輪景観の創出・発信のためのプロセス _____ 206
6.1.	はじめに _____ 206
6.2.	計画検討期間(1997年～2003年) _____ 207
6.3.	招致活動期間(2003年～2005年) _____ 208
6.4.	開催準備期間(2005年～2011年) _____ 209
6.5.	競技会場建設期間(2011年～2012年) _____ 210
6.6.	大会開催期間(2012年) _____ 211
6.7.	まとめ _____ 212
7.	結論 _____ 218
7.1.	各章の要点 _____ 220
7.2.	限られた時間の中で多くの関係者をまとめる大会コンセプト立案 _____ 222
7.3.	都市構造の特徴を余すところなく取り込んだ競技会場計画 _____ 226
7.4.	建築のナカからソトの都市景観を映し出す競技会場計画 _____ 228
7.5.	今後の五輪における競技、放送に貢献する五輪景観 _____ 229
参考資料	_____ 237
資料1	都市景観を映し出す競技会場の映像分析 _____ 237
資料2	ロンドン五輪レガシー現地調査 2018 概要 _____ 247
資料3	ロンドン五輪レガシー現地調査 2019 概要 _____ 251
引用文献および参考文献	_____ 261

第 1 章

序論

1.1. 研究背景

- 1.1.1. 五輪招致・開催をめぐる現代的課題
- 1.1.2. 五輪における映像コンテンツの重要性
- 1.1.3. 五輪開催の現代的意義
- 1.1.4. 2012 年ロンドンオリンピック

1.2. 研究目的

1.3. 研究対象

1.4. 既往研究のレビュー

- 1.4.1. 五輪競技会場の建築計画・設計（建築計画研究分野）
- 1.4.2. 五輪と都市景観（景観研究分野）
- 1.4.3. 五輪開催と都市計画・開発（都市計画分野）
- 1.4.4. 五輪とメディア（メディア研究分野）
- 1.4.5. 本研究の新規性

1. 序論

本章では、まず、研究背景として、近年、競技会場やインフラ施設への莫大な投資と大会後の維持費への懸念から、オリンピック・パラリンピック(以下、五輪)招致を断念する都市が増えている事実に加え、新しい五輪像を模索する国際五輪委員会(International Olympic Committee, 以下、IOC)からの提言を紹介する。そのようなIOCの提言に沿う形での招致計画を立案したのが2012年に開催したロンドン五輪であり、ロンドン五輪は市内中心部において仮設競技会場を多用し、競技する選手の背景の都市景観を映し出し、世界のスクリーンに発信された。以上のような背景を踏まえて、ロンドン五輪の競技会場を調査事例として取り上げ、調査する本研究の目的を確認する。

1.1. 研究背景

1.1.1. 五輪招致・開催をめぐる現代的課題

相次ぐ五輪招致都市の断念。五輪開催は競技会場、都市インフラの整備などに莫大な投資だけでなく、大会後の施設の維持費などが必要となり、イタリアのローマやドイツのミュンヘンなどが2024年夏季五輪の招致活動の途中において財政難、住民投票否決を理由に招致を断念している。2024年の招致レースにおいて、開催都市の立候補都市がなり手がいない現状を鑑みてIOCは、最後の2都市に残ったフランスのパリとアメリカのロスアンゼルスに対して、2024年と2028年の夏季五輪の開催権を分け合う案を2019年6月のICO総会において提案し、決定した。2024年はパリ五輪、2028年はロスアンゼルス五輪という限られた立候補都市を逃したくないIOCの苦悩をこの2都市同時決定から見て取れる。

(1) クーベルタン伯爵の時代で既に抱えていた五輪開催の課題

五輪開催に向けた莫大な経費負担を懸念した開催都市の思いが、立候補都市の減少を生み、開催都市の2都市同時決定というIOCの荒業を生み出したわけだが、実は、五輪開催都市の費用負担問題は近代五輪を生み出したと言われるピエール・ド・クーベルタン伯爵の時代(1900年代初頭)から議論されていた。以下、クーベルタン伯爵の五輪開催において費用が高騰しつつあることへの懸念の声を紹介する。

“もし、不必要にも関わらずとても大規模な恒設施設が建設された最近開催された五輪に

においてしばしば過度な費用が生じていたら、とても残念なことである。仮設構造物でも十分であり、最終手段として、たくさんの人が利用する機会が多く見込める場合において、これらの恒設建物を推奨する。もし、これらの費用が未来の五輪招致への立候補を検討している小さな国をためらわせたなら、とても残念なことである。”¹

クーベルタン伯爵の時代から、五輪を開催することによる開催都市への費用負担や都市計画への影響などは長年続いた。大会後にインフラ設備への投資費用の回収や競技会場の大会後の後利用対策や維持費負担、すなわち、負の遺産問題に悩むアメリカのモン트리オール五輪のような事例を鑑みて、IOC は招致計画においてレガシー計画も 2012 年の夏季五輪の招致計画から立候補都市が提出する招致ファイルにおいて記載することを要項に加えていた。

また、1990 年代後半に白熱する立候補都市間の招致レースにおいて、立候補都市の招致計画を評価する評価委員への過度な接待が、IOC 委員への汚職問題へと繋がり、五輪への失望を恐れた IOC はその過度な開催費用を抑えるための調査委員会を設立し、その委員長であったリチャード・パウンド氏のレポートが 2003 年 7 月にチェコのプラハで開催された第 115 回 IOC 総会に提出された。今一度、過度な設備投資を必要しない五輪開催を目指すことを確認するものであった。また、同時に、IOC へのその後の五輪に対する思惑もこのレポートからは読み取れる。それが本研究のテーマにも関連する映像を意識した五輪、というテーマであったが、まず、過度な五輪開催を抑制する IOC をレポートの概観を次節で紹介する。

(2) 五輪開催費高騰化抑制のためのレポートに込められた IOC の思い

2003 年 7 月にチェコのプラハで開催された第 115 回 IOC 総会に提出したレポートがある。「五輪競技調査委員会(Olympic Games Study Commission)」というタイトルのレポートは高騰化した五輪を懸念した IOC が今後の五輪開催の指針と同時に、招致を考える世界の立候補都市への指針へとなるものであり、同委員の委員長であるリチャード・パウンドの名で提出されている。高騰化する開催費、主に施設建設費および維持費、を抑制するための主催者からの提言であり、1990 年代後半に起こった IOC 委員会の汚職事件などへの信頼を回復するための声明文であると言ってよい。46 ページからなるこのレポートの概要は以下となる。

- IOC は正の遺産(*positive legacy*)を開催都市にもたらすことを五輪憲章に盛り込んだこと²。
- 競技会場の大会後の維持費は低く見積もられること³。
- 大会の放送について、世界の視聴者のリビングルームに向けた大会計画を考えると(後述)⁴。
- 競技会場に関して、より多くの仮設競技会場の採用と、計画的に競技会場のクラスター化を目指し、大会後の競技会場の利用を注意深く考慮すること、大会の重要さはレガシー計画を最大化することである⁵。
- 恒設施設は大会後のレガシー計画が明確な場合のみ建設し、可能な限り仮設施設の採用を推奨する⁶。
- 競技会場選定の以下の規則の採用とする。まず、既存競技会場を、もし必要ならば改修して利用する。次に新しい競技会場はレガシーとして必要な場合のみ、かつ可能な限り可変的に活用できる場合において建設する。そして、レガシー計画がない場合は仮設による解決策を探す⁷。

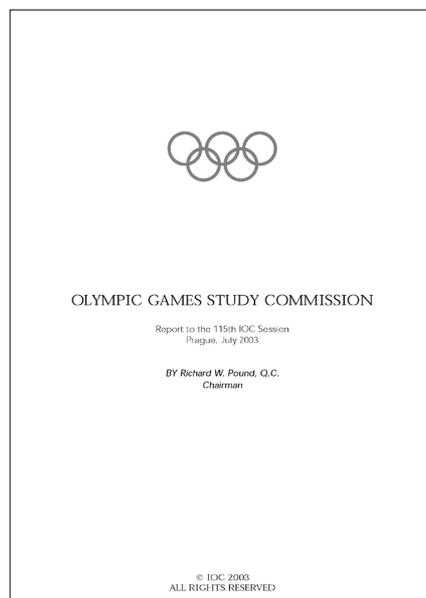


図 1-1 IOC リポート表紙

このレポートには他にも大会運営⁸や大会関係者の数⁹、サービスの質¹⁰についてまと

められているが、巻頭に 1900 年代初頭のクーベルタン伯爵が既に懸念していた競技施設の高騰化に対する当時の懸念の声明文のように、やはり、ページの多くを割かれているのが、競技会場の経費削減であった。

しかし、このレポートを単なる五輪開催への経費削減案、すなわち施設建設費抑制案を提言するものと捉えるのではなく、独自の提案を加えたのがロンドン五輪招致委員会であった。「大会の放送(Broadcasting the Games)」に注目した。

現在の五輪開催において、テレビ中継抜きに運営することは不可能に近い。世界のアスリートを開催都市に集めて競技をし、4 年毎に世界の都市で開催されたとしても、現地で観戦できるのはごくわずかである。それを補完するのがテレビ映像とそれを中継するネットワークシステムである。世紀の祭典、スポーツの祭典という五輪の注目度は高く、4 年の一度の夏のイベントをテレビ画面の向こうから注目し、世界一流の超人のアスリートパフォーマンスと、その世界の選手を相手に奮闘する自国選手の活躍を見届ける。それが結果的に放送権料の高騰に繋がる。

五輪と映像の関係の歴史は長い。2000 年初頭を境に IOC は OBS の設立をしたように映像を意識した五輪開催を計画していた。そこで、ロンドン五輪招致委員会は、競技会場の経費削減案と共に映像を意識した五輪開催という IOC の思惑を巧みに自分たちの提案に取り込みながら招致計画の立案していた。

1.1.2. 五輪における映像コンテンツの重要性

4年に一度開催されるスポーツの祭典オリンピック・パラリンピック(以下、五輪)において、各国を代表する選手による世界レベルの競技を楽しむのは会場の観客だけでなく、テレビ映像を通して観戦する世界中の視聴者が大半を占める。テレビ放送は、オリンピックの理想を広め、オリンピックを世界的に発展させる上で最も重要な役割を担ってきた。現在の五輪開催はテレビ中継があつて初めて成立していると言えるだろう。

以下、五輪開催とそのテレビ中継の重要な節目の歴史について概観する。

五輪のテレビの中継映像はナチス政権下の1936年ベルリン五輪から始まった。中継はベルリンとその周辺のみ¹¹であった。放映権の規約が確立されたのは、1948年のロンドン五輪¹²からであり、1958年にはテレビ放映権の問題が五輪憲章に盛り込まれた¹³。1960年ローマ五輪では、初めてヨーロッパ18カ国に生中継され、その数時間後にはアメリカ、カナダ、日本にも放映された¹⁴。1964年東京五輪では初の衛星放送による海外中継を実施した¹⁵。1966年にIOCは、収益分配を初めてNOC(National Olympic Committee 参加国五輪委員会)とIF(International Sport Federation 国際競技連盟)に拡大した¹⁶。1968年メキシコ五輪では初のカラー放送による生中継が行われた¹⁷。2001年に五輪の主催組織である国際五輪委員会(International Olympic Committee 以下、IOC)は五輪映像等を統括する五輪放送機構(Olympic Broadcasting Services 以下、OBS)を設立した。2004年アテネ五輪ではいくつかの地域で初のインターネットでのライブ中継を開始した¹⁸。2008年の北京五輪の放送局では、オリンピック史上最多となる5,000時間のHDライブコンテンツを提供した¹⁹。デジタルメディアは、中東、アジア、アフリカの78カ国において、IOC独自のデジタルチャンネルを含め、世界中で視聴可能とした。2012年のロンドン五輪における放送は、かつてないほど多くのプラットフォームで提供されるようになり、世界中の500以上のテレビチャンネルで、約10万時間のオリンピック放送が行われた²⁰。2016年にOBSは五輪チャンネルというオンライン上の独自チャンネルを開設し、動画メディアに慣れ親しむ若い世代へ訴求した²¹。

2003年に開催した115回IOC総会に提出したレポート²²に「五輪中継を世界最大の視聴者のリビングルームに届ける」と記述したように、IOCはより個人を意識した映像による五輪開催を目指した。

一方で、1990年代から、競技する選手の背景に開催都市の景観を取り込んだ競技会場

がバルセロナ五輪やシドニー五輪などで実現し²³、それを受けて 2012 年のロンドン五輪は招致計画段階からテレビに都市景観を映し出す計画を立案し、実現した²⁴。映像を意識した五輪開催を目論む IOC の意向を招致計画や実施計画の中に汲み取り、大会を成功に導いたのである。

以上のように、1964 年に開催された東京五輪以降の日本の高度経済成長期がそうであったように、世界でも映像受信機としてのテレビが普及し、1984 年のロサンゼルス五輪では、ローマ五輪の放映権料と比較して 200 倍強に達した²⁵。同様に五輪の中継映像を視聴できる国と地域も 2000 年のシドニー五輪以降はほぼ全世界をカバーしている²⁶。五輪ではその放映権料は倍々で高騰し、21 世紀に入ってから、2000 年に開催されたシドニー五輪(1,330mUSD)から 2012 年のロンドン五輪(2,600mUSD)にかけての 12 年で 2 倍になっている。

Broadcast Revenue History: Olympic Games

Olympic Games	Broadcast Revenue (in USD millions)
Rome 1960	1.2
Tokyo 1964	1.6
Mexico City 1968	9.8
Munich 1972	18
Montreal 1976	35
Moscow 1980	88
Los Angeles 1984	287
Seoul 1988	403
Barcelona 1992	636
Atlanta 1996	898
Sydney 2000	1,332
Athens 2004	1,494
Beijing 2008	1,739
London 2012	2,569
Rio 2016	2,868

図 1-2
過去の五輪における放映権料の変遷

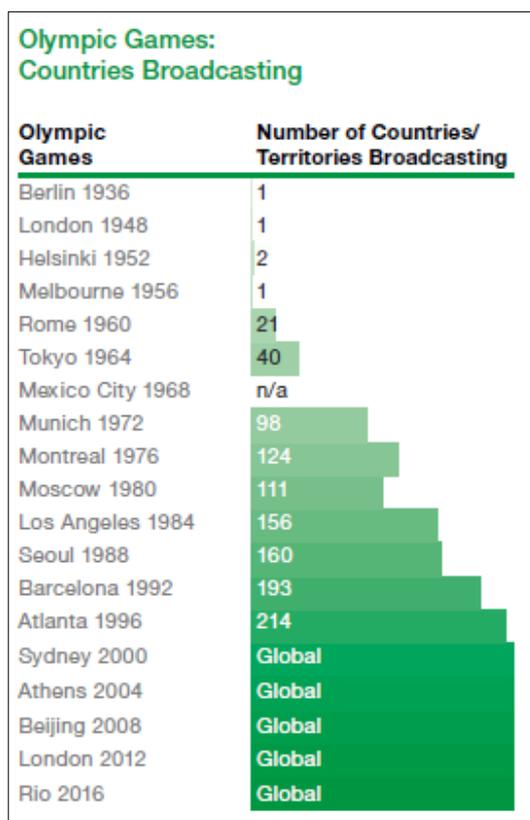


図 1-3
過去の五輪における放送国数の変遷

(1) 映像と五輪の歴史

五輪と映像の長い歴史において、まず、最初に言及されるのが 1936 年に開催されたベルリン五輪の映画監督レニ・リーフェンシュタールによる記録映像である。ドイツ、ナチス党の党大会の映像を作成していたリーフェンシュタールは映像責任者として抜擢される。リーフェンシュタールによる記録映像は「オリンピア」と名付けられ、それまでのスポーツ映画とは異なる作品であり、第一部「民族の祭典」、第二部「美の祭典」からなる。アスリートの肉体美まで余すところ収めた芸術性の高い記録映像だけでなく、ナチスドイツのプロパガンダとして政治的メッセージまでも込められていた²⁷。躍動する選手たちの競技風景を、よりダイナミックにそのカメラに映し出すために、リーフェンシュタールの映像チームは、時に競技場に穴を掘り、ローアングルからの映像、選手と並走するために車輪付きの台車に乗るなど、当時としては革新的な撮影方法で、競技会場内において選手を効果的に見せる画角を探求した²⁸。競技によっては、照度不足から後日競技の風景の様子を再撮影してまでそのカメラに収めていたが、演出、見せ方までも計画して映像として記録しているところに単なる競技映像以上のものが込められているが読み取れる。リーフェンシュタールの活動に対するナチス党の宣伝相であるゲッペルスからの妨害や実際現場で競技をする選手たちの不平不満を受けながらも世紀の祭典の映像をそのカメラに収めた²⁹。このように、五輪映像にはスポーツの記録のみならず、芸術性、政治的メッセージまでもが含まれる(舛本, 2000)³⁰。



図 1-4 ベルリン五輪において様々なカメラポジションとカメラワークで撮影する
映画監督レニ・リーフェンシュタール

日本の高度経済成長期の幕開けとも言われた 1964 年にアジア初の五輪として開催した東京五輪では、市川崑監督が映像を収めた。こちらでも、スポーツの祭典の記録性はもとより、新体操選手チェコのチャフラスカヤに再演技を依頼するなどし、芸術性を込めつつ、当時は遠くの国、アジアの島国で暮らす人々の日常を差し込んだ文化的側面の映像も差し込まれていた。

(2) IOC の映像五輪に対するアプローチ

放送技術の発展によってテレビが世界中に普及し、五輪開催における放映権料は、放送が開始されたローマ五輪から高騰し続けている。そこで主催者である IOC も 2001 年に五輪開催の映像などを統括する独立機関として、OBS(Olympic Broadcasting Services 本社スペイン・マドリード)を設立した。それまでのテレビ中継は大会毎に開催都市や国の放送局と共同組織を設立していたが、同組織は継続的に映像の質や権利などを管理するために設立された。OBS は IOC からの独立機関としているが、組織の代表は IOC 委員を務めるなど、五輪開催の主催者である IOC が主体となる映像運営組織と考えられる。

OBS は以下の 3 つの部門からなる。

- テクニカル部門：放送、配線、カメラ配置など機能するかどうか調整など
- プランニング部門：運営、電機技術、など
- プロダクション部門：カメラ技術統括、など

大会における競技映像をはじめとした関連映像の構成はプロダクション部門が制作する。どのように見せるか(how to show)、どこを見せるか(when to show)、いつ見せるか(when to show)、という構成、いわば映像の脚本を考える部門である。

また、開催都市組織委員会が見え方を提案するも、決定権は OBS にある。それゆえ、明確なコンセプト、例えばロンドンの場合は都市を映し出す五輪を具体的なビジュアルイメージを共有することで共感を得やすい提案となる。

OBS 設立以前は開催都市の現地組織と IOC の共同組織体で映像関連を管理、運営していたが、2010 年のバンクーバー冬季五輪から OBS が映像関連について統括していくことになる。夏季五輪としては 2012 年に開催したロンドン五輪が初となった。

2001 年にはいり、IOC は映像関連組織として OBS を設立したが、前述したように 2003 年の IOC 総会でのレポートにおいても、「大会の放映：競技風景を世界中のリビングルー

ムへ届ける」と記載し、映像を意識した五輪を宣言していた。

その後、映像と五輪の関係は受信機であるテレビからインターネットや SNS における映像を無視できなくなる。2000 年代に入り、インターネットが人々の生活に身近になってくると、テキストから画像、そして動画へと人々の受信、そして発信する情報量が格段に増えていく。通信機器としてのパソコンの性能が上がり、その上、ブロードバンドなどの通信ネットワーク環境が整備され、手軽になり、安価になってくる。パソコンも演算処理装置だったものが、インターネットと繋がり、通信機器となると、よりパーソナルなものになり、テレビが普及した時と同様に一家に一台から一部屋に一台になった。さらに 2000 年代後半の携帯電話にパソコンの搭載したスマートフォン(以下、スマホ)の登場によって、パソコンは手のひらに一台となった。五輪開会式で入場する世界各国の選手団がスマホ片手に登場し、選手同士やスタジアムを背景にした自撮り写真、動画を撮影し、すぐさま手のひらから SNS などで発信する様子もおなじみの風景となっている。後述するがロンドン五輪も SNS 五輪と言われたが、招致計画段階では撮影や発信機器としてスマホや、そのネットワーク環境としての SNS もそれほど普及しておらず、招致計画から開催計画へ移行した時期にも、そのテクノロジーの普及発展は日進月歩であり、2012 年の五輪開催時にその恩恵を効果的に実行していたかという疑問が残る。

2010 年代に入り、手のひらで、映像や動画をはじめとした映像が見れる日常になり、2016 年には OBS が五輪チャンネルを設立³¹する。五輪離れが懸念される若い世代へ慣れ親しんだ動画メディアによって訴求した。大会時にもスマートフォンで視聴でき、大会後も世界的な規模を誇る動画視聴サイトである YouTube 上の独自サイトで個人が主体的に視聴できる映像記録としてアーカイブしている。

(3) 映像を意識した五輪計画に寄り添う競技会場計画とその映像

映像受信機が人々の手に届き、また届ける手段としてのネットワーク環境が発達し、五輪の競技映像が世界中から見れるとなると、すなわちグローバル化が進むと、映し出すべきはそのローカル色である。スタジアム内での競技する選手の背景に映し出されるのが観客席だけでは、開催都市の映像としては弱い。中継映像や現地のリポーターの背景の開催都市ならではのランドマークの映像が映し出されることはあるが、五輪という世界のトップアスリートの集うイベントを見ている視聴者に最も訴求力のある場面は競技風景である。競技会場を開催都市の都市景観に向けて開放することで、世界の視聴者はグローバル

規模のネットワーク環境に乗った開催都市の都市景観というローカルの魅力を楽しむことになる。

例えば、1992年に開催したスペインのバルセロナで開催した五輪の水泳ダイビング競技会場のジャンプ台に立つ競技選手の遠景に街のシンボルであるサグラダファミリアと整然とした美しい碁盤の目の区画が背景に望むことが出来る。2000年に開催したオーストラリアのシドニーで開催した五輪では、トライアスロン競技会場となったシドニー湾岸地区の背景にやはり街のシンボルであるシドニーオペラハウスやシドニー湾橋を映し出した。その開催都市ならではの都市景観を競技会場の背景に映し出す五輪映像が作られた。

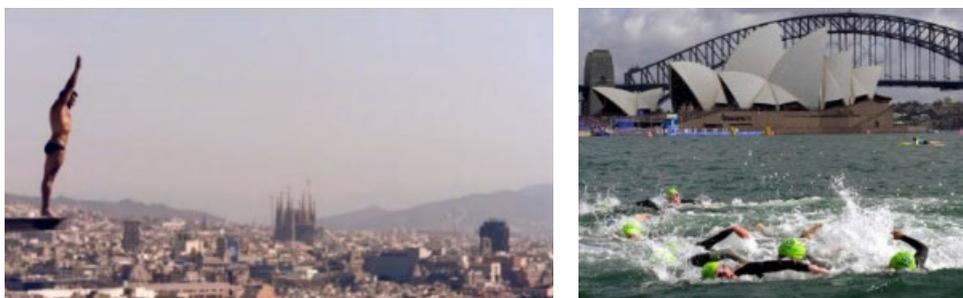


図 1-5 都市景観を競技背景に映し出した
バルセロナ五輪 1992(左)とシドニー五輪 2000(右)の映像

2004年にギリシャのアテネで開催された五輪では、五輪発祥の地だけあって、観光名所である史跡を背景とした競技会場を計画するだけでなく、古代五輪の跡地が史跡になっており、それらを競技会場とすることで競技背景に五輪発祥の地アテネのローカルの魅力をテレビ映像に映し出して発信した。例えば、砲丸投げ競技であるが、陸上競技の一部である投擲競技は通常メインスタジアム内で実施されるが、古代五輪におけるメイン会場であったオリンピア古代競技場(Ancient Stadium of Olympia)を活用した。1896近代五輪の主会場となったパナシナイコ競技場内をアーチェリー会場とした。他にも、マラソン競技では、マラソン発祥の地である、マラトン競技場横をスタートし、パナシナイコ競技場を目指し、アテネ市内の史跡を背景にして、選手を並走しながら都市景観を映し出した。

いずれにせよ、ここに挙げた競技会場の事例は、スタジアム型、アリーナ型の競技会場であり、マラソン競技や自転車のロード競技のように街路そのものを競技会場とするものとは異なる。それは街路をコースとしたマラソン競技や自転車競技の背景に開催都市の

都市景観が映り込むことは自明であり、ローカルな魅力を映し出すために計画するのは、映像の発信場所、すなわちカメラポジションと映像の動き、カメラワークである。本研究の調査事例の対象である競技会場同様に、スタジアム型、アリーナ型でありながら、周辺都市景観にして開放した競技会場を計画したことが注目すべき点である。詳細は後述するが、バルセロナ五輪 1992 からロンドン五輪 2012 の五輪開催において都市景観を競技する選手の背景に映し出した競技会場の事例は後述する。

また、ロンドン五輪の招致の成功を収めた招致計画の大枠を決めた招致計画の策定した時期は 2003 年～2004 年であるため、都市を映し出す競技会場を計画する際に参考にしたのはバルセロナ五輪とシドニー五輪であるという証言がある。このことからわかるように、2012 年に開催したロンドン五輪は、それまでの五輪と映像の経緯や 2000 年初頭から映像に重きを置いた IOC の要望を巧みに招致計画に盛り込み、それを実現させることで、ロンドンの都市景観を背景に映し出す五輪計画とその競技会場を実現することで、五輪という世界の視聴者が注目する瞬間にローカルな魅力を世界に発信した。

五輪における映像コンテンツの重要性の変遷は、カメラの競技会場の映し方の変化と共に競技会場の構造にもあらわれている。五輪を世界が注目するイベントと捉え、スターアーキテクトを起用し、豪華な意匠によるスタジアムを都市のランドマークとすべく計画すれば、カメラは、自ずと競技会場の外観を映し出す。一方で、カメラを会場内部に設置し、競技する選手の背景に都市景観を映し出すものと割り切れば、カメラから見えない部分は非常に簡素な構造とすることが可能となる。

1.1.3. 五輪開催の現代的意義

招致が決定してから開催まで7年³²、また招致計画策定からの経緯から考える五輪開催が開催都市にもたらす影響は大きい。

五輪開催は都市開発における「触媒」³³と形容され、効果的に活用することで開発は促進される。例えば、戦後復興と高度経済成長を目指し、インフラ整備が急務とされた1964年の東京五輪は五輪のための競技会場だけでなく、都内の高速道路や地方への新幹線敷設などのインフラ整備への効果を最大限に生かした事例と言える。

2012年のロンドン五輪は市内東部地区ストラトフォード地区をメインパークとして再開発を行ったわけだが、英国政府としても長年懸念であったロンドン市東部地区の再開発を五輪開催の目的の一つとし大会を計画、実現させたことで、本来よりも20年早く開発が進んだと言われている³⁴。

一方で、近年開催都市の選出が難航しているように、インフラ等が整った都市は五輪開催意義を見出すのに苦労している。その点、ロンドン五輪は、この都市開発の役割はもちろんのこと、開催都市や実施競技などの認知度を高め、周辺都市環境の価値を高める都市プロモーションという五輪の新たな役割を見出したと言われている³⁵。五輪レガシーを大会後の競技会場の後利用の方法や維持管理費のあり方が議論されるなかで、開催都市や競技のプロモーションの視点から競技会場を計画するロンドン五輪の考え方は注目に値する。

五輪招致による都市計画における功罪の罪に目を向けると、前述したように、五輪招致が既存の都市計画に勢いを付けようとしていたが、五輪招致を目指したことで、当初の都市計画の目論見が崩れ、足かせになっている例もある。

冬季五輪の例であるが、2018年に開催し韓国の平昌五輪は招致成功までに3度目の挑戦によって冬季五輪招致を実現している。

平昌五輪は大会ビジョンとして「アジアのウインタースポーツのハブ」になることを目指した。また、韓国政府の「第3次国家総合領土計画(2000-2020)」などに基づいた江原道を東西3都市をつなぐウインタースポーツベルト構想という地域開発の起爆剤とし五輪開催を位置付けていた。しかし、2010年冬季五輪招致案を2003年に提出するも招致に失敗。中心である平昌からの距離をIOCに指摘されると、ウインタースポーツベルトの一端を担い、江原道最大都市である原州市を2014年冬季五輪の招致案を2007年に提出する際に除外した。そして、平昌郡と江陵市に競技会場を集中させる2つのクラスター案へと変更し、2018年冬季五輪の招致案として2011年に提出し、3度目の正直で五輪を

獲得した。山寄ら(2018)³⁶で、平昌五輪をケーススタディとして競技会場・施設の招致から開催に至る変遷を明らかにしたように、招致決定後も大会運営など IOC の求める基準から、開閉会式しか使用しない五輪スタジアムを生み出した。また、隣接した 3 か所の氷上系競技会場を大会後も使用するなど、当初、江原道全域を想定していた地域開発から大幅の変更をしている。この例からも五輪招致を目指すことで当初の目論見から大幅に変更を余儀なくされている例³⁷がある。

コロナによって 1 年延期された 2021 年に開催された東京五輪 2020 も五輪招致によって同様の影響を受けた。東京五輪招致も当初は 2016 年の夏季五輪を招致するための計画であった³⁸。都市博中止によって長年塩漬けされた状態のお台場湾岸地区を中心に 2016 年夏季五輪の招致計画は立案された。しかし、2016 年の夏季五輪は南米大陸では初めて開催されるブラジルのリオデジャネイロに決定した。

2016 年の招致失敗を受けて、東京都と日本五輪協会は 2020 年への招致活動を開始した。湾岸地区のメインスタジアムの風環境などを理由に神宮外苑の国立競技場の建て替え、2016 年案ではメインスタジアムの計画地を選手村とした招致計画を立案した。2013 年夏の IOC 総会に先駆けて、2012 年後半から国際コンペを実施し、ザハ・ハディド案が選ばれた。しかし、五輪開催するための観客数を確保するための規模の設計と条件に加え、建築士独自の意匠と構造形式から、予測される建設費は高騰し、大会まで 7 年という工期、その規模から風致地区である神宮外苑の景観にそぐわないなど大きな論争を巻き起こした³⁹。結局、ザハ・ハディド案の国立競技場のコンペ案は白紙撤回され、日本人建築士である隈研吾による計画案となった。

平昌五輪と東京五輪 2020 のように招致が成功するまで、招致計画を繰り返し立案したことで、当初の五輪招致計画案を再開発の触媒、起爆剤として期待していたにもかかわらず変更を余儀なくされている。しかし、他の立候補都市が招致に成功したというだけで、平昌市や東京都など立候補都市の五輪招致に絡めた都市計画が必ずしも悪いというわけではない。他の立候補都市が選出される理由も、世界の 5 大陸で均等に開催することを目指した IOC は 2 大会連続で同じ大陸からは選ばれない、直前(2 年前)の冬季五輪を開催する同じ国や大陸での夏季五輪の招致はない、など明文化されていないが、暗黙のルールの中で開催都市が決められている理由もある。それでも、立候補都市が少なくなっているという理由でその暗黙のルールも崩れてしまっている。

(1) 招致プロセスの変更、選挙方式から対話方式へ

過度な招致レースによって招致計画への負担によって立候補を敬遠する世界の都市への配慮として、IOC が導入したのが招致都市決定に至る選挙方式からの対話方式である⁴⁰。これは IOC がこれまで開催してきた五輪開催の知見を開催都市に助言しながら五輪招致を望む都市と一緒に大会計画と一緒に都市計画も作っていく持続可能な五輪開催と大会運営と都市計画というのがある。

1984 年のロスアンゼルス五輪も商業化させ、黒字化した成功例としての五輪として見られているが、1976 年に開催されたカナダのモントリオール五輪が大会後に大きな負債を抱えたことで立候補都市が敬遠し、1984 年招致レースも対抗馬がなく、自らの都市の特徴などとじっくり向き合うことが出来た招致計画案を立案出来たと考えられる。

そういう意味では、勝つための五輪招致案を含んだ都市計画ではなく、また開催までの十分な時間を伴った実現案という観点からも大会後のレガシー計画を練り上げられるパリ五輪 2024 もロスアンゼルス五輪 2028 やコンサルタント方式を初めて採用したオーストラリアのブリスベン五輪 2032 には無理のないあたらしい五輪開催に伴う都市計画案が期待できる。

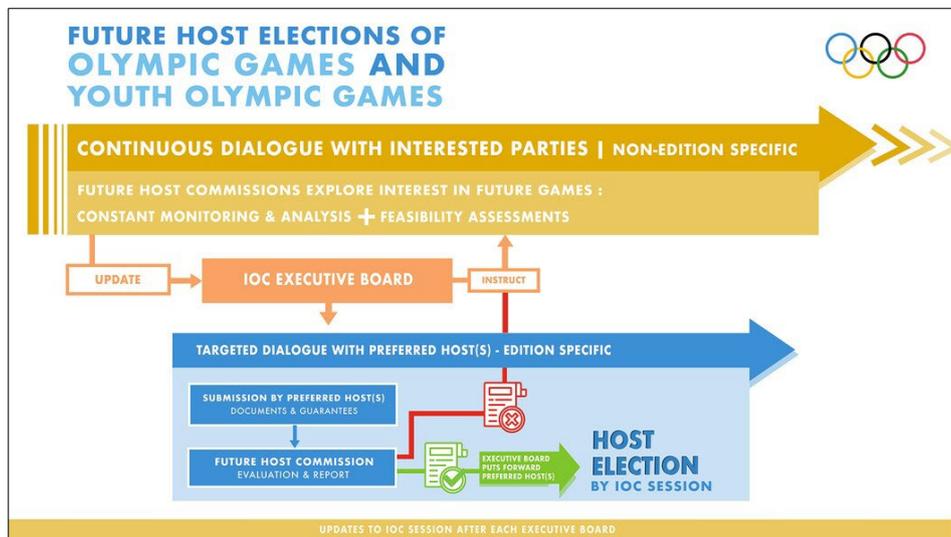


図 1-6 五輪開催都市の招致選考課程において、変更された対話方式を表す資料

以上、五輪は従来のように開催都市の再開発を促進する側面がありつつも、本来の開催都市の自らの都市計画の予定を狂わせる負の側面もある。そんな中、五輪開催において地

域の再開発を促進させつつも、十分インフラが整った都心部においては、仮設競技会場を採用し、周囲の都市景観を映し出すという、新しい活用事例がある。

(2) 開催を都市プロモーションの機会とする五輪計画

五輪開催に必要な都市インフラ整備費用の問題、高騰するテレビ放映権料の問題がある一方で、新しい五輪の価値を戦略的に取り込んだのがロンドン五輪 2012 計画であった。いくつかの仮設競技会場を市内中心部に積極的に建設し、そして競技会場で競技する選手の背景に開催都市の魅力を世界に発信した。五輪は世界が注目するスポーツの祭典である。同時に、開催都市や国の文化資産などを世界に発信する貴重な機会でもある。ロンドン市は五輪を契機に都市景観という都市の文化資産を映像にして発信した。

ロンドンの計画は都市プロモーションの役割を五輪開催計画の鍵に据えたわけだが、そのプロモーションするのはロンドン市の未来のためである。五輪開催という世界が注目するイベントにおいて、躍動する超一流選手の姿と同時に、開催都市の露出は高まるのは当然ではあるが、それは大会後の未来の市民のためである。それは大会後の観光都市のロンドンへのレガシーとしてのインバウンド効果である。

事実、ロンドン五輪招致委員会は招致計画の早い段階で、五輪開催がもたらす観光都市ロンドンへの効果を前面に押し出していた。英国ロンドンを拠点とする総合エンジニアリング会社、Arup(アラップ)によるロンドン五輪の実現可能性を検証したリポートに掲載されているように、英国政府の観光政策に対して寄与するという招致計画を作ることで政府の協力を得ることが出来た。8 章「費用対効果の定量化(Quantified cost and benefits)」では、ロンドン五輪を招致したことによる効果について検証し、特に「観光産業の発展(Growth in tourism)」について言及している⁴¹。また、2012 年の大会から 1 年が経ち、大会後を総括するニュースでは、インバウンド効果による訪英観光客は増加したとしている。

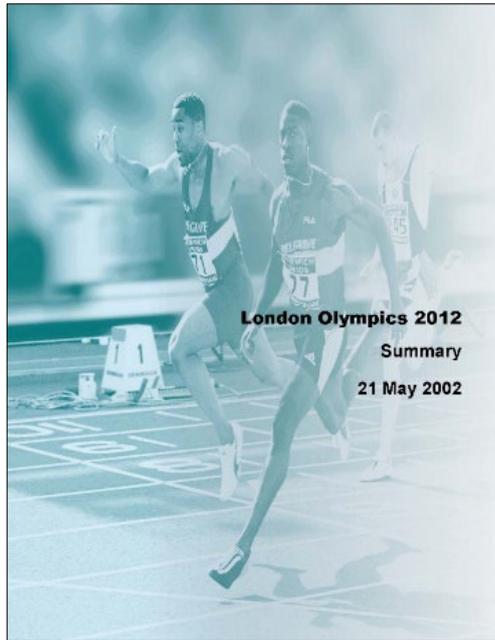


図 1-7 ロンドン五輪の実現可能性を検証したアラップリポートの表紙

1.1.4. 2012年ロンドンオリンピック

実際のロンドン五輪とはどのような大会だったのか。本研究では映像を意識した五輪として扱っていくわけだが、その背景として2012年の夏に英国の首都で開催された五輪について、その概要を整理する。

2012年の第30回夏季五輪大会の開催によって、ロンドンは史上初となる同一都市で3回目の五輪を開催した都市となった。

1回目は1908年の第4回夏季五輪でホワイトシティスタジアムをメインスタジアムとして開催した。これは当初、開催都市であったイタリアのローマ市がヴェスヴィオ山(Mount Vesuvius)の噴火によって中止を余儀なくされての代替地として開催されたものである。

2回目は1948年の第14回夏季五輪でウェンブリースタジアムをメインスタジアムとした。直前の2大会(第12回と第13回)は戦争の影響で中止を余儀なくされている。特に第13回はロンドン市での開催を目指していたため、1948年の第14回ロンドン五輪は戦後復興五輪としての位置付けであった⁴²。

3回目になる2012年の第30回夏季五輪のメインスタジアムのあるメインパークは市内東部ストラトフォード地区をメインに大会を計画、実施した。それまでの多くの世界の都市で開催してきた五輪同様、大会を招致することで、東部地区一帯を再開発することを目指した。メインパークの敷地であるストラトフォード地区は、前述した通り、未開発地区であり、長年開発を求められた地区であったが、5つの行政地区にまたがる地区であったために、計画が進まなかった。事実、再開発計画は既に立案され、招致活動と並行して建築計画許可は得ていた。五輪招致計画が立案されたことで一気に実現に向けて動き出し、五輪計画が実現したことで地区一帯の再開発計画も20年早まったとされている。

(1) ストラトフォード地区におけるユーロスター発着の国際特急駅の存在

ストラトフォード地区の再開発においてユーロスターが発着する国際駅の存在も忘れてはいけない。1994年11月にフランスのパリとロンドンを結ぶ国際特急列車ユーロスターは開業当時、市内中心部南端(テムズ川の南側)、サウスバンクにあるウォータルー国際駅に発着していた。しかし、2007年11月には、ロンドン市内中心部北東端にあるセントパンクラス駅を発着する路線に変更された。その計画が持ち上がることで、その通過地点であるストラトフォード地区にも国際駅を計画することになった。事実、招致ファイル

にも大会の中心となる選手村のあるメインパークのアクセスの良さとして、欧州大陸からの国際高速鉄道の発着するストラトフォード駅をアピールポイントとしていた。しかし、現在、パリとロンドンをつなぐからユーロスターはストラトフォード国際駅に発着することではなく、終点のセントパンクラス国際駅で乗り換えてストラトフォード駅までを利用することになる。大会時に観戦チケットを持った観客が市内の交通機関を自由になるチケットによって、ストラトフォード地区までアクセスしてたように、市内中心部北西端に位置するセントパンクラス駅からの列車によって7分で到着できる。



図 1-8 ユーロスターのロンドン発着駅であるセントパンクラス国際駅
五輪リングが掲げられた

(2) 「都市景観を映し出す五輪」 ロンドン五輪競技会場 3つのゾーン

本節では、ロンドン五輪の公式レポートに基づき、ロンドン五輪の競技会場の特徴について都市的視点から整理を行う⁴³。

主な競技会場はオリンピックパーク(市内東部)、セントラルゾーン(市内中心部)、リバーゾーン(市内南東部)の3つのゾーンに配置された。オリンピックパークのストラトフォード地区は招致計画前から長年都市開発が待たれた地域であり、五輪開催でメインパークとして開発された。大会後はエリザベス女王五輪公園となり、メインスタジアムは近隣フットボールチームのホームスタジアムメインパーク民プール、選手村はマンション群へと改修され、仮設競技場跡地には文化と教育の地として美術館や大学を誘致する計画が進められている⁴⁴。一方、市街地であるセントラルゾーンとテムズゾーンの仮設競技会場は、期間限定の建築物であったが、その背景に都市景観をテレビ画面に映し出すというIOCとオリンピック・ムーブメントを支援するコンセプトとして、招致ファイルに

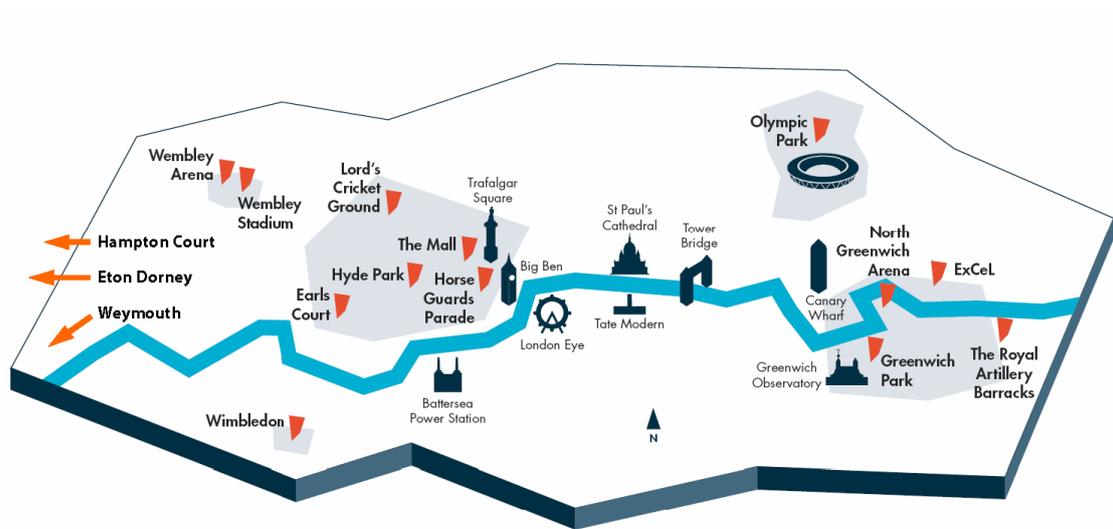


図 1-9 ロンドン五輪における競技会場配置図

競技会場を 3 つのゾーンに分け、市内中心部に点在する。

記述されていた⁴⁵。その「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトは、市内ランドマークを競技器具として見立てた招致ポスターや市内を東西に流れるテムズ川を模した招致ロゴにも表れていた(後述)。大会が近づくと、五輪リングがタワーブリッジ、セントパンクラス国際駅、テムズ川など、ロンドン市内のランドマークなどに設置され、国内外のメディアに映し出された。聖火リレーも英国内のランドマークを巡るコースとして計画された⁴⁶。このように「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトの立案を可能としたのは、ロンドンの建物保全、地区保全、景観保全など様々なスケールでの都市保全の蓄積(西村 2004)⁴⁷によって見せるべき対象が明確であったからだとと言える。

近年の五輪開催では、大会時の選手や関係者の選手村と競技会場の移動距離を短く、コンパクトで円滑な大会運営をアピールするために、ゾーン(zone 地域)やクラスター(cluster 群)という言葉を使って、いくつかの競技会場が寄り集まっていることをアピールしている。ロンドンも市内を 3 つの地区(Olympic Park オリンピックパーク、Central Zone 市内中心部、River Zone 河川地区)⁴⁸に分け、競技会場や選手村を計画し、分類した。しかし、すべての競技会場がこの 3 つのゾーンに収まっているわけではなく、ロンドン市郊外(自転車競技のハンプトンコート競技会場、テニス競技のウインブルドン競技会場など)、ロンドン市近郊(セイリング競技会場、BMX 競技会場など)、また英国の地方都市を競技会場(サッカー競技の各種既存フットボールスタジアムの活用など)として計画

し、全 33 か所で競技が実施された。

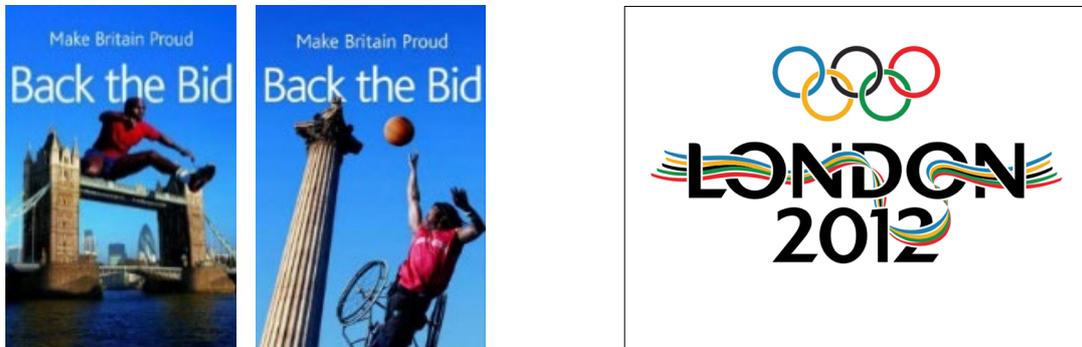


図 1-10 招致ポスター(左) 招致ロゴ(右)

いずれにせよ、ロンドン市内ではメインパークゾーンに計画したメインスタジアムや競泳場などに代表される新設の恒設競技会場と、市内中心部ゾーンに計画したビーチバレーボール競技会場やマラソン競技発着会場などの新設の仮設競技会場と、テムズ川ゾーンに計画したミレニアムドームやエクセル国際展示場などの既存施設を改修して五輪競技会場としていた。

- オリピックパーク(市内東部)。メインスタジアムや選手村など。
- 市内中心部(市内中心部)。ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場、市街地マラソン競技会場、ハイドパークトライアスロン競技会場など。
- 河川地区(市内南東部)。グリニッジ・パーク馬術競技会場、ノースグリニッジアリーナ競技会場、エクセル展示場競技会場、ロイヤルアーセナル射撃競技会場など。

(3) 2000 年代におけるロンドンの位置付け

欧州におけるロンドンの位置付けについて整理する。2000 年代初頭である招致活動時期や 2012 年のロンドン五輪開催時期には英国はユーロ圏(EU 連合)に加盟しており(その後、2016 年 6 月 23 日の国民投票での EU 離脱を選択し、離脱協定に基づき 2020 年 1 月 31 日に EU を離脱)、島国である英国はユーロ圏共通の貨幣であるユーロを採用してなど一定の距離は置いていたものの、地理的距離や招致および開催準備期間であった 2000 年代は好景気の後押しを受けていた。

また、ロンドン市郊外にはヨーロッパの玄関口でもあるターミナル空港であるヒース

ロー空港があり、世界から欧州へやってくる際のハブになっており、ロンドンを訪れるのには非常に利便性が高い(下図)⁴⁹。市内東部にはロンドンシティ空港、市郊外には北にルートン空港、南にガトウィック空港があり、それぞれ国際線が乗り入れており、1990年代から台頭してきた格安航空の影響もあり、欧州を中心とした海外からロンドンへの利便性は非常に高いと言える。

また、ロンドンにはパリを結ぶ国際特急列車ユーロスターも発着しており、パリの他、ブリュッセルやアムステルダムにも延伸し、欧州からロンドンへの列車によるアクセスも非常に利便性が高い。しかも、ロンドン五輪招致計画に先駆け、開通当初のロンドン市内の発着駅は市内中心部南端のウォータルー国際駅であったが、ルートを変更する計画により、市内中心部北端のセントパンクラス国際駅へと変更され、その途中駅である、ロンドン五輪のメインパークが計画された、ストラトフォード地区にもユーロスターのためのストラトフォード国際駅が建設された。大会の中心地になるメインパークの計画地がロンドン市内東部であるストラトフォードに決定したのも、このユーロスターの路線変更による影響も大きかったと思われる。

ロンドン市中心部の規模は非常にコンパクトである。また、交通網も非常に発達しており、市内中心部周縁まで地上線が乗り入れ、市内中心部の交通網として地下には地下鉄の路線が張り巡らされている。また、市内中心部の地上の交通網としては街並みの一部でもある赤い二階建てのバス無数のルートを走り、他にもブラックキャブと呼ばれるタクシーが一方通行が多く走る市内中心部の足となっている。また、テムズ川を移動する船という交通もあり、市民の通勤や観光客は船上からの観光都市ロンドンの景観を楽しみながら移動している。新しい交通手段としては、ロンドン五輪の準備期間に導入されたレンタルサイクルである。コンパクトな街を象徴するように自転車も市民の重要な足となっていたが、小回りの利く自転車というレンタルサイクルも市民と観光客の重要な足となっていた。

これらの交通網が発達としたロンドンという都市においては、大会時の競技会場へのアクセスの混乱を避ける代替案となり、多くの大会関係者や観光客が移動を助けることになった。しかし、市内中心部のほとんどは歩くことが可能であり、交通網が使わずとも移動可能である。大会時にチケットを持っていた観戦客には市内の移動をスムーズにするための同封された1日乗り放題パスが同封されていたが、歩いての移動も推奨されていた。

招致計画の際に、コンパクトな都市の規模とそれに加えて充実した交通インフラはロンドン市のアピールポイントになり、更に市内東部地区のストラトフォード地区のメイン

パーク計画と共に市内中心部の広場や王立公園に仮設で建設した競技会場や市内中心部の観光名所を巡るマラソン競技会場の計画は招致計画の目玉となっていた。

以下はロンドン市中心部に点在する競技会場の位置関係を示した図である。中心街を周回するマラソン競技会場や、中心部の敷地に建設したホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場や、市内南東部の王立公園であるグリニッジ・パーク馬術競技会場がある。メインパークは市内東部のストラトフォード地区に位置する。

Le Royaume-Uni et l'Europe : facilité d'accès et transports excellents
 The UK and Europe: Easy proximity and excellent transport links

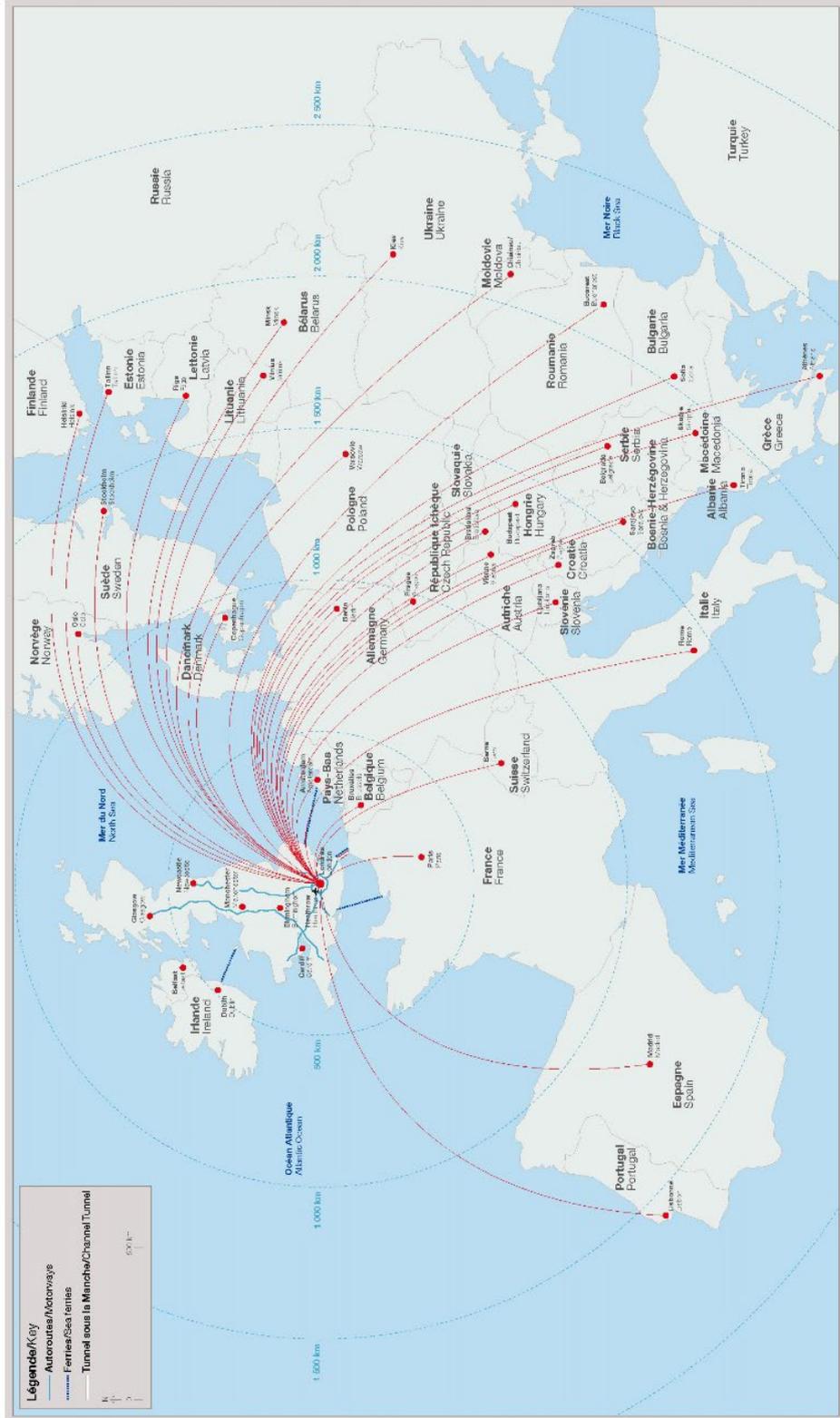


図 1-11 招致ファイルに掲載した欧州の航空路線図
 ロンドン市は欧州からアクセスも良く、世界から欧州への玄関口でもある

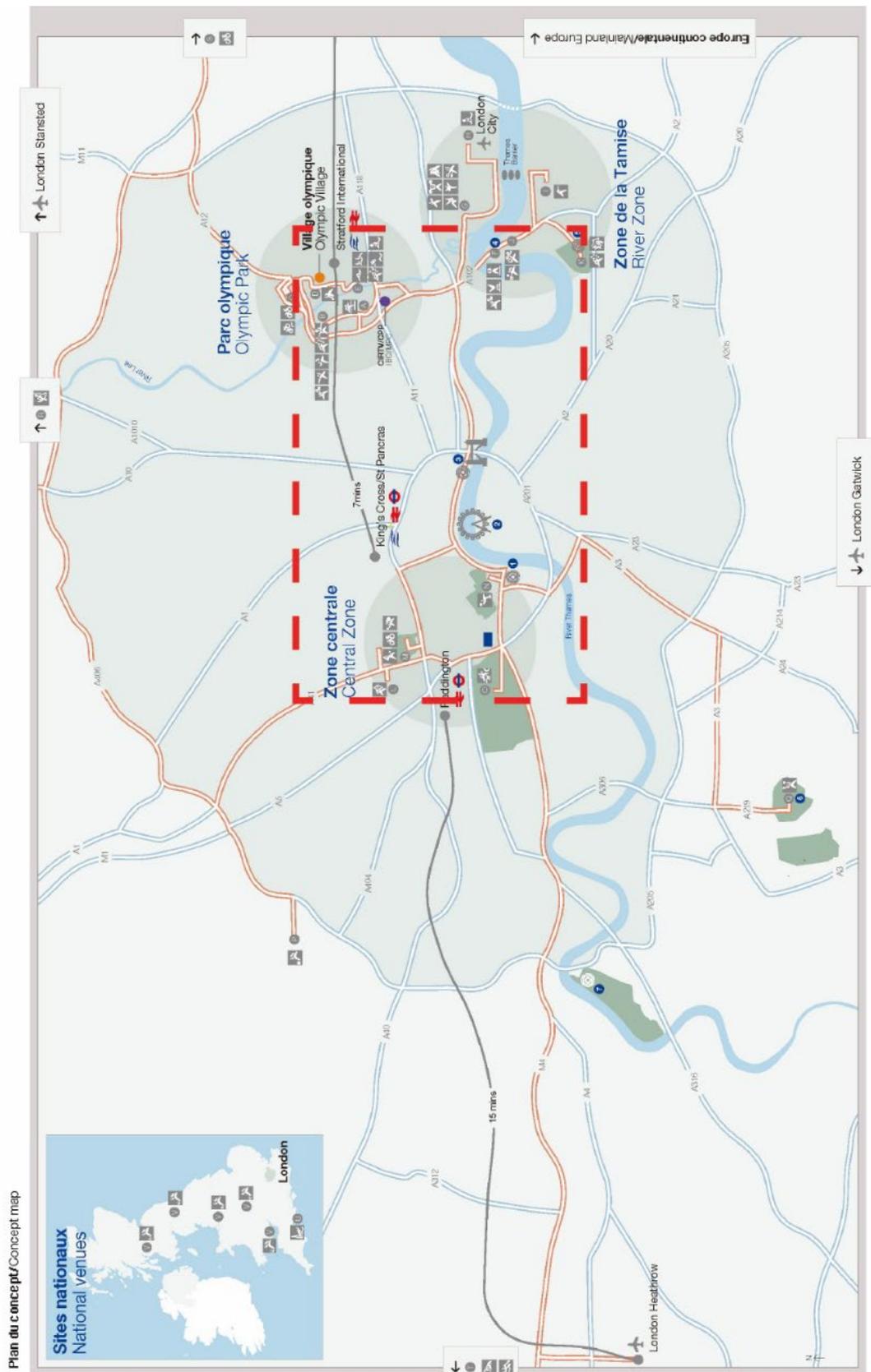


図 1-12 招致ファイルに掲載した市内全域の競技会場配置図
 競技会場は市内中心部に計画されながらも国内外からのアクセスが良い

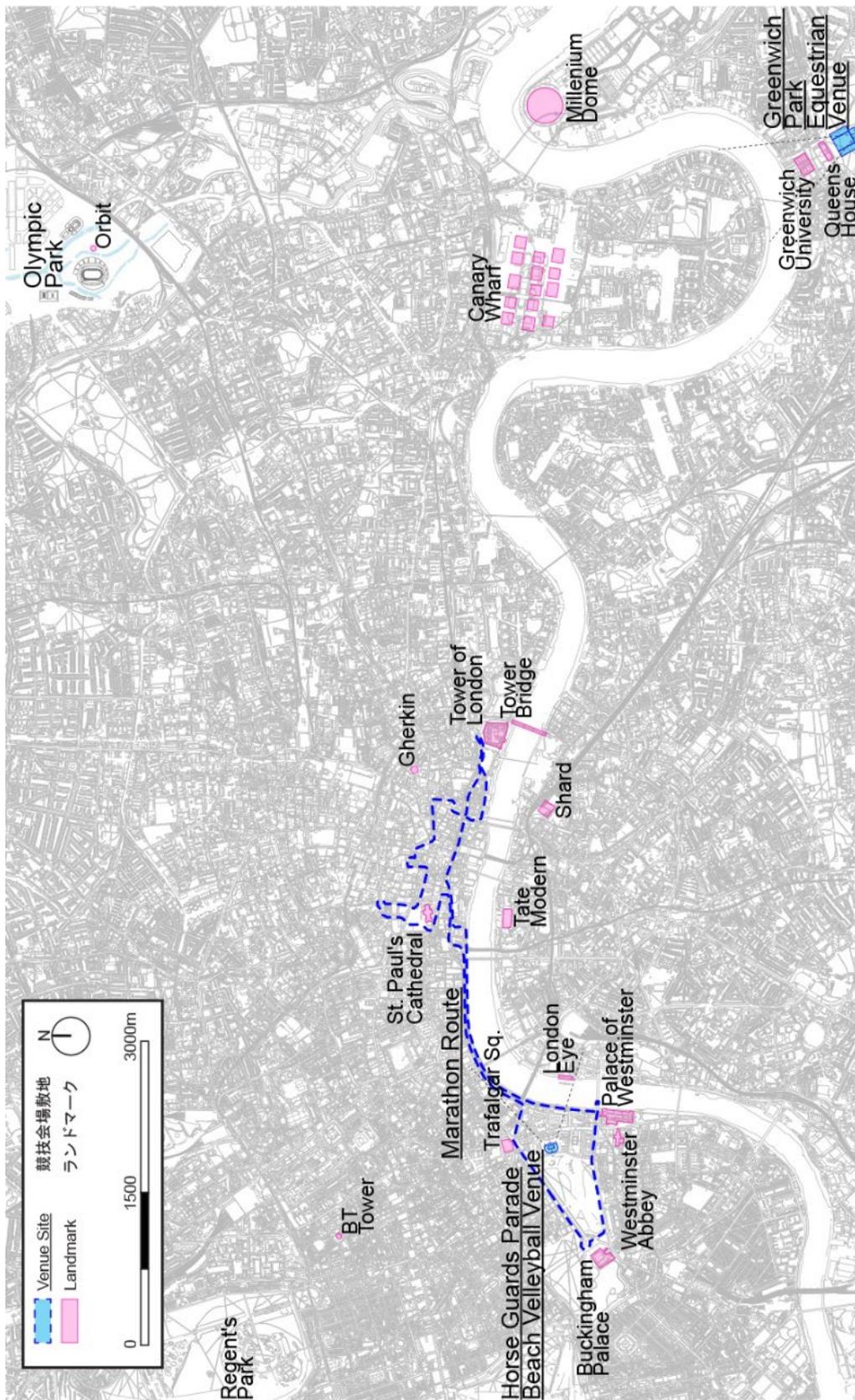


図 1-13 本研究の調査事例となる 3 つの競技会場のロンドン市内の配置図
(馬術、ビーチバレーボール、マラソン)

(4) EU 圏内におけるロンドンで五輪を開催するということ

2000 年代に入り、欧州の国境を越え、同じ経済圏で構成する EU が本格的に始まった時期で、人々の流動が激しく、英国にも多くの欧州圏の人々が生活をしていました。

ロンドンはミレニアム事業として、テムズ川南岸、通称サウスバンクが盛り上がり始める。はテートモダンの裏手であり、テムズ川対岸のセントポール大聖堂を結ぶ、ミレニアムブリッジやテムズ川沿いの遊歩道が整備されたミレニアム事業で注目され始めた地域だった。

2003 年～2004 年に掛けては招致計画のマスタープランを策定した時期である。ロンドン東部地区ストラトフォード地区をメインパークとする五輪招致計画を立案することで、懸案だったロンドン東部地区一大再開発を目指した。同時に大会後の後利用、すなわちレ



図 1-14 ロンドン五輪招致マスタープラン模型
市内東部地区をメインパークとする計画



図 1-15 大会後のレガシー計画を紹介する資料の表紙

ガシー計画を同時進行で進めていた。産業廃棄物処理場、工場、倉庫、操車場、車庫など何もない広大な敷地と運河や水路が流れる土地の間を縫うようにして競技会場や選手村が計画された。大会後の全体計画としてのオリンピック記念公園(後のクイーンエリザベスオリンピックパーク)、すなわち最終形を計画しつつ、その上に、一枚の地層(レイヤー)として大会時の全体計画としてのメインパークを計画していた。大会後に、大会時の地層(レイヤー)を剥がせば、目指すべきレガシー版の公園が現れるという考え方であった。

レガシー計画はロンドン市が五輪招致に成功した 2005 年 7 月以降も並行して計画していた。ストラトフォード地区のメインパークの大会後の具体的な計画案を策定、大会後の 2030 年や 2050 年後のロンドン東部地区を考える計画であった。招致計画を策定する以前から、この地区は産業廃棄物処理場、鉄道の操車場、バスの車庫、倉庫、工場などによる土壌汚染された地区であり、英国としても長年、開発の声が待望された地区であった。テムズ川に流れ込む河川や運河がこの地区を流れていたが、浄化した水辺空間にどのように街を開くかの親水性について、ビジュアル表現とともに提案していた。

そして、2012 年に入って、オリンピックイヤーを迎えるが、英国の経済状況はそれどころではなかった。2008 年のリーマンショックに端を発した金融不安は欧州危機まで続き、それまで対岸の火事だったギリシャ、スペイン、イタリアなど EU 各国の不景気の連

鎖がいよいよ英国にまで迫ってきた。2000年代はEUの新たな経済圏の恩恵を受けてきた英国だったが、同じ経済による不景気の連鎖と言うEU経済圏の負の側面がロンドン五輪の開催年に露呈した。

(5) ロンドン五輪におけるサステナブルの捉え方

開催都市のなり手がいない現状、開催に際して莫大な設備投資が必要となる現状への反省から、近年の五輪開催において重要な考え方となっているのがサステナビリティ(sustainability 持続可能性)という考え方がある。これは持続可能な社会を目指す考え方としてSDGsにも合致している。SDGsとは、Sustainable Development Goalsの頭文字からとったもので、国連に加盟する世界193か国が合意した2030年までに達成すべき17の目標、169のターゲットのことである⁵⁰。

建築都市の側面から見れば、建設にまつわるCO2削減や脱炭素化などの項目が当てはまるが、もちろん、ロンドン五輪の計画においても、招致計画の時点からサステナビリティには言及している。ひとつは大会後の施設後利用に関する計画を盛り込む、レガシー計画について招致ファイルに盛り込まれたはじめての大会であり、他にも、競技会場の計画についても既存競技会場の活用や既存施設の競技会場への転用、もしくは新設でも仮設競技会場を計画して、大会後の規模を縮小、改修、用途変更、もしくは撤去、などを計画時から盛り込んでいたことが評価されていた。ちなみに、後述するテクニカルマニュアルの競技施設編に記載してあるがIOCとしても優先順位として、既存施設活用、仮設競技会場の建設で五輪競技会場が賄なうことが出来ない場合に、後利用の計画を検証した上で新設の恒設競技会場の建設を推奨している。

しかし、ロンドン五輪の注目すべき点は、競技会場の計画においてIOCが求めるサステナビリティという考え方は押さえつつ、仮設競技会場の活用の仕方に戦略性があったことだと考える。ロンドン五輪がそれまでの五輪と比較して多く計画した仮設競技会場は、大会後に撤去するので五輪イベントがあったことを記す記念碑なものは現地を訪れても何も残らない。だからこそ、大会時に、メディアをはじめとした多くの注目を集める場所を敷地として計画した。

ロンドン五輪では、大会後に撤去する仮設競技会場をサステナビリティの観点から計画したが、その理由として、簡易な建設方法による建設費削減、大会後の撤去による維持管理費削減の点だけで採用したわけではなく、期間限定の仮設建築物だからこそ、恒設建

築物では建設が困難な市内中心部にある王立公園や広場を敷地とすることを可能とし、周辺都市景観を競技する選手の背景としてテレビカメラに映し出した。これはロンドン五輪招致計画にも競技会場の周辺都市景観を「忘れがたい、象徴的な、背景の、陳列棚(memorable, iconic, backdrop, showcase)」⁵¹として形容していた。仮設競技会場をサステナビリティという観点から採用したわけではなく、テレビカメラによる映像を意識した五輪にも寄与するツールとして仮設競技会場を捉えていた。

(6) ロンドン五輪開会式の開催都の価値を高める演出

「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトはロンドン五輪、開会式の演出でも見ることが出来た。それは開会宣言をする英国王室のエリザベス女王陛下の出番になったときだ。テレビ画面を見ている視聴者たちは、切り替わった映像を見ることになる。ロンドンのランドマークの一つであるバッキンガム宮殿の庭にヘリコプターで降り立ったのは、英国のエンターテインメントのアイコンであるジェームスボンド(ジェームスボンドは歴代の英国を代表する俳優が演じているが 2012 年当時はダニエル・クレイグ)であった。ジェームスボンドが開会宣言をする女王陛下をヘリコプターでお迎えに上がったという設定だ。宮殿内のレッドカーペットをエスコートし、ヘリコプターに乗り込むと、市内の市民の顔が見える低空飛行で市内を巡り、タワーブリッジの間を抜けて、夕焼けの中、二人を乗せたヘリコプターはまさに開会式が行われている市内東部のストラトフォード地区へと向かう。映像によるロンドン市の紹介を終え、メインスタジアムの上空にヘリコプターが到着すると、ライブ映像に切り替わり、スタジアム上空に本物のヘリコプターが飛来する。そこからジェームスボンド、とエリザベス女王とジェームスボンドが英国旗の描かれたパラシュートで降下してくる。もちろん、開会式のスタジアム上空からパラシュートで降下してきた二人はスタントマンによる演出だが、彼らがスタジアムの外に見切れると、本物の女王陛下がスタジアム内に現れ、ゆっくりと階段下りてきて、開会宣言の場へ移動していく。これが英国のアイコンによる都市を映し出すことによる女王陛下登場の演出であった。映像とリアル(フェイク)を融合させ、開催都市ロンドンの都市景観と歴史、文化を紹介する演出であった。

今でも 1964 年の東京五輪の象徴的なシーンとして 5 基の航空自衛隊による快晴の秋の青空をキャンパスに白煙で 5 つの輪のようにダイナミックな演出として、開会式が行われるメインスタジアムの上空を飛行機などが飛来するシーンは度々見てきたが、そこから

その国のアイコンとしての女王を飛ばした。

そして、開会式のクライマックスは、聖火台への採火の瞬間であるが、その最終の聖火ランナーに至るまでも都市景観を映し出す演出をする。聖火を手にしたランナーはテムズ川をボートで下る。エスコートする運転手は有名サッカー選手デイビッド・ベッカムであった。そして、聖火の最終ランナーであるが、起用したのは無名の 10 代の選手たちであった。世界が最も視聴するイベントである五輪開会式においてロンドン五輪は都市景観を映し出すと同時に文化資産、エンターテインメントなどを前面に押し出した演出となった。

(7) ロンドン五輪における仮設競技会場の役割

ロンドン五輪で整備された全 37 の競技会場のうち、仮設競技会場の数は 21 会場であり、面積数、座席数ともにそれ以前に開催された五輪と比較して多い⁵²。近年の五輪開催で採用される仮設競技会場は、可動性、順応性、軽量、安価、組み立て易さ、見た目の軽やかさだけでなく、大会後の競技会場の規模縮小、変更、移設、撤去などにも対応でき、維持費負担の軽減を可能としている。IOC は持続可能な五輪開催の点から、まず既存施設の活用、次に仮設競技会場、それらが難しい場合においてレガシーを考慮した恒設施設の建設、という優先順位で会場の選定を推奨しており、競技会場の設計基準の詳細は同組織発行の「テクニカルマニュアル_競技会場設計基準編」(後述)に記載されており、それらを元に、組織委員会でも競技会場の計画・建設の明確なルールを決め、実現した⁵³。

五輪競技会場における仮設建築について今一度整理しておきたい。前述のとおり、期間限定の建築ゆえ、大会後撤去を前提に建設しており、イベントにおいて負の遺産を遺さない施設となる。仮設競技会場は安価&短工期などから費用面の特徴ばかりが大きく注目されるが、期間限定の建築だからこそ、恒設建築では建設が困難な敷地にも設置することが出来る。選手の競技の背景に映し出したロンドン市内の都市景観こそがロンドン五輪計画における大きな特徴と言える。その敷地の持つ文脈、地軸、歴史的背景などを積極的に取り入れることで、新設する恒設競技会場以上の価値を持つ建築物になる。また、通常建設が想定されていない場所に建設することを可能とするからこそ、その場所からの望む都市景観は特別なものとなる。

本研究で扱うロンドン市内中心部の五輪景観を生み出す競技会場の他にも仮設競技会場を多く採用している。メインパーク内のホッケー競技会場は新設した仮設競技会場であ

り、大会後は撤去したが、南側観客席を一部低層化しており、競技する選手の背景にメインスタジアムや展望台、その先にはカナリワーフの高層ビルを映し出した(Photo 1)^{注 17)}。また、市内中心部にある既存クリケット会場であるロード・クリケットは改修し、アーチェリー会場として転用した。円形のグラウンド内のレンガ造観客席と近未来的な形状の記者席を結ぶ軸線上に競技場を設置し、それを挟むように仮設観客席を建設した(Photo 2)^{注 18)}。弓と矢を構え、的に向かって構える選手のその先には有機的な形態が特徴的なメディアセンターの建物が映し出される。また、街中を競技会場とした例であるが、自転車タイムトライアル会場は、市郊外ハンプトンコート宮殿をスタート地点として、ロンドン市内中心部まで周回するコースであり、バッキンガム宮殿まで周回し、選手の背景にロンドン市内の街並みを映し出した。

(8) 都市を映し出す五輪計画の背景となったロンドンの都市構造

都市を映し出すというロンドン五輪の計画に欠かせないのが、その敷地であり、背景となるロンドンの都市構造である。地理的要因、都市計画、建築計画、そして景観計画の観点から以下に整理する。

まず、地形的要因として、集約した(コンパクトな)地理的構造が挙げられる。世界中のアスリートが集まり、選手村から日々の活動をする五輪の日常において集約した地理的構造であることは非常に重要である。発達した交通インフラ網もあり、大会期間中は関係者も観客も公共交通機関を利用した移動が推奨されていた。観戦日のチケットには公共交通機関の終日フリーパスが付いていた。



図 1-16 大会の競技チケットには、開催日の公共交通チケットが同封されていた

また大会期間中は、市街地の道路を封鎖して実施されるロード系競技や多くの観戦客がロンドンにやってくることを想定し、生活する市民は徒歩による移動をメディアを通して要請していた。このようなお願いが可能となったのは、ロンドン市内が歩いて移動することが可能なほど集約しているからであり、市内に点在するランドマークも集約することで重層的な都市景観を形成している。それは、詳細は後述するが、平坦な地形や都市保全の観点からの高層ビルの建設が制限されていたことも一助ある。



図 1-17 大会期間は歩いてロンドン市内を移動するための地図(左)と
余裕を持って市内を移動するようにとお知らせ広告(右)

また、ロンドン市内中心部は平坦な地形が続き、景観保全などの観点から建物における高さ制限があり、市内周縁部の丘から市内全体が一望できる。例えば、市内北部のアレキサンドラ・パレス (Alexandra Palace)、より中心部北端のプリムローズ・ヒル (Primrose Hill)、そして、南西部のテムズ川南岸であるグリニッジ・パーク (Greenwich Park) 敷地内の小高い丘に上がれば、ロンドン市内と、点在するランドマークを一望することが可能となる。後述する市内中心部に仮設競技会場の一部として階段状の観客席を設置することで、そこに設置したカメラポジションから、競技会場の先の都市景観を競技する選手の背景として映し出すことが出来る。また、後述する市内の広場空間の影響もあるが、広場やテムズ川上空が空いていると市内のスカイラインを形成するランドマークの重層的な景観を望むことが可能となる。

ロンドン市は市内中心部にもスクエア (Square) と呼ばれる大小さまざまな規模の広場、

緑や水の空間が豊かな公園(パーク Park)として、リジェント・パーク(Regent Park)やハイド・パーク(Hyde Park)などが保全されており、スクエアなどは周囲に住む近隣住民のコミュニティスペースとしての役割から、大きなスクエアやパークでは、市民の憩いの場としての役割だけでなく、コンサート、パブリックビューイング、式典、アトラクション、文化イベント、そして五輪のようなスポーツイベントまで様々な規模と用途に対応可能となる。その際に採用するが仮設建築物である。期間限定のイベントだからこそ仮設建築物で十分に対応可能であり、利用後に原状回復を見込める。このように様々な規模と用途に合わせて仮設建築物で可變的に対処可能なのは、広場や公園という何もない場所として常に保持されているからであり、これもロンドンの持つ都市の利点である。最後に建築の敷地としての活用は難しいが、ロンドンの都市空間における重要な構成要素が市内中心部を横断するテムズ川であることも忘れてはならない。水運によって街を発展させてきた河川は、様々なデザイン、規模、用途の橋が分断しがちな都市を繋ぐ。テムズ川上空は開けており、川岸のスカイラインとその先の重層的な都市景観を眺望可能とする。また、蛇行しながら横断している河川の形状は、前述したように五輪招致段階でのロゴマークに採用され、市民に愛される都市のアイコンとして認識されている。



図 1-18 競技会場の敷地となる王立グリニッジ・パーク(左)とホースガーズパレード(右)

(9) ロンドン眺望景観管理構想(London View Management Framework)

これらの地理的要因、都市計画の観点から都市を映し出す五輪を計画出来たのは、様々なレベルでの都市保全があったからである。その中の一つに、ロンドン市内中心部において、歴史的・文化的に象徴となる眺望景観の保全を目的に策定された「ロンドン眺望景観管理構想(London View Management Framework)、以下LVMF」(岡村 2010)⁵⁴がある。



図 1-19 LVMF の表紙

この LVMF には、人々がロンドン市とその歴史的、文化的に象徴となる景観を把握することに活用される指定眺望景観⁵⁵が 27 か所指定している。詳細は次章に譲るが、これらと競技会場が重なっているかどうか、また、競技会場の背景に望見される都市景観と LVMF で指定されている眺望景観に含まれ、視覚的に文化的にも突出した建物や構造物である、ランドマーク⁵⁶に共通するものがあるかどうか、五輪景観を生み出す競技会場の抽出の基準となる。

以下、LVMF の資料内の指定眺望景観を記した頁を抜粋する。市内広域の配置図を記したものと市内中心部の配置図を示したものがある。これら指定眺望景観の箇所が合計 27 か所となる。

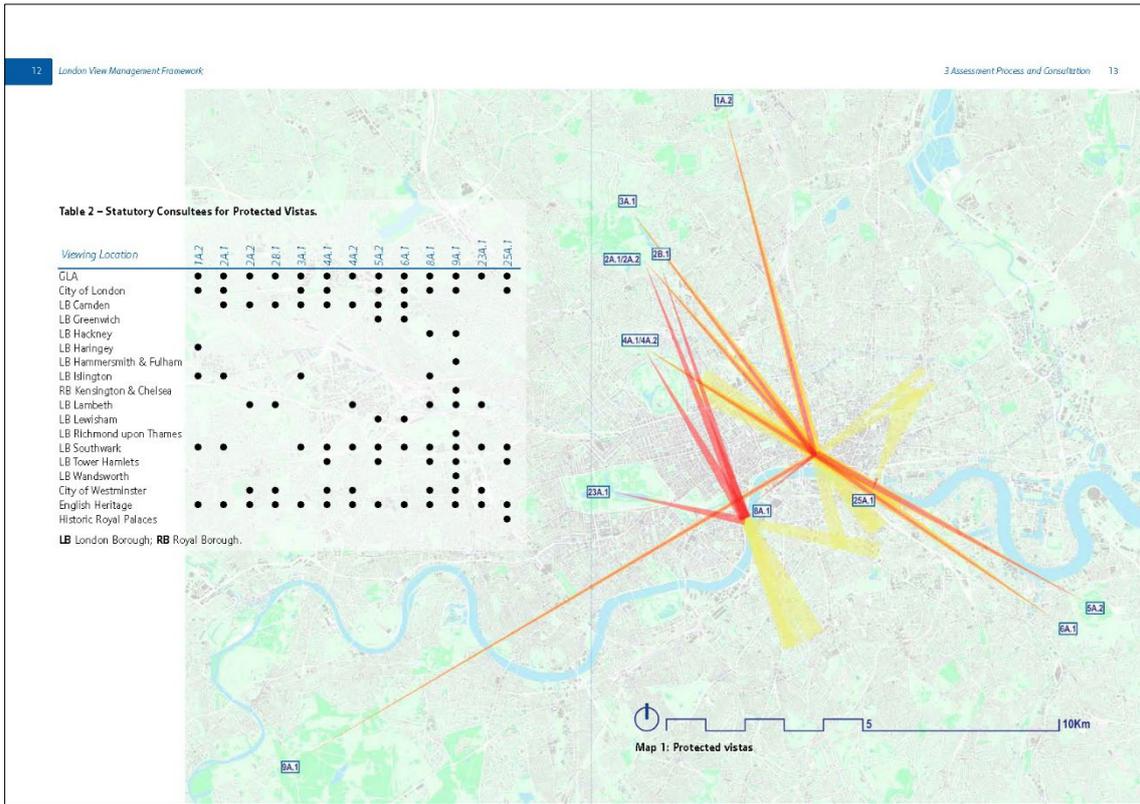


図 1-20 LVMF 内の指定眺望景観を記す頁(市内広域)

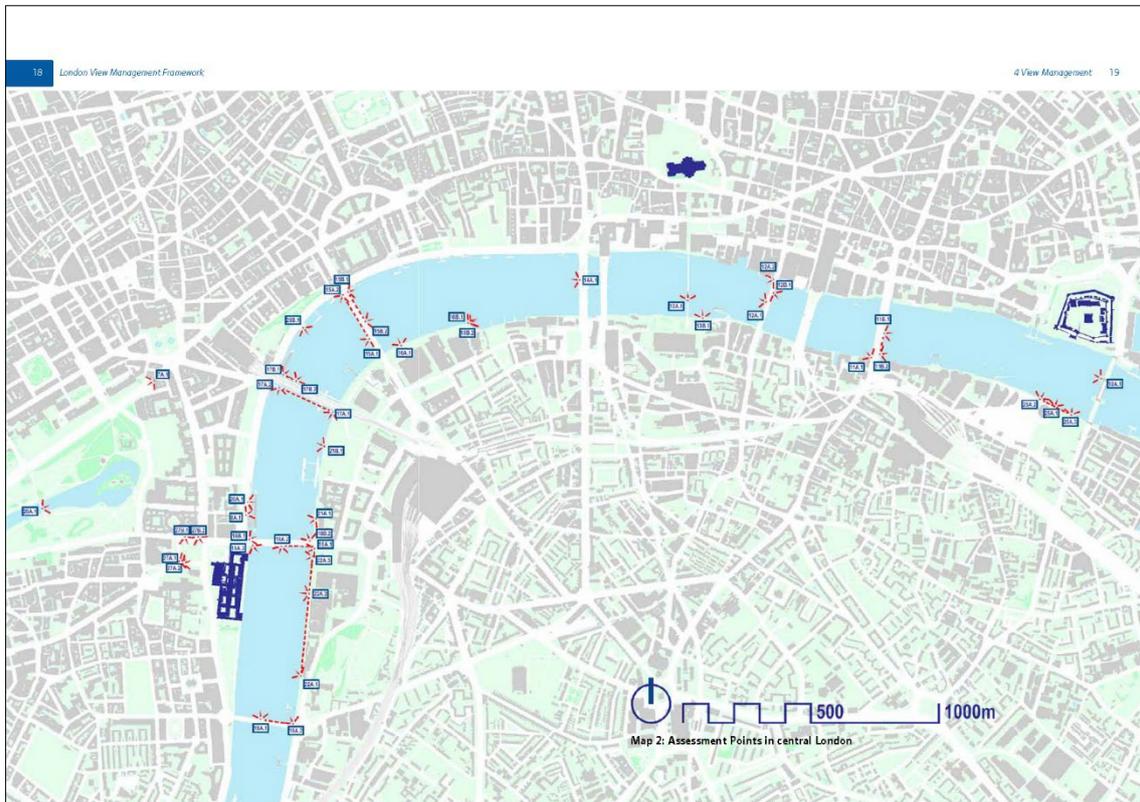


図 1-21 LVMF 内の指定眺望景観を記す頁(市内中心部)

(10) パリ五輪 2024 へと継承される都市を映し出す演出

「都市景観を映し出す五輪」という考え方を継承したのが、東京五輪閉会式でのハンズオーバーセレモニーで紹介された 2024 年に開催されるパリ五輪であった。エッフェル塔の下にビーチバレーボール競技会場、コンコルド広場にアーバンスポーツ競技会場、ベルサイユ宮殿の庭園で馬術競技会場など市内の観光名所を敷地に競技会場を計画している。また、これまでの五輪同様、世界中の視聴者が最も注目する開会式では、市内の中心部を流れるセヌ川を会場として世界から集まった選手たちはボートに乗船し、はセヌ川を入場行進する。開会式は川沿いから入場料無料で観戦でき、史上最大の 60 万人の観客が会場で開会式に参加することになる。

(11) ロンドン五輪における SNS の位置付け

本研究はカメラによって映し出された都市景観に関する研究であるが、対象はテレビ画面に映し出された映像である。テレビがレガシーメディアと言うのならばニューメディアと呼ばれるソーシャルメディアについても本研究の立ち位置を明確にしておく。

ロンドン五輪は初のソーシャルメディア五輪に位置付けられたが、ソーシャルメディアのプラットフォームである SNS とそこに提供されるスマートフォンカメラから生み出された画像、動画について以下に述べる。

ロンドン五輪で世界に発信された五輪映像において、SNS などのソーシャルメディアについては、招致活動準備期間(2003~2005)では、あまり議論されていなかったというより、私たちの日常に SNS は浸透していなかった。しかし、急速なデバイステクノロジーの発展(スマートフォンの普及)、個人が主体的にメディアとなって、手のひらから、その場所から発信するというソーシャルメディアというスタイルが定着したことから、組織委員会としても対応を余儀なくされた。

例えば、開会式リハーサルが始まる前のことである。開会式の芸術監督である英国人映画監督であるダニー・ボイルは、観客の前に登場し、自らの姿をメインスタジアムのスクリーンに映し出した。そして、「公開された開会式の演出に対して、ソーシャルメディアでの発信を控えて欲しい」と自らマイクを取って呼びかけた。しかし、彼の顔が映し出されたスクリーンには#SAVETHESURPRISE (驚きを取っておけ)というソーシャルメディアで拡散する際の“#(ハッシュタグ)”による単語も重ね合わせて映し出され、ソーシャルメディアを活用した、良識のある情報発信と拡散を観客にお願いしていた。観客や視聴者

を驚かさず開会式の演出としては、このようなスタンスでの SNS での発信の仕方に対する距離の取り方だったのだろう。一度、アップされた映像は見せたくなくても、時に悪意を持って拡散され、炎上を引き起こす。しかし、個人が SNS にアップした画像や動画はやはり素人である一般人によるものが(当時は)主流であり、映像の質としては専門家によるものには到底及ばない。しかし、公式の大会競技映像は専門家とその機材によって、撮影、編集、調整、発信、保管というプロセスを経ており、またそのカメラポジションも放送と掲載を前提として選ばれた場所(カメラポジション：選手と同じコート内など)としてのメディア席であり、一般の観客が撮影する画角とは大きく異なる。映し出される競技の背景となる都市景観は、計画者が意図したアングルがあるとは限られない。

以上の理由から、本研究においては SNS に掲載された映像や動画は調査資料とはせず、公式映像である五輪チャンネルのみを調査資料として扱うこととする。言い換えれば、現地や会場にいる人のスマートフォンで撮影し、SNS で発信、拡散する映像を調査資料とするよりも、SNS に載せて拡散するための映像としての五輪チャンネルを調査資料とした。



図 1-22 節度を持った SNS 発信を呼びかける開会式の芸術監督のダニー・ボイルが
開会式リハーサルでビジョンに映し出される

1.2. 研究目的

前節の背景で概観したように、近年、五輪はその開催の意義を問われつつ、持続可能な計画と実現の方法として映像を意識した大会運営を目指していた。それらを実現するになかで必要となるのはどのような考え方であり、行動なのだろうか。本節では研究目的として、その目的達成に必要なコンセプトを整理する。

本研究の目的は、「ロンドン五輪において都市を映し出す五輪競技会場計画の立案方法および実現方法を解明する」である。この研究目的を解明するために、その研究プロセスを3つの研究課題に分け、それぞれ目的を立て、調査を実施し、考察を加える。

- 研究課題 1 (3 章) : 大会コンセプトの立案の経緯の解明
- 研究課題 2 (4 章) : 競技会場の建築計画・設計の解明
- 研究課題 3 (5 章) : 都市景観を映し出した中継映像を生み出したカメラポジションとカメラワークの解明

これら3つには次の関係性がある。まず、研究課題1で五輪景観を生み出す競技会場の背景となる大会コンセプトの立案方法とその経緯を解明し、五輪景観を生み出す競技会場が研究課題2の調査事例となる。そして、五輪景観を生み出す競技会場で生み出された中継映像はどのようなカメラポジションとカメラワークで生み出されたのかを研究課題3で解明する。これらの3つの関係性は本研究のコンセプトである五輪景観のダイアグラム図でも説明可能である。

そして、それぞれを以下に詳説する。

まず、研究課題1(3章)であるが、ここでは「大会コンセプトの立案方法とその経緯の解明」を目的とする。ロンドン五輪招致計画において、ロンドン五輪招致委員会は、どのようにして競技する選手の背景としての「都市景観を映す出す」というコンセプトを立案したのか。これを解明するために、大会の公式資料や設計図書を収集、解読し、また、関係者へのヒアリング調査から分析し、考察を加える。

次に研究課題2(4章)であるが、ここでは、五輪景観を生み出す競技会場の建築計画および設計、そしてカメラポジションについて解明する。そのため、五輪景観を生み出す競技会場(とくに観客席の配置・形態等)の建築設計に着目し、計画・設計図書等(以下の表の一覧)からその特徴を読み解くと共に、様々な組織に所属する多くの関係者が関与

し、招致計画から大会実現までという限られた時間の中で競技会場計画の実現・経緯を解明する。

最後に研究課題 3 (5 章)であるが、ここでは、競技する選手と競技会場の背景に映し出された都市景観について、カメラがどこから、どのようにして映し出したのか、公式記録動画におけるカメラポジションとカメラワークの調査・分析から解明する。

以下が、これらの研究課題を解明する際に参照した建築計画・設計図書の一覧である。それぞれの図面の発行はロンドン五輪組織委員会である。

表 1-1 本研究調査において参照した図面一覧

no.	drawing title	drawing no.	issued by	issued date	rev
1	equestrian & mod. pen., greenwich park, Site Plan, Overlay & Operations, Detailed Design	POP-A-O-EQ-MZ-GRP-SP-00-001	LOCOG	11/Jul/2012	Rev.B09
2	equestrian, greenwich park, Venue Plan	grp-o-01-01	LOCOG	1/Jul/2008	Rev.B
3	beach volleyball, horse guards parade, Enlarged Venue Plan, Overlay & Operations, Arena Seating Bowl Level, Detailed Design	POP-A-O-BV-XX-HGP-PL-02-200	LOCOG	30/Jan/2012	Rev. 03
4	Marathon / Race Walking Courses, Central London / Victoria Park		LOCOG	1/Jan/2005	Rev.A, IOC Evaluation Visit
5	athletics-marathon, the mall, Venue Plan, Marathon Start/Finish, Overlay & Operations, Detailed Design	POP-A-O-AT-XX-MLL-PL-00-100	LOCOG	30/Jan/2012	Rev.B02
6	triathlon, hyde park, Venue Plan, Overlay & Operations, Detailed Design	POP-A-O-TR-XX-HYD-PL-00-100	LOCOG	24/May/2011	Rev.B01

また、本研究には、持続可能な五輪開催への提言となることを想定している。五輪開催都市などが大会を計画・実現する際のマニュアルとして、「オリンピック・テクニカルマニュアル(以下、テクニカルマニュアル)」があり、後述する既往研究でレビューする分野にまつわる視点は欠落しており、実務的にも本研究の有用性は示唆される。

(1) オリンピック・テクニカルマニュアルについて

テクニカルマニュアルとは、五輪招致検討都市、立候補都市、開催都市が大会を計画・実現する際に参照するための、五輪憲章(Olympic charter)や開催都市契約書(host city contact)に準ずる位置づけのIOC発行のガイドラインと言える。

「宿泊施設」「選手村」「競技協約」「交通」など大会運営分野ごとにまとめられ、21 巻から構成されている⁵⁷。ロンドン五輪の招致ファイルには仮設競技会場の適切な利用について言及されているが⁵⁸、会場周辺の景観への配慮については触れられていない。

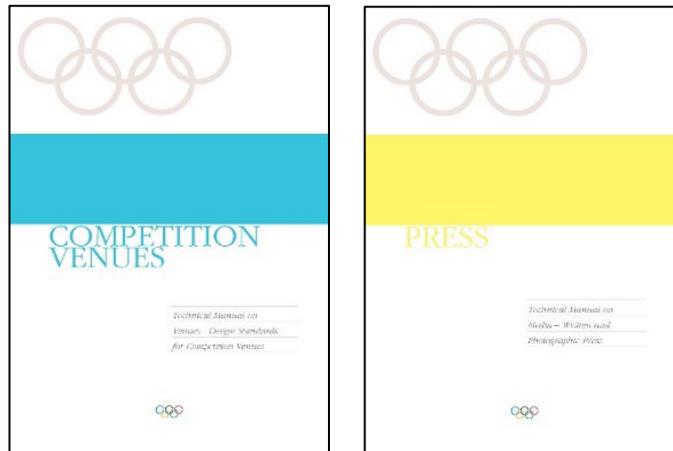


図 1-23 五輪テクニカルマニュアル表紙（左：競技会場編、右：メディア編）

（2）テクニカルマニュアル_競技会場設計基準編について

テクニカルマニュアル「競技会場設計基準編」編の仮設競技会場に関する項目において、IOC は持続可能な五輪開催への観点から、まず既存施設の五輪競技会場への転用、改修を含めた活用を推奨する。次に新設の仮設競技会場を建設し、それらが難しい場合においてレガシーを考慮した恒設の競技会場の建設を検討する、という順位で競技会場の計画を推奨している。また、競技会場の設計基準の詳細も「テクニカルマニュアル_競技会場設計基準編」に記載されている。以下に概要を整理することで、このマニュアルの目的などを明らかにした。

表 1-2 テクニカルマニュアル「競技会場設計基準編」概要

資料使命	招致検討都市、立候補都市、開催都市に対して、競技会場計画の設計基準を提供
資料目的	競技会場の経費は五輪の中で大きな部分を占め、非常に重要な大会の成功要因。競技会場建設に関わる五輪開催都市組織委員会や関係者にとって五輪競技会場設計基準を理解の資料
対象読者	開催都市の組織委員会やその関係者だけでなく、招致検討都市も必読の資料
制作方法	IOCと競技団体やそれ以前の大会組織委員会と関係者らと構築
更新性	更新は流動的なものとして作られており、未来の五輪大会に向けて固定されたものではない。大会毎、競技団体などによってルールなどが変更されたときには常に更新
競技会場計画に際しての主な原則	競技会場はなるべく共有、既存活用(必要ならば改修)、新築ならば大会後のレガシーの必要性を考慮して、レガシー案がないなら仮設競技会場で対応。会場群として集める。仮設施設を恒久施設の上に最大化
義務	競技会場計画における必要条件を必ず求めるものではなく、固定の基準でもなく、この基準は未来の五輪大会に向けて基本的なものとして提供

(3) テクニカルマニュアル_メディア編について

メディア編は 1 巻と 2 巻からなり、映像メディアを扱う本研究では 2 巻の「放映」を参照した。大会組織委員会と IOC との放映権にまつわる機材や設備についての概要を説明しており、どのように見せるか、カメラの位置などについての取り決めについての記載もある。五輪開催の計画と実施における放送と競技会場への関わりを紹介している。

表 1-3 テクニカルマニュアル「メディア編」概要

資料目的	組織委員会と五輪放送組織公認の放送局IOCと放映権を締結することによって提供されるメディア機材やサービスの概要を説明
制限	要望は開催都市、会場、競技などの現地での条件によって調整が必要になることを想定
対象読者	開催都市の組織委員会やその関係者だけでなく、競技団体、メディア関係者、招致検討都市、立候補都市向け
概要	4章の放送では組織委員会と競技会場内で提供される放送機材を含むメディアのための五輪放送組織によるメディア機材とサービスについて OBSに指導してもらったIOCのメディア部門とIOCの法律部門によって編集。またIOCが五輪開催によってメディアについて更新すべきと判断した際にはいつでも更新
義務	最低限度のメディア機材とサービスが提供される
影響の仕方 (4.3.1)	どう見せるかはOBSの管理下
カメラ位置 (4.3.2)	放送組織は組織委員会と共にカメラ位置を計画。試合場でのカメラは関係競技団体との協議する必要がある。IOCと調整していく。カメラ位置の最終案は組織委員会との合意が必要であり、もし矛盾が生じた場合はIOCが介入する可能性

以上、3 つの研究課題(3 章、4 章、5 章)の詳細と、五輪招致、大会の計画、そして円滑に実現するためのガイドラインとしてのテクニカルマニュアルを参照したが、いまや国家レベルのスポーツイベントとなった五輪を計画する際には、どのような関係者が、どの段階で、何を提案することが招致を成功に導くのか。そして、招致決定後、大会を実現するまでに、さらに多くの関係者が関わる中で、どの段階で、どのように連携していくことが必要であるかを、公式資料、設計図書などの関連資料や関係者へのヒアリング調査から明らかにしておくことも本研究の目的である。

1.3. 研究対象

本研究の研究対象は、後述する既往研究のレビュー節で触れる多岐に渡る五輪関連研究の中でも「五輪景観創出に向けた関係者の包括的な取り組み」を詳細化することであり、各分野の既往研究を検証する前に、五輪は学術的なテーマとして既に多くの研究が実施されている。五輪はスポーツの祭典でありながら、計画実現することで開催都市には大きな影響を与えるので、競技会場、インフラ整備、地域開発という建築から都市開発などの学術テーマになる。また、開催都市や国家の文化的側面を発信するもあるため、学術的にも多岐にわたるテーマとなっている。そのように、社会に与える影響として、社会学もしくはスポーツ社会学の領域では五輪をテーマにした研究や議論が盛んに行われている。以前から五輪研究は、その大会の意義(開催することが都市開発の機会)から都市計画、ハード面をテーマにしていたが、前述のように、近年五輪開催の意義を問われており、大会後のレガシー、サステイナブルをテーマにした研究が多い。大会後のレガシーとしては、会場や都市インフラなどモノとして残るもの有形レガシーや、誇りや愛国心、文化醸成など記憶や印象として残る無形レガシーなどがある。

1.4. 既往研究のレビュー

五輪景観の創出・発信という観点から既往研究を整理する。既往研究の分野として、建築計画、景観研究、都市計画、メディア研究という学術的領域を概観する。まず、建築計画の領域は③競技会場についてであり、次に、景観研究や都市計画については④周辺都市景観、そして、メディア研究については①カメラ(視点)を主に取り上げ、検証をする。

1.4.1. 五輪競技会場の建築計画・設計（建築計画研究分野）

まず、建築計画の立場から、競技会場に関する既往研究を整理する理由として、都市景観の中での建築の位置付け、仮設建築物活用の新しい側面、そして五輪における競技会場の新たな意味付けを見出すために建築計画の既往研究を概観する。

May 他(2012)⁵⁹は、ロンドン五輪の馬術とビーチバレーボールの競技会場として市内の公園や広場を競技会場とした現場での経緯の詳細を記録している。また、Bulley 他(2015)⁶⁰は同大会での周辺都市景観を映し出す仮設競技会場の実現について指摘している。他にも同大会の仮設競技会場活用の必然性については Nimmo 他(2011)⁶¹が過去の五輪の後利用の検証と共に考察をしている。また Epstein 他(2011)⁶²は五輪開催における仮設競技会場の有効性について、持続可能な競技会場の計画から実現に至る要諦をロンドン五輪から考察をし、John 他(2019)⁶³では過去の五輪メインスタジアムを紹介し、これからの五輪で求める競技会場のあるべき姿を考察している。しかし、これらの論考では、五輪競技会場とカメラからの景観として周辺都市景観との調和には触れられていない。また、五輪競技会場を検証する際、開催都市の中での都市スケールにおける建築計画を検証するため、競技会場の平面図や断面図など設計図書の詳細から検証調査したものは少ないと考える。

1.4.2. 五輪と都市景観（景観研究分野）

次に、景観計画分野から五輪競技と都市景観の関係について整理する。まず、國井(2017)⁶⁴の東京五輪 2020 のマラソンコースの景観分析があるが、これはランナーの視点による景観分析であり、シークエンス型景観（後述）の事例である。また、ニリオ(2015)⁶⁵による五輪招致による新しい競技会場や都市インフラ計画が生み出す都市景観の変容に関する考察がある。しかし、本研究ではこのような現地での景観体験だけでなく、テレビやインターネットという映像を通しての景観体験に着目する。また、カメラの映像

を通しての景観体験を得るということは、見る場所(カメラポジション)と見え方(カメラワーク)を計画論となり、そのために既往研究としての景観計画を比較対象とする必要がある。

1.4.3. 五輪開催と都市計画・開発（都市計画分野）

そして、都市計画の分野から競技会場計画に着目するが、それは競技会場計画地というカメラポジション(視点)の存在する敷地の都市計画論という観点だけでなく、都市景観(視対象)を形成する都市計画論である。

五輪開催が都市計画に及ぼす影響として、Nimmo 他(2011)⁶⁶による、ロンドン五輪招致決定による市内東部の都市開発の変容と五輪閉幕後のレガシーについての考察がある。そして、尾崎(2007)⁶⁷は、五輪開催による都市改造の正当化についてと古いタイプの開発主義的発想による都市空間の変容について考察している。これらの研究では、五輪開催が都市計画に及ぼす影響として、都市開発が主な研究対象であるが、本研究では五輪とともに世界へ発信されるべき保全対象としての景観やランドマークに着目している。

そして、橋本(2017)⁶⁸の論考ではイーファー・トゥアン(地理学者)⁶⁹からの引用として、宗教建築やトポフィリア論を展開し、敷地や敷地軸など都市や敷地固有の設計と条件の建築に与える影響について考察している。地軸など敷地環境などの設計と条件に取り込み、沿うことで建築に求心力が生まれ、中心性、象徴性が高まる。スポーツを現代人の新たな宗教と捉えるならば、競技会場が本来持つ帰属意識から、競技場建築を宗教的聖地(巡礼地)としている。イベント後の撤去を前提とする建築物である仮設競技会場においては簡素になりがちだが、仮設だからこそその得られる周辺環境を取り込み、世界が目にする五輪というイベントにおいて、開催都市ならではの周辺環境を取り込み、非日常感を演出する重要な与条件となる。

1.4.4. 五輪とメディア（メディア研究分野）

最後に、メディア研究としての五輪映像であるが、これまでの五輪映像や五輪中継は競技映像そのもの、もしくは競技映像とは異なる映像として世界に発信されることが期待されてきた。しかし、本研究で着目するのは競技会場の中からのカメラ映像であり、競技する選手の背景に映し出される都市景観の映像が期待されている。

五輪開催における公式記録映像における記録性、芸術性、政治的メッセージについて

舛本(2000)⁷⁰の論考がある。しかし、調査資料となる映像は記録映像などであるため、テレビ中継映像は調査資料から除外されている。また五輪とメディアについては、新旧メディアの視聴変化についてのもの⁷¹や、五輪による対市民広報外交と国家ブランディングについてのもの⁷²に詳しいが、それらは視聴者、視聴スタイルについての研究である。同様にスポーツ中継におけるカメラワークの研究⁷³⁷⁴もあるが、これらは被写体とカメラワークの関係性を解析し、その効果を研究するものである。

そして、競技会場で観るだけではなく、テレビ視聴で見ることに注目する杉本(2017)⁷⁵の論考では、ボードリヤール⁷⁶を引用し、消費社会におけるメディアのありようを解説しつつ、スポーツを観ているのではなく、視せられているなど、観る(観戦)と見る(視聴)の違いについて論じている。また、リー(2017)⁷⁷は、Olympic Media, Olympic Televisionなどの著者スポーツメディア研究者 Andrew Billings の論考を引き合いに出し、スポーツ中継の魅力のひとつは結果がわからない「競争上の不確実性(competitive uncertainty)」⁷⁸でもあるとしつつ、高騰する放映権料の問題から、米国の放送局 NBC が選手の感動物語、ストーリー、脚本など過度にパッケージ化する五輪中継について解説している⁷⁹。そのような意味では本研究が扱っている五輪景観というコンセプトは「開催都市の都市景観をプロモーションするためのパッケージ」という考えられるかもしれない。これらのメディア研究は、狭義のメディア論と捉えるのではなく、建築計画、景観研究、都市計画に緊密に連携して論を展開するものとする。

1.4.5. 本研究の新規性

以上のように、五輪には多岐にわたる学術的な既往研究の分野が存在するが、その中でも、建築計画研究、景観研究、都市計画研究、メディア研究を横断的に、かつ実際の大会を事例として論じる研究は希少であり、そこに本研究の新規性があると考えられる。

例えば、建築計画研究分野では、五輪開催で計画する競技会場の仮設建築物としての有用性について参照したが、仮設建築物であることが逆に、恒設建築物では建設不可能な都市の広場や公園を敷地とする可能性を示唆する。そして、都市計画研究の分野からは、五輪を開催すると都市の様相が大きく変容してしまうのがこれまでの事例だったが、仮設建築物による競技会場を計画・建設すれば、大会後に原状回復をする、遺さないレガシーを選択することが出来る。

その上、従来の五輪の競技会場で生み出される映像は競技する選手を中心にし、競技会場内で完結したものである。それに対し、本研究で事例調査対象とする競技会場で生み出される映像は競技する選手の背景に周辺都市景観を取り込めるように競技会場の形状とその配置を計画している。以上のような競技会場における映像化の手法に新規性があると考ええる。



図 1-24 東京五輪 2020 ビーチバレーボール競技会場競技映像
観客席が遮蔽物となり周辺都市景観を取り込めていない

また、景観研究では、カメラを通した新しい景観体験を目指すのが、五輪を国威啓発やプロパガンダのメディアと見なしていた既往研究からすると、五輪という世界一流の選手が集まる競技大会と言うコンテンツに更なる魅力を付加している。

さらに、景観を映像(画像、写真など)として把握するという事は、景観分析の世界で用いられてきた。宗方(2003)⁸⁰のように、実物の代わりに映像を用いて都市景観の評価を行う先行研究は多くあり、その中でも、ロンドンのような観光地の写真や画像などを使った都市イメージを調べる景観研究(神谷、2000)⁸¹や、都市景観を映し出した画像を解析する研究(姫野、2002)⁸²などもある。しかし、本研究では、観客席からの景観を映像化して発信する点に新規性があると考ええる。

¹Pound, Richard (2003), IOC, 表紙裏の扉頁 3.1 Review, Olympic Games Study Commission, Report to the 115th IOC Session, p.10, (Olympic review, April 1911, pp 59-62 の伝語原書の英訳を筆者による日本語訳) 原文の英文を以下に紹介する。

“It would be very unfortunate, if the often exaggerated expenses incurred for the most recent Olympiads, a sizeable part of which represented the construction of permanent buildings, which were moreover unnecessary - temporary structures would fully suffice, and the only consequence is to then encourage use of these permanent buildings by increasing the number of occasions to draw in the crowds - it would be very unfortunate if these expenses were to deter (small) countries from putting themselves forward to host the Olympic Games in the future.”

Pierre de Coubertin,

² 前掲、Pound, Richard (2003), pp.4, 1. Introduction

³ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.9, 3. Preliminary Consideration, Consequences and “knock-on” effects

⁴ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.10, 3. Preliminary Consideration, Broadcasting the Games

⁵ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.14, 4 Considerations for Implementation

⁶ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.15, 4 Considerations for Implementation

⁷ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.23, 5 Recommendations, 5.2 Venues and Facilities, Venue Selection and Construction, 2.01 Recommendation

⁸ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.27, 5.3 Games Management

⁹ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.32, 5.4 Number of Accredited Persons

¹⁰ 前掲、Pound, Richard (2003), pp.27, 5.5 Service Levels

¹¹ OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp.28, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY ベルリンとその周辺のみで、視聴時間は138時間、視聴者数は16万2,000人。

¹² 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp.28, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹³ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp.28, OLYMPIC

BROADCASTING HISTORY, 五輪憲章、第 49 条「テレビ放映権は、IOC の承認を得て組織委員会が販売し、その収益は IOC の指示に従って分配される」

¹⁴ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 29, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹⁵ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 29, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹⁶ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 29, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹⁷ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 29, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹⁸ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 29, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

¹⁹ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 30, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

²⁰ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 30, OLYMPIC BROADCASTING HISTORY

²¹ オリンピック・チャンネルは、“オリンピック・アジェンダ 2020”のもと、オリンピック・ムーブメントとして若い世代を取り込みたい IOC の目的のために 2016 年 8 月に設立。チャンネルは PC、スマートフォンなどのアプリなどで視聴可能となる (www.olympicchannel.com)。本論文の調査事例となるロンドン五輪の各競技映像は世界最大の動画共有サービスサイト上にアーカイブされており、いつでも、どこでも、個人が主体的に閲覧可能な状況にある (www.youtube.com/user/olympic)。

²² 前掲、Pound, Richard (2003), pp.10, 3. Preliminary Consideration, Broadcasting the Games, 3.1 Review, (予備検討事項、大会中継)に記述がある。

“Broadcasting the Games: The expansion and improvements in broadcasting the Olympic Games have helped to promote the Games internationally, taking the passion, drama and spectacle of the Games into the living rooms of the largest global audience of any event. (五輪を放送することの拡大と発展は、世界的な大会へと促進することを助け、大会の情熱とドラマと壮大さを他のどのイベントよりも世界最大の視聴者数のリビングルームへ届ける)”

²³ ロンドン五輪公式レポート (London 2012 Olympic Games Official Report, Volume 2

以下、公式レポート) (2013), LOCOG, pp.21, Chapter One, Setting the Stage,。1992年バルセロナ五輪では、飛び込み競技を高台にある屋外プールの飛び込み台で実施し、サグラダファミリアや市内格子状街区を競技する選手の背景に映し出した。2000年シドニー五輪ではトライアスロン競技をメイン会場である湾岸地区で実施し、ランドマークであるオペラハウスやシドニー湾橋を競技する選手の背景に映し出した。no.6, "Instead, recognising lessons inherent in the approaches of Barcelona 1992 and Sydney 2000 to sustainability and legacy, London 2012 and all its partners set about creating a lasting impression for future generations." また、2004年アテネ五輪では、砲丸投げ競技をアテネ郊外オリンピアの古代競技会場(遺跡広場)の芝生の観客席に囲まれて実施した。

²⁴ ロンドン五輪招致ファイル(London 2012 Candidate City: Candidature File _Official bid file of London for the Summer Olympic Games in 2012, Vol.1 以下、招致ファイル) (2004), LOCOG, pp.17-19, Theme 1, Concept and legacy, 1.2, Vision, Games that make a difference で、ロンドン五輪招致ファイルに記述した4つのビジョン(pp.17)の4つ目 "Supporting the IOC and the Olympic Movement" として、ロンドン市の資産であるランドマークなどをテレビ映像として活用すると記述。また、選手だけでなく、世界中の視聴者を喜ばせる印象的な競技会場計画についても説明している。

²⁵ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp.27, OLYMPIC BROADCAST REVENUE GENERATION, Broadcast Revenue History: Olympic Games に、高騰する大会放映権料の経緯を記述している。

²⁶ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp.24, OLYMPIC ROADCASTING HISTORY WORLDWIDE COVERAGE, Olympic Games: Countries Broadcasting に、放映される国と地域の経緯を記述している。

²⁷ デイヴィッド・クレイ ラージ(2008), ベルリン・オリンピック 1936—ナチの競技, 白水社

²⁸ インフィールド, グレン・B(1981), 喜多迅鷹他訳, レニ・リーフェンシュタール—芸術と政治のはざまに, リプロポート

²⁹ Leni Riefenstahl(1992), LENI RIEFENSTAHL LIFE, Eiko Ishioka, Kyuryudo Art Publishing Co., Ltd.

³⁰ 舛本直文(2000), スポーツ映像のエピステーメー—文化解釈学の視点から, 新評論

³¹ Olympic チャンネルの歴史や成果については以下にある。
IOC Annual Report(2020), IOC, pp.106, Olympic Channel, Promoting Olympism in Society,

³² 2024年と2028年の夏季五輪の開催地を選定した従来の招致レース方式ではなく、2032年の開催地がオーストラリアのメルボルンに決定したように、IOCは五輪開催都市の選定として対話方式に変更された。これは五輪開催を求める立候補都市からの五輪開催の提案をIOC側が評価するのではなく、開催都市とIOCと一緒に大会後の後利用計画、すなわちレガシー計画も一緒にした五輪開催計画を策定して、評価していくものである。

³³ Stephen Essex & Brian Chalkley(1998), Olympic Games: catalyst of urban change, Leisure Studies, Volume 17, Issue 3, pp.187-206, 論文タイトルの他、本文でも「五輪は都市を変えるための重要な触媒となった、“…， the olympics have, …， emerged as a significant catalyst of urban change …」と記述してある。

³⁴ Abrahams, T., et al. (2012), Eastside Story, The Olympic Park, The Architects' Journal, pp.23, ロンドン五輪メインパークであるストラトフォード地区は五輪招致計画以前から再開発を望まれていた地域だったが、5つの行政自治区にまたがっていたため計画が進まなかった。それゆえ、五輪招致成功したことで本来よりも20年早く開発が進んだと言われている。“the bid's success effectively brought forward the whole regeneration of the area by two decades.”

³⁵ London2012 Venues(2013), LOCOG, pp.9, LOCOGが発行したロンドン五輪全競技会場の記録資料には「ロンドンを見せるーロンドンと英国の有名なランドマークを見せるための敷地を選ぶ。“Showcasing London-selecting locations that showcase London and the UK's famous landmarks”」とある。

³⁶ 山寄一也・岡村祐(2018), 「平昌冬季五輪における競技会場・施設の招致から開催に至る変遷 主会場である平昌五輪プラザと江陵五輪パークをケーススタディとして」, 2018年度日本建築学会大会学術講演梗概集(7066 東北), pp.189-190

³⁷ 山寄一也(2018), 日経XTECH ウェブ連載「平昌がつなぐ五輪レガシー」(2018/2/22～4/10 計6回)

- オリピックパークが2つ？平昌で五輪レガシーを考える
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00001/>
- 平昌五輪の中心はどこ？正しい仮設競技場の使い方
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00003/>
- カーリングの舞台が唯一の「既存改修」だった理由
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00004/>
- ボブスレー会場に学ぶ、競技場を「負の遺産」としないための顧客創造

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00005/>

- ブレる競技場の後利用、平昌の経験を東京に生かせ

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00006/>

³⁸ 石坂友司(2021), コロナとオリンピック 日本社会に残る課題, 人文書院

³⁹ 榎文彦(2013), JIA MAGAZINE 295, pp.010-015, 特別寄稿「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」

⁴⁰ Future Host Election, <https://olympics.com/ioc/future-host-election>

⁴¹ London Olympics 2012, London Olympics 2012 Cost and Benefit (Summary) (2002), ARUP in association with Insignia Richard Ellis

⁴² 前掲、公式リポート 第1巻(2013), pp14, Section 2 History behind the bid, 2.1 Britain's Olympic history, 2.1.4 The 1948 Games

⁴³ 五輪における公式リポート(例: London 2012 Olympic Games Official Report_Volume 1, 2, 3, 2013)とは、五輪憲章や開催都市契約書にあるように開催組織委員会が大会閉幕後に提出を求められる報告書である。招致計画から実施に至る作業の記録とし、以後の五輪組織委員会、立候補都市、招致都市などが参考にするための記録である。過去の五輪の公式リポートは五輪に関する研究機関 IOC Olympic Studies Centre(スイス・ローザンヌ)内にある図書館 Olympic World Library に保管されており、オンライン上で誰でも閲覧可能である。<https://library.olympic.org>

⁴⁴ 山寄一也(2019), 日経 XTECH, ロンドンに学ぶ「五輪後の街づくり」と題して、英国ロンドンで実施した文献調査や関係者へのヒアリング調査(2018.11-12)から得られた情報を連載し、報告している。

⁴⁵ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp.19, Vol.1-Theme 1の「コンセプトとレガシー: IOC とオリンピック・ムーブメントを支援する。(Concept and legacy, 1.2, Supporting the IOC and the Olympic Movement)」として「都市の素晴らしい資産である象徴的かつ歴史的なランドマークを使うことで、忘れられないテレビ映像を創出する。 “...we will capitalise on some of the city's greatest assets; using iconic and historic landmarks to create memorable television images, tapping into London's rich cultural life and making the most of our skill for delivering pageantry with a contemporary flair.”」と記述している。

⁴⁶ 前掲、公式リポート第3巻(2013), pp.104, Section4, London as a Host City, 「都市のランドマーク群は競技や聖火リレーの素晴らしい舞台と背景としての役割を果たした。

“The city’ s landmarks served as dramatic settings and backdrops for sport and for the Torch Relay,....”と記述している。

⁴⁷ 西村幸夫(2004), 都市保全計画—歴史・文化・自然を活かしたまちづくり, 東京大学出版会, pp. 417-479,

⁴⁸ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp. 20-21

⁴⁹ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp. 2-3, Introduction 3,

⁵⁰ 平本 督太郎(2021), 図解でわかるSDGs 「17の目標」と「自分にできること」がわかる本, メイツ出版, pp. 18-19

⁵¹ 2012年夏季五輪立候補都市申請書(2004), “Response to the questionnaire for cities applying to become Candidate cities to host the Games of the XXX Olympiad and the Paralympic Games in 2012(以下、立候補都市申請書)” LOCOG, P10, “テーマIV: 競技会場”

⁵² Bulley, J., et al. (2015), London 2012 legacy: A sustainable model for delivering large sports events, Civil Engineering Vol.168, pp. 89-96, “2.2 Showcasing London” (pp. 90-91)において、ロンドン五輪ではすべての競技会場 37 会場の内、仮設を 21 会場としている。

⁵³ 前掲、公式レポート第3巻(2013), pp. 40, Section 2, Staging a great Games, 組織委員会は競技会場計画・建設に向けて、明確なルールを決め、実現した。

⁵⁴ 岡村祐(2010), 英国ロンドンにおける新・眺望景観保全計画の基本的枠組み, 日本建築学会技術報告集, 16巻32号, pp. 329-334

⁵⁵ London View Management Framework, Supplementary Planning Guidance(以下、LVMF)(2012), Greater London Authority, pp. 29, 「5, Visual Management Guidance (LVMF 補助的な計画の手引き)」に「指定眺望景観は人々がロンドン市とその歴史的、文化的に象徴となる景観を把握することに活用される。”The views designated in the London Plan are highly valued because they make a significant contribution to people’ s ability to understand and appreciate London as a whole. They are also highly valued because they allow a viewer to see significant historic and cultural landmarks in their landscape or townscape setting and to understand the relationship between them.”と記述している。

⁵⁶ 前掲、London View Management Framework(2012), pp. 237 「LVMF 補助的な計画の手引き」の「別表 A: 用語解説 “Appendix A: Glossary”」に「ランドマーク “Landmarks”」

の解説として「視覚的に文化的にも突出した建物や構造物」としている。

⁵⁷ テクニカルマニュアル(Technical Manual)は以下の 21 巻から構成される(2005 年 11 月発行)。Accommodation(宿泊施設)、Accreditation(認定)、Brand Protection(商標保護)、Ceremonies(式典)、Communications(コミュニケーション)、Design Standards for Competition Venues(競技会場設計基準)、Hospitality(ホスピタリティ)、International Federation Requirements(国際競技連盟の要望)、Media Written and Photographic(メディア)、Olympic Games Impact(五輪の与える影響)、Olympic Village(選手村)、Organisation of Election to IOC Athletes Commission(IOC 選手委員選挙組織)、Organising Meetings(調整会議)、Other Olympic Games Matters(その他の議題)、Paralympic Games(パラリンピック)、Planning Coordination and Management(調整管理計画)、Sport(競技協約)、Ticketing(チケット)、Transport(交通)、Workforce(労働力)

⁵⁸ 前掲、招致ファイル第 1 巻(2004), pp. 19, Concept and legacy, 1.2, Vision, Games that make a difference)で「豪華にならずに洗練させるが私たちの方針となりました。 “Excellence without extravagance” has become our mantra.」と記述している。

⁵⁹ May, P., et al. (2012), Temporary Olympic Structures, INGENIA (Royal Academy of Engineering), Issue 51, pp. 2-7

⁶⁰ Bulley, J., et al. (2015), London 2012 legacy: A sustainable model for delivering large sports events, Civil Engineering Vol.168, pp. 89-96

⁶¹ Nimmo, A., et al. (2011), Delivering London 2012: Temporary venues, Civil Engineering Vol.164, pp. 59-64

⁶² Epstein, D., et al. (2011), Delivering London 2012: Sustainability strategy, Civil Engineering Vol.164, pp. 27-33

⁶³ John, G., et al. (2019), Olympic Stadia: Theatres of Dreams, Routledge

⁶⁴ 國井 洋一(2017), 2020 年東京オリンピックマラソンコースの動画像による景観分析, ランドスケープ研究, 80 巻 5 号, pp. 615-620

⁶⁵ ニリオ・オリンピア(2015), 都市とオリンピック : 都市の美学と新たな景観, 〈特集〉都市と建築の美学, 美学 66 巻 1 号, pp. 21-29

⁶⁶ Nimmo, A., et al. (2011), Delivering London 2012: Master planning, Civil Engineering Vol.164, pp. 13-19

⁶⁷ 尾崎正峰(2007), オリンピック招致と都市, 一橋大学スポーツ研究, 26: pp. 41-46

-
- ⁶⁸ 橋本純一(2007), スポーツ観戦環境の設計(Ⅰ)～モダンスタジアム・デザインの変遷と具体例～, 『信州大学環境科学年報』第39号, 信州大学環境科学研究会, pp.1-6
- ⁶⁹ イーフー トゥアン(Yi Fu Tuan) (1992), トポフィリアー人間と環境, 小野有五(翻訳), 阿部一(翻訳), せりか書房
- ⁷⁰ 前掲、舛本直文(2000)
- ⁷¹ Tang Tang&Roger Cooper(2013), Olympics Everywhere:Predictors of Multiplatform Media Uses During the 2012 London Olympics, Mass Communication and Society, Vol.16 Issue4, pp.850-868
- ⁷² Shuhua Zhou, Bin Shen, Cui Zhang & Xin Zhong(2013), Creating a Competitive Identity: Public Diplomacy in the London Olympics and Media Portrayal, Mass Communication and Society, Vol.16 Issue4, pp.869-887
- ⁷³ 高木真一 他(2003), カメラワーク情報をベースにした映像の特徴解析に関する検討, 情報処理学会研究報告オーディオビジュアル複合情報処理, 2003 巻 24(2002-AVM-040)号, pp.43-48
- ⁷⁴ 田中彰 他(2000), イベント駆動型カメラワークによる動的シーンの効果的映像化, 情報処理学会研究報告コンピュータビジョンとイメージメディア, 2000 巻 33(1999-CVIM-121)号, pp.73-80
- ⁷⁵ 杉本厚夫(2017), “スポーツを「観る」ことと「見る」ことの相克 —駅伝・マラソンを事例として—”, スポーツ社会学研究, 25 巻 1号(特集:一流スポーツをみる(観る/見る)ということ), p.35-47
- ⁷⁶ ジャン ボードリヤール(Jean Baudrillard)(2015), 今村 仁司(翻訳), 塚原 史(翻訳): 消費社会の神話と構造 新装版, 紀伊國屋書店
- ⁷⁷ リー・トンプソン(2016), スポーツとメディアの相互変容, 体育の科学 / 日本体育学会 編 66(5):2016.10(特集 スポーツのもつ力), p.335-339
- ⁷⁸ リー・トンプソン(2017), 史上もっとも成功したメディア・イベント—アメリカにおける2016年リオ五輪のテレビ放送—, スポーツ社会学研究, 25 巻 1号(特集:一流スポーツをみる(観る/見る)ということ), p.21-33
- ⁷⁹ 前掲、リー・トンプソン(2017)
- ⁸⁰ 宗方 淳, 大井 尚行, 平手 小太郎, 安岡 正人(2003), 「スライドを用いた都市景観評価に視野設定が及ぼす影響に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集, 68 巻 563 号, pp.69-75

⁸¹ 神谷 文子, 浦山 益郎, 北原 理雄(2000), 「主題要素の写され方からみた都市景観写真の構図に関する研究 : 欧米 10 都市の観光ガイドブックを事例として」, 日本建築学会計画系論文集, 65 巻 528 号, pp. 179-186

⁸² 姫野 由香, 佐藤 誠治, 小林 祐司(2002), 「観光画像からみた景観特性の解析に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集, 67 巻 559 号, pp. 187-193

第2章

五輪景観の定義と類型、および

五輪景観を生み出す競技会場の抽出

2.1. 景観研究における五輪景観の位置付け

2.1.1. 借景研究における五輪景観の位置付け

2.2. 周辺都市環境と調和する競技施設の空間的構造の傾向

2.3. 五輪景観の定義と本研究における位置付け

2.3.1. 五輪景観の定義と構成要素

2.3.2. 五輪景観の本研究における位置付け

2.4. 五輪景観の分類__シーン型とシーケンス型

2.5. 「都市景観を映し出す競技会場」から「五輪景観を生み出す競技会場」への抽出

2. 五輪景観の定義と類型、および五輪景観を生み出す競技会場の抽出

本章では、本研究の目的を達成するために必要な五輪景観というコンセプトの定義と研究における位置付けを整理し、調査事例となる五輪景観を生み出す競技会場の抽出を行う。その前提として、まず、景観研究(特に借景研究)における五輪景観の位置付けを整理する。次に、様々な周辺都市環境との調和を実現している競技施設の実例を挙げ、その傾向をつかみつつ、空間的構造を把握する。

2.1. 景観研究における五輪景観の位置付け

景観研究における基本的な景観の構造として、以下の篠原の景観把握ダイアグラム¹⁾のように、視点と視対象を主な要素として挙げられる。後述する五輪景観のダイアグラムにおいては、カメラ①を視点とし、選手②、競技会場③、周辺都市景観④を視対象とする。しかし、五輪と言うスポーツイベントのテレビ中継において、カメラがその画角の中に収まるように追跡するのは基本的に競技をする選手であり、それ以外、画面に映し出される競技会場や都市景観の占める割合は、選手自身の動きや、カメラポジションと選手の位置関係(カメラが移動する場合、選手が移動する場合、両者が移動する場合などによって常に変化する)、もしくはカメラワークによって常に変化する。

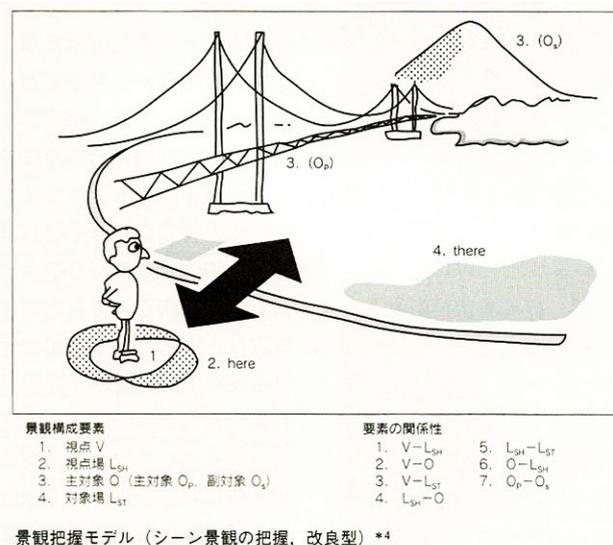


図 2-1 篠原における景観把握モデル(1982 改良型)

また、視対象の位置関係も、以下の視距離の具体的な数値を示す分割表²のように、近景である競技する選手と、中景や遠景となる競技会場や周辺都市景観となる。しかし、主な視対象となる競技する選手が動き、また、より良い画角での映像を獲得するためにカメラポジションが移動するなど、常に、視点と視対象は移動し続けるため、近景—中景—遠景に相当する構成要素は変化する。しかし、カメラ—選手—競技会場—周辺都市景観という序列は変わらない。

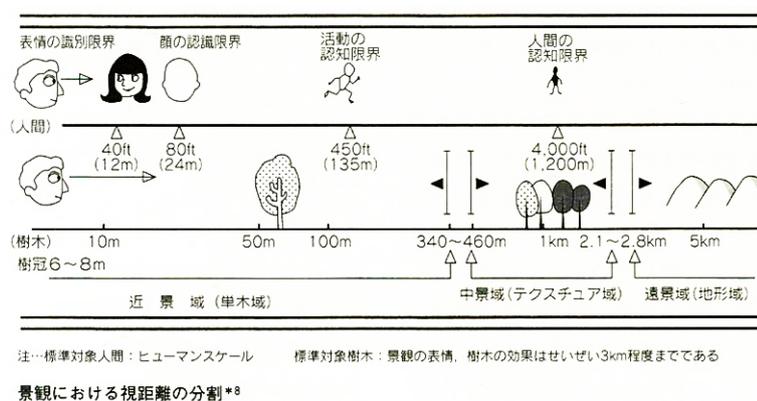


図 2-2 景観における視距離の分割表

また、カメラを通した景観体験は、特定の場所から見た一定の範囲を固定する風景画や風景写真などによる景観表現にも類似しており、景観を無限定な視覚情報としてはなく、透視図として 3 次元空間に存在する物の形を立体的に見えるように平面上に表現したように³、操作可能な構図論として成立する⁴。

このような目的を達成するためのコンセプト立案としたのが五輪景観であり、五輪という都市を舞台にしたスポーツイベントを実現するにあたり、各構成要素を形成する主体である関係者を統合し、実現する際に統合的な意志を視覚化したものが五輪景観のダイアグラムである。各関係者がそれぞれの関与する範囲を自らの分野にとどまることなく、他分野を意識しつつ、主体的に連携して、実行するイメージの共有を出来たことが、五輪と言う大きなイベントの成功の要因であると考えられる。その中には、開催都市の映像のレガシーとして残されるプロモーションとしての都市景観であった。

2.1.1. 借景研究における五輪景観の位置付け

以上、景観研究における五輪景観の位置付けを整理したが、本項では更にその射程を狭め、日本庭園の借景の構造や定義を専攻研究から概観しつつ、五輪景観の位置付けを整理する。借景庭園を参照する理由は、五輪景観の構成要素が類似しており、その定義や構造が参照になると考えたからである。選手の背景となる都市景観の効果的な見せ方として、競技会場の観客席の形状とその配置によって縁取る効果があり、それは借景庭園の技法を採用していると言える⁵。

(1) 景観研究における借景の位置付け

借景庭園を対象とした研究は上原⁶、伊藤⁷、西沢⁸、進士⁹、本中¹⁰、など多数ある。

まず、上原¹¹は世界の造園界において借景と言う日本の造園法の有用性を論じている。そして、進士¹²は、日本庭園の始まりとして、まず囲むこと(囲繞性)として、塀、垣などで周囲を囲み、外界と遮断し、小宇宙を構成することを基調とする日本庭園において、借景を認める必然として、庭園内に完結するのではなく、つながることで、社会性を持つことを求めているとする。

(2) 借景の定義

借景の定義に関しては、伊藤¹³、本中¹⁴らによるそれぞれの定義があるが、進士¹⁵は、借景の条件と技法上のポイントを整理するには西沢¹⁶の定義が諸説を総合していて最も妥当である、として以下のように紹介している。

「借景は最初庭にあった外の風景を眺望することから始まり、景を庭の景の一部としてとり入れ、これに調和させさらに発展させると、借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する。最後に主賓を引き立たせるために庭を消すに至れば借景はその極致に達する。すなわち庭は借景を引き立てるための前景にすぎぬまで自己を滅却した状態になる。」

以上のことからわかるように、庭園を囲むことで、近景の前庭と遠景の周辺景観が視覚的に繋がることで主従関係の逆転が起こる、としている。

(3) 借景の構造

借景の構造についても、伊藤¹⁷などが考察しているが、それらを踏まえ進士¹⁸は借景を

形成するその構造として以下の4つが重要であるとしている。

①借景対象、②見切り、③園内景、④コンケイブ(Concave, 窪地)

②見切りは主に塀や垣であり、借景対象を「縁取る」効果がある。同様の構造を上原¹⁹は、「景観の生捕り」と表現し、本中²⁰は「風景の見切り」としている。五輪景観を形成する景観構造においては、後述する②競技会場の観客席の形状が見切りとなり、背景にある周辺都市景観を生け捕っている。本研究では「縁取る」という表現を用いることとする。

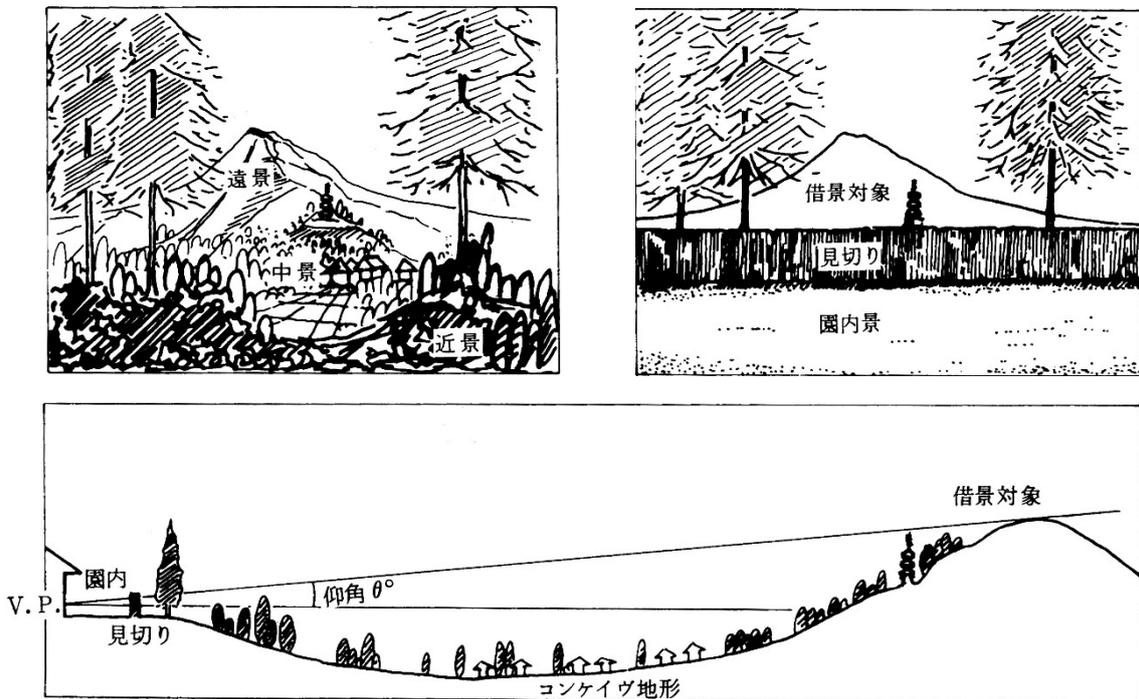
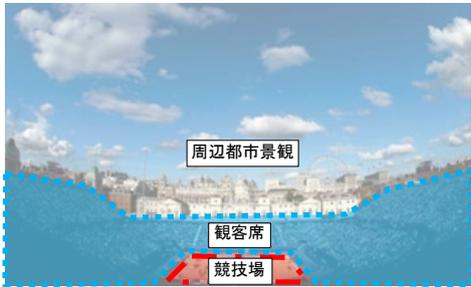
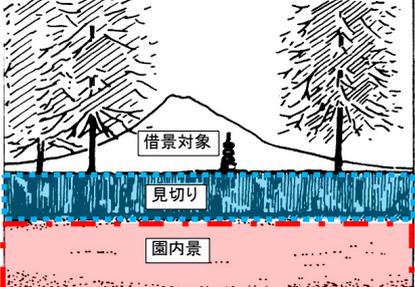


図 2-3 進士による借景の景観構造と借景の条件

以下の表は、ロンドン五輪の競技会場(ホースガーズパレードビーチバレーボール競技)と進士²¹による借景構造を比較する表であるが、園内景(庭園など：赤)→見切り(塀や垣など：青)→借景対象(山など)の景観構造および、見切りによって借景対象を縁取る操作は、ロンドン五輪の競技会場において、競技場(赤)を観客席(青)が囲い、更にその形状によって周辺都市景観を縁取る形状操作に類似している。そこで、本研究では借景庭園の定義や構造などを参照しつつ、五輪景観を解明していくものとする。

表 2-1 五輪景観と借景の景観を縁取る構造の比較表

	五輪景観の構造	借景の構造
<p>景観を 縁取る構造</p>	 <p>周辺都市景観</p> <p>観客席</p> <p>競技場</p>	 <p>借景対象</p> <p>見切り</p> <p>園内景</p>

2.2. 周辺都市環境と調和する競技施設の空間的構造の傾向

前節では、日本庭園の借景の手法とその景観構造を概観し、五輪景観を生み出す競技会場を調査事例として取り上げたが、一般的な競技会場建築でも、景観をはじめとした周辺都市環境との調和の傾向が、以下のように見られる。

近年、五輪競技会場に限らず、行政や市民の要望に応え、周辺都市環境との調和を目指す魅力的な競技施設が世界各地に実現している。周辺都市環境と調和する競技会場には以下のような傾向がみられる。

2004年に開催したサッカーの欧州選手権に向けて建設した採石場跡地のサッカー専用スタジアムであるポルトガル・ブラガのエスタディオ・ムニシパル・デ・ブラガ²²はメインスタンドとバックスタンドのみを設え、採石場跡地という敷地背景をゴール裏の崖のむき出した岩盤に残し、大型ビジョンを設置しスタジアムのシンボルとした。



図 2-4 エスタディオ・ムニシパル・デ・ブラガ

また、同じくフランスのサッカーであるボルドーのヌーボ・スタッド・ド・ボルドー²³は、観客スタンドを無数の円柱が支える外観が特徴的なスタジアムであり、ギリシャ・アクロポリスの丘のパルテノン神殿と形容され、スタジアムを訪れた観客は円柱の間を通り、スポーツを観戦するという気分を高揚させて場内に入場する。



図 2-5 ノーボ・スタッド・ド・ボルドー

このように、競技会場へ入退場する観客動線を確保もスポーツ施設計画には必須条件となる。英国ロンドン近郊のウェンブリースタジアム²⁴もスタジアム周囲のコンコースと近隣駅への長い動線を確保することで、混雑緩和および待機場所としての機能を確保し、最大観客数9万人が入退場することを可能とした。



図 2-6 ウェンブリースタジアム

また、2021年に無観客で開催した東京五輪のメインスタジアムである国立競技場は都心部にありながら、広大な神宮外苑敷地に隣接し、いくつもの公共交通機関が乗り入れているため、訪れる人は様々な方法と方向から入退場する。同競技場は、東京五輪招致にむけて実施した国際設計競技コンペで選ばれた英国の建築家、故ザハ・ハディドによる初期案の外観デザインや規模などが、敷地周辺の神宮外苑に馴染まないとの理由で白紙撤回され、その後選ばれた隈研吾案は、周辺環境と調和した“杜のスタジアム”というコンセプトの外観デザインと市民が周遊できる回廊をスタジアムの外周部に積層し、憩いの場と

した。

このように、地域コミュニティを醸成する場としての機能を競技施設に求める計画も近年多く見られる。小林(2019)²⁵では、アメリカのボルチモア市、クリーブランド市などの大規模競技施設が都市の開発の目玉となる計画を紹介する。荒廃し、夜間は犯罪蠢くダウンタウンに競技施設を建設し、地域を活性化させることで夜間人口の減少緩和を目指し、敷地のある周辺都市環境の価値を高めた。競技施設の建設による経済効果の観点よりもコミュニティの醸成の観点から自治体が支援するという事情がある。荒廃した地域の中心部に競技施設を建設する視覚的効果だけでなく、ホームチームの試合によって街の人が共通の話題を持ち、社交場としての機能を持つ。

また、景観的に周辺都市環境と調和する例として、周辺都市景観への指向性を生み出す観客席を配置する競技会場がある。

北九州サッカー場²⁶は敷地が関門海峡に隣接し、バックスタンドの観客席を低層化することで背景に湾岸の景色を望むことが出来る。

米国のピッツバーグにある野球場は²⁷外野観客席の一部を低層化することで、野球中継の背景としてピッツバーグの街のシンボルであるアレゲニー川、川に架かるロベルト・クレメンテ橋、そして対岸にあるダウンタウンの高層ビル群が映し出される。

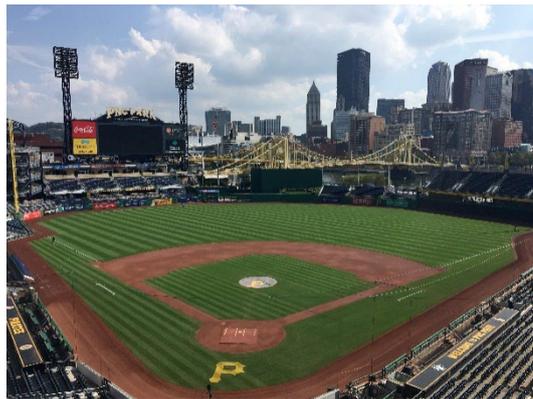


図 2-7 ピッツバーグ野球場

広島市の街の中心部、原爆ドームの近くから、広島駅近く貨物ヤード跡地に移転した新しい広島市民球場²⁸では、観客席スタンドの一部を開放することで、近くの高架を通過する新幹線を映し出すなど、試合中でも競技会場から周辺都市景観を眺望可能としている。



図 2-8 広島市民球場

以上のような近年の競技会場建築の周辺環境との調和を考えた場合のロンドンの状況を以下に整理する。

ロンドン市では、観客に見せるべき、あるいは世界に発信すべき、開催都市の歴史や文化を象徴する都市景観の価値が共有され、保全されていた。また、このような景観を望む視点場が、競技場の面積要件を満たす程度の敷地規模を持つ公園や広場であった。これは、まさに中心部に大規模な公園・緑地を有し、都市保全に取り組んできたロンドンの強みであったと言える。その上で、計画検討期間や招致活動期間に、都市景観を映し出す五輪という大会コンセプトの構想とそれを具現化するための競技会場敷地の選定を行った。そして、招致活動期間には招致委員会や建築事務所によって競技会場の周辺都市景観のランドマークへの指向性を持った観客席の形状や配置といった建築計画・設計レベルでの工夫が行われた。

2.3. 五輪景観の定義と本研究における位置付け

「都市景観を映し出す五輪」を実現したロンドン五輪 2012 の特長として、市内中心部を敷地とし、競技する選手の背景に都市景観を映し出した競技会場の存在があった。

本節では、本研究の重要なコンセプトとなる「五輪景観(Olympic-scape)」について整理する(後述のダイアグラムを参照)。山岸(2020)²⁹では五輪景観を「選手、競技会場、周辺都市景観の各要素をカメラによって重層的に映し出す映像」と定義した。具体的には、開催都市に集約した競技会場で多種多様な競技を実施する五輪において、恒設競技会場に加えて、通常では計画・実現が困難な場所に仮設競技会場を建設し、周辺都市景観を競技する選手と競技会場の背景としてカメラで映し出し、競技観戦者のみならず、世界の視聴者に発信していくのが五輪景観である。

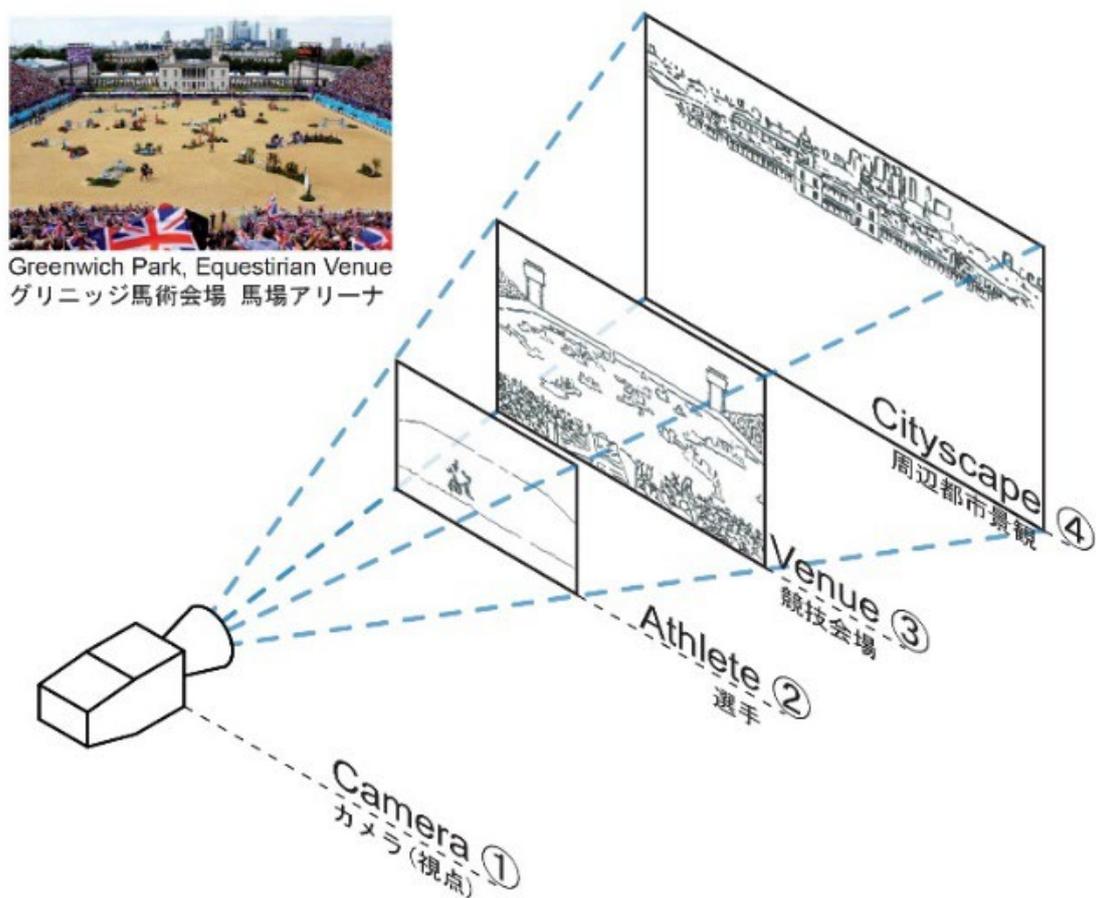


図 2-9 五輪景観ダイアグラム

2.3.1. 五輪景観の定義と構成要素

この五輪景観の構成要素は①カメラ、②選手、③競技会場、④周辺都市景観であり、それぞれの関係性は以下のダイアグラムのようになる。前述した日本庭園の借景の構造と同じ配置構造をしている。

なお、一般的に、①カメラは競技会場内に設置されるが、本研究では視点としてのカメラの存在に着目しているため、③競技会場とは分けて扱うこととした。

①カメラ：景観構造上、視点の役割を担い、競技する選手や競技会場と、その背景に周辺都市景観を映し出し、映像を世界に発信する。

②選手：主な視対象として、カメラに追跡され、映像として映し出される。

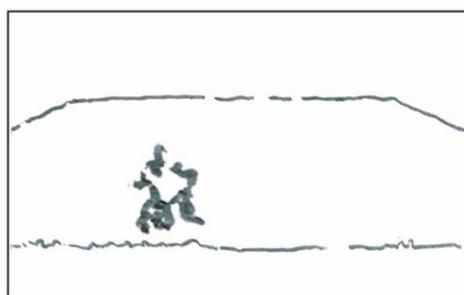
③競技会場：競技する選手とともにカメラによって捉えられ、観客席は選手の背景要素にもなる。また、観客席には周辺都市景観を縁取る効果もある。なお、現地の観客席からも選手の背景に都市景観を見ることができる。

④周辺都市景観：競技する選手と競技会場の背景として、競技観戦者や世界の視聴者によって認識される。開催都市の歴史的、文化的に象徴となる景観など様々なものが映し出される。

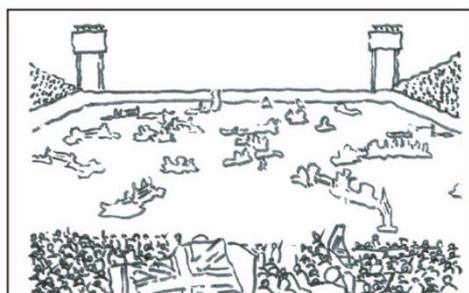
これらの構成要素の中で建築的に操作可能なのが、①カメラ、③競技会場、④周辺都市景観であるため、本研究では①、③、④を軸にその計画・設計方法を考究する。



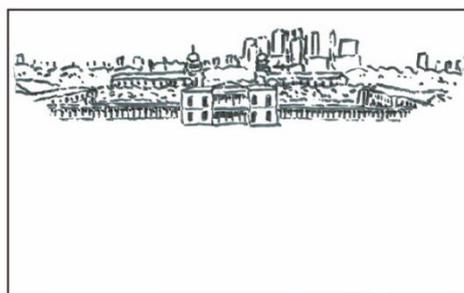
Camera カメラ(視点) ①



Athlete 選手 ②



Venue 競技会場 ③



Cityscape 周辺都市景観 ④

図 2-10 五輪景観ダイアグラム構成要素

2.3.2. 五輪景観の本研究における位置付け

本研究の根底にあるのは五輪競技会場の建築計画および設計論であり、そこから見える景観論であると考え、研究の独自性として、それらを統合的に考察することであり、さらにそれをカメラの中継映像の創出手法に着目することが挙げられる。それゆえに、それらがどのように立案・実現方法を解明する必要がある。

また、競技会場が都市における位置付けとして、景観、すなわち建築の外部(外観)に着目したこれまでの建築論、都市景観論ではなく、内部から都市を映し出す視点に着目したことに新規性があると考え。その上、都市景観の視点を中継映像というカメラによる視点としたことで、再現性のある計画可能とした景観論であると考え。

また、借景の構造を整理した景観研究の視点から五輪景観ダイアグラムを解説すると以下となる。

五輪景観(Olympic-scape)の解説

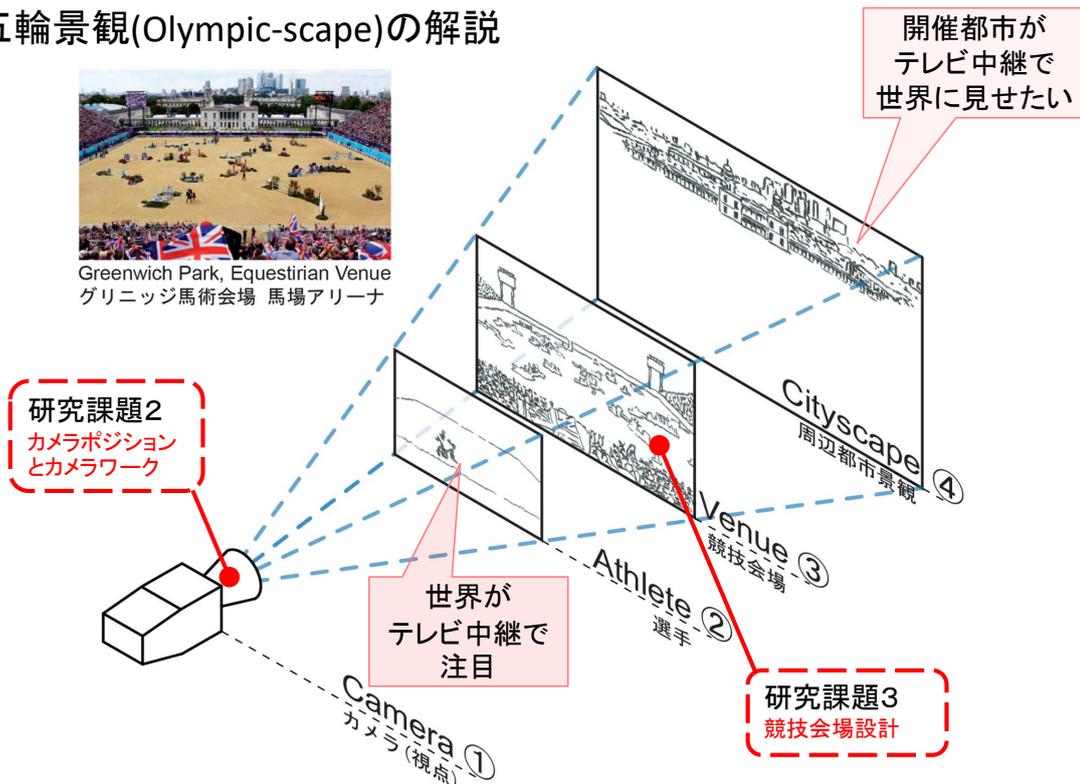


図 2-11 本研究における五輪景観ダイアグラムの位置付け

また、これらの五輪景観ダイアグラムの構成要素は、前述した既往研究の学術的領域にも対応している。

既往研究と五輪景観ダイアグラムの対応関係

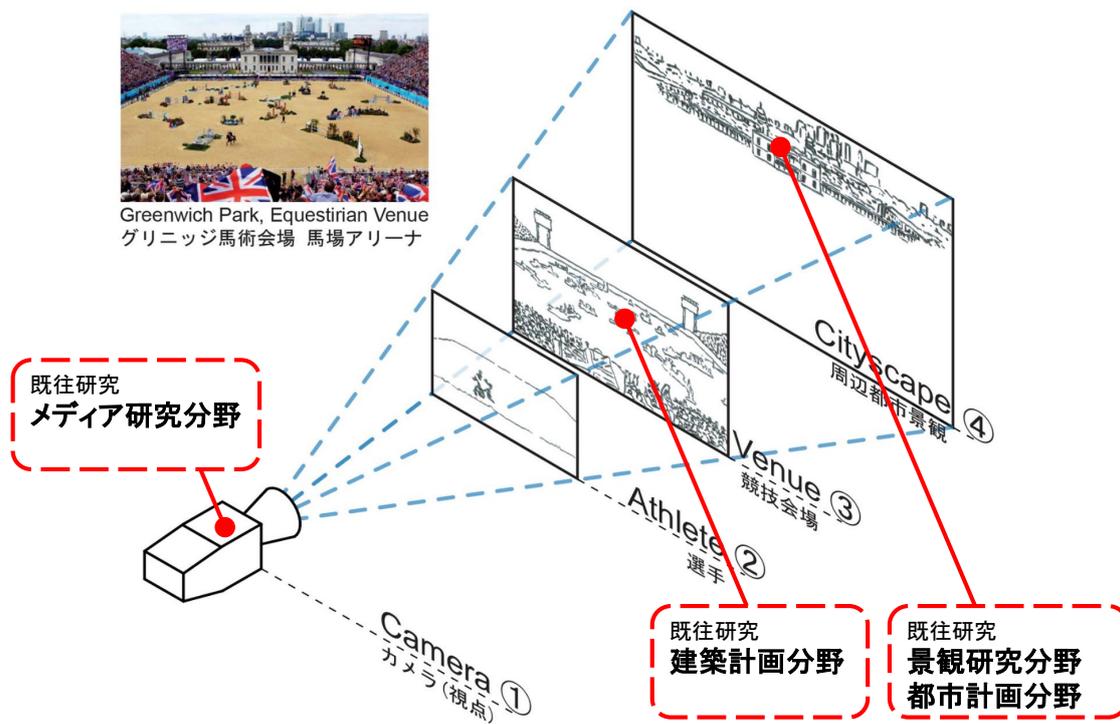


図 2-12 既往研究と五輪景観ダイアグラムの対応関係

2.4. 五輪景観の分類_シーン型とシーケンス型

五輪景観の分類として、山寄(2020)では以下のように類型化した。

- シーン型五輪景観：アリーナ競技会場の中都市景観を映し出す(会場設備を伴う)
- シーケンス型五輪景観：市街地そのものを競技会場とし、都市景観を映し出す(会場設備を伴わない)

このように分類した理由としては、マラソン競技のように市街地をシーケンス型競技会場とすれば、競技する選手の背景に周辺都市景観が映り込むのは自明であるため、競技会場の形態とその配置を考察するシーン型競技会場とは分類した。ここでいうシーン型景観とは視点の位置が固定されている景観であり、シーケンス型景観とは視点を移動させながら次々と移り変わっていくシーンを継続的に体験していく景観である³⁰。

また、五輪景観の構成要素を前述したが、対応する五輪景観ダイアグラムもシーン型、シーケンス型では異なる。シーケンス型五輪景観を生み出す競技会場であるが、市街地そのものが競技会場であるので、そのダイアグラムには③競技会場は該当しない。

ロンドン五輪におけるシーン型、シーケンス型五輪景観を生み出す競技会場は 4 章で整理するが、以下のように分類できる。

表 2-2 五輪景観の分類：シーン型(左)とシークエンス型(右)の違い

	シーン型五輪景観を生み出す競技会場	シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場
五輪景観 ダイアグラム	<p>Greenwich Park, Equestrian Venue グリニッジ馬術会場 馬術アリーナ</p>	<p>Greenwich Park, Equestrian Venue Cross Country Event (Olympic Channel) グリニッジ馬術会場 総合馬術クロスカントリー (オリンピックチャンネルより)</p>
競技会場とカメラと都市景観の関係		
主な対象競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・グリニッジパーク馬術競技(馬場競技) ・ホースガーズパレードビーチバレーボール競技会場 	<ul style="list-style-type: none"> ・マラソン競技会場 ・グリニッジパーク馬術競技会場(クロスカントリー競技)
競技特性	アリーナ、馬場、コートなど	街路、園路など
会場としての設備	観客席による競技場の枠組み	フェンス(一部観客席あり)による競技場の枠組み
観客席形状(平面図)	U字型、O字型(一部低層)、リニア型、	リニア型

- シーン型五輪景観。カメラが競技会場の中にある。例：グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場など。



図 2-13 グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)



図 2-14 ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

- シークエンス型五輪景観。カメラが選手と共に街なかにある。例：市街地マラソン競技会場(ザ・マル)、グリニッジ・パーク馬術競技会場(クロスカントリー競技)など。



図 2-15 市街地マラソン競技会場



図 2-16 グリニッジ・パーク馬術競技会場(クロスカントリー競技)

2.5. 「都市景観を映し出す競技会場」から「五輪景観を生み出す競技会場」への抽出

カメラなどのメディアによって都市景観が映し出された五輪競技会場の基本的特性を立地、建築、景観の観点から読み解く。

まず、ロンドン五輪における IOC による公式記録映像(五輪チャンネル)を解読し、全競技会場 36 か所から、競技する選手の背景に「都市景観を映し出した競技会場」として 15 か所を抽出した³¹。それぞれの競技会場の主な競技映像にどのような都市景観が映し出されていたのか画像分析を行い、巻末の参考資料としてまとめた。

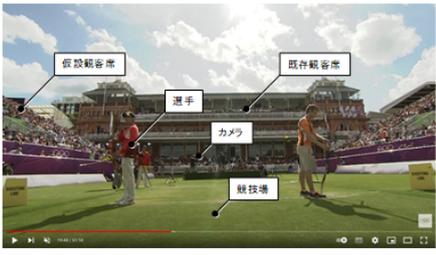
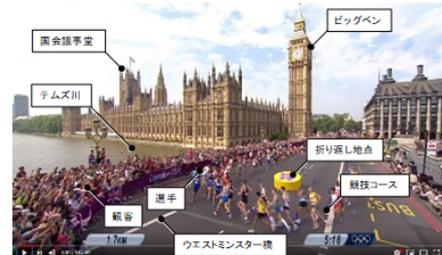
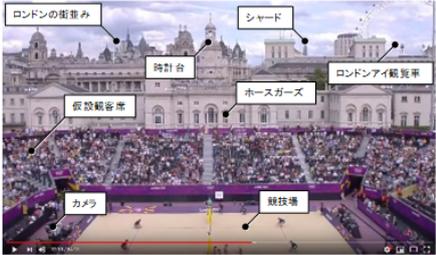
アーチェリー シーン型 都市景観を映し出す競技会場	マラソン シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場
	
<p>競技名 Archery</p> <p>競技会場名 Olympic Ground</p> <p>概要 クリケット競技の基地、ロード/クリケット場に屋外型仮設競技会場を設置した。仮設観客席スタンドの上部に浮かぶ幾何学形態のメディアセンターとレンガ造のビクトリアン観覧席を軸と組み込み込むように観客席を設置することで、敷地の輪郭を認識しつつ、クリケット場内外の周辺都市景観を映し出した。敷地中央軸の軸線上にある観覧席ビクトリアン/ビリオンに設置したカメラがメディアセンターを正面に映し出す</p> <p>主な視点(カメラポジション) 敷地中央軸の軸線上にある観覧席ビクトリアン/ビリオンに設置したカメラがメディアセンターを正面に映し出す</p> <p>競技会場の形状とその配置 敷地中央軸の軸線を挟み込むように観客席を設置することで、メディアセンターを正面に周辺都市景観を録取った</p> <p>主なランドマーク、周辺都市景観 Media centre, Victorian Pavilion, etc</p>	<p>競技名 Athletics: Marathon</p> <p>競技会場名 The Mall (London's streets)</p> <p>概要 市街地を周回する仮設コースを設置し、市内の主要ランドマークを選手と並走しながら、その背景に映し出した。セントポール大聖堂、バッキンガム宮殿、ロンドンアイ観覧車などの近景、中景、遠景として映し出した。ピクベンの前に折り返し地点を設置してクレーンカメラを映し出した。選手と並走するバイクカメラによって競技する選手とその背景の都市景観を映し出すが、コース上のランドマークとなる建物や景観の周辺にもカメラを設置して周辺都市景観を映し出した。</p> <p>主な視点(カメラポジション) 選手と並走するバイクカメラによって競技する選手とその背景の都市景観を映し出すが、コース上のランドマークとなる建物や景観の周辺にもカメラを設置して周辺都市景観を映し出した。</p> <p>競技会場としての街の特性 市内中心部にマラソン競技会場として設置しているため、選手の背景には様々なランドマークや都市景観が次々と映し出された。また、スタートゴール地点であるザ・マールの沿道の両側には1,620人収容の仮設観客席を設置し、バッキンガム宮殿やクイーンビクトリアメモリアル(噴水)を背景に映し出した。</p> <p>主なランドマーク、周辺都市景観 ●St Paul's Cathedral ●The London Eye ●The Shard ●Buckingham Palace ●Queen Victoria Memorial, The Mall ●Tate Modern, etc</p>
ビーチバレーボール シーン型 都市景観を映し出す競技会場	競歩 シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場
	
<p>競技名 Beach Volleyball</p> <p>競技会場名 Horse Guards Parade</p> <p>概要 王室の式典などが実施される市内中心部の広場、ホースガードズパレードに屋外型仮設競技会場を設置した。東側観客席を低層化したことで、周辺都市景観として、近景のホースガードズ、中景のロンドンアイ観覧車、遠景のシールドなどのロンドンのスカイラインを景観的に映し出した。</p> <p>主な視点(カメラポジション) 敷地中央軸が走る西側観客席の上段に設置したカメラから東側の観客席上空から望む周辺都市景観を映し出す</p> <p>競技会場の形状とその配置 敷地中央軸をセントメリーにし、東側観客席を低層化することで、そこから周辺都市景観を録取った</p> <p>主なランドマーク、周辺都市景観 ●Whitehall Court ●Horse Guards ●The London Eye ●Shell Centre tower ●The Shard, etc</p>	<p>競技名 Athletics: Race Walk</p> <p>競技会場名 The Mall (London's streets)</p> <p>概要 バッキンガム宮殿前のザ・マールを周回する仮設コースを設置し、周辺都市景観を映し出した。マラソン競技と比較して、設定されたコースの範囲はバッキンガム宮殿周辺のみであり、ビクトリアメモリアル噴水やウェリントンアーチを映し出していた。</p> <p>主な視点(カメラポジション) 選手と並走するバイクカメラによって競技する選手と、周辺コースはほぼバッキンガム宮殿であるために、ザ・マールなどのコース沿道にカメラを設置し、周辺都市景観を映し出した。</p> <p>競技会場としての街の特性 周辺コースはほぼバッキンガム宮殿周辺であり、ザ・マールの沿道の両側には1,620人収容の仮設観客席を設置し、バッキンガム宮殿やクイーンビクトリアメモリアル(噴水)への指向性を生み出した。</p> <p>主なランドマーク、周辺都市景観 ●Buckingham Palace ●Queen Victoria Memorial, Wellington Arch, The Mall</p>

図 2-17 画像分析表の一部(巻末の参考資料から抜粋)

次に、抽出された 15 か所の競技会場に対して、映し出された景観の価値や重要性に着目し、前出のロンドン眺望景観管理構想「London View Management Framework (LVMF)」

を参照した。

前章で概観したように、LVMF の資料では、まず指定眺望景観の配置図としてロンドン市内広域と市内中心部で記載している。資料では、各指定眺望景観の詳細な解説が続く。例えば、以下はグリニッジ・パークの指定眺望景観の詳細を解説する頁であるが、敷地内の正確な計測位置、そこから見える眺望の画像とその内容、視覚的に文化的にも突出した建物や構造物であるランドマークなど、が記載されている。

この LVMF には、人々がロンドン市とその歴史的、文化的に象徴となる景観を把握することに活用される指定眺望景観 が 27 か所指定しているが、これらと競技会場が重なっているかどうか、また、競技会場の背景に望見される都市景観と LVMF で指定されている眺望景観に含まれるランドマーク に共通するものがあるかどうかを確認した。

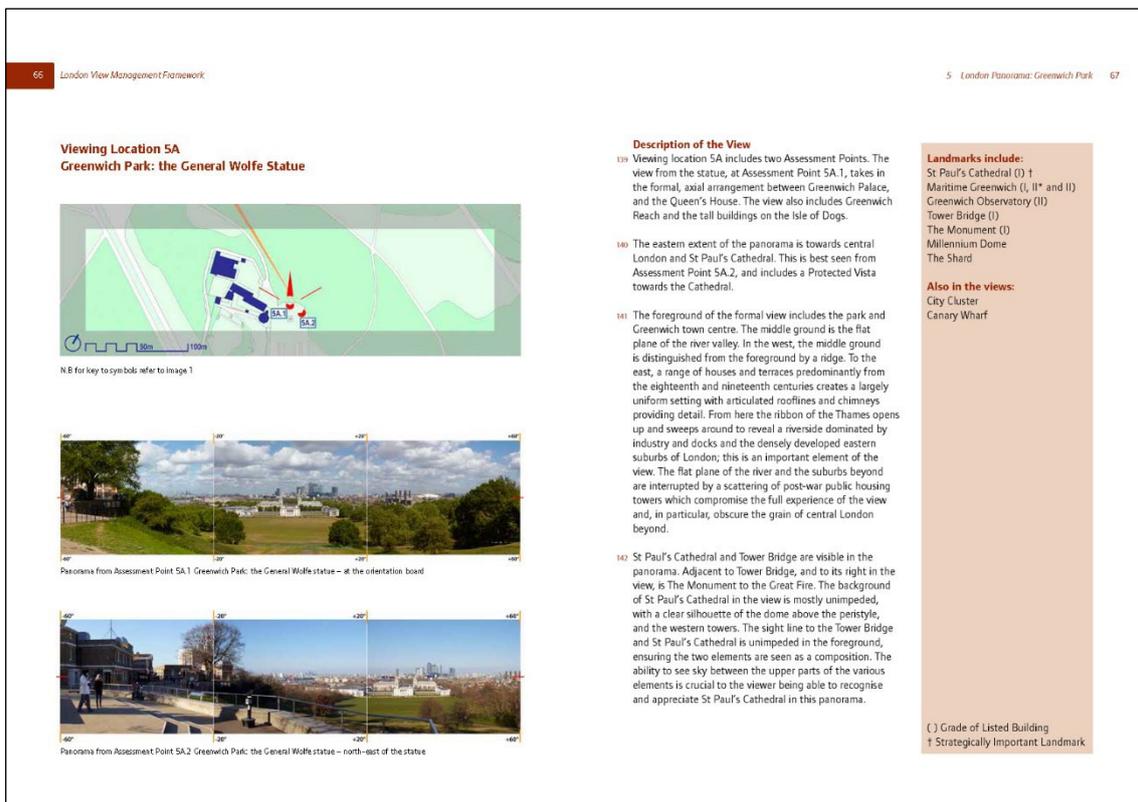


図 2-18 LVMF 内のグリニッジ・パークの指定眺望景観の詳細の頁

上記の 15 か所の競技会場のうち、その立地がこの視点場と重なるのは、グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)とホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場、市街地マラソン競技会場など 7 競技会場(8 競技)であった。また、これらの会場からは

LVMF の指定眺望景観と共通するランドマークが視認されることから、当該都市景観には歴史的、文化的価値が認められる。よって、これらを、「五輪景観を生み出す競技会場」として選定する。



図 2-19 五輪景観を生み出す競技会場の抽出プロセスダイアグラム

表 2-3 都市景観を映し出す競技会場一覧

シーン型 都市景観を映し出す競技会場		
		
Archery Lord's Cricket Ground	Beach Volleyball Horse Guards Parade	Canoe Sprint & Rowing Eton Dorney
		
Cycling, BMX Olympic Park BMX Track	Equestrian, Jumping & Dressage Greenwich Park	Hockey Olympic Park Riverbank Arena
シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場		
		
Athletics, Marathon The Mall (London's streets)	Athletics, Race Walk The Mall (London's streets)	Cycling, Mountain Bike Hadleigh Farm
		
Cycling, Road The Mall, Hampton Crt Palace, etc	Equestrian, Eventing(Cross-Country) Greenwich Park	Modern Pentathlon Aquatics Cntr, Greenwich Park, etc
		
Open Water Swimming Hyde Park	Sailing Weymouth and Portland	Triathlon Hyde Park

具体的には、前者は、競技会場の立地する王立グリニッジ・パークを視点場として、近景に海洋博物館やテムズ川、遠景にカナリワープの高層ビル群を望み、これは LVMF の指定眺望点 5A.1 からの景観にほぼ重複する (LVMF では、より標高の高い丘の上の地点を眺望点として指定している)。後者は、保全地区にも指定されている官庁街の広場を会場とし、近景にホースガーズ、遠景にロンドン・アイ観覧車、300m 超の高層ビル「シャード」を望み、同様に LVMF では指定眺望点 26A に該当する。なお、シーン型五輪景観を生み出す競技会場として選定した、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場とグリニッジ・パーク馬術競技会場のロンドン市内における位置関係と LVMF の指定眺望点の重なりを表す図を以下に示した。

なお、他の 11 競技会場については、アーチェリー競技会場のように、クリケット場のメディセンターと観覧パビリオンを結ぶ線を挟み込むように屋外型仮設観客席を設置したことで、敷地の軸線を意識しつつ、周辺都市景観を映し出した例もある。しかし、これらのように敷地特性のある場所を競技会場としているものの、そこから映し出される都市景観には、会場の位置が LVMF の視点に該当しない、あるいは眺望される景観に、LVMF で特定されているランドマークが含まれていないことも確認された。

本研究では、五輪景観の構成要素である「開催都市の歴史的、文化的に象徴となる景観」が映し出されているかを重視し、LVMF との対応関係がみられる 7 競技会場 (8 競技) を次章以降の調査事例の対象とする。

以下は、ロンドン五輪の全 36 か所³²の競技会場の競技会場の敷地、建築、景観についての概要、LVMF 視点場と競技会場敷地との重なり、LVMF 指定眺望景観と共通するランドマークとその他のランドマーク³³、の位置関係を整理した表である。この表からロンドン五輪の全競技会場 (36 か所) → 都市景観を映し出す競技会場 (15 か所) → 五輪景観を生み出す競技会場 (7 か所__8 競技) として抽出した。これら五輪景観を生み出す競技会場 (7 か所__8 競技) から、更に 4 章の五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置 (研究課題 2) と、5 章の五輪景観を生み出す競技会場のカメラポジションとカメラワーク (研究課題 3) において、調査事例を選定する。

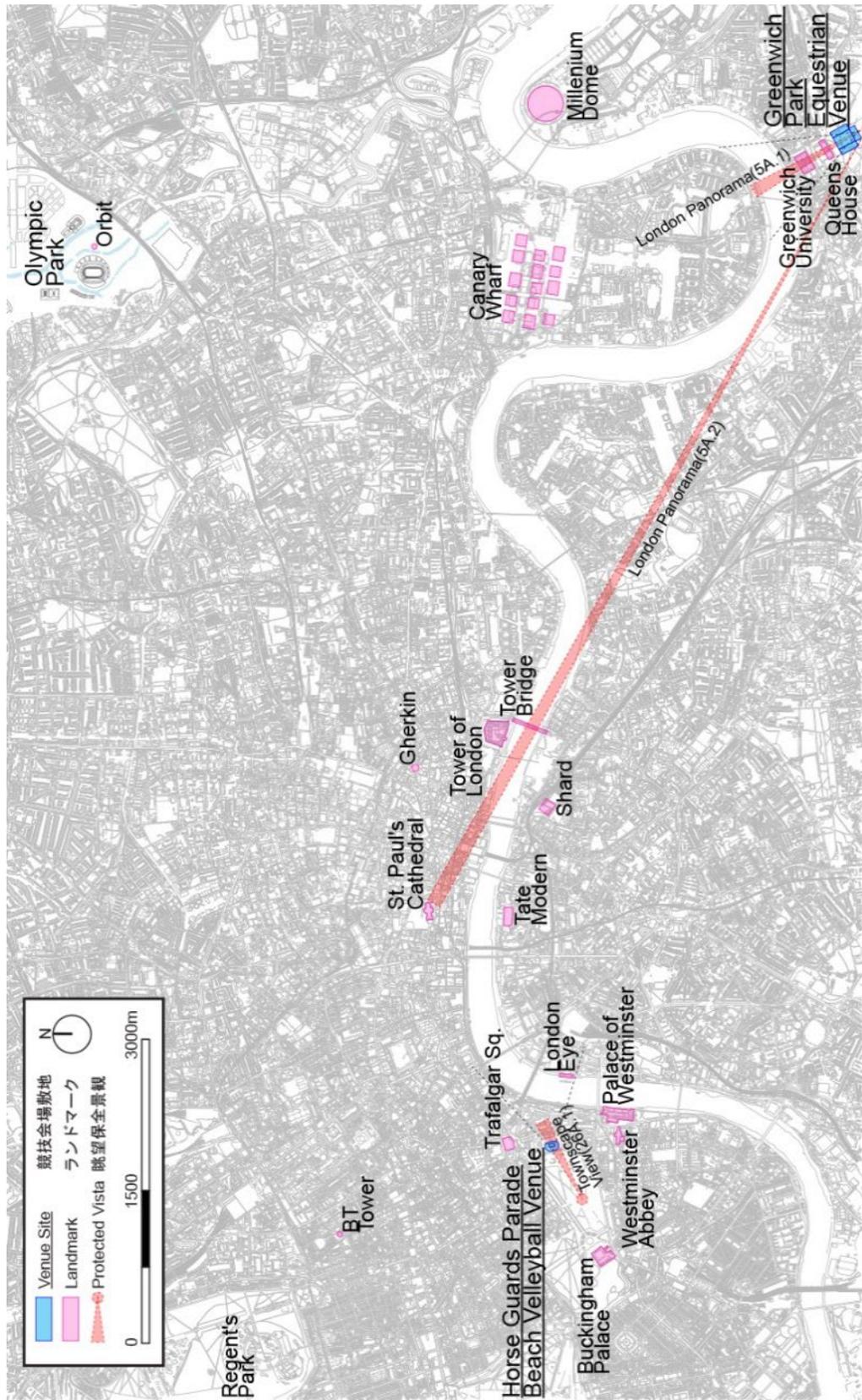


図 2-20 ロンドン五輪における競技会場と LVMF と対応関係

-
- ¹ 篠原他(2021), 景観用語事典 増補改訂第二版, 彰国社, 「景観把握モデル」, pp. 31
- ² 前掲、篠原他(2021), 「視距離」, pp. 64
- ³ 前掲、篠原他(2021), 「透視図」, pp. 64
- ⁴ 前掲、篠原他(2021), 「景観の学」, pp. 16
- ⁵ 前掲、篠原他(2021), 「視点と視点場」, pp. 32-35
- ⁶ 上原敬二(1926), 借景とヴィスタ, 造園学雑誌, 2(1), pp. 121-127
- ⁷ 伊藤ていじ(1965), 古都のデザイン 借景と坪庭, 淡交社
- ⁸ 西沢文隆(1975), 庭園論 I : 人と庭と建築の間 (西沢文隆小論集 2), 相模書房
- ⁹ 進士五十八(1986), 「借景」に関する研究, 造園雑誌 50(2), pp. 77-88
- ¹⁰ 本中真(1997), 借景(日本の美術 5), 至文堂
- ¹¹ 前掲、上原敬二(1926), pp. 121
- ¹² 前掲、進士五十八(1986), 「2. 囲繞性基調の日本庭園における借景の基本的性格」, pp. 78
- ¹³ 前掲、伊藤ていじ(1965), 「生けどる」, pp. 116
- ¹⁴ 前掲、本中真(1997), 「借景と眺望」, pp. 17
- ¹⁵ 前掲、進士五十八(1986), 「3. 借景庭園の景観構造と借景の条件」, pp. 83
- ¹⁶ 前掲、西沢文隆(1975), 「借景」, pp. 324-330
- ¹⁷ 前掲、伊藤ていじ(1965), 「借景の構成」, pp. 135-139
- ¹⁸ 前掲、進士五十八(1986), 「3. 借景庭園の景観構造と借景の条件」, pp. 79
- ¹⁹ 前掲、上原敬二(1926), pp. 124
- ²⁰ 前掲、本中真(1997), 「風景の見切り」, pp. 42
- ²¹ 前掲、進士五十八(1986), 「3. 借景庭園の景観構造と借景の条件」, pp. 84
- ²² John, G., Sheard, R. and Ben V., (2013), *Stadia: The Populous Design and Development Guide*, Routledge, pp. 310, Braga Municipal Stadium Braga, Portugal, Appendix 3 Case studies 09
- ²³ A Stadium for Bordeaux

<https://www.herzogdemeuron.com/index/projects/complete-works/351-375/367-nouveau-stade-de-bordeaux.html>, accessed 2021.08.31

²⁴ 前掲、John, G., et al. (2013), pp.310, Wembley Stadium London UK, Appendix 3 Case studies 29

²⁵ 小林至, 武藤泰明(2019), プロ野球ビジネスのダイバーシティ戦略 改革は辺境から。地域化と多様化と独立リーグと, PHP 研究所, pp.155-159, 「大規模スポーツ施設の建設は、都市開発の核になり得るか」

²⁶ 江口隆志(2017), 北九州スタジアム(ミクニワールドスタジアム北九州)の取り組み, 特集スポーツ～スポーツで「つながる」～, Civil Engineering Consultant, Vol.277, pp.010-013

²⁷ PNC Park (Pittsburgh stadium), <https://populous.com/project/pnc-park>, accessed 2020.11.09

²⁸ 仙田満, 金箱温春(2011), 広島市民球場, 建築雑誌増刊作品選集 2011, 日本建築学会, pp184-185

²⁹ 山寄一也・岡村祐(2020), 五輪景観を構成するカメラワーク、選手、競技会場、都市景観の関係性、ロンドン五輪における市内仮設競技会場のケーススタディ, 日本建築学会技術報告集, 26巻 64号 p.1143-1148, “1.2 目的”(pp.1144)で、五輪景観について定義している。

³⁰ 前掲、山寄一也他(2020), pp.1144, “4. 調査対象と調査方法”において、五輪景観をアリーナ型競技会場が映し出す「シーン型景観」と市街地を競技会場とする「シークエンス型景観」に類型化している。

³¹ 都市景観を映し出した15か所の競技会場の競技映像はIOCによるロンドン五輪の公式記録映像(五輪チャンネル)を解読した。

Archery: <https://www.youtube.com/watch?v=LqUh6NcWODw>

Beach Volleyball: <https://www.youtube.com/watch?v=kiFA1p-a9hA>

Rowing: <https://www.youtube.com/watch?v=x6wHZNWF7pA>

Cycling BMX: <https://www.youtube.com/watch?v=iMaABzjQXQQ>

Equestrian-Jumping & Dressage: https://www.youtube.com/watch?v=QABaq8Qw_Es

Hockey: <https://www.youtube.com/watch?v=1VfHfTd5XBQ>

Athletics, Marathon: <https://www.youtube.com/watch?v=gFNfvY775Qo>

Athletics, Race Walk: <https://www.youtube.com/watch?v=qAALNtJakOk>

Cycling, Mountain Bike: https://www.youtube.com/watch?v=3J_rGPcSs0w

Cycling, Road: <https://www.youtube.com/watch?v=QNp3Ymg8f28>

Equestrian-Eventing(Cross-Country): <https://www.youtube.com/watch?v=mpMD0t-vqCk>

Modern Pentathlon: <https://www.youtube.com/watch?v=cLxguQKbBM8>

Open Water Swimming: <https://www.youtube.com/watch?v=rzfye6QSA0Q>

Sailing: <https://www.youtube.com/watch?v=chF001QI194>

Triathlon: <https://www.youtube.com/watch?v=TGi3HqYrWHE>

³² 前掲、Bulley, J., et al. (2015)で参照した文献の数字(37 会場)と算出法が異なる。これは会場または競技のいずれかを基準に算出したかの違いであり、ここでは競技を基に算出した。例えば、The mall は会場では”1”つとして算出するが、同会場では陸上マラソン(Marathon)、競歩(Race Walk)、自転車ロードレース(Cycling, Road)が実施されており、競技としては”3”と算出した。

³³ 前掲、London View Management Framework(2012), pp. 35-236, 「LVMF 補助的な計画の手引き」内の各指定眺望景観内に見えるランドマークとして「含まれるランドマーク “Landmarks include:”」と「同様に見えるもの” Also in the views:”」を Table 2 に記述した。LVMF2007 年版には「戦略的に重要なランドマークと市内の主要なランドマーク」として整理されていた。2012 年版には当該ページがなくなっていたが、各 Management Plans には以下のような市内でも重要なランドマークが記載してあり、以下に整理した。

List of Strategically Important and Other Landmarks

- Strategically Important Landmarks: St Paul’ s Cathedral, Palace of Westminster, Tower of London,
- Other landmarks listed in Management Plans: BT Tower, Buckingham Palace, Cannon Street Station Towers, City Hall, Cleopatra’ s Needle, The Cutty Sark, Golden Jubilee/Hungerford Footbridges, Greenwich Maritime World Heritage Site, Greenwich Observatory, HMS Belfast, Lambeth Palace, The London Eye, Millennium Dome, Millennium Bridge, The Monument, The OXO Tower, The Queen’ s House Greenwich, The Queen’ s House, the Old Royal Naval college, Royal Festival Hall, Royal National Theatre, The Shard, Somerset House, Southwark Cathedral, Tate Modern / Tate Modern Chimney, Tower Bridge, Towers of Westminster Abbey,

Victoria Memorial, Waterloo Bridge, Westminster Abbey, Westminster Bridge

第3章

五輪景観を生み出す競技会場に至る

大会コンセプトの立案とその変遷

- 3.1. はじめに
- 3.2. 過去の五輪との比較から見るロンドン五輪の競技会場の特徴
- 3.3. 都市景観を映し出す五輪コンセプト立案経緯

3. 五輪景観を生み出す競技会場に至る大会コンセプトの立案とその変遷

3.1. はじめに

本章では、映像を重視した五輪開催を目指す IOC の理念を読み取ったロンドン五輪招致委員会が、2012 年の夏季の五輪の招致から実施計画立案の段階において、「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトがいかんして生まれ、それがロンドン五輪における各競技会場においてどのように反映されたのかを、過去の五輪大会との比較や、招致検討期間、招致活動期間の経緯などから解明した。

解明に先立ち、本章の該当期間の概要を以下に紹介する。

招致検討期間と招致活動期間において、英国五輪協会の命をうけ、元ホッケー英国五輪代表選手であったデイビッド・ルッカース(David Luckers)はロンドン市における五輪開催の実現可能性の検討を開始し、大会コンセプトとメインパークとなる敷地選定を行った。最終的にはロンドン東部ストラトフォード地区の再開発計画に、五輪計画を重ねる形で採用された。並行して、五輪開催による費用対効果の検証において、観光促進を掲げ、観光政策を推進する政府の招致への支援を受ける。それに伴い、「都市景観を映し出す五輪」と言うコンセプトが固まっていく。さらに、招致活動が進むにつれて、市内ランドマークを競技器具として見立てた招致ポスターや市内を東西に流れるテムズ川を模した招致ロゴなども作成され、このコンセプトを体現した。

また、調査方法として、文献調査として過去に開催した五輪の公式レポート群、IOC 発行の資料、ロンドン五輪の招致計画、公式記録、および招致計画に至るまでの計画検討段階の資料、計画・設計図書の収集、解読する。また、関係者へのヒアリング調査も並行して実施する。

表 3-1 過去に開催された五輪において都市景観を映し出した主な競技会場一覧

Year/City 開催年 &都市	Venue 競技会場	City-scene 都市景観	scene/sequence シーン型 シーケンス型	venue direction 都市景観への指 向性	non-sports site 非競技用施設で の空地	How to broadcast the city-scene as backdrop どのようにして背景の都市景観を映し出したか
1982 Barcelona バルセロナ	Diving 飛び込み	Sagrada Família, City scape	シーン型	✓		Broadcasted the swimming diving platform with the cityscape. Sagrada Família and square city block as backdrop. 高台にある聖ファウルの飛び込みの背景にサグラタファミリアや市内格子状街区を映し出した。
	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	Sant Sadurni d'Anoia, Circuit de Catalunya in Montmeló	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with Sant Sadurni d'Anoia area. Circuit de Catalunya as backdrop. サン・サドゥルニ・ダノイアやカタルニャを背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Race walk 競歩	City street of Zona Franca, Olympic Stadium	シーケンス型			TV cameras ran alongside and broadcasted the runners in the historic neighborhoods immediately south of the Olympic stadium as backdrop. 市内近郊回廊コースを背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Marathon マラソン	Sagrada Família, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with city streets and landmarks as backdrop. 市内回廊のサグラタファミリアを背景にして、選手を並走しながら映し出した。
1996 Atlanta アトランタ	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	North downtown in Atlanta	シーケンス型			TV cameras ran alongside and broadcasted athletes in the north downtown in Atlanta, the most scenic neighborhoods in the city as backdrop. 最も美しい景観のアトランタ市内北西部を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Race walk 競歩	Historic area of south of the Olympic Stadium	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted the runners in the historic neighborhoods immediately south of the Olympic Stadium as backdrop. 五輪スタジアム南側の歴史的な地区を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Marathon マラソン	Martin Luther King Jr. Center, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with historical landmarks. Martin Luther King Jr. Center, city street as backdrop. 市内回廊の歴史的建造物や記念碑を背景とし、選手を並走しながら映し出した。
	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	Centennial Parklands, Beaches	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with Centennial Parklands and water views of beaches as backdrop. センテニアル記念公園、海岸を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
2000 Sydney シドニー	Race walk 競歩	City street, Olympic Stadium	シーケンス型			TV cameras ran alongside and broadcasted the runners started and finished at Olympic stadium and circuit route at city streets as backdrop. 五輪スタジアム敷地、市内回廊を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Beach Volleyball ビーチバレーボール	Bond Beach	シーン型	✓		The venue site was the famous beach near Sydney, but TV cameras couldn't project beautiful coast scenes from inside of the arena. シドニー近郊の有名な海水浴場に競技会場だったが、会場内から海が見えなかった。
	Triathlon トライアスロン	Sydney Harbour Bridge, Sydney Opera House	シーケンス型	✓		Broadcasted competition with the Sydney harbour, Harbour Bridge and Opera House as backdrop. メイン会場である湾岸地区の中心部のランドマークであるオペラハウスとシドニー港橋を背景に映し出した。
	Marathon マラソン	Sydney Harbour Bridge, Sydney Opera House, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with Sydney Harbour Bridge, Sydney Opera House, City street as backdrop. 市内回廊をコースとし、シドニー港橋などを背景に選手と並走しながら映し出した。
2004 Athens アテネ	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	Kotzia Square, Voulagmeni-Agia Marina Route, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes with historical landmarks and seaside routes as backdrop. 海岸線やアテネ中心部の歴史ある要所を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Race walk 競歩	Olympic Stadium, City street	シーケンス型			TV cameras ran alongside and broadcasted the runners started and finished at Olympic stadium and circuit route at city streets as backdrop. 五輪スタジアム敷地、市内回廊を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
	Archery アーチェリー	Panathinaiko Stadium	シーン型	✓		Broadcasted the archery at Panathinaiko Stadium, competition site of the first modern Olympic Games in 1896. 1896年近代五輪の主要会場となったパナティナイコ競技場内をアーチェリー会場として映し出した。
	Shot Put 砲丸投げ	Ancient Stadium of Olympia	シーン型	✓		Broadcasted Shot Put competition at the Ancient Stadium of Olympia, the ancient square surrounded by spectators. アテネ郊外オリンピアの古代競技場、観客で囲まれる砲丸投げ競技場を映し出した。
2008 Bejin 北京	Marathon マラソン	Marathon Stadium, Panathinaiko Stadium, City street	シーケンス型	✓		Broadcasted the cyclists with Hampton Court Palace, city streets as backdrop, repeatedly on the circuit course. ハンプトンコート宮殿や市街区を背景にした周回コースを走る選手を繰り返し映し出した。
	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	Marathon Stadium, Panathinaiko Stadium, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted the cycling race started at Yongdingmen and route with Great Wall and Beijing streets as backdrop. 市内の天安門前走コース、万里の長城まで、選手を並走しながら映し出した。
	Race walk 競歩	Yongdingmen Gate, Great Wall, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted runners around the course as backdrop. 選手を並走しながら映し出した。
	Marathon マラソン	Marathon Stadium, Panathinaiko Stadium, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted runners on Beijing streets as backdrop, routed from Tiananmen Square, 天安門広場コースを走り、北京市内を背景にして、選手を並走しながら映し出した。
2012 London ロンドン	Hockey アイスホッケー	Olympic Park, City	シーン型	✓		Broadcasted the other venues and cityscape of London from the lower spectators stand. 囲まれた観客席の一部を低層化することで、メインハブ内の施設やその先のロンドン市の街並みを映し出した。
	Archery アーチェリー	Lord's Cricket Ground	シーン型	✓		Broadcasted the venue on the axis between brick traditional spectators stand and futuristic shape media centre. レンガ葺きの旧観客席と未来的形態の記者席を軸に軸線上に競技会場を配置し、カメラ機軸の新旧を映し出した。
	Olympic Road & Time Trial 自転車ロード&タイムトライアル	The Mall, Hampton Court Palace, City street	シーケンス型	✓		Broadcasted the cyclists with Hampton Court Palace, city streets as backdrop, repeatedly on the circuit course. ハンプトンコート宮殿や市街区を背景にした周回コースを走る選手を繰り返し映し出した。
	Race walk 競歩	The Mall, Buckingham Palace, Admiralty Arch	シーケンス型	✓		Broadcasted the runners with Buckingham Palace and Admiralty Arch as back stop, repeatedly on the circuit course of The Mall. ハンキンガム宮殿やアドミラルティアークを背景とした回廊コースを走る選手を繰り返し映し出した。
Equestrian 馬術	Marathon マラソン	Greenwich Park, City	シーン型	✓		Broadcasted the layered cityscape, historical buildings, skyscraper and river from the hill in the park and the top of stands. ハーヴェグの史跡から、高層ビル群、街並みを高所から、観客席からが重層的に映し出した。
	Beach Volleyball ビーチバレーボール	Horse Guards Parade, London	シーン型	✓		Broadcasted the city skyline as backdrop because of looking up camera angle as character of volleyball. パレーボールという競技ゆえ、ボールや選手を吊上げるアンテナで市内ランドマークのスカイラインを映し出した。
	Marathon マラソン	Big Ben, St Pauli, City street	シーケンス型	✓		Repeatedly broadcasted the runners and other rankings with city landmarks as backdrop on the circuit course. 周回し、異なる階級の選手をカメラがうごいて中心部のランドマークを走る選手を繰り返し映し出した。
	Triathlon トライアスロン	Hyde Park, City street	シーケンス型	✓		TV cameras ran alongside and broadcasted athletes in the rich nature of park and cityscape as backdrop. 選手と共に移動するカメラが自然豊かなハーパークの景観と市内ランドマークを映し出した。

3.2. 過去の五輪との比較から見るロンドン五輪の競技会場の特徴

まず、ロンドン五輪のコンセプト立案の調査する前に、招致計画立案に参考したと言われる過去の五輪¹において、都市景観を映し出した競技会場の傾向を調査した。参照したのはロンドン五輪以前に開催された五輪(バルセロナ五輪 1992、アトランタ五輪 1996、シドニー五輪 2000、アテネ五輪 2004、北京五輪 2008)であり、各五輪大会において、競技会場で競技する選手の背景に都市景観を映し出したものをそれぞれの公式レポートから画像を抽出し、以下のように整理した。過去に開催した全ての五輪は大会後に発行する公式レポート²に競技会場を記録している。そのなかでも都市景観を映し出した画像を掲載した競技会場を以下のように抽出した。表の説明は以下の項にあり。

(1) 五輪開催における公式レポートの位置付け

本研究の重要な資料となるのが大会の公式レポートであるが、公式レポートの概要と意義についてロンドン五輪の公式レポートの巻頭³に記載してあるので、以下に要約する。

五輪憲章(*Olympic Charter*)と開催都市契約(*Host City Contract*)にあるように、ロンドン五輪組織委員会は、IOCの指示に従い、五輪大会の公式レポート作成を義務付けられている。公式報告書は、大会の事業内容を要約し、その経緯を記録し、オリンピック・ムーブメントへのレガシーにもなる。従来、公式報告書は3巻で構成され、大会終了後に大会の様子をまとめていた。しかし、ロンドン五輪組織委員会では北京五輪 2008以降から、立候補都市がどのように大会の招致を成功させたかに特に焦点を当てた第1巻(*Volume 1*)⁴を追加した。この巻の主な対象読者は、将来の大会主催者、申請/立候補都市、五輪研究者、歴史家、そしてオリンピック・ファミリーなどの関心のある人々である。この本の目的は、単に「招致ファイル」に書かれていることを再現することではなく、大会の計画が時間とともにどのように発展してきたかを示す参考資料となる。(略)

ロンドン五輪における大会公式レポートは3巻から構成される。前述の招致に関するまとめた第1巻に続き、第2巻(*Volume 2*)⁵では五輪競技大会の競技記録を掲載した公式記録本であり、そして第3巻(*Volume 3*)⁶は第一巻の招致成功までの道のりを受けて、招致成功以降、大会を実現するために必要だった組織の、大会を準備に求められた出来事を記録している。以上のように、ロンドン五輪の招致計画から、実施に向けての経緯を紐解

く本研究において、この公式レポートは重要な資料の一つとなる。

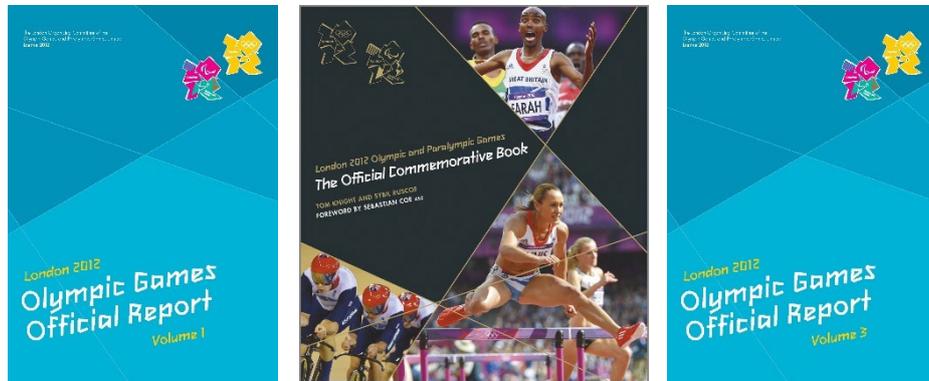


図 3-1 ロンドン五輪公式レポート
第 1 巻(左)、第 2 巻(中)、第 3 巻(右)

(2) 過去の五輪に見られる傾向

都市景観を映し出した競技会場の画像の傾向から、それぞれの特徴を調査項目として表を一覧にした。「シーン型／シークエンス型」「都市景観への指向性の有無」「非競技用施設での実施の有無」だけでなく、「どのようにして背景の都市景観を映し出したか」として整理した。過去の五輪開催において都市景観を映し出した競技会場として、市街地を競技会場(シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場)はもちろんのこと、アリーナ型の競技会場も、競技する選手の背景に都市景観を映し出すことを意識した、観客席の一部を開放もしくは低層化する競技会場を計画していた。サグラダファミリアや格子状になっている市街地街路を背景として映し出すために丘の上に競泳飛び込み競技会場を建設したバルセロナ五輪や大会の中心部であるオペラハウスやシドニー湾橋を背景としたトライアスロン会場などを計画したシドニー五輪の事例がある。

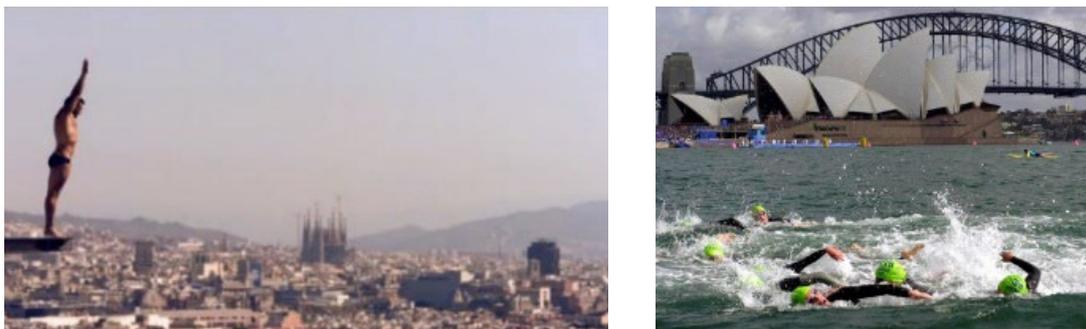


図 3-2 バルセロナ五輪 1992 年とシドニー五輪 2000 年

(3) 過去の五輪との比較から浮かび上がるロンドン五輪の特徴

上記の表では比較対象として、同条件でのロンドン五輪の競技会場も一覧に加えたが、そこからロンドン五輪の特徴が以下のように浮かび上がる。過去、都市景観を映し出す競技はマラソンのような市街地を競技会場とするシークエンス型が多いが、ロンドン五輪においてはシーン型を多用しているのが特徴である。それらシーン型景観のある競技会場の都市景観への指向性として、シーン型景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置の傾向も見られる。また、王立公園、広場など競技用ではない場所に仮設競技会場を建設したこともロンドン五輪の特徴であり、仮設建築だからこそ恒設では困難な市内中心部でありメディアの注目度の高い場所を競技会場の敷地として活用出来た。石畳のコースを設定した市街地マラソン競技会場などもそうだが、ロンドン五輪の競技会場は必ずしも競技する場所として相応しいとは言い難かったが、比較的にな新しく採用された競技であるビーチバレーボールやトライアスロンなどの各国際競技連盟は競技普及促進の点から注目度の高い場所で開催されることによるメディアへの露出度の高さの方を取り、これを歓迎している。

また、シーン型五輪景観を生み出す競技会場の特徴は 1992 年開催のバルセロナ五輪と 2000 年開催のシドニー五輪に見られ、招致計画時期(2003 年～2004 年)から逆算しても、これらの競技会場を参照したという証言と合致する⁷⁾。この都市景観を映し出すという考え方は招致計画当初から構想され、後述する招致ロゴや招致ポスターのデザインにも表れている。



図 3-3 ロンドン五輪 アーチェリー競技会場(左)、ホッケー競技会場(右)

3.3. 都市景観を映し出す五輪コンセプト立案経緯

ロンドン五輪における、都市を見せる、という大会コンセプトをどのように立案したのか。その始まりは、招致を計画検討する期間と招致活動期間にあったと考える。以下、ロンドン五輪の計画検討期間、招致活動期間を中心とした主な出来事を以下に記す。

(1) 計画検討期間(1997年～2003年)

バーミンガム、マンチェスターと英国開催の五輪招致に3度失敗した英国五輪委員会(British Olympic Association 以下 BOA)は英国の首都であるロンドン市での招致を決め⁸【before 1994】、1990年代はその実現可能性と市内の開催地区選定の検討を開始した。しかし、本格的な検討に入ったのは1997年になってからであった。その際の主要人物となったのが、1996年のアトランタ五輪に出場した、元ホッケー英国五輪代表選手のゴールキーパーであったデイビッド・ルッカーズ(David Luckers)であった。当時のBOA会長であるサイモン・クレグ(Simon Clegg)にロンドン市における五輪開催の実現可能性を検討する命⁹を受けた。当時は協会内の廊下の端に一人でしかも最初の3カ月は無給¹⁰で立ち上げたという¹¹。

1997年2月に本格的に作業を開始すると、その時点でロンドン市が夏季五輪の招致を目指していたのは2004年夏季五輪や2008年夏季五輪であった。実現可能性を検討するワーキンググループは4つのテーマ(競技と会場、交通、選手村の場所、環境)を元に検証した。招致の可能性を検討した結果、2008年夏季五輪の開催地が欧州からの選ばれる可能性がないことが判明しても、2000年にかけてワーキンググループは定期的に設けられた。しかし、五輪招致を確実なものとするには、英国政府、ロンドン市、英国五輪協会の3者から支援が不可欠だった。

英国内で首都であるロンドン市内で五輪開催の検討を開始したが、次は市内のどの敷地を中心に計画案をまとめるか作業を行った。1998年6月に発行されたロンドン五輪選手村の候補地を調査した資料には、市内の敷地候補37か所から、12か所を選定する過程が記されている。それぞれの会場に検証項目にウェンブリースタジアムなどへのアクセスがあることから、当時はウェンブリースタジアムをメインスタジアムとしての招致計画を策定していたと思われる。他にも敷地規模、ヒースロー空港へのアクセス、市内中心部へのアクセスなどのチェック項目がある¹²。

この候補地の中には、最終的にメインパークになるストラトフォード地区とともに、

キングス・クロス地区などが含まれていた。キングス・クロス地区は新しいユーロスター発着駅であるセントパンクラス駅に隣接し、ストラトフォード地区とは別に、英国内でも長年再開発が望まれていた場所であった。五輪招致計画とは別にキングス・クロス地区も地上駅改修、ユーロスター駅改修、地下鉄駅改修を中心にした大再開発が行われた。この地域はゾーン1に位置し、アクセスは申し分ないが、大会後のストラトフォード地区の五輪記念公園としての街の規模を見ると多少規模としては足りなかったと思われる。

このような候補地における良い点悪い点の検討を経て、市内各地における五輪開催に適した用途と相応しい規模などから候補地に絞られていく。その中には 2005 年の世界陸上の開催地として予定されていたながらも辞退したパケットロックにおける五輪開催案¹³も含まれていた(2005 年の世界陸上はヘルシンキで開催された)。最終的には、ウェンブリー地区(西地区)案とストラトフォード地区(東地区)案に絞られた。

一方、同時期の IOC では、1990 年代後半に起きた委員の招致に対する汚職接待事件からの信頼回復を目指して、大会運営の変更や組織改編が行われていた。開催都市に過度の負担を強いる五輪計画を避けるためのレガシーという考え方を盛り込んだ IOC 五輪憲章¹⁴の発行【Jan/1998】や、映像技術革新や若い世代へ訴求するため OBS(五輪放送機構)を設立【2001】した。

開催場所を東部地区と定めた BOA は、英国政府の支援を取り付けるために五輪招致が観光業の雇用創出を期待でき、観光政策に力を入れる英国政府に協調した【Jan-Mar/2002】。その観光政策に寄与する五輪計画として具体化したのが都市を見せるというロンドン五輪というコンセプトであった。

2002 年 10 月、英国五輪協会の声明として、満場一致で 2012 年夏季五輪に立候補することを表明し、ロンドン市内の大英博物館にて記者会見を行った¹⁵。

また、IOC は五輪開催における開催都市へのインフラ整備などによる過度の負担を軽減するための提言としてのレポートに、テレビ画面の競技中継の五輪に言及した【Jul/2003】。

市内メイン会場選定時期(他はウェンブリー案やパケットロック案)の BOA によるレポート¹⁶【15/Dec/2000】では市内広域に競技会場の敷地が点在している。ストラットフォード案として固まった総合エンジニア会社 Arup によるレポート¹⁷【13/Mar/2001】では、市内東部に敷地の多くを集めたが、既存施設と王立公園の活用を打ち出すにとどめている。

(2) 招致活動期間(2003年～2005年)

2003年8月19日、ロンドン五輪招致を目指す組織として、London2012Ltd が設立さ

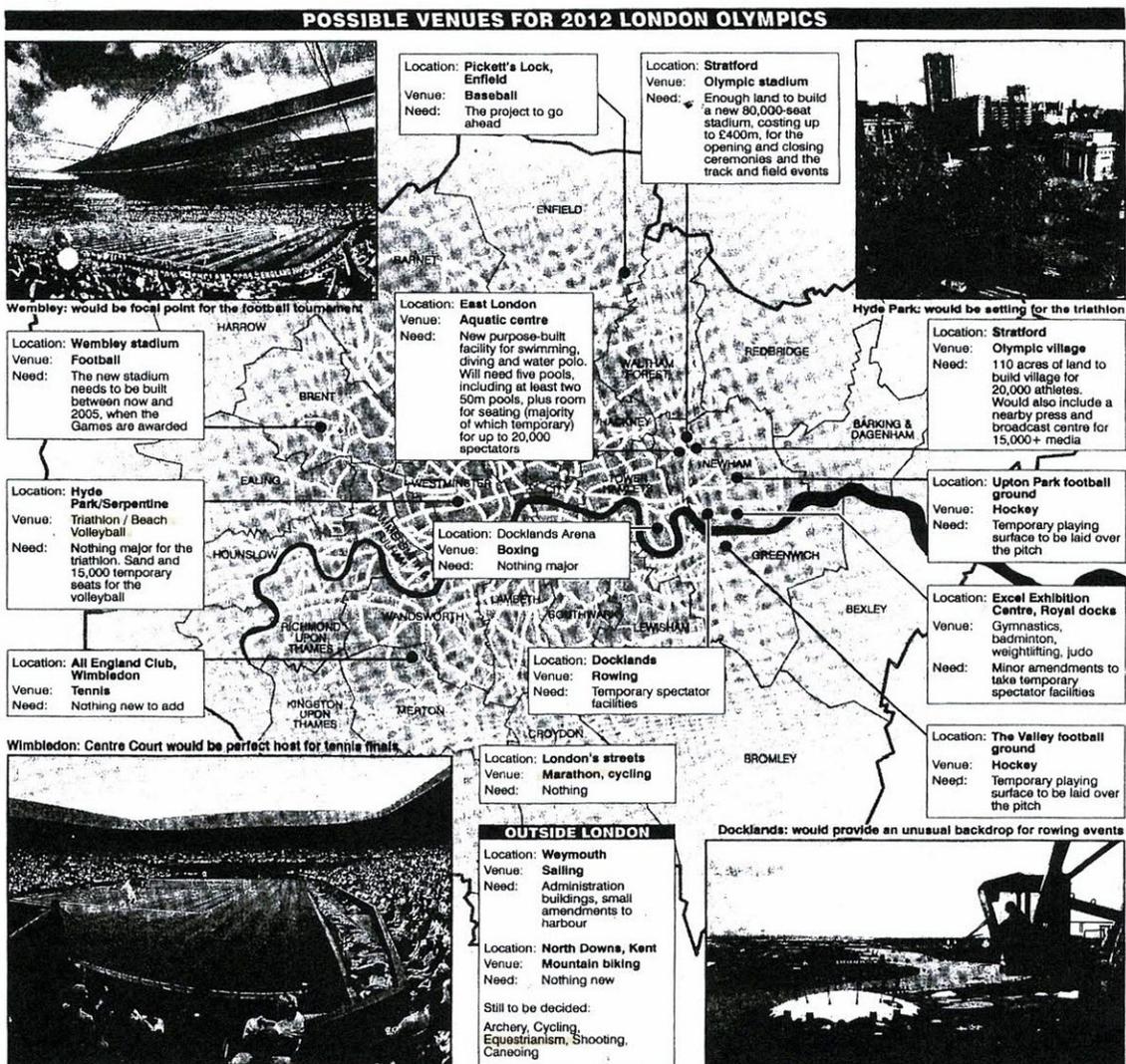


図 3-4 当時の新聞(Independent)記事(2001/3/13)より

れた。母体となっているのは政府、ロンドン市、英国五輪協会である¹⁸。

招致委員会は、招致キャンペーンに向けて、ロゴを作成した。2004年1月にデザインコンペを実施し、1,100作品の中から選ばれた¹⁹。LONDON 2012の間を蛇行する五輪リングの色のリボンの形は、ロンドン市の街のシンボルでもあるテムズ川の形を模している。招致委員会は、招致の機運を高める広告キャンペーンとして、このロゴと招致応援ポスターを作成した。この年の2004年や開催年2012年はうるう年であり、うるう年 Leap year の” Leap”には「飛躍」という意味もあり、Leap for London 招致キャンペーンとして、街を代表する6つのランドマークを選手が飛び越えるというポスターを街に展開した²⁰。

2004年1月15日に組織委員会は、IOCへの公式な立候補の意思表示となる立候補都市申請書²¹を提出し、翌日、招致を正式に開始することを発表する記者会見をロンドン市内、テムズ川南岸に位置するロイヤルオペラハウスで実施した。招致委員会の委員長カッサーニ、初代ロンドン市長ケン・リビングストン、当時の英国首相トニー・ブレアらが参加し、招致にむけて官民連携をアピールした²²。



図 3-5 ロンドン市が IOC に提出した 2012 年夏季五輪立候補都市申請書

この立候補都市申請書には、都市を見せる、という表現とそれを具現化する競技会場として市内中心部の王立公園や市内広場など注目度の高い場所を競技会場の敷地として、グリニッジ・パーク、ホースガーズパレード、ハイドパークなどを選定した計画が記載してある【15/Jan/2004】。

2004年5月18日、IOCは2012年夏季五輪の立候補都市として2次審査に進む5つの都市を発表した。ロンドンの他にフランスのパリ(Paris)、スペインのマドリード(Madrid)、アメリカのニューヨーク(New York)、ロシアのモスクワ(Moscow)が選ばれた。この1次審査で落選した他の都市はドイツのライプツィヒ(Leipzig)、キューバのハバナ(Havana)、ブラジルのリオデジャネイロ(Rio de Janeiro)、トルコのイスタンブール(Istanbul)であった。2次審査に進む5つの都市はこの時点から立候補都市として名乗ることが出来る²³。申請都市の9つから立候補都市の5つに選ばれたことを、London2012チームは市内中心部に新しい観光名所となった観覧車ロンドン・アイにて発表している²⁴。

しかし、IOCの立候補都市調査委員は、2004年に実施した世界の立候補都市を視察した後の調査報告書に、これら王立公園や市街地広場を競技会場とする案に対して「不明確」と懸念を示した²⁵。しかし、招致委員会は2次審査である招致ファイルを提出する際に、大会ビジョンとして「印象に残るテレビ映像を作るために、象徴的かつ歴史的に有名なランドマーク(名所旧跡)という都市の最高の資産のいくつかを活用する。」として盛り込んだ²⁶【15/Nov/2004】。

ちなみに、競技会場敷地の選定は、立候補都市申請書(1次審査)と招致ファイル(2次審査)の間にもIOCの指摘により変更があった。フェンシング会場が市内北部のアレキサンドラパレス(Alexandra Palace)からメインパークへ、射撃会場がロンドン郊外のビスレー(Bisley)からロンドン市内の王立の旧軍駐屯地(Royal Artillery Barracks)へと、選手や観客の移動に配慮した結果、市内中心部に変更している²⁷。その間、8カ月で数々の専門家を起用し、2次審査となる招致ファイルを作成している。

招致ファイルに掲載したロンドン五輪の計画は、明確なレガシー計画を盛り込み、サステナビリティに配慮した五輪の開催計画であったが、やはり仮設競技会場の数も全体の競技会場に対する数や割合において、他の都市に比較して多かったという

招致ファイルにおける大会のビジョンを体現する5つのテーマは以下となる。この5つは大会後の公式ファイル²⁸にからの転載であるが、5つ目テーマ「コンパクトで、象徴的な、交通の便の良い会場」は招致ファイル²⁹では前面に押し出していなかった。前例の

ないコンセプトだったためか、に4つめの補足的な位置づけで記載された。

- *アスリートに生涯忘れられない経験を提供 (Delivering the experience of a lifetime for athletes)*
- *英国にスポーツのレガシーを残す (Leaving a legacy for sport in the UK)*
- *再生による地域社会への貢献 (Benefiting the community through regeneration)*
- *IOC とオリンピック・ムーブメントへの支援 (Supporting the IOC and the Olympic Movement)*
- *コンパクトで、象徴的な、交通の便の良い会場 (Compact, iconic and well-connected venues)*

(3) 招致活動そのものが「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトを体現

以上、招致成功に至るロンドン市の活動の概要を時系列に整理した。その各所に、都市の資産を前面に押し出した計画が徐々に明確になっており、その形が芽生えている。しかも、招致活動における重要な発表をする記者会見などを、ロンドン市内の文化施設(大英博物館、ロイヤルオペラハウス、ロンドン・アイ観覧車など)を選択し、要人や著名人などと共に発表している。美術館、劇場、アトラクション、などを記者会見の場にして、招致活動をニュースとしてメディアに取り上げてもらう際に映像としての映える場所を背景にしつつ、記者会見そのものが「都市景観を映し出す五輪」を体現していた。

本節では、都市景観を映し出す五輪の大筋の端緒が、招致の計画検討期間と招致活動期間にあったと考えるが、招致成功後の開催準備期間と競技会場建設期間の出来事の概要も以下に記す。

(4) 開催準備期間(2005年～2011年)

また、招致ファイル(2次審査)を提出後、すなわち招致を勝ち取ってからも、競技会場計画地の変更や建築計画は大きく変更をしている。開催場所の変更、建築タイプの変更(恒設建築から仮設建築へ)などがあった。他にも競技そのものが五輪競技から除外されたために競技会場そのものが計画されなくなる例もある。たとえば、野球とソフトボール

競技会場としては市内中心部にある王立公園であるリジェントパークに計画されていた。仮設で計画していた野球場やもう一つの市内中心部に計画する競技会場として、競技する選手の背景としてロンドンの都市景観をどのように映し出す計画を目指していたが見てみたかったが、欧州における野球の人気度や、アメリカをはじめとした野球大国ですら一流選手であるメジャーリーグ選手を派遣するかどうかの足並みが揃わないなどの影響もあり、2012年のロンドン五輪において野球とソフトボール競技は除外された。

ちなみに競技会場ではないが、世界各国のメディア関係者がその取材や放送の拠点とするメディアセンター、IPC/MPCも招致成功後に大きく変更をしている。メインパーク内南端から北端への移動である。メディアセンターという機能上、この変更が競技する選手の競技環境に配慮する必要もなく、開催まで7年を考えると変更に大きな影響はなさそうだが、メディアセンターという機能から開催後の後利用を考えた上での計画になっておらず、とにかく求められた規模の建築空間を提供したに過ぎないとは、メディアセンターを計画した建築士の弁であった³⁰。

他にも大きな競技会場の大きな計画変更は市街地マラソン競技会場である。詳細は後述するが、大会2年前になって、選手の背景にカメラに映る都市景観のことや、運営管理上の問題からスタート／ゴール地点の変更に伴い、メインスタジアムのあるメインパークへ発着するコースレイアウトから、市内中心部を3.5回、周回し、バッキンガム宮殿前の大通り、ザ・マルをスタート／ゴール地点とするコースレイアウトへと大きく変えた。

(5) 競技会場建設期間(2011年～2012年)

また、開幕が近づくと、タワーブリッジ、ナショナルギャラリー、セントパンクラス国際駅、ヒースロー国際空港、キューガーデン(庭園に描かれた)、テムズ川など、国内外のメディアが映し出すロンドンのランドマークなどに五輪リングを設置し、開催都市の都市景観を映し出すというコンセプトを競技会場以外でも実現した。同様の考え方として、聖火リレーも英国内やロンドンを巡り、国内、市内のランドマークがメディア画像やテレビ画面に映し出された³¹。聖火リレーの英国内でのルートは皆が手軽に回れるルートとして計画され、英国内のランドマークを余すことなく映し出すとともに、多くの市民の目に触れることになり、機運を高めることに一助となった。

表 3-2 ロンドン五輪の計画立案から大会実現までの経緯

before 1994	Following the disappointments of failed bids by Manchester(1996&2000) & Birmingham(1992), BOA set about establishing London as the only city to hold an Olympic Games. バーミンガム招致失敗(1992大会)、マンチェスター招致失敗(1996大会、2000大会)を経て、英国五輪協会(BOA)はロンドン市を開催地とする五輪招致を検討	feasibility stage 計画検討期間	
May/1997	Feasibility study of a London Olympic bid conducted by the BOA. ロンドン五輪の実現可能性をBOAが調査開始。市内開催可能地域を検討		
Jan/1998	The first Olympic Charter with the topic of Legacy to be issued by IOC. レガシーに言及した初の五輪憲章が発行される		
Dec/1999	After research and discussion, Wembley Stadium wasn't suitable for the Olympic main stadium. BOA chose the Stratford area for the main Olympic Park. 検討の結果、市内西部地区ウェンブリースタジアムが五輪競技会場として不適格と判明。BOAは市内東部地区ストラットフォードの地域再生案として五輪開催地を絞り込む		
15/Dec/2000	BOA report, the staging a London Olympic Games was issued to DCMS. BOAによる五輪検討報告書を文化・メディア・スポーツ省(Department for Culture, Media and Sports 当時、以下DCMS)へ提出		
2001	Olympic Broadcasting Services(OBS) was set up by IOC. 五輪放送機構(OBS)がIOCによって設立		
Feb-May /2001	BOA's first formal presentation to the Mayor, GLA and stakeholders BOA五輪案を関係組織への説明。政府、GLA、ロンドン新市長など		
13/Mar/2001	London Olympic Games Bid plan revealed on newspapers. 英国の各種メディアでロンドン五輪について発表		
Nov/2001	Confidential report by surveyors Insignia Richard Ellis to a "Stakeholders Group" (Government, GLA/LDA and BOA) on land availability for a London Olympics. 調査会社Insignia Richard Ellisによるメイン会場の土地取得可能性の調査報告書提出を政府などへ提出		
Jan-Mar /2002	Commissioning of cost-benefit analysis (ARUP report) of staging a London Olympic Games. 総合エンジニア会社Arupに五輪開催費用対効果の調査依頼。英国政府も調査開始		
15/May/2003	Government commits to London 2012 英国政府の正式の支援表明		
Jul/2003	"Broadcasting the Games" was issued on the report to the 115th IOC Session. 115回IOC総会レポートで、テレビに映し出される五輪に言及		
Aug/2003	London Olympic Games Bid Team set up. ロンドン五輪招致委員会設立。		
15/Jan/2004	Applicant City Questionnaire was submitted to IOC. 立候補都市調査表をIOCに提出(1次審査)		bidding stage 招致活動期間
May/2004	Candidate City announcement. 立候補都市に選定(1次審査通過)		
15/Nov/2004	Candidature file was delivered to IOC. 招致ファイルを提出(2次審査)		
Feb&Jun /2005	IOC Evaluation Commission visited in London,16-19/Feb. Report of the IOC's Evaluation Commission issued on Jun. IOC評価委員会の立候補都市訪問(ロンドン2/16~19)。同委員会による6月に調査報告書発行	prep. stage 準備期間	
6/Jul/2005	London awarded the hosting city for the 30th, 2012 Summer Olympic Games at the 117th International Olympic Committee Session in Singapore. 第117回IOC総会(シンガポール)において第30回夏季五輪大会の開催地が英国ロンドン市に決定		
Late-Early 2010	Planning application for competition venues were submitted to and accepted by London Borough. 行政自治区に会場の建築許可申請&承認	games stage 開催期間	
Jul-Aug/2011	Test event was held on site. Competition venue (simpe ver.) was built. テストイベント開催。競技会場建設		
Jul-Aug/2012	London Olympic Games was held and the competition venues with the stunning city-scape as its backdorp, was broadcasted on TV screens. ロンドン五輪開幕。都市景観を背景とした会場はテレビ中継で放映		

以上が、都市景観を映し出す五輪のコンセプト立案とそれに伴う競技会場計画敷地の変遷であり、主要な出来事は以下の経緯を示す表にまとめた。また、五輪景観を生み出す大会コンセプト立案の経緯は各競技会場の敷地選定からも読み取れる。各競技のロンドン市内における競技会場の敷地の変遷を5つの時期から以下に整理した。

- ①開催検討時期(BOA Report : 2000/12/15)
- ②招致検討段階初期のメディア発表(Arup Report : 2001/3/13)
- ③立候補都市申請書(IOCによる1次審査 : 2004/1/15)
- ④招致ファイル(IOCによる2次審査 : 2004/11/15)
- ⑤公式レポート(開催後 : 2013)

これら5つの時期で整理した表から読み取れることは、「①開催検討時期」では市内広域に競技会場の敷地が点在している。ストラットフォード案として固まった「②招致検討段階初期のメディア発表」では、市内東部に敷地の多くを集めたが、既存施設と王立公園の活用を打ち出すにとどめている。IOCへの最初の意思表示となる「③立候補都市申請書」で初めて都市を見せるという表現とそれを具現化する競技会場として市内中心部の王立公園や広場など注目度の高い場所として選定している。更に「④招致ファイル」では、テレビへの中継映像を意識した五輪開催と、街のアイコンであるランドマークを背景とした競技会場について言及している。

(6) 五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯と関係者間の意見調整

次章以降において、研究対象として抽出した調査事例について、分析する。事象と関係者の関与の経緯を時系列にまとめた。

着目する関係者は五輪景観を生み出す競技会場の計画・実現に招致の初期段階から実現まで関わった LOCOG(ロンドン五輪組織委員会。旧組織である英国五輪協会や五輪招致委員会も含む)、IOC(国際五輪委員会。国際競技連盟 IF を含む)、行政(ロンドン市、英国政府)、建築事務所の4者とし、立場、役割は以下の通りである。

表 3-3 ロンドン五輪における各競技会場の敷地選定の経緯

Document 資料	BOA Report issue date 発行日	Arup Report issue date 発行日	Applicant City Questionnaire 立候補都市調査表	Candidature File 招致ファイル	Official Report 公式レポート
Archery	Hackney Marsh (not noted)	Hackney Marsh London's streets (not noted)	Lord's Cricket Ground (not noted)	Lord's Cricket Ground Tower Bridge - Olympic Stadium Victoria Park	Lord's Cricket Ground The Mall (London's streets) Victoria Park
Athletics, Marathon	(not noted)	(not noted)	(not noted)	Olympic Stadium North Greenwich Arena	Olympic Stadium Wembley Arena
Athletics, Race Walk	(not noted)	(not noted)	(not noted)	(not noted)	(not noted)
Badminton	Olympic Stadium* London Arena	Olympic Stadium Ex:Oel or London Arena	North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	Olympic Stadium Wembley Arena
Baseball & Softball	The Oval & Hackney Marsh	The Oval or Picketts Lock & Hackney Marsh	Regent's Park	Regent's Park	Regent's Park (not noted, eliminated sports)
Basketball	North Greenwich Arena / Picketts Lock	North Greenwich Arena / Picketts Lock	North Greenwich Arena / O.P. Basketball Arena	North Greenwich Arena / O.P. Basketball Arena	North Greenwich Arena / O.P. Basketball Arena
Beach Volleyball	Regent's Park	Hyde Park or Regent's Park	Horse Guards Parade	Horse Guards Parade	Horse Guards Parade Ex:Oel
Boxing	Ex:Oel / London Arena**	Docklands Arena or Ex:Oel	Docklands Arena or Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel
Canoe/Kayak, Sprint	Royal Albert Dock	Docklands	Docklands	Eton Dorney	Eton Dorney
Canoe/Kayak, Slalom	Helme Pierpoint or Lee Valley***	Lee Valley or Broxbourne	Lee Valley or Broxbourne	Broxbourne	Lee Valley White Water Centre
Cycling, BMX	(not noted, new sports)	(not noted, new sports)	O.P. BMX Track	O.P. BMX Track	O.P. BMX Track
Cycling, Mountain Bike	North Downs (Svenorks)	North Downs	Swivley Forest	Wesley Country Park	Heddligh Farm
Cycling, Road	Redester	London's streets or Rochester	Hyde Park	Regent's Park	The Mall (Box Hill) / Hampton Court Palace
Cycling, Track	Lee Valley	Hackney Marsh	O.P. Velodrome	O.P. Velodrome	O.P. Velodrome
Equestrian	Woburn	Hertfordshire or Royal Veterinary college,	Greenwich Park	Greenwich Park	Greenwich Park
Fencing	Ex:Oel	Brookman's park or Ex:Oel Plain	Greenwich Park	Greenwich Park	Greenwich Park
Football	Various	London Arena / Ex:Oel	Wembley / Regional Football Stadia	Wembley / Regional Football Stadia	Wembley / Regional Football Stadia
Gymnastics, Artistic &	North Greenwich Arena	Wembley / Regional Football Stadia	Wembley / Regional Football Stadia	Wembley / Regional Football Stadia	Wembley / Regional Football Stadia
Gymnastics, Rhythmic	Picketts Lock	Ex:Oel or Picketts Lock or North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	North Greenwich Arena
Handball	Ex:Oel	Ex:Oel or Picketts Lock / North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	Wembley Arena
Hockey	The Valley	Ex:Oel or Picketts Lock / North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	North Greenwich Arena	Wembley Arena
Judo	Ex:Oel	Ex:Oel	Copper Box	O.P. Basketball Arena / O.P. Copper Box	O.P. Basketball Arena / O.P. Copper Box
Modern Pentathlon	Crystal Palace	Crystal Palace	O.P. Copper Box / O.P. Aquatics Centre / Greenwich Park	O.P. Copper Box / O.P. Aquatics Centre / Greenwich Park	O.P. Aquatics Centre /
Rowing	Royal Albert Dock	Royal Albert Dock	Eton Dorney	Eton Dorney	Greenwich Park Eton Dorney
Sailing	Weymouth and Portland	Weymouth and Portland	Weymouth and Portland	Weymouth and Portland	Weymouth and Portland
Shooting	Bisley	Bisley	Bisley	Royal Artillery Barracks	Royal Artillery Barracks
Swimming, Diving	Tottenham Hale or other	O.P. Aquatics Centre or Tottenham Hale or London Fields****	O.P. Aquatics Centre	O.P. Aquatics Centre	O.P. Aquatics Centre / Hyde Park (Open Water Swimming)
Synchronised Swimming	Tottenham Hale or other	Fields****	O.P. Aquatics Centre	O.P. Aquatics Centre	O.P. Aquatics Centre / Hyde Park (Open Water Swimming)
Swimming, Water Polo	Tottenham Hale or other	Fields	O.P. Aquatics Centre / University of East London	O.P. Aquatics Centre / University of East London	O.P. Water Polo Arena
Table Tennis	Ex:Oel	Ex:Oel	North Greenwich Arena	Ex:Oel	Ex:Oel
Taekwondo	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel
Tennis	Wimbledon	Wimbledon	Wimbledon	Wimbledon	Wimbledon
Triathlon	London Docklands or Hyde Park	Hyde Park	Hyde Park	Hyde Park	Hyde Park
Volleyball	Picketts Lock	Picketts Lock	O.P. Arena	O.P. Arena	Ex:Oel
Weightlifting	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel
Wrestling	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel	Ex:Oel

*敷地名等の表記は開催地名(公式レポート)より付からず記載。 ** / は予選と決勝で使用。 *** or は可能性のある対象敷地。 **** O.P.=Olympic Park

五輪招致における開催都市の選定には、開催国の五輪協会が主導する。その後、五輪開催の意義、経済効果などを検討し、開催都市や開催国などの行政の支援を取り付ける。IOC との協議や他開催都市との招致レースに向けて招致委員会を設立する。招致委員会は各競技会場の想定敷地や規模を盛り込んだ招致計画を策定し、IOC の開催する総会において五輪開催都市が選定される。その後、組織委員会を設立し、競技会場の計画・実現に向けて建築事務所を筆頭とした関係者が関わる。

公式レポートには、スポーツ業界との関係をどのように構築するか、についても言及し、戦略的に、主要関係者である IOC や IF との綿密な連携が重要であるとしていた。特に、建築士として、IF が求める最新の競技会場の配置と計画を明確にするためには、早い段階で IF の要望を把握しておくことが重要である、としていた³²。

¹ 前掲、公式レポート 2 巻(2013), pp. 21

² 過去の開催された五輪の大会後に各組織委員会によって発行された公式レポートで本研究の調査参考資料として活用したのは以下となる。

- バルセロナ五輪 1996 : OFFICIAL REPORT OF THE GAMES OF THE XXV OLYMPIAD BARCELONA, Vol. 1-5(1993) COOB' 92
- アトランタ五輪 1996 : THE OFFICIAL REPORT OF THE CENTENNIAL OLYMPIC GAMES : ATLANTA, Vol. 1-3(1997), ACOG
- シドニー五輪 2000 : OFFICIAL REPORT OF THE XXVII OLYMPIAD : SYDNEY OLYMPIC GAMES, Vol. 1-2(2001), SOCOG
- アテネ五輪 2004 : OFFICIAL REPORT OF THE XXVIII OLYMPIAD: ATHENS, Vol. 1-3(2005), ATHOC
- 北京五輪 2008 : OFFICIAL REPORT OF THE BEIJING OLYMPIC GAMES, Vol. 1-4(2009), BOCOG

³ 前掲、公式レポート第 1 巻(2013), pp. 9, Section 1, Introduction

⁴ ロンドン五輪の公式レポート第 1 巻は p133 から構成され、目次と概略は以下となる。

- 第 1 章 : 序文 Section 1: Introduction
- 第 2 章 : 招致計画の裏にある経緯(特にロンドンと英国がオリンピック・ムーブメントの発展においていかに重要な役割を果たしてきたかを示すとともに、2003 年 6 月に正式に発足するまでの招致活動の初期の成り行きを振り返る) Section 2: History behind the bid
- 第 3 章 : 招致計画の裏にあるコンセプト (ロンドンの提案の基礎となる招致の主要コンセプトを紹介) Section 3: Concept behind the bid
- 第 4 章 : 招致の計画経緯 (招致会社の設立からシンガポールでの落札までの招致活動全体のストーリーを紹介) Section 4: The bid process
- 第 5 章 : パラリンピック競技大会の計画 (パラリンピックの考え方が、招致ファイルの各要素にいかに完全に統合されていたか) Section 5: Paralympic Planning
- 第 6 章 : 招致を支持する (一般市民、政府、企業、スポーツ界という 4 つの異なるが重要な関係者から、いかにして招致活動が支持されたか) Section

6: 'Backing the bid'

- 第7章：移行計画（招致委員会から大会組織委員会への移行について）Section 7: Transition planning

⁵ ロンドン五輪の公式レポート第2巻は312ページから構成され、目次は以下となる。

- 序章 Introduction
- 第1章：舞台を準備する Setting the Stage
- 第2章：ようこそ、世界の皆さん Welcoming the World
- 第3章：ロンドン五輪2012 競技大会 The London 2012 Olympic Games
- 第4章：ロンドンパラリンピック2012 競技大会 The London 2012 Paralympic Games
- 第5章：ロンドン2012の祝祭 The London 2012 Festival
- 第6章：ロンドン2012の記録 London 2012 Stats

⁶ ロンドン五輪の公式レポート第3巻は167ページから構成され、目次は以下となる。

- 概要 Executive summary
- 第1章：世界最高の組織を築き上げる Section 1: Building a world-class organisation
- 第2章：最高の大会を用意する Section 2: Staging a great Games
- 第3章：みんなの大会 Section 3: Everyone's Games
- 第4章：開催都市としてのロンドン Section 4: London as a Host City
- 第5章：レガシーの実現 Section 5: Enabling legacy
- おわりに Conclusion

⁷ 前掲、山寄一也(2019), ロンドンに学ぶ「五輪後の街づくり」連載第3回、「大会後も稼ぐ五輪」という発想、都市景観を観光資源に 仮設競技会場の敷地選定がロンドン五輪の成功につながった

⁸ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp. 16, ロンドン五輪招致を振り返り(2.2 Background to London's 2012 bid, 2.2.1 Origins)として「様々なIOC委員からの助言を受け、英国五輪協会はロンドン市こそが五輪招致を可能とする都市であると定めた。(…advice received from various IOC members, the BOA set about establishing London as the only viable city to hold an Olympic Games.)」と記述している。

⁹ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp. 16, Section 2 History behind the bid, 2.2 Background to London's 2012 bid, 2.2.1 Origins

¹⁰ Luckes, David - Oral evidence, Q109(2013/6/23), Select Committee on Olympic and Paralympic Legacy, Oral and written evidence, House of Lords, pp.587

¹¹ Lee, Mike(2006), The Race for the 2012 Olympics, Virgin Books, pp5

¹² 1998年6月に発行された London Planning Advisory Committee による五輪の選手村の敷地を調査する資料として、An assessment of site options for an olympic village for the xxxth olympiad bid by london(draft)によると 市内の選手村敷地の候補として 37 か所を調査し、そこから 12 か所(※)を選定する過程が記されている。それぞれの会場に検証項目に Wembley Stadium などへのアクセスがあることから、当時は Wembley Stadium をメインスタジアムとしての招致計画を策定していたと思われる。他にも規模、ヒースロー空港へのアクセス、市内中心部へのアクセスなどのチェック項目がある。

※ロンドン市内の五輪選手村候補地 12 か所 : RAF Uxbridge, Northolt Aerodrome, Southhall Gas Works/Minet Estate, Wormwood Scrubsm, Hendon Police College/RAF East Camp, Copthall, King's Cross Railway Lands, Crews Hill, Royal Ordnance, Waltham Abbey, Stratford Railway Lands, Joyce Green Hospital and Adjacent Land, Ebbsfleet

¹³ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp.19, Section 2 History behind the bid, 2.2 Background to London's 2012 bid, 2.2.5 BOA report

¹⁴ OLYMPIC CHARTER(1998), pp.19, Article 14: Section 2: Mission and role of the IOC, Chapter 1: The Olympic Movement

¹⁵ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp21

¹⁶ BOA report(2000), British Olympic Association

¹⁷ 前掲、London Olympics 2012, London Olympics 2012 Cost and Benefit (Summary) (2002)

¹⁸ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp21

¹⁹ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp28

²⁰ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp55

²¹ 前掲、立候補都市申請書(2004), pp10, "Response to the questionnaire for cities applying to become Candidate cities to host the Games of the XXX Olympiad and the Paralympic Games in 2012", "テーマIV: 競技会場"

²² 前掲、公式レポート1巻(2013), pp29

²³ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp.30, Section 4:The bid process, 4.3 Candidate City status and the development of the Candidature File

²⁴ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp30

²⁵ IOC 立候補都市調査報告書(Games of the XXX Olympiad in 2012, Report by the IOC Candidature Acceptance Working Group to the IOC executive board) (2004), IOC, pp.41, IOC 評価委員会による立候補都市訪問後の調査報告書には、ロンドンの競技会場案(Sports venues, LONDON)に対して「グリニッジ・パーク、(略)、ホースガーズパレードなどで、予算や工期などの情報が不足しており、既存競技会場としては不明瞭である。“The inclusion of Greenwich Park, Hyde Park, Regents Park, Swinley Forest and Horse Guards’ Parade as existing sports venues is unclear, given that no budget is allocated for upgrading / construction, or construction dates provided.”」とあった。

²⁶ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp.19, 「コンセプトとレガシー、競技会場：集約、象徴、接続の良い。“Theme 1, Concept and legacy, Venues: compact, iconic and well-connected”」の項目として、敷地であるグリニッジ・パークを紹介(“..., we have selected locations that provide excellent facilities and spectacular backdrops: the World Heritage sites of Greenwich, ..., Horse Guards Parade, the Royal Parks and Eton Dorney. These venues will all inspire athletes and delight viewers around the world.”)している。

²⁷ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp.30, Section 4:The bid process, 4.3 Candidate City status and the development of the Candidature File

²⁸ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp.23-25

²⁹ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp.19, Venues: compact, iconic and well-connected Volume 1-Theme 1 Concept and legacy

³⁰ 前掲、山寄一也(2019): ロンドンに学ぶ「五輪後の街づくり」連載第2回、「五輪レガシー計画は失敗?! 立案者に真意を聞く 五輪大会計画と後利用計画の両立の難しさ

³¹ 前掲、公式レポート3巻(2013), pp.104, Section4, London as a Host City, “The city’s landmarks served as dramatic settings and backdrops for sport and for the Torch Relay ,....”

³² 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp.68

第4章

五輪景観を生み出す競技会場の 敷地選定と観客席のデザイン

4.1. はじめに

- 4.1.1. 競技会場計画の実現・経緯と関係者の関わりを解明する理由
- 4.1.2. 競技会場の構成要素と建築計画・設計の論点

4.2. 研究対象事例の抽出

4.3. 事例調査 1__グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)

- 4.3.1. 五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造
- 4.3.2. 五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯
- 4.3.3. 五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置

4.4. 事例調査 2__ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

- 4.4.1. 五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造
- 4.4.2. 五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯
- 4.4.3. 五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置

4.5. 小結

4. 五輪景観を生み出す競技会場の敷地選定と観客席のデザイン

4.1. はじめに

本章では、「シーン型五輪景観」に該当する五輪競技会場の計画から実現に至る経緯において、開催都市ロンドンや競技団体、そして建築設計関係者が、敷地の空間的特性や周辺の都市景観をいかに読み取り、それを競技会場の建築計画・設計のなかで、いかに「五輪景観」を生み出したのかを明らかにした。

本章の構成は以下となる。

まず、1 節で競技会場計画・設計について分析調査を実施する前提として、競技会場計画の実現・経緯と関係者の関わりを解明する理由を明確にする。その上で事例調査対象となる競技会場の建築計画・設計の論点を確認する。次に、2 節では、前章で選定した五輪景観を生み出す競技会場として選定した 15 か所の競技会場の中から、競技会場計画・設計の事例調査の対象となるものを選定する基準を明確にする。そして、3 節、4 節では、選定した 2 つの競技会場の分析を実施し、最後の 5 節で小結としてまとめる。

調査事例として、抽出した五輪景観を生み出す競技会場の中から、グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場を選択し、計画・設計図書の収集や関係者へのヒアリング調査から、競技会場の計画から実現に至る経緯および、関係者の関与の変遷を明らかにする。

調査方法は以下とする。

まず、研究事例として選定した 2 つの競技会場について、五輪景観の空間的構造ダイアグラムに沿って競技会場の特徴を記述・分析する。

次に、五輪景観を生み出す競技会場の計画・実現経緯について、各競技会場の招致決定を境にした招致段階(計画検討期間、招致活動期間)と実施段階(開催準備期間、競技会場建設期間、大会開催期間)に区分し、公式記録、計画・設計図書、関係者へのヒアリング調査により、事象と関係者(ロンドン五輪組織委員会、国際五輪委員会、行政、建築事務所の 4 者)の関与の経緯を時系列にまとめた。表に対応している本文の年月日は【 】で示す。着目する関係者は五輪景観を生み出す競技会場の計画・実現に招致の初期段階から実現まで関わった LOCOG(ロンドン五輪組織委員会。旧組織である英国五輪協会や五輪招致委員会も含む)、IOC(国際五輪委員会。国際競技連盟 IF を含む)、行政(ロンドン市、

英国政府)、建築事務所の4者とし、立場、役割は以下の通りである。五輪招致における開催都市の選定には、開催国の五輪協会が主導する。その後、五輪開催の意義、経済効果などを検討し、開催都市や開催国などの行政の支援を取り付ける。IOCとの協議や他開催都市との招致レースに向けて招致委員会を設立する。各競技会場の想定する敷地や規模を盛り込んだ招致計画でロンドン市での五輪開催に成功した後、競技会場の計画・実現に向けて建築事務所と共に具体化する。

そして最後に、五輪景観を生み出す競技会場（とくに観客席の配置・形態等）の建築設計に着目し、計画・設計図書等からその特徴を読み解くと共に、事象と関係者の関与の経緯を明らかにする。

五輪景観(Olympic-scape)

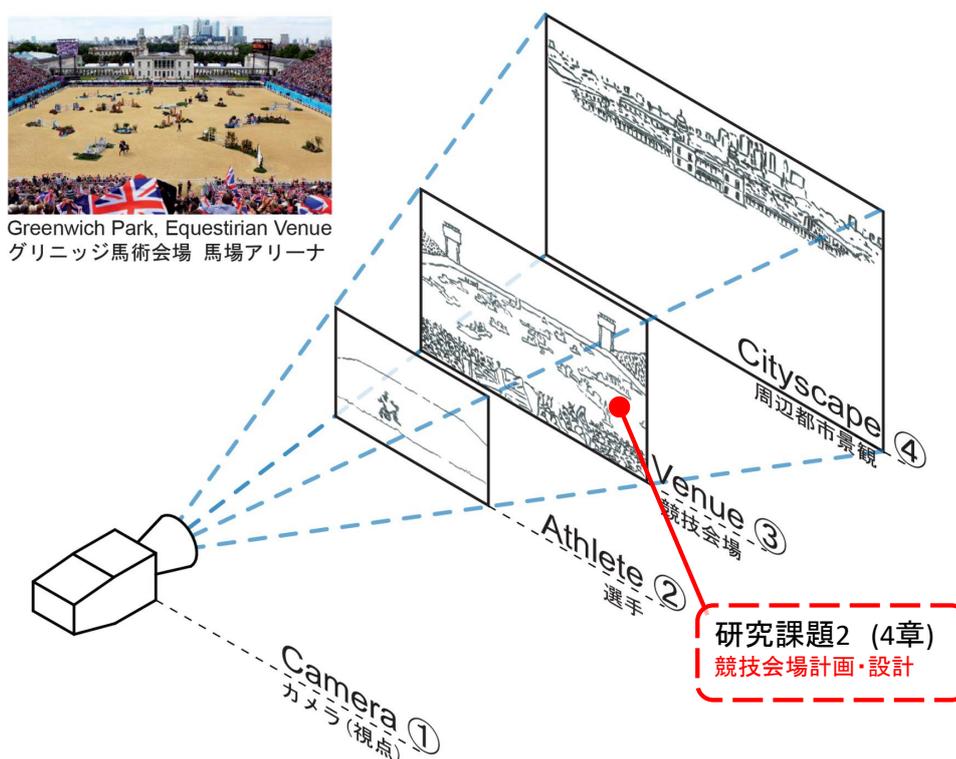


図 4-1 五輪景観ダイアグラムにおける研究課題2の位置付け

4.1.1. 競技会場計画の実現・経緯と関係者の関わりを解明する理由

後述する事例調査において、五輪景観を生み出す競技会場計画の実現にむけた経緯と関係者の関わりを解明するが、その理由を本項で以下のように述べる。

現在の五輪は開催都市の自治体、そして開催国の政府の支援なしには計画・実現が難しいほどの巨大なスポーツイベントとなった。それを招致計画立案はもとより、招致成功後から開催までの限られた期間で、都市レベルで計画・実現するためには、大会組織委員会だけでなく、様々な組織に所属する関係者の関与が不可欠となり、関与するタイミングも異なる。関与する関係者の数が増えれば、責任の所在もあいまいになる。

また、経緯に関して時期を区分割けして検証する理由としては、招致決定から開催まで大会のインフラ整備のための限られた期間の問題がある。2012年夏季五輪開催都市を決定した当時のIOCは、開催から7年前の総会における選挙方式で開催都市を決定している。五輪という国家レベルのスポーツイベントであるが、同時に地域の様相を大きく変える開発の側面を持つのであれば、招致決定してからの7年というのは、都市開発の本格的な計画と実現するには短い(序章の背景で説明したように、その後、IOCは開催都市決定を選挙方式から対話方式へと変更している)。また多くは開催都市の自治体や開催国の政府の公金活用に頼っており、それゆえ、責任の所在もあいまいになる。確かに、五輪開催という明確な締め切りは、様々な思惑から進まなかった都市開発を進展させるなど、良い面(ロンドン五輪のメインパークであるストラトフォード地区の再開発が好例)がある一方で、五輪開催という締め切りが免罪符になり、間に合わせるため多額の費用を掛かってしまうという悪い面が出てしまう。それゆえに、大会から計画から実現に向けた経緯を期間ごとに検証していくことは非常に重要であると考ええる。

このように多数の関係者が関与し、都市開発には短い時間と言う背景の中で、五輪開催に必要な競技会場の計画・実現の経緯を中心に、それぞれの関係者の関わりや思惑を時系列に解明することは、未来の五輪計画立案の際に参考になる歴史的に価値のある資料になると考える。それゆえ、章の結論となる小結では、その内容を一般化し、展開可能な結論に導くことを目指す。

着目する関係者は五輪景観を生み出す競技会場の計画・実現に招致の初期段階から実現まで関わったLOCOG(ロンドン五輪組織委員会。旧組織である英国五輪協会や五輪招致委員会も含む)、IOC(国際五輪委員会。国際競技連盟IFを含む)、行政(ロンドン市、英

国政府)、建築事務所の 4 者とした。詳細は各競技会場の項で検証するが、おおまかな立場と役割の関与は以下の通りである。

五輪招致における開催都市の選定には、開催国の五輪協会が主導する。その後、五輪開催の意義、経済効果などを検討し、開催都市や開催国などの行政の支援を取り付ける。IOC との協議や他開催都市との招致レースに向けて招致委員会を設立する。各競技会場の想定する敷地や規模を盛り込んだ招致計画でロンドン市での五輪開催に成功した後、競技会場の計画・実現に向けて建築事務所と共に具体化する。

本章の解明において重要になるヒアリング調査の概要を整理する。ヒアリング調査の実施対象者(氏名、肩書)として以下に一覧する。五輪開催における関係者も多岐にわたるが、ヒアリング調査対象者である 4 者(ロンドン五輪組織委員会、国際五輪委員会、行政、建築事務所)を中心にヒアリング調査を実施した。

まず、建築事務所であるが、シドニー五輪に携わった後、英国に帰国し、招致委員会のメンバーとして招致計画の初期段階から関与した建築士、招致計画のメーンパークのマスタープランに関与した建築士、組織委員会設立後も実施計画を立案し、最終的に競技会場の建設まで関与した建築士、競技会場の主任建築士のように大会直前まで建設現場で競技会場が実現するまで関与した建築士もいる。

次に、行政側としてのロンドン市の関係者の証言であるが、当時のロンドン市長の政策アドバイザーとして渉外担当責任者(建築・都市部部長)の証言として、レガシー計画を明確に定めていた招致および五輪計画を立案した当初からあったことが確認できた。

そして、IOC と共に実施競技の要望を出す側としての各競技団体(International Federation 通称 IF)の関係者として、グリニッジパークやホースガーズパレードの各競技会場の総責任者、国際陸連のマラソンコース公式測定員など、五輪において各種競技団体が関わることを意味を聴くことが出来た。

他にもメールでのインタビューと言う形で、ロンドン五輪に関わった関係者のヒアリング調査を実施し、ロンドン五輪において、壮大なコンセプトを計画・実現を可能としたのは各関係者間において綿密な連携によるものであると認識できた。

調査場所は現地での対面やメールによるヒアリング調査(英国・ロンドン、韓国・平昌、東京・六本木)を実施した。現地調査として、2018 年 11 月と 2019 年 11 月にロンドンで、2018 年 2 月には冬季五輪の行われた韓国・平昌で、2019 年 7 月では日本・東京で関係者

の来日に合わせてヒアリング調査を実施した。

以上の関係者のヒアリング調査を元に五輪景観を生み出す競技会場の計画・実現経緯について、招致決定を境にした招致段階(計画検討期間、招致活動期間)と実施段階(開催準備期間、競技会場建設期間、大会開催期間)に区分し、公式記録、計画・設計図書、関係者へのヒアリング調査により、事象と関係者の関与の経緯を時系列にまとめた。ヒアリング調査を元に、公式記録によって検証可能となったのは、ロンドン五輪組織委員会、ロンドン市、そして大会後も持続的にレガシー計画を実現するための組織などの情報公開体制が充実しているからであると考えられる。

表 4-1 ヒアリング調査 関係者一覧

no.	interviewee name	job title 肩書(当時)	date
1	Derek Wilson	ロンドン五輪招致計画策定建築士	25/Nov/2019
2	Chris Jopson	ロンドン五輪招致計画策定建築士	2/Dec/2018
3	Tim Hadaway	ロンドン五輪グリニッジパーク馬術競技会場総責任者(国際馬術連盟施設部門長)	24/Sep/2020
4	Pete Richardson	ロンドン五輪ホースガーズパレード・ビーチバレーボール/ザ・マルマラソン競技会場主任建築士	2/Oct/2020
5	Francois Guyot	ロンドン五輪ハイドパークトライアスロン競技会場主任建築士	5/Oct/2020
6	Richard Callicott	ロンドン五輪ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場総責任者(英国バレーボール協会会長)	16/Sep/2020
7	Hugh Jones	国際陸連マラソンコース公式測定員/ロンドンマラソン優勝者1982	15/Sep/2020
8	Gergely Markus	国際トライアスロン連盟スポーツ部門長	28/Sep/2020
9	Robert Nisbiet	ロンドン五輪競技グリニッジパーク馬術会場主任建築士	31/Aug/2020
10	Richard Brown	ロンドン市長アドバイザー	26/Nov/2019
11	Jae Won Bang	ロンドン五輪インフラ整備担当建築士/平昌冬季五輪施設&インフラ整備マネージャー	2/Dec/2019
12	Eddie Taylor	ロンドン五輪仮設競技会場インフラ整備担当建築士	26/Nov/2019

4.1.2. 競技会場の構成要素と建築計画・設計の論点

本項では本章で説明する、「五輪景観」を生み出す競技会場の建築計画・設計のなかで、どの部分に着目するのか、以下に整理する。

まず、競技する選手の背景に都市景観を映し出す競技会場の構成について確認する。競技会場の建築構成は大きくわけて3つからなる。競技場(選手が競技する場所)、観客席(観客が観戦する場所)、設備(大会運営を実現するために必要な設備区域、バックヤード)である。本研究では、競技する選手の背景に都市景観を映し出すための五輪景観を検証するものなので、競技会場は競技場と観客席から構成されるものとする(競技会場=競技場+観客席)。

特に観客席は選手の背景要素にもなり、競技する選手をより近い距離で、良いアングルで観戦することを求めるのならば、観客席のスタンドは急な角度の「壁」のような構造物、すなわち「遮蔽物」になる。また、より多くの観客を収容するのならば、競技場の周囲を囲うようにして観客席スタンドを設置することで実現できる。しかし、ロンドン五輪では、あえて観客席スタンドを競技場の周囲に囲うことなく、一部を開放、もしくは低層化することで、そこから見える都市景観を取り込むことを意図した。それは、カメラによって映し出された映像は、観客席によって周辺都市景観を縁取られ、観客席スタンドの形状と配置の工夫によってランドマークへの指向性を生み出した。これは前述の借景を形成する要素である塀や垣の「景観の生捕り」や「風景の見切り」の効果と類似している。もちろん、現地の観客席からも選手の背景に都市景観を見ることができる。

以上のことから、本章の事例調査対象における建築計画・設計論は「競技会場の観客席の形状とその配置」に着目して論を展開していくものとする。

競技会場 = 競技場 + 観客席

観客席

観客が競技を**観戦する場**であり、配置とその形状によって、テレビ画面では**都市景観を縁取る要素**となる

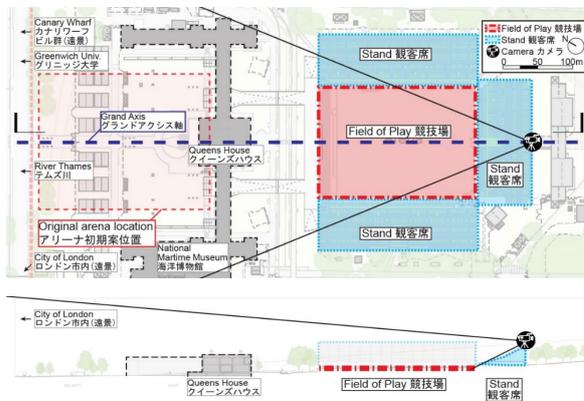


図 4-2 競技会場が縁取る都市景観の解説図

4.2. 研究対象事例の抽出

五輪景観を生み出す競技会場の中から、調査事例としてグリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場を抽出した理由としては、シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場である市街地マラソン競技会場やグリニッジ・パーク馬術競技会場の総合馬術クロスカントリー競技などは、選手の背景に都市景観が映し出されるのは自明であり、競技会場の計画・設計について検証する本章では、アリーナ型が主なシーン型五輪景観を生み出す競技会場のみを調査事例とした。

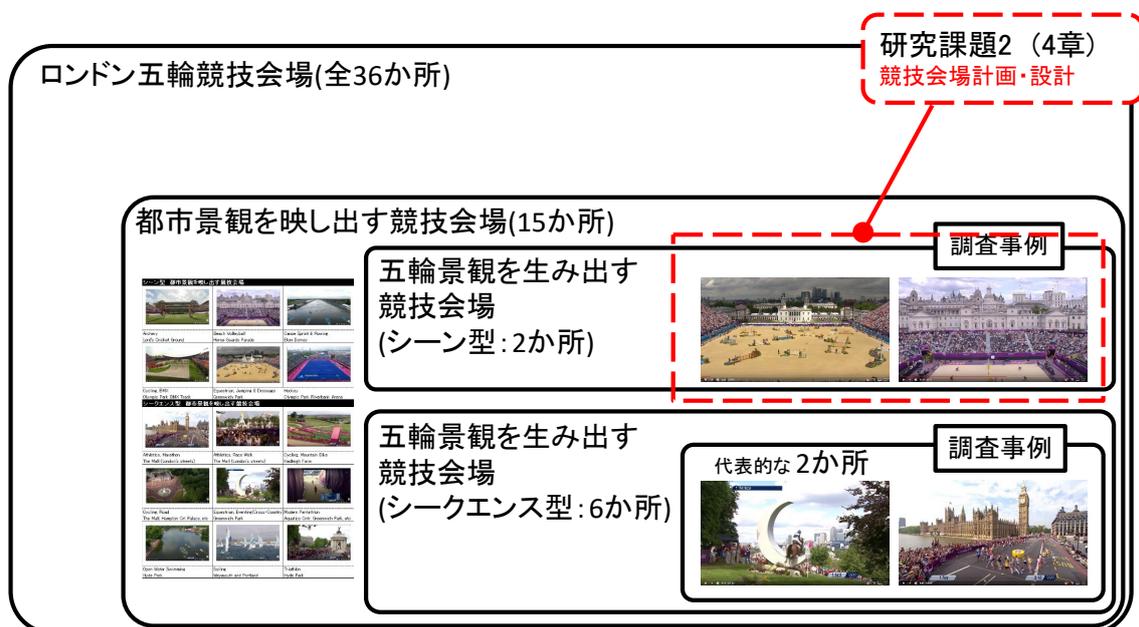


図 4-3 調査事例となる五輪景観を生み出す競技会場の抽出プロセス

- シーン型五輪景観を生み出す競技会場
 - グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)
 - ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

調査事例となる2つの競技会場について、計画敷地や建築設計の側面から整理する。

ロンドン五輪における競技会場とその敷地の位置付けとして、3つのゾーンに分けられ、メインパークゾーンはストラトフォード地区の再開発という名目で恒設競技会場や恒設施設を建設したが、仮設競技会場である2事例が位置するのは、セントラルゾーン(ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場)とテムズ川ゾーン(グリニッジ・パーク

馬術競技会場)という比較的ロンドン中心部に位置する。

ロンドンの公共交通機関はゾーン制を敷いており、そのゾーンで交通費の値段が変わってくる。ロンドン市民の意識としてゾーン 1, 2, 3 が比較的中心部と言われるが、ロンドン五輪における競技会場はメインパークゾーン(ゾーン 3)、テムズ川ゾーン(ゾーン 2)、セントラルゾーン(ゾーン 1)、に位置する。ロンドン五輪は招致計画の段階から、これらの公共交通機関のゾーン 1, 2, 3 に多くの競技会場を計画したことでコンパクトな五輪をアピールした。特に市内中心部に位置するゾーン 1, 2 において、新たに競技会場を建設するのならば仮設建築物で対応することが合理的であった。

言い換えれば、仮設競技会場は大会後に撤去することを前提に建設することで、維持費の問題(負の遺産)などを考える必要がなく、そればかりか、仮設建築物ゆえ、恒設建築物では困難な場所(公園や広場)を競技会場敷地とすることを可能とし、近隣から遠景までの周辺都市景観を競技の背景として映し出すことが出来る。また、五輪というイベントのために仮設競技会場を新設するので、都市軸や敷地軸などの周辺都市環境を競技会場の形状と配置計画に取り込むだけでなく、周辺都市景観を効果的にテレビカメラに映し出すために、観客席によって都市景観を縁取って建設する。



図 4-4 グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)(左)、
ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場(右)

4.3. 事例調査1_グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)

4.3.1. 五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造

馬術競技会場はロンドン市内南東部に位置する王立グリニッジ・パークを敷地とし、馬場、障害、総合馬術が行われる馬場アリーナ(23,000席)と総合馬術クロスカントリーコース(全長6km)からなる仮設競技会場である。敷地であるグリニッジ・パークはロンドンで最古の王立公園であり、園内にはグリニッジ天文台や英国登録建造物クイーンズハウスが現存し、同公園は1998年に世界遺産に登録された。また、園内には世界標準時である子午線0度線だけでなく、グランドアクシスという敷地ならではの軸線もある。その軸線上をシンメトリーに北からクイーンズハウス、グリニッジ大学が縦列し、五輪の馬場アリーナも続いて建設された。敷地周辺には海洋博物館、テムズ川、カナリワーフの高層ビル群などが点在するが、軸線上の馬場、観客席、上空のワイヤーカメラから様々なアングルで近景、中景、遠景として、選手と競技会場の背景となる周辺都市景観が映し出された(図4-4)¹。なお、クロスカントリーコースは芝生、崖、丘、樹木、池などの公園の特性を生かして敷設された。



図 4-5 グリニッジ・パーク馬術競技会場 中継映像



図 4-6 馬術アリーナ敷地 初期案

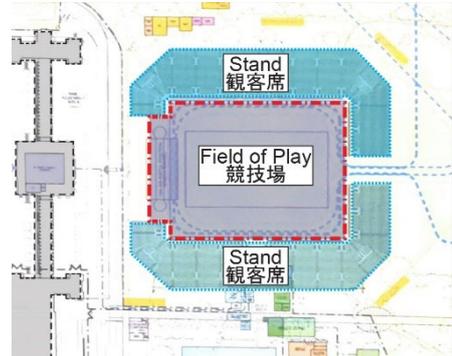


図 4-7 馬場 アリーナスロット案

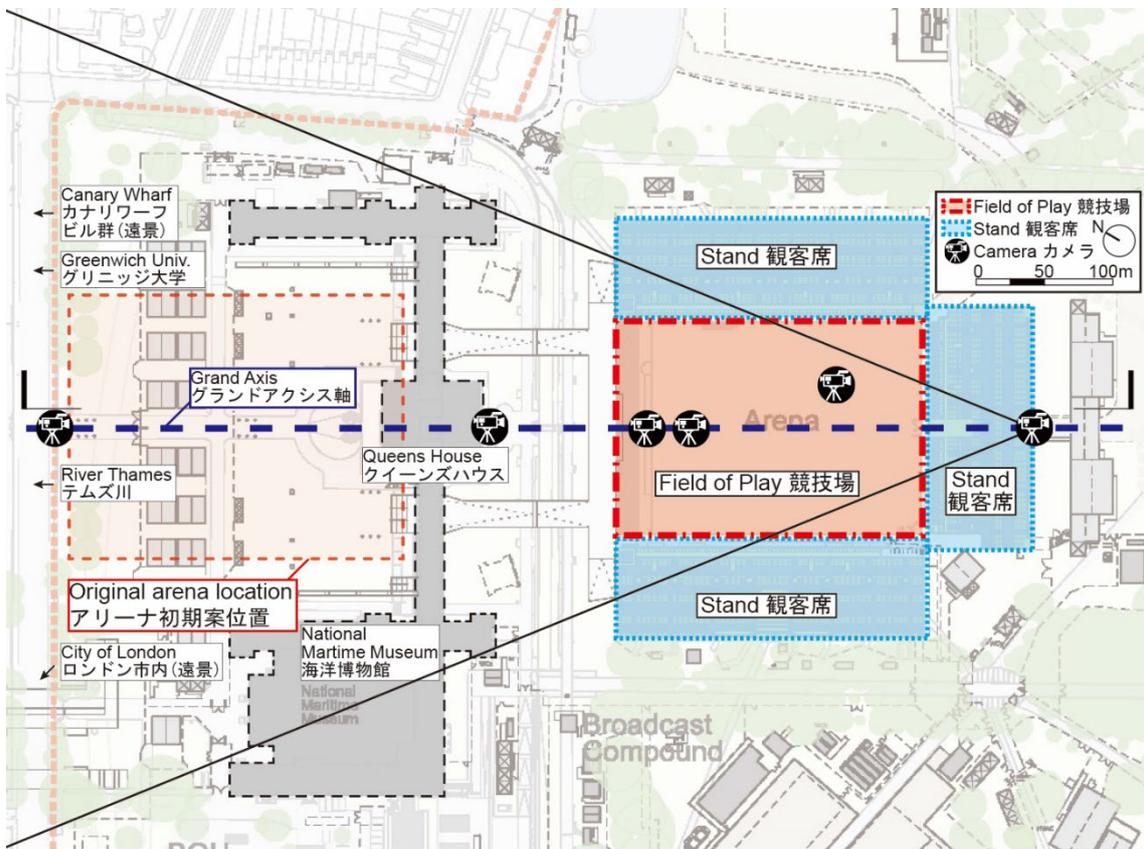


図 4-8 グリニッジ・パーク馬術競技会場 平面配置図

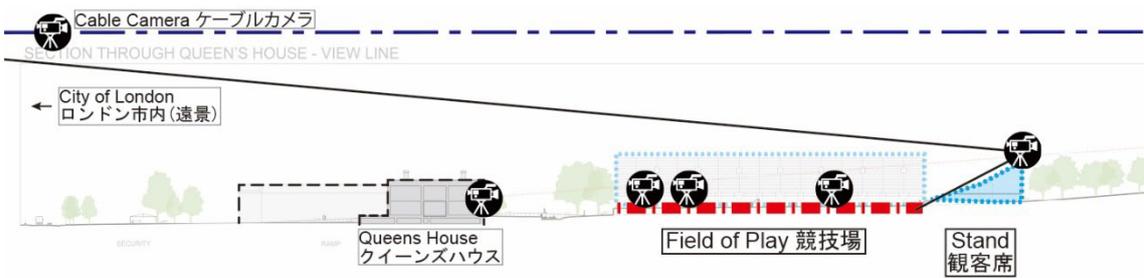


図 4-9 グリニッジ・パーク馬術競技会場 断面図

4.3.2. 五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯

招致計画当初、英国五輪協会は馬術会場を郊外の既存施設の活用することで検討していたが²【15/Dec/2000】、ロンドンを見せるという大会コンセプト、持続可能性、競技普及促進の観点から市内中心部での開催を目指し、グリニッジ・パークを選定した³【Early 2003】。招致委員会は立候補都市調査表でも同地を会場敷地とした⁴【15/Jan/2004】が、IOC 評価委員会は立候補都市訪問後の調査報告書で、王立公園を敷地とする会場を競技会場とする案に対して、改修や建設に対する予算、建設時期の情報不足などの指摘をした⁵。これを受けて、招致委員会は招致ファイルに求められた情報と共に大会ビジョンとして「選手のために壮観な背景の場所を競技会場に選びました。世界遺産であるグリニッジ・パーク…他の印象的な場所…それらの会場は選手を刺激し、世界の視聴者を喜ばせる」と盛り込んだ⁶【15/Nov/2004】。招致成功後には、組織委員会が初期案であるクイーンズハウス北側の馬場アリーナ敷地(図 4-5、位置は図 4-7 に赤破線で表示)⁷を規模の問題から南側の芝生広場へと移動した。しかし、馬場アリーナは変更後も設置場所の規模の制限から北側観客席のない、U 字型平面の観客席配置となった。U 字型平面の観客席配置への変更は、結果的に北側に開けたロンドン市内を一望することを可能とし、都市を見せる競技会場というコンセプトはより明確になった【2008】。その後、グランドアクシス軸線を意識した馬場アリーナは、南側観客席スロットをトンネルへと変更し(図 4-6)⁸、計画がほぼ固まった(図 4-7, 図 4-8)⁹。その後、計画許可申請の承認後に実施された住民説明会で、組織委員会は地域住民から大会後に何も残らない競技会場の賛否¹⁰を問われるが、メイン会場から離れた馬術会場の問題(北京五輪の香港会場の例)や、競技普及促進から話題性のある場所で開催する意義を、委員長自ら説明し、グリニッジ・パーク馬術競技会場を実現した【23/Mar/2010】。五輪開催時には英国王室の親族の所属する英国団体チームが銀メダルを獲得するなど、選手と競技会場の背景としての周辺都市景観がカメラに映し出された。英国馬術協会は「素晴らしいテレビ中継映像と共に、競技と選手の写真が様々な新聞の一面を飾り、3,400 万ポンド相当の書面媒体の価値を生み出した」と評価した¹¹【Jul-Aug/2012】。

表 4-2 グリニッジ・パーク馬術競技会場の実現経緯と関係者の関与

		Architect 建築事務所	International Olympic Committee 国際五輪連盟	Governments (Great Britain&London) 行政	Organising Committee of the Olympic Games 大会組織委員会
feasibility stage 計画検討期間	before 1994	●			
	May/1997	●			
	Dec/1999	●			
	15/Dec/2000	●			
	13/Mar/2001	●			
	Early 2003	●			
	15/May/2003		●		
	Jul/2003				●
	Aug/2003	●	●		
	bidding stage 招致活動期間	15/Jan/2004	●	●	●
15/Nov/2004		●	●	●	●
preparation stage 開催準備期間	6/Jul/2005	●	●	●	●
	2008	●		●	●
	Autumn 2009			●	●
	23/Mar/2010	●	●		●
construction stage 競技会場建設期間	Jul/2011	●		●	
	Apr-Jul/2012	●			●
	25/Jul/2012	●		●	●
games stage 大会開催期間	Jul-Aug/2012	●	●	●	

4.3.3. 五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置

組織委員会は、馬場アリーナを同敷地内で建設する際の重要な与条件であるグランドアクシス軸線上にシンメトリーに配置し、Fig.2 でロンドン市内の位置関係を確認したように都市景観を観客席で効果的に縁取る計画を立案した。その観客席は空に広がる階段形状であり、グランドアクシス軸線をより意識させるものとなった。そして、馬場アリーナは緩やかに傾斜する芝生に支柱を並べた高床式であり、そのことで正面のあるクイーンズハウスの下部を切り取り、効果的に縁取った。また、北側を開放し、馬場を中心にした U 字型平面の観客席は、カメラアングルを自ずと軸線上に集め、近景から遠景へと導いた。また、同敷地には丘の展望台にある視点場からの眺望景観（LVMF で指定）が存在したが、組織委員会や建築設計事務所は観客席をクイーンズハウスのバルコニーと展望台を結ぶ線に干渉しない高さに抑えた。その結果、敷地のあるグリニッジ行政自治区は仮設建築物の高さの影響をわずかであると判断した¹²。

4.4. 事例調査 2_ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

4.4.1. 五輪景観を生み出す競技会場の空間的構造

ビーチバレーボール競技会場はロンドン市内中心部に位置するホースガーズパレードを敷地とし、メインコート(15,000席)1面とサブコート2面などから構成される仮設競技会場である。敷地一帯は保全地区に指定され、バッキンガム宮殿、国会議事堂、ウエストミンスター寺院、行政機関の庁舎(首相官邸、防衛省、文化省など)などに囲まれている。敷地には、東側に隣接するホースガーズのファサード中央にある時計台を通る敷地中央線が走る。同線上にシンメトリーにセンターコートやサブコートを設置し、競技時には同線上に設置したカメラ(観客席上段や競技ネット上)から競技映像を映し出した。他にもビーチバレーボール競技ならではのコートレベルのローアングルや観客席上部から俯瞰するアングルから、選手と競技会場の背景にホースガーズ、オールドアドミラルティビル、ロンドン・アイ観覧車、シャードなど近景、中景、遠景の周辺都市景観が映し出された(図4-9)¹³。



図 4-10 ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場 中継映像



図 4-11 会場全景 CG

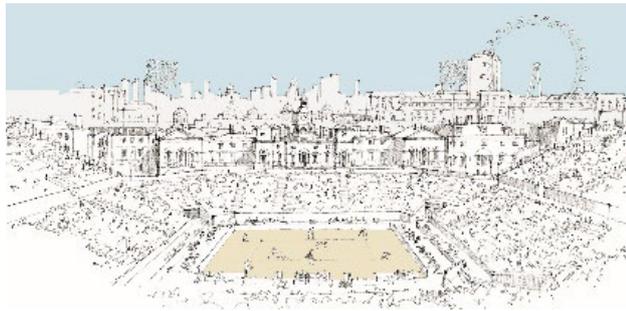


図 4-12 会場全景スケッチ

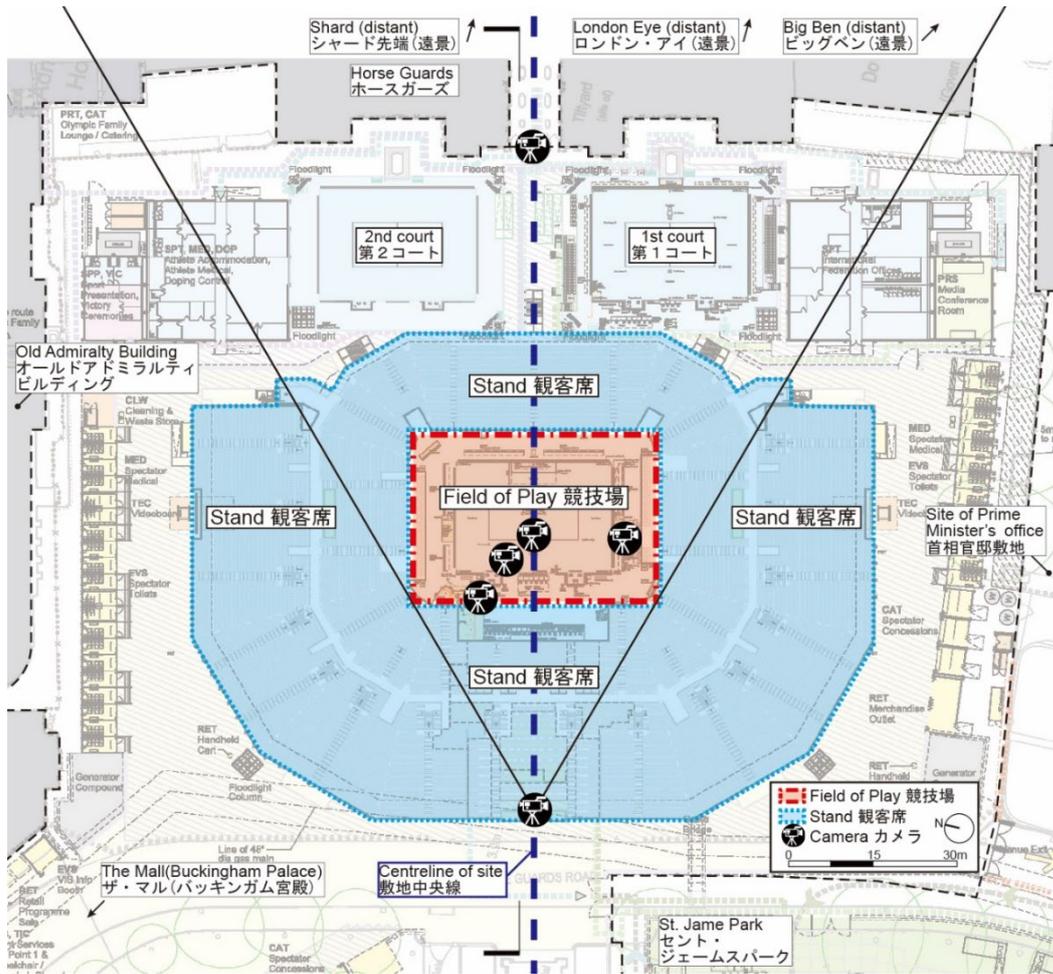


図 4-13 ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場 平面配置図

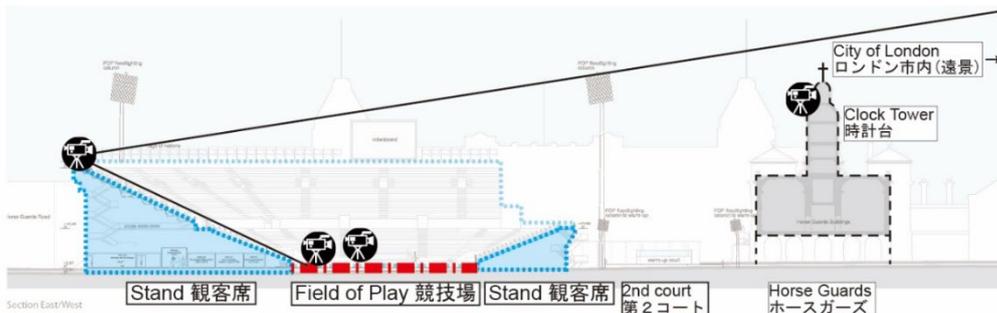


図 4-14 ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場 断面図

4.4.2. 五輪景観を生み出す競技会場の実現経緯

ビーチバレーボール競技会場の敷地は招致計画初期の BOA リポート¹⁴【15/Dec/2000】やメディア発表によると、都心部に位置する王立公園であるリジェンツパークやハイドパークであった【13/Mar/2001】。その後、招致委員会は IOC に提出した立候補都市調査票にホースガーズパレードを記述したが¹⁵【15/Jan/2004】、これに対し IOC は、グリニッジ・パーク同様、市内広場を敷地とする競技会場という計画案に対して情報不足を指摘した¹⁶。これを受け、招致委員会は招致ファイルに必要情報と共に同地を競技会場の敷地として掲載した¹⁷。市内中心部という注目を集める場所での開催は競技普及促進の点からバレーボール競技連盟から支持されていた経緯がある¹⁸。招致資料には既に CG イメージとして低層化した東側観客席の背景に周辺都市景観が描かれていた（図 4-10）¹⁹【15/Nov/2004】。同様に計画許可申請書類の会場全景図にも選手と競技会場の背景となる周辺都市景観が表現されていた²⁰（図 4-11）。一方で同敷地は首相官邸や英国王室宮殿などの要所に囲まれているなど、セキュリティや敷地面積など様々な制約のある場所であったため、組織委員会や建築設計事務所は常に代替会場地としてリジェンツパークやハイドパークでの開催も想定しつつ計画を進めていた²¹【2008】。五輪開催直前 6 月には英国女王即位 60 周年記念式典が近隣のバッキンガム宮殿とザ・マルで開催されたため、本来ならば施工に 3~4 か月の時間かかる同規模会場を同イベント後の 6 週間で施工する必要があった【Jun-Jul/2012】。それゆえ、組織委員会は敷地のあるウエストミンスター行政区から夜間の施工に関する計画許可も得ていた²²【2/Mar/2011】

表 4-3 ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技競技会場の実現経緯と関係者の関与

		Architect 建築事務所			
		International Olympic Committee 国際五輪連盟			
		Governments (Great Britain & London) 行政			
		Organising Committee of the Olympic Games 大会組織委員会			
feasibility stage 計画検討期間	before 1994	Following the disappointments of failed bids by Manchester(1996&2000) & Birmingham(1992), BOA set about establishing London as the only city to hold an Olympic Games. パーミンガム招致失敗(1992大会)、マンチェスター招致失敗(1996大会、2000大会)を経て、英国五輪協会(BOA)はロンドンを開催地とする五輪招致を検討	●		
	May/1997	Feasibility study of a London Olympic bid conducted by the BOA. ロンドン五輪の実現可能性をBOAが調査開始。市内開催可能地域を検討	●		
	Dec/1999	After research and discussion, Wembley Stadium wasn't suitable for the Olympic main stadium. BOA chose the Stratford area for the main Olympic Park. 検討の結果、市内西部地区ウエンブリースタジアムが五輪競技会場として不適格と判明。BOAは市内東部地区ストラットフォードの地域再生案として五輪開催地を絞り込む	●		
	15/Dec/2000	Beach Volleyball venue location was cited at Regent's Park on BOA report. BOAレポートにビーチバレーボール競技会場をリジェンツパークと記載	●		
	13/Mar/2001	London Olympic Games Bid plan and potential Beach Volleyball venue location was revealed on newspapers. メディアにロンドン五輪招致計画とビーチバレーボール会場を発表	●		
	15/May/2003	Government commits to London 2012 英国政府の正式支援表明		●	
bidding stage 招致活動期間	Jul/2003	"Broadcasting the Games" was issued on the report to the 115th IOC Session. 115回IOC総会レポートで、テレビに映し出される五輪に言及			●
	Aug/2003	London Olympic Games bid team set up. ロンドン五輪招致委員会設立	●	●	
	15/Jan/2004	Applicant City Questionnaire was submitted to IOC. Beach Volleyball venue location was cited at Horse Guards Parade. 立候補都市調査表をIOCに提出(1次審査)。ホースガーズパレードをビーチバレーボール競技会場と記載	●	●	●
	15/Nov/2004	Candidature File was delivered to IOC. Beach Volleyball venue location was cited at Horse Guards Parade. 招致ファイルをIOCに提出(2次審査)。ホースガーズパレードをビーチバレーボール競技会場と記載	●	●	●
preparation stage 開催準備期間	6/Jul/2005	London awarded the hosting city for the 30th, 2012 Summer Olympic Games. 第30回夏季五輪大会の開催地が英国ロンドン市に決定	●	●	●
	2008	Regent's Park and Hyde Park were both looked as alternatives site due to the logistics. 実現の難しさからリジェンツパークやハイドパークを代替会場を検討	●		●
	15/Dec/2010	Planning application for the venue was submitted to London Borough of Westminster. ウェストミンスター行政自治区に競技会場の建築許可申請		●	●
	2/Mar/2011	Planning was accepted by London Borough of Westminster. ウェストミンスター行政自治区により建築許可承認		●	●
construction stage 競技会場建設期間	Aug/2011	Test event was held on site and main court and 1500 spectators stand was built. テストイベント開催。競技場と仮設観客席(1500人収容)建設	●	●	●
	4/Jun/2012	Diamond Jubilee Concert, celebrating 60th anniversary of the accession of Queen Elizabeth II, was held outside Buckingham Palace on The Mall near the site. 英国エリザベス女王即位60周年記念ダイヤモンド・ジュビリー・コンサートが敷地近隣、バッキンガム宮殿、ザ・マルで開催。		●	
	Jun-Jul/2012	Just after the Diamond Jubilee Concert, the construction of venue began. ダイヤモンド・ジュビリー・コンサート終了後、すぐに会場建設開始	●		●
games stage 大会開催期間	25/Jul/2012	London Olympic Games opening day. The venue completed with main coat, 15,000 spectators stand, two sub-coats and six training coats. ロンドン五輪開幕。会場は競技場と主競技場、観客席(15,000人収容)、サブ競技場(2面)、練習場(6面)として完成。	●	●	●
	Jul-Aug/2012	Surrounding city-scape(distant, middle, close) of London was broadcasted as its background during the games and intervals. 五輪開催中、競技中や休憩時間の背景として、ロンドンの都市景観(遠景、中景、近景)がテレビ画面に映し出される。	●	●	●

4.4.3. 五輪景観を生み出す競技会場の観客席の形状とその配置

競技会場の敷地は、北にオールドアドミラルティビル、東にホースガーズ、南に首相官邸に囲まれ、西にセントジェームズパークが広がる(図 4-12、図 4-13)²³。競技会場は、メインコートをすり鉢状の観客席が囲むが、東側を低層化したことで、隣接するホースガーズの時計台のみならず、図 3-6(3 章)で位置関係を示した市内周辺都市景観を効果的に縁取り、カメラに映し出した。また、シンメトリーな観客席は馬術競技場同様に空に広がる階段形状であり、敷地中央線をより際立たせた。また、同敷地は LVMF で示されたパノラマ景や町並み景など複数の眺望景観に配慮する必要があったが、施設の立地するウエストminster行政自治区は計画許可のプロセスにおいて、その影響をわずかであると判断した²⁴。

4.5. 小結

本節では、2つの調査事例を横断的に見た競技会場の敷地、建築、景観に関する特徴と、計画から実現への経緯を考察する。

まず、敷地的には、ロンドン五輪において注目すべきは、王立公園や広場などの公共空間を競技会場の敷地としたことである。敷地には軸線や歴史背景などの特性があり、その敷地特性を積極的に取り込むことで、形態的にも意味的にも開催都市ロンドンへ繋がる文脈のある競技会場が生まれている。次に、建築的には、周辺都市景観を背景に取り込むために競技会場は屋外型でなければならない。また、観客席は競技中継の際に周辺都市景観を映し出す際の遮蔽物にもなることから、一部を開放もしくは低層化するなどランドマークへの指向性のある形状で配置した。そして、恒設競技会場では困難な市内中心部である王立公園や保全地区という制約の多い場所を五輪競技会場の敷地としたのは、大会後に撤去するという期間限定の仮設建築物を採用したからこそ、という点にも注目したい。そして、景観的には、前述のとおり競技会場の景観のうち、LVMFで示された視点やランドマークを含んだ歴史的、文化的価値のある眺望景観との重なりがみられた。

次に計画から実現への経緯を考察するが、はじめに計画検討期間の英国五輪協会や招致活動期間の招致委員会が主導した大会コンセプトの構想化とそれを具現化するための競技会場敷地選定に至った経緯から整理する。

まず、計画検討期間で最も重要な出来事は、開催都市としてロンドン市が選ばれたことである²⁵【before 1994】。当初、英国五輪協会は英国内のバーミンガムやマンチェスターでの五輪招致を目指していたが、首都ロンドンを立候補都市と決めたことで数々のランドマークが存在する「都市景観を映し出す五輪」のコンセプトを立案することになった。グリニッジ・パークは世界遺産かつ王立公園であり、ホースガーズパレードは主要官庁街かつ保全地区というロンドンを代表する観光地であったが、これらは制約の多い敷地(世界遺産の保護、セキュリティ問題など)であり、招致活動期間だけでなく開催準備期間も郊外の既存施設や市内の広い公園を代替地として想定していた。一方、これらの注目を集まる場所で競技を実施することはメディアへの露出を高めることになり、各競技団体は競技普及促進の点から歓迎した。建築事務所はIOCの定める観客数などの与条件を反映しながら、各敷地に競技会場の規模が適切か検討した。また、ロンドン市の文化資産である周辺都市景観などを押し出した招致案は当時の英国政府の観光政策に協調する形となり、大会開催に向けて、政府の支援を取り付けた。招致計画案で言及されているクイーンズハ

ウス、ミレニアムドーム、ウエストミンスター宮殿、ロンドン・アイ観覧車などはロンドンの都市景観を代表するランドマークであり、LVMF の指定眺望景観から見えるランドマークとしても特定されていた。以上のことから招致委員会設立前の関係者が招致計画の立案に際し、「都市景観を映し出す五輪」という具体的なコンセプトを構想したことが、IOC に提出する招致ファイルを作成する上での合意形成を得るために重要だったと考える。

次に、開催準備期間では、各競技会場の計画が具体的になるにつれて問題が顕在化している。例えば、競技会場の敷地は招致決定後も賛否はあったが、常に代替地を想定しながら建築事務所や組織委員会が中心となり、実現に向かった。また、一部を開放もしくは低層化した観客席は競技会場の建物面積の縮小にも寄与し、市内中心部で狭い敷地には有効な解決策にもなった。また、実施計画が具体化するにつれて、都市を映し出す五輪というコンセプトはより明確になった。本章での調査事例の会場ではないが、市街地マラソン競技会場のよう大会 2 年前になって、当初のメインスタジアムゴール案から市内中心部周回コース案へと変更した例もある²⁶。このように仮設競技会場の計画許可のプロセスにおいても都市保全への配慮は問われ、その中でもロンドン市内の眺望景観の保全を目的として制定された LVMF は拠り所となった²⁷。以上のように、招致決定後、実施段階に入り、様々な問題を関係者が克服する際、「都市景観を映し出す五輪」という明確なコンセプトを共有できたことが、制約の多い設計条件下で競技会場を実現するために必要であったと推察できる。

¹ 五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:馬術総合クロスカンントリー 開催日:

2012/7/30 開催場所:王立グリニッジ・パーク

<https://www.youtube.com/watch?v=mpMD0t-vqCk>

² 前掲、BOA report(2000), pp. 106, BOA 作成のレポート内の Chapter10 で、「東ロンドン(ストラトフォード地区)案 “GENERAL SPORTS CONCEPT, East London Scenario - based upon Stratfords”」で構想していた。

³ Finding, A. (2013), “LONDON 2012-DID WE DELIVER?”, Proceedings of the 21st NATIONAL EQUINE FORUM, pp. 6-11, 第 21 回国際馬術会議での英国馬術協会役員(Chief Executive British Equestrian Federation)Finding 氏のグリニッジ・パーク馬術競技会場に関する発言(Greenwich - The Venue, pp. 6)として「馬術競技会場の敷地として 3

つの提案(グリニッジ・パーク、ホースガーズパレードとハイドパーク、リジェンツパークの順)があった。“…We placed three recommendations before the leaders of our Olympic disciplines. They were, in order: first, Greenwich Park, second, Horse Guards Parade and Hyde Park, and third, Regents Park. …”としている。

⁴ 前掲、立候補都市申請書(2004), pp. 10, ロンドン市がIOCに提出した立候補都市調査表の「競技会場 “THEME IV: VENUES,”」の項目に「グリニッジ子午線が走り、世界遺産でもある他に類のない見事な背景を持つグリニッジ・パークを馬術競技会場と近代五種競技の決勝戦会場として活用する。“Directly south, on the line of Greenwich Meridian, is the World Heritage Site at Greenwich Park which will provide a uniquely stunning backdrop for the equestrian events and the final stages of the modern pentathlon.”」と記述していた。

⁵ 前掲、IOC立候補都市調査報告書(2004), pp. 41, IOC評価委員会による立候補都市訪問後の調査報告書には、ロンドン市の競技会場案(Sports venues, LONDON)に対して「グリニッジ・パーク、(略)、ホースガーズパレードなどで、予算や工期などの情報が不足しており、既存競技会場としては不明瞭である。“The inclusion of Greenwich Park, Hyde Park, Regents Park, Swinley Forest and Horse Guards’ Parade as existing sports venues is unclear, given that no budget is allocated for upgrading / construction, or construction dates provided.”」とあった。

⁶ 前掲、招致ファイル第1巻(2004), pp. 19, ロンドン市の招致ファイル(Vol.1)の「コンセプトとレガシー、競技会場：集約、象徴、接続の良い。“Theme 1, Concept and legacy, Venues: compact, iconic and well-connected”」の項目として、敷地であるグリニッジ・パークを紹介(“For athletes performing outside the venue, we have selected locations that provide excellent facilities and spectacular backdrops: the World Heritage sites of Greenwich, the Palace of Westminster and the Tower of London; other iconic locations such as Wembley, Lord’s Cricket Ground, Wimbledon, Horse Guards Parade, the Royal Parks and Eton Dorney. These venues will all inspire athletes and delight viewers around the world.”)している。

⁷ グリニッジ・パーク馬術競技会場、招致計画(北側案)CGイメージ LOCOG提供

⁸ グリニッジ・パーク馬術競技会場・馬場アリーナ入場スロット案図面に筆者が加筆。図面名称:equestrian, greenwich park, Venue Plan, grp-o-01-01, LOCOG(1/Jul/2008, Rev. B)

⁹ グリニッジ・パーク馬術競技会場図面に筆者が加筆。図面名称: equestrian & mod. pen., greenwich park, Site Plan, Overlay & Operations, Detailed Design, POP-A-0-EQ-MZ-GRP-SP-00-001, LOCOG, (11/Jul/2012, Rev.B09)

¹⁰ 前掲、Finding, A. (2013), pp.9, 英国馬術協会役員 Finding 氏のロンドン五輪馬術競技会場のレガシー(The Legacy)に関する発言として「単一競技の恒設競技会場の維持費は非常に高額になり、既に世界中には負の遺産となった五輪競技会場が多数存在する。

“...The costs of running permanent stadia in legacy mode for a single sport are very high, not even athletics can sustain a dedicated stadium for their sport. For us a single high performance venue would compete with those already in place. There are many disused and unsustainable Olympic facilities across the world to prove the point. ...”と紹介。

¹¹ 前掲、Finding, A. (2013), pp.7, 英国馬術協会役員 Finding 氏による発言として、グリニッジ・パーク馬術競技会場(Greenwich - The Venue)のメディアへの貢献を評とした。

“...As well as outstanding television pictures, we saw for the first time ever, pictures of our sport and our athletes on the front pages of the serious papers and for sporting reasons—we generated £34m of written media coverage, we discovered “dancing horses” and heroes recognised across the world. ...”

¹² 馬術競技会場敷地のあるグリニッジ行政自治区による計画許可書(Greenwich Park in the London Borough of Greenwich, Planning application no. 09/2598/F, 2010.1.20)の項目“26-30, London View Management Framework, Planning report PDU/2505/01”には「提案にはロンドンパノラマや世界遺産に明らかに有害な影響を与えるが、一方でロンドン五輪とパラリンピックに素晴らしい背景を生み出すことにもなる。この一時的な提案の組み合わせは、世界遺産を敷地とすることへの有害な影響より重要である。“30; Whilst the proposal will undoubtedly have a detrimental impact upon the London Panorama and World Heritage Site, it will also provide spectacular backdrops for the London Olympic and Paralympic Games. This combined with the temporary nature of the proposal outweigh any temporary harm to the setting of the World Heritage Site.”」としている。

¹³ 五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画: ビーチバレーボール 女子予選プールC チェコ VS オーストリア 開催日: 2012/7/2 開催場所: ホースガーズパレード
<https://www.youtube.com/watch?v=kiFA1p-a9hA>

¹⁴ 前掲、BOA report(2000), pp.106, BOA 作成のレポート内の Chapter10 で、「東ロンドン(ストラトフォード地区)案 “GENERAL SPORTS CONCEPT, East London Scenario - based upon Stratfords”」に、ビーチバレーボール競技会場の敷地を、リジェンツパークとしていた。

¹⁵ 前掲、立候補都市申請書(2004), pp. 10, 「競技会場(THEME IV: VENUES)」に「ホースガーズパレードのビーチバレーボール競技会場はトラファルガー広場や国会議事堂という歴史的背景に対比して活気ある新競技として設置した。(Beach Volleyball at Horse Guards’ Parade will set a vibrant new sport against the historic backdrop of Trafalgar Square and the Houses of Parliament.)」と記述した。

¹⁶ 前掲、IOC 立候補都市調査報告書(2004), pp. 41, IOC 評価委員会によるとグリニッジ・パーク同様「予算や工期などの情報が不足しており、既存競技会場としては不明瞭である」とした。

¹⁷ 前掲、招致ファイル(2004), pp. 19, グリニッジ・パーク同様、招致ファイルの「コンセプトとレガシー、競技会場：集約、象徴、接続の良い」の項目で、敷地であるホースガーズパレードを紹介している。

¹⁸ Richard Callicott, ロンドン五輪ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場総責任者(英国バレーボール協会会長)へのヒアリング調査より, 調査日:2020.9.16

¹⁹ 会場全景 CG イメージ、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場、招致計画 LOCOG 提供

²⁰ 会場全景スケッチ, Horse Guards Parade, St. James Park & The Mall: Design and Access Statement(2010.9), LOCOG, pp.32

²¹ Pete Richardson, ロンドン五輪ホースガーズパレード・ビーチバレーボール/ザ・マルマラソン競技会場主任建築士へのヒアリング調査より, 調査日:2020.10.2

²² ビーチバレーボール競技会場の施工会社であるアトキンスのレポート「Trooping the colour」によると「施工時間は午前8時から午後11時までとした。もしさらなる時間が必要ならば、計画許可書類において、大きな騒音を立てない夜間施工の許可も得ていた。

“The construction working time was from 8am to 11pm. If more time is needed, then the planning application allows night time working as well, providing that it isn’ t too noisy”」としている。MEDIA, ATKINS, www.atkinsglobal.com/en-gb/media-centre/features /trooping-the-colour

²³ ビーチバレーボール競技会場図面に筆者が加筆。図面名称: beach volleyball, horse

guards parade, Enlarged Venue Plan, Overlay & Operations, Arena Seating Bowl Level, Detailed Design, POP-A-0-BV-XX-HGP-PL-02-200, LOCOG, (30/Jan/2012, Rev. 03)

²⁴ ビーチバレーボール競技会場敷地のあるウエストミンスター行政自治区による計画許可書(Horse Guard Parade in the London Borough of Westminster, Planning application no. 10/09157/FULL, 2010.12.15)の項目“17-20, London View Management Framework, Planning report PDU/2673/01”には「提案にはロンドンパノラマ、登録建造物(グレード1)、世界遺産に明らかに有害な影響を与えるが、一方でロンドン五輪とパラリンピックに素晴らしい背景を生み出すことにもなる。この一時的な提案の組み合わせは、登録建造物(グレード1)や世界遺産を敷地とすることへの有害な影響より重要である。“20; Whilst the proposal will undoubtedly have a detrimental impact upon the London panorama, Grade I listed buildings and the World Heritage Site it will also provide spectacular backdrops for the London Olympic and Paralympic Games. This combined with the temporary nature of the proposal outweigh any temporary harm to the setting of the Grade I listed buildings and World Heritage Site.”」としている。

²⁵ 前掲、公式レポート1巻(2013), pp. 16, ロンドン五輪招致を振り返り(2.2 Background to London’s 2012 bid, 2.2.1 Origins)として「様々なIOC委員からの助言を受け、英国五輪協会はロンドン市こそが五輪招致を可能とする都市であると定めた。(…advice received from various IOC members, the BOA set about establishing London as the only viable city to hold an Olympic Games.)」と記述している。

²⁶ Hugh Jones, 国際陸連マラソンコース公式測定員/ロンドンマラソン1982優勝者へのヒアリング調査より, 調査日:2020.9.16

²⁷ 各競技会場の敷地内などで指定されている眺望点は表3-5の項目: Viewing locations with Assessment Points を参照

第5章

五輪景観を生み出す競技会場の カメラポジションとカメラワーク

5.1. はじめに

- 5.1.1. 五輪競技会場とカメラポジションの関係性とその変遷
- 5.1.2. 個人が主体的に五輪を視聴する環境構築__五輪チャンネル

5.2. 借景構造から読み解く五輪景観

- 5.2.1. 借景は内部と外部環境と繋ぐ社会的行為
- 5.2.2. 五輪景観が借景の景観構造によって繋ぐもの

5.3. 研究事例対象の抽出

5.4. カメラポジションとカメラワーク

5.5. 事例調査 1__ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

- 5.5.1. 競技と競技会場の特性
- 5.5.2. 調査結果および考察

5.6. 事例調査 2__市街地マラソン競技会場

- 5.6.1. 競技と競技会場の特性
- 5.6.2. 調査結果および考察

5.7. 事例調査 3__グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技、クロス カントリー競技)

- 5.7.1. 競技と競技会場の特性
- 5.7.2. 調査結果および考察

5.8. 小結

5. 五輪景観を生み出す競技会場のカメラポジションとカメラワーク

5.1. はじめに

本章では、競技する選手と競技会場の背景に映し出された都市景観について、カメラがどこから、どのようにして映し出したのか、公式記録動画におけるカメラポジションとカメラワークの調査・分析から解明する。その際、借景技法によって景観を繋ぐという社会的意義の観点から五輪景観の構造を読み解く。招致計画期間から開催準備期間にかけて、五輪景観を生み出す競技会場という構想を具現化するために OBS と設計事務所が調整し、カメラポジションとカメラワークを計画していた。様々な競技特性の映像に対して異なるカメラワークで競技する選手とその背景の都市景観を映し出していた。

シーン型五輪景観（ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技等）は、アリーナ内にカメラを設置し、アリーナ内にある様々なカメラポジションのカメラをスイッチングしつつ、それぞれのカメラも様々な角度（ロー&ハイアングル、上空から）から競技する選手と背景の都市景観を映し出した。選手に近い場所のローアングルからカメラが見上げることで、都市のスカイラインを重層的に映し出した。逆に、競技会場の上空に張ったケーブルに吊るしたカメラからは、競技する選手と競技会場を周辺都市景観の中で俯瞰的に映し出した。

他方、シーケンス型五輪景観（市街地マラソン競技会場等）では、市街地中心部を競技会場として、バイク等の車両が競技する選手と並走しながら、背景の都市景観を次々と映し出す映像となった。加えて、コース沿いに設置した定点カメラは動きのある競技選手を捉え、次々スイッチングしていく。これにより、選手の背景にある都市景観が次々と場面転換する映像となる。競技会場が周回コースならば、選手が何度も同じ場所を通過するため、周辺都市景観を映し出す機会が増える。しかも選手が先頭集団、後続集団など分散れば、さらに映し出す機会が増えることになる。これはスポーツのライブ中継という不確定要素の多い撮影条件を補完することになる。

これらの調査方法としてはロンドン五輪における IOC による公式記録映像（五輪チャンネル）を調査資料とした。この公式資料上で、対象とする 3 会場 4 競技の中継映像（動画）を閲覧し、市内ランドマークや周辺都市景観が映りこんだ映像（紹介テロップの映像、都市を俯瞰するクレーンカメラなどを採用した映像）から静止画として抽出した。会場ごと

に、これらの画像が得られた視点（カメラポジション）を図面上に示す競技会場図とともに、動画の中での「映像時刻」、「視点(カメラポジション)」、映っている「選手の様子・動き」、映っている「競技会場の要素」、映っている「都市景観・ランドマーク」、「カメラワーク」、「映像の概要」を一覧にまとめた表を作成した。今回、調査資料として、参照したロンドン五輪の中継映像は五輪チャンネルとしてユーチューブ上にアーカイブされており、大会時のテレビ中継はもちろんのこと、オンライン上で中継されたものである。

五輪景観(Olympic-scape)の解説

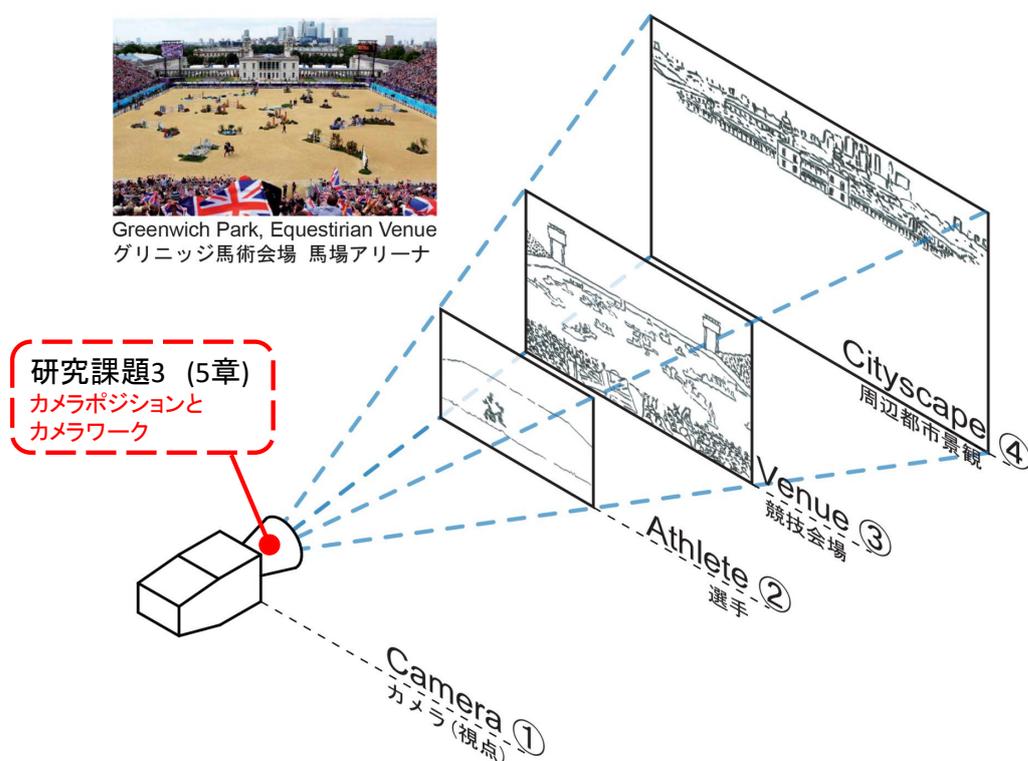


図 5-1 五輪景観ダイアグラムにおける研究課題 3 の位置付け

5.1.1. 五輪競技会場とカメラポジションの関係性とその変化

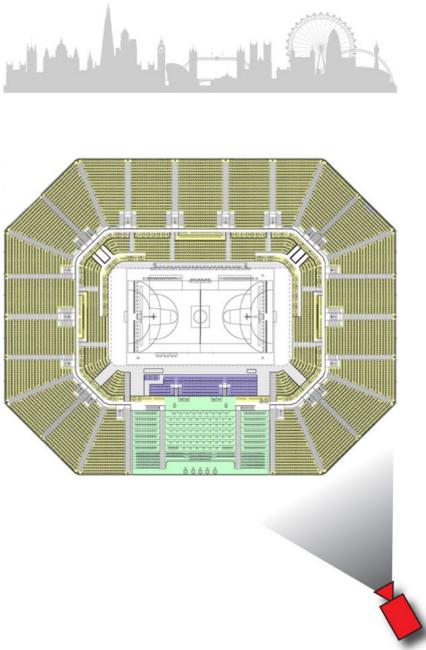
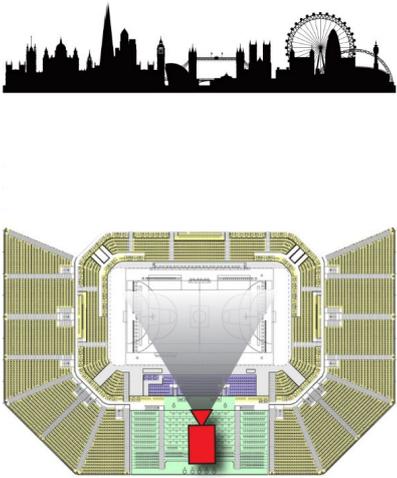
ここで、開催都市の都市景観、競技会場、カメラポジションの関係性の変遷について整理する。

競技する選手の背景に開催都市の都市景観を映し出すという考え方が乏しかった時代には、競技会場の計画と設計の意識は主に外観に注目していた。例えば、2008年に開催した中国の北京五輪のメインスタジアム(北京国家体育場。通称、鳥の巣)は、世界的建築家とアーティストを起用し、彼らのコラボレーションによる奇抜で斬新なデザインの外観となり、競技会場自身を都市のアイコンとなることを目指した。

しかし、2012年のロンドン五輪のメインスタジアムは簡素な作りで、解体後の改修を前提に計画していた。同様の考え方で、同大会の市内中心部に建設した仮設競技会場では、競技会場内のカメラから競技する選手の背景に開催都市ロンドンのランドマークを映し出した。建築のナカから、ソトの都市景観を映し出すカメラワークを目指したと言える。それゆえ、カメラのアンクルから外れる簡素な外観は、鉄パイプの構造体に布を張り付けただけ、という割り切った意匠であった。

北京五輪 2008 とロンドン五輪 2012 の五輪競技会場とカメラポジションの関係性とその変化を以下の表にまとめる。

表 5-1 競技会場、カメラ、都市景観の位置関係の変化

	北京五輪2008	ロンドン五輪2012
中継映像		
競技会場、カメラ、都市景観の位置関係		

5.1.2. 個人が主体的に五輪を視聴する環境構築__五輪チャンネル

本研究課題の調査資料となる、五輪チャンネルについて解説する。五輪チャンネルとは“オリンピック・アジェンダ 2020”のもと、オリンピック運動として若い世代を取り込みたい IOC の目的をサポートするために 2016 年 8 月に設立され、チャンネル自体はスマートフォンなどのアプリなどで視聴可能となる (www.olympicchannel.com)。本論文の調査事例となるロンドン五輪の各競技映像は世界最大の動画共有サービスサイト、ユーチューブ上に保管され、いつでも、どこでも、個人が主体的に閲覧可能な状況にある (www.youtube.com/user/olympic) 大会開催時に IOC 提供の国際基準映像は各国放送局によるテレビ中継はもちろんのこと、オンライン環境(日本: gorin.jp など)での視聴が可能であった。また、五輪放送権を獲得していない国と地域にはユーチューブ上に特設チャンネルを開設した。ロンドン五輪における約 100,000 時間におよぶテレビ映像は世界中の 500 以上のテレビチャンネルに配信、放送された¹⁾。



図 5-2 オリンピックチャンネル ユーチューブサイト

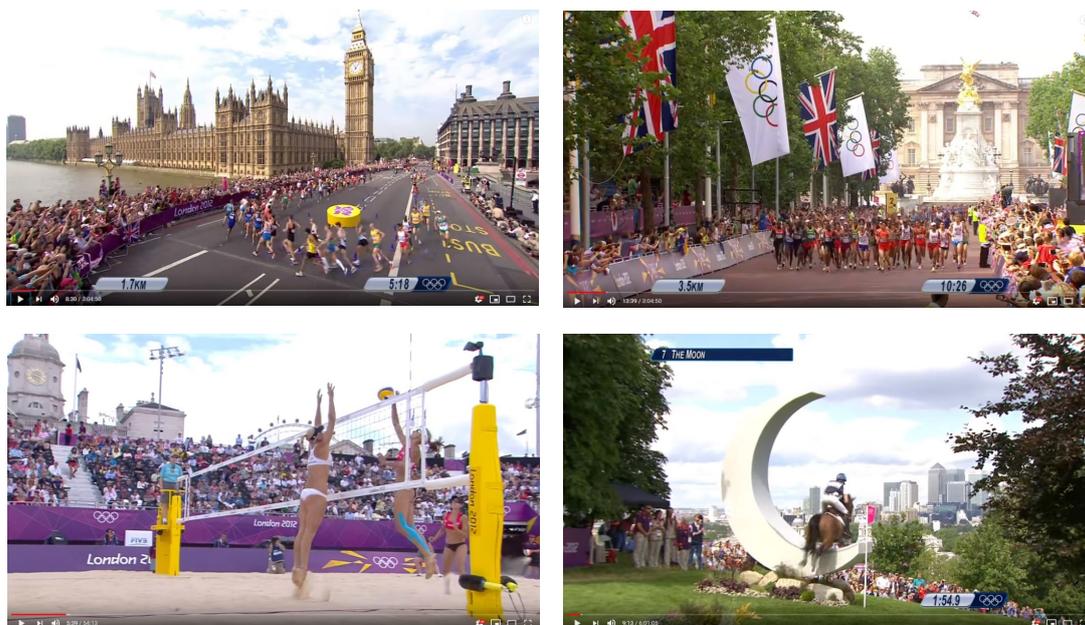


図 5-3 オリンピック・チャンネル上のロンドン五輪の競技中継映像群

(左上) マラソン競技・ビックベン前 (右上) マラソン競技・ザ・マル

(左下) ビーチバレーボール競技会場 (右下) 馬術競技会場(クロスカントリー競技)

5.2. 借景構造から読み解く五輪景観

2章において、五輪景観を借景研究における位置付けから紹介した。本節では、抽出した研究対象事例の競技会場を踏まえ、建築、都市、カメラ(視点)から借景技法によって景観を繋ぐという社会的意義の観点から五輪景観の構造を読み解く。

5.2.1. 借景は内部と外部環境と繋ぐ社会的行為

進士²は、日本の借景技法と日本的特質の意義として、単なる園外景観への「眺望」という西洋庭園や中国庭園とは異なることを注目する。庭園の囲繞性を付与しつつ外部景観と交渉する工夫を求められるかたちで、巧妙な景観構造と自然に対する高度な精神的態度を得ることが出来た、としている。

また、芸術家である岡本³は借景庭園のあり方を「大自然の景観をまっこうから受けられる。しかもそれを受けとめるために、なにかしなければならなかったら、小細工はやめて、単純で強靱な手をうつ以外にありません。人間における抽象性、その明快さと単純さこそ大きな自然に対抗して、しかもそれを生かすことの出来る形式なのです。」と表現している。これは西沢⁴の「庭は借景を引き立たせるために前景にすぎぬまで自己を滅却した状態」とする論理展開と通じるものがある。

さらに、篠原⁵は「庭園における閉ざされた世界としての完結性への志向と、外の世界へ向かう眺望性への欲求。この相矛盾する欲求を止揚し、極めて微妙な地点において両者の関係を定着したのが借景という技法であろう。」としている。

これらをまとめると、借景とは庭園内の秩序を維持しつつ、外部景観を視覚的に取り込むことであった。日本庭園における眺望の視点は、庭園や建築からであるが、本研究において調査対象となる五輪競技会場における眺望の視点は観客席からであり、かつカメラとなる。そして、塀や垣に囲われた庭園を、観客席に囲われた競技場と置き換えるならば、五輪景観を生み出す競技会場も相反するものを繋いでいることになる。

これらの先行研究によって明らかにされた借景が繋ぐものを、五輪景観を生み出す競技会場の構造に置き換えた場合、五輪競技会場によって繋ぐものとは何に相当するだろうか。五輪景観構造と借景構造と並列して以下に整理する。

表 5-2 借景と五輪景観が繋ぐもの 比較表

		園外景／競技会場内	園内景／競技会場外
借景構造	篠原修 による対比	外の世界へ向かう眺望性への欲求	閉ざされた世界としての完結性への志向
		原文「庭園における閉ざされた世界としての完結性への志向と、外の世界へ向かう眺望性への欲求。この相矛盾する欲求を止揚し、極めて微妙な地点において両者の関係を定着したのが借景という技法であろう。」	
	西沢文隆 による対比	主役(主賓)	脇役(自己を減却した状態)
		原文「借景は最初庭にあった外の風景を眺望することから始まり、景を庭の景の一部としてとり入れ、これに調和させさらに発展させると、借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する。最後に主賓を引き立たせるために庭を消すに至れば借景はその極致に達する。すなわち庭は借景を引き立てるための前景にすぎぬまで自己を減却した状態になる。」	
五輪景観構造	岡本太郎 による対比	自然、複雑、脆弱、具象性、難解	人工、単純、強靱、抽象性、明快
		原文「大自然の景観をまっこうから受け入れる。しかもそれを受けとめるために、なにかしなければならぬとしたり、小細工はやめて、単純で強靱な手をうつ以外にありません。人間における抽象性、その明快さと単純さこそ大きな自然に対抗して、しかもそれを生かすことの出来る形式なのです。」	
	主な視対象	周辺都市景観	選手と競技場
	視対象の動き	静(建築)	動(選手)と静(競技場)
	建築タイプ	常設の都市景観となる意匠	仮設の簡素化された意匠

表 5-3 断面による借景／五輪景観の構造 比較表

断面による 借景／五輪景観の構造 (N.T.S.)	
借景構造	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>進士五十八の提唱</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>園内 見切り V.P. 仰角 θ° 借景対象 コンケイヴ地形</p> </div> </div> <p>進士五十八の提唱する借景の景観構造において、以下の4つの条件が必要であるとする。①借景対象、②見切り、③園内景、④コンケイブ(Concave, 窪地)。見切りとしての塀や垣によって、景観を縁取る(上原敬二は「生け捕り」)ために、仰角に注目する。</p>
五輪景観構造	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>グリニッジパーク</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>Stand 観客席 Field of Play 競技場 Queens House クイーンズハウス City of London ロンドン市内(遠景)</p> </div> </div> <p>競技場(馬場)をU字平面の観客席で囲い、開放された北側の正面にクイーンズハウスのファサードを映し出す。北側観客席を開放しているために、縁取っているために、南側観客席上段のカメラは選手を映し出しつつ、その背景に周辺都市景観を映し出すことが可能となる。</p>
	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>ホースガーズパレード</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>Stand 観客席 Field of Play 競技場 Stand 観客席 2nd court 第2コート Clock Tower 時計台 Horse Guards ホースガーズ City of London ロンドン市内(遠景)</p> </div> </div> <p>西側観客席上段に設置したカメラは、カメラは下を向いているが、対面にある東側観客席を低層化しているため、ホースガーズの時計台を含んだファサードを映し出し、その背景にあるロンドンアイ観覧車、遠景に高層ビルであるシャードなど、ロンドン市内のスカイラインを重層的に映し出す。</p>

5.2.2. 五輪景観が借景の景観構造によって繋ぐもの

これらの言説を、五輪景観を生み出す競技会場の構造に当てはめると、内部秩序とは、選手が競技をする競技場(馬場、フィールド、ピッチ、コートなど)であり、その競技環境の維持しつつ、外部秩序である周辺開催都市景観に競技会場が繋がることになる。以下に、借景構造によって周辺景観を「生け捕った」ように、五輪競技会場によって「縁取られた」周辺都市景観を以下に整理する。

競技会場におけるウチとソトで相反するものを視対象と考えるならば、静である周辺都市景観にたいして、動である選手や競技会場がある。また、都市景観を形成するために長期にわかって活用する常設建築と、五輪と言うスポーツイベントのために短期に活用する仮設競技会場の対比が顕在化する。しかも、現代の私たちは、その通信技術の発達により、開催都市の景観を借景という形で享受できるのは観客席の観客による視点だけでなく、会場内に設置したカメラを視点と考えるのならば、発信される映像によって、世界中の視聴者もそのテレビ、パソコン、スマホなどのスクリーンに映し出される映像を受け取ることが可能となる。グローバルな環境において開催都市のローカルな景観を受信することができる。

ちなみに、枯山水庭園に代表される借景の技法は、工事も小規模であるがゆえに費用も掛からず⁶、周辺環境の景観を取り入れることが出来る、としている。これを五輪競技会場の構造で考えるならば、その計画・設計において、特性のある場所を敷地とし、仮設建築物としての競技会場を建設し、都市の文化資産である都市景観を競技する選手の背景にすることにより、カメラに向けてその都市固有の競技映像を生み出し、発信することを可能とする。

表 5-4 借景と五輪景観によって縁取られた景観

		園外景	縁取られた景観(借景)
借景構造	進士五十八の提唱		
	五輪景観構造	<p>グリニッジパーク</p>	
	<p>ホースガーズパレード</p>		

5.3. 研究事例対象の抽出

五輪景観を生み出す競技会場は7競技会場(8競技)あり、シーン型として2競技会場とシークエンス型として5競技会場が該当する。

シーン型の五輪景観を生み出す競技会場は、競技場を観客席によって囲んだ競技会場の中に視点となるカメラを配置し、そこから主となる撮影方法である。本研究ではホースガーズパレード・ビーチバレーボール会場およびグリニッジ・パーク馬術会場(馬場競技)が該当する。

一方、シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場は、競技会場の外、もしくは市街地そのものを競技会場とし、市街地において複数の視点を配置する、もしくは選手と並走し、選手を追う撮影方法である。シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場は、合計5競技会場が該当するが、似たルートの競技会場の例(競歩競技会場、自転車ロード競技会場は市街地マラソン競技会場と似ている)、敷地が同じ競技会場の例(グリニッジ・パーク近代五種競技会場はグリニッジ・パーク馬術競技会場と同じ敷地)、映し出す歴史的、文化的に重要なランドマークが同じ例(ハイドパーク・トライアスロン競技会場は市街地マラソン競技会場と似ている)があるので、シークエンス型としては、その中でも代表的な、市街地マラソン競技会場とグリニッジ・パーク馬術競技会場(クロスカントリー競技)の2競技会場を選択する。



図 5-4 調査事例となる五輪景観を生み出す競技会場の抽出プロセス

- シーン型五輪景観を生み出す競技会場
 - ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場
 - グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技)
- シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場
 - グリニッジ・パーク馬術競技会場(クロスカンントリー競技)
 - 市街地マラソン競技会場

それぞれ、カメラポジションとカメラワークについて、都市景観を競技する選手の背景に映し出した中継映像を抽出し、整理する。それぞれの五輪景観の構成要素のダイアグラムは以下となる。

5.4. カメラポジションとカメラワーク

本節では、カメラポジション(視点)とワークワークについての紹介し、その効果について五輪景観のダイアグラムによって解説する。

カメラポジションとしては、シーン型五輪景観とシークエンス型五輪景観で解説したように競技会場の内で固定した場所からの撮影(主にシーン型)や、選手と共に街に出て並走および追走する撮影(主にシークエンス型)となる。競技の中継映像は競技会場の内外に設置されたカメラの位置(カメラポジション)とカメラの動き(カメラワーク)によって生み出され、視聴者に届けられる。

カメラポジションとして、カメラを土台などに固定し、定まった場所のカメラワークによって生み出されるのが(主に)シーン型五輪景観であり、カメラ自身が移動するカメラポジションとカメラワークによって生み出されるのが(主に)シークエンス型五輪景観である。その際、カメラの土台となるのが、クレーン(アーム先端で移動する視点)／バイク(バイク等で移動する視点。ボート上のカメラを含む)／ケーブル(上空ケーブル等を移動する視点。ヘリコプターカメラも含む)などである。

クレーンカメラは、クレーン部が動くことで、上下前後左右とシームレスな映像を撮影することが可能である。それは選手のアイレベルの映像と選手の上空の映像の間を行き来できることから、競技会場である都市空間における競技する選手の位置付けを確認することができる。

バイクカメラは選手と並走でき、最も選手に近い場所のカメラポジションで選手と同じ目線で、選手の背景に流れる都市景観をシームレスに映し出すことが可能となる。

ケーブルカメラも一連の流れをシームレスに映し出すことに相応しいが、その映像は競技する選手を映し出すのと同時に競技会場を設置した敷地の都市軸などを意識させることも可能となる。また、ヘリコプターカメラによる映像は鳥の目線である。コース上空に飛ぶヘリコプターに設置されたカメラの映像は都市空間の中を走る選手を上空から映し出す。上空からの映像は都市空間そのものを競技会場とするなかで競技する選手を映し出す。

また、カメラワークには以下の分類があり、競技する選手の動きを、それぞれの組み合わせで複合的な動きで追跡する。個別のカメラワークによる効果を以下に一覧した。整理したのは、フィックス(Fix 固定)／パン(Pan 水平回転)／ロール(Roll 回転)／ティルト

(Tilt 垂直回転)／ドリー(Dolly 前後)／トラック(Truck 水平)／ペDESTAL(Pedestal 垂直)である。

動きや移動の方向は図の赤矢印を参照のこと。また、視点の動きだけでなく、視点の移動による映像の効果も同様に整理する。



図 5-5 競歩競技中継に映るカメラを持つカメラマン



図 5-6 マラソン競技中継に映るクレーンカメラ



図 5-7 トライアスロン競技中継で選手に並走するバイクカメラ



図 5-8 遠泳競技中継に映るボートカメラ



図 5-9 ケーブルカメラ カメラ本体(左)、ケーブルを張るための支柱(右)

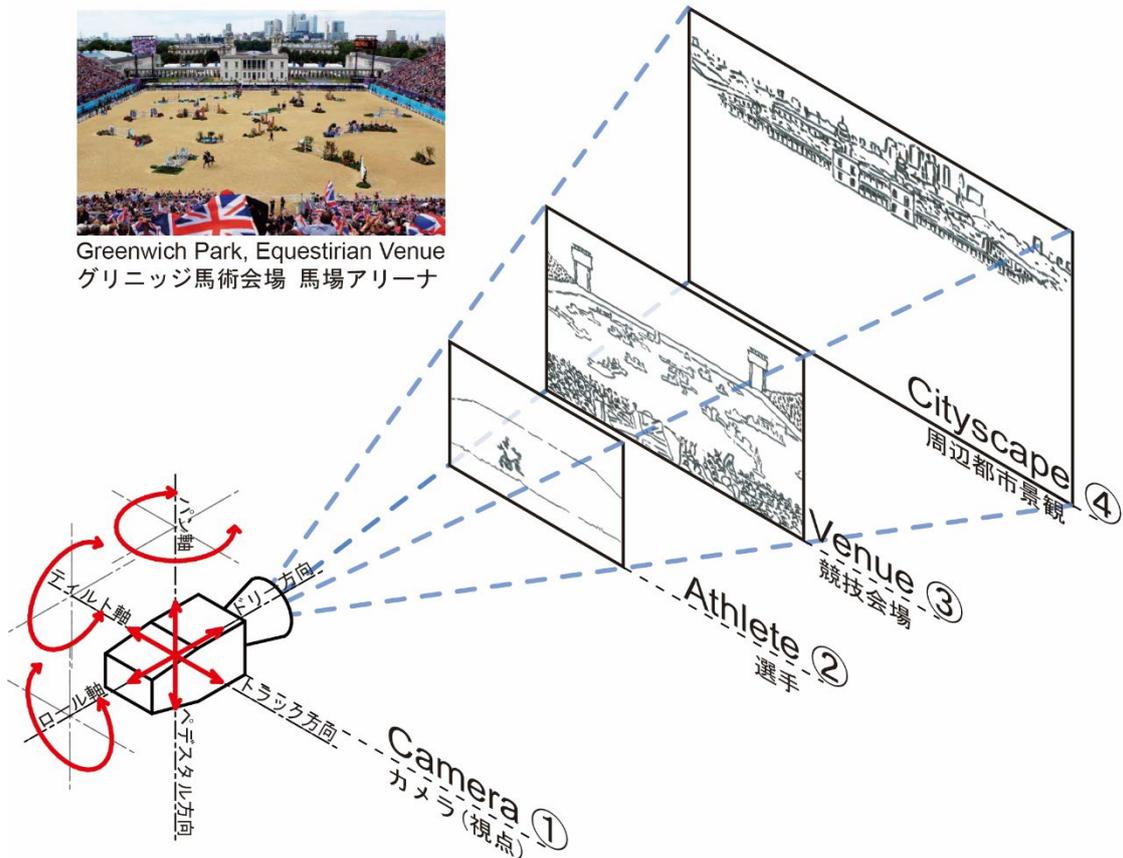


図 5-10 五輪景観を生み出すカメラワークの動き

表 5-5 カメラワークの動きとその効果

視点場の動き	フィックス(Fix 固定)	カメラを固定することで、画面に落ち着きがあり、客観的な画を映し出す効果
	パン(Pan 水平回転)	広い被写体の表現や水平移動の被写体を追うことで、その場所らしさを映し出す効果
	ロール(Roll 回転)	カメラを横軸回転させることで、天地が回転する中で被写体を不安定にし、ダイナミックさを映し出す効果
	ティルト(Tilt 垂直回転)	縦に長い被写体の表現や垂直移動の被写体を追うことで、被写体の大きさを映し出す効果
	ドリー(Dolly 前後)	被写体にカメラが近づくことで、遠近が強調され、立体感を表現する効果
	トラック(Truck 水平)	水平移動する被写体に対して積極的な関わり得る効果や背景に対して移動の流動感と臨場感を増す効果
視点場の移動	ペDESTAL (Pedestal 垂直)	垂直移動する被写体に対して積極的な関わり得る効果や背景に対して移動の流動感と臨場感を増す効果
	クレーン(Crane)	アーム先端に取り付けられたカメラを操ることで、ミクロ(選手)からマクロ(都市)をスムーズに移動し映し出す
	バイク(Bike ボートも含む) ケーブル(Cable ヘリコプターの空撮も含む)	バイク荷台に乗ったカメラマンがカメラを操ることで、選手と同じ速度で競技会場や都市景観を映し出す 競技会场上空に渡したケーブルに吊るされたカメラを操り、選手、競技会場、都市景観を映し出す

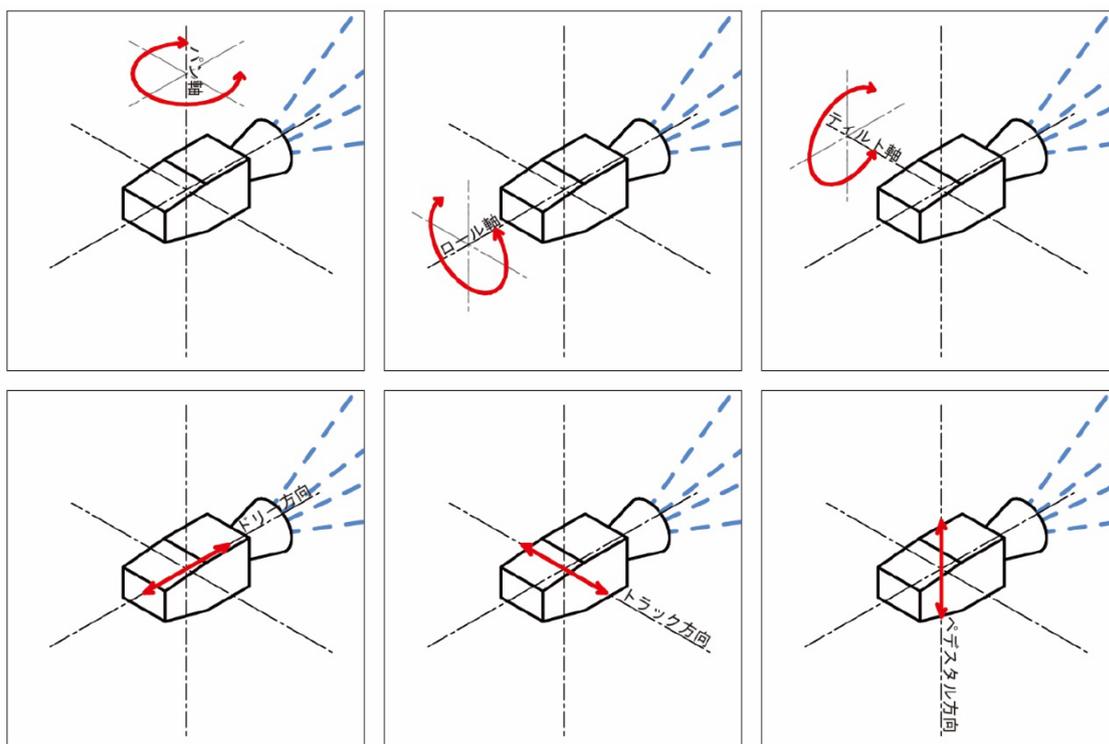


図 5-11 カメラワーク動きの解説一覧

【上左】パン(Pan 水平回転)／【上中】ロール(Roll 回転)／【上右】ティルト(Tilt 垂直回転)

【下左】ドリー(Dolly 前後)／【下中】トラック(Truck 水平)／【下右】ペDESTAL(Pedestal 垂直)

5.5. 事例調査 1_ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場

5.5.1. 競技と競技会場の特性

まず、映し出す競技と競技会場の概要として、その特性を以下に整理する。

ビーチバレーボール競技は砂を敷き詰めたコート上で実施される 2 人制バレーボールの対人競技である。男子・女子別の対抗戦である。同じく五輪競技で実施されている 6 人制のバレーボールと異なり屋外で実施され、2 人しかいないことで緊張感のある競技となる。バレーボールとは異なる柔らかいビーチバレーボールを使用する。それゆえ、競技場周辺の風環境への配慮が重要となる。五輪における予選会は平日の日中に行われるが、トーナメントの後半戦なってくると夜間での競技開催となる。その際にはもちろん周辺環境である都市景観がカメラに映ることはない。

1996 年のアトランタ五輪から採用された新しい競技である。

シドニー五輪 2000 のボンベイビーチや東京五輪 2020 のお台場などでは海岸沿いに競技会場を設置したが、ビーチバレーボールでありながら、砂を敷き詰めたコートとその周囲を囲む観客席があれば、海岸沿いでなくてもよい。むしろ、選手の頭上で軽量のボールによるラリーを続ける上で、海風などの強い風環境の影響を受けない場所(例として都心部など)のほうが、競技会場の敷地として適している。それゆえ、風環境の影響を受けない敷地で競技を実施した際、観客席は競技場を囲むことで競技会場周辺からの風を妨げる壁の役割を果たしているが、それを開放、もしくは一部低層化するなど自由度が高まる。

ロンドン五輪においては、市内中心部の広場ホースガーズパレードに 1.5 万人収容の仮設競技会場を設置した。東側観客スタンドを低くすることで競技会場からはホースガーズ、ロンドン・アイ観覧車等、遠景の高層ビル・シャード先端を含めた都市景観が得られる。

この競技会場敷地はウエストミンスター行政自治区内に位置し、景観保全地区でもある同地は、周囲はホースガーズパレード、ホワイトホール、文部科学省、英国国会議事堂、ウエストミンスター寺院、マラソン競技などの発着点であるザ・マル、バッキンガム宮殿、そして裏庭が競技会場に隣接する首相官邸などに囲まれる英国の主要な場所である。

5.5.2. 調査結果および考察

競技する選手の背景に都市景観を映し出した映像は8か所⁷となった。主に競技を実施したのはセンターコートを中心にした競技会場であるため背景に都市景観を映し出した映像は限定される。

市内中心部という隣地を建物に囲まれた周辺環境ではあるが、低く建設された東側観客スタンドの背景にホースガーズやロンドン・アイ観覧車などが、西側観客席上段のカメラポジションからの映像で映し出される(HGP_01)。競技ネット下、コートサイド(ローアングル)からの定点カメラ映像は必然的にローアングルとなる。これは選手たちの頭上でラリーを続けるビーチバレーボールの競技特性といえるが、選手やボールの背景として都市景観を映し出す際に非常に相性の良いアングルと言える。また、ネット際の攻防、アタックの瞬間などを映し出すためにリプレイのスローモーション映像にはホースガーズやロンドン・アイ観覧車などの周辺都市景観が繰り返し、よりはっきりと映し出される。(HGP_02)。

唯一のクレーンカメラは競技場コート南側に設置され、一連の滑らかな動きのカメラワークで選手と都市景観をシームレスに映し出す。この場面ではサーブを受けた選手のレシーブの乱れを味方選手がリカバリーしてアタックへ繋げたの一連の動きをシームレスにクレーンカメラで映し出した。その間、競技する選手の背景にはロンドン・アイ、ホースガーズ、オールドアドミラルティビルという順で都市景観が映し出された(HGP_03)。

同じくクレーンカメラによる映像だが、HGP_03とは逆のカメラワークで、サーブを打つ選手目線から都市景観へと映像が一連の流れで移り変わる。最終的には競技会場北側にあるオールドアドミラルティビル上部を映し出すカメラワーク(HGP_04)。

コートサイドからのカメラは相手チームから打たれるサーブを待つ選手の表情を映し出す。緊張感のある選手の表情の背景には、観客席と内閣府の入居する建物の屋根と煙突も一緒に映し出した(HGP_05)。

ネットの上部に設置した固定カメラがネット上の攻防を映し出す。リプレイ映像のスローモーションに映し出される選手の手先の背景に近隣建物であるホースガーズの時計台やロンドン・アイ観覧車の上部が映し出される(HGP_06)。

西側観客席上段のカメラポジションからは競技紹介やセットカウント紹介の際に、競技会場の全景として、競技場コートの背景として石造りのロンドンの街並みが近景、中景、遠景と重層的に映し出される。ロンドン・アイ観覧車やホースガーズはもちろんだが、五

輪開幕直前に全貌を表したシャード先端も映し出している(HGP_07)。セット間の試合戦況をテロップで紹介する際、HGP_07とは逆のカメラポジションで競技会場の全景を映し出す。ホースガーズの上部に設置された固定カメラからは、石造りの都市景観とは異なりセントジェームス公園、セントジェームス公園湖(池)、王立学会の建物など緑豊かなロンドンの街並みが映し出している(HGP_08)。

期間限定の仮設競技会場だからこそ、短期間で市内中心部の広場に建設することが出来、それゆえ、周辺都市景観を競技映像に収めることが可能にしたのが、この競技会場における五輪景観の特徴と言える。

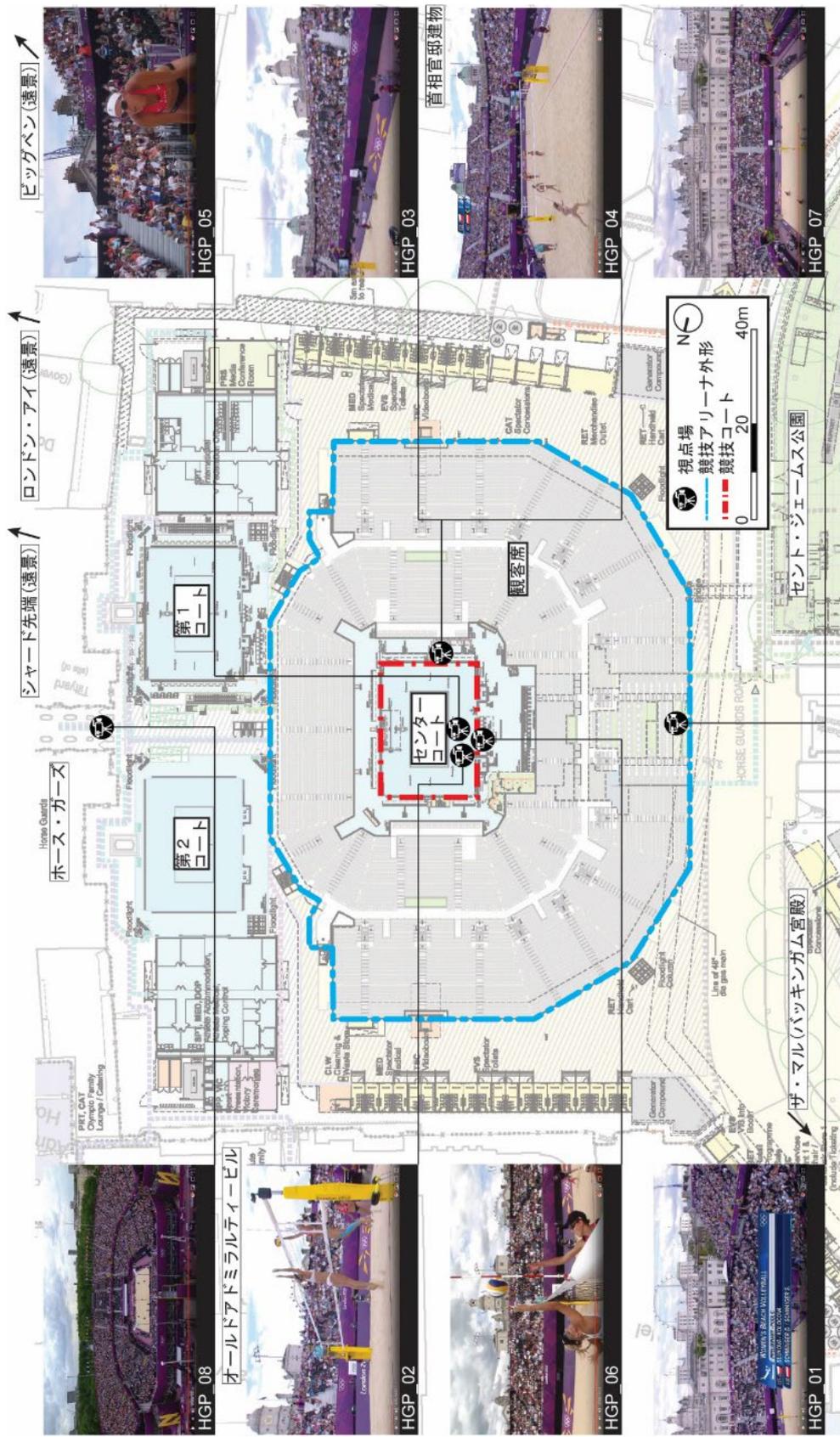


図 5-12 ビーチバレーボール競技会場のカメラポジションと映し出された映像一覧

表 5-6 ビーチバレーボール競技会場のカメラポジションとカメラワークの解説

映像番号	映像名称	映像時刻	視点(カメラポジション)	選手の様子・動き	競技会場の要素	都市景観・ランドマーク	カメラワーク	映像の概要
HGP_01	試合前ウォーミングアップ全景	0:01:21	西側スタンドメディア席上部	練習中の選手	観客席、スクリーン、コート	ロンドンアイ、内閣府建物上部(屋根と煙突)、ホースガーズ、シヤード先端遠景	パン	コートを見下ろし、試合前練習風景、競技選手紹介テロップ
HGP_02	アタック	0:05:35	コートサイド(西側)ローアングル	トス、アタック、ブロックの選手	コート、ネット、観客席	ホースガーズ、ロンドンアイ	パン	アタックの瞬間をコートサイドカメラ(ローアングル)で映し出す。リブレイ、スローモーション
HGP_03	タイムアウト明け	0:07:16	コートサイド(南側)クレーン	コートインする選手たち	観客席、コート、審判台、ネット、	ロンドンアイ、ホースガーズ、オールトアドミラルティビル	パン/クレーン	タイムアウト明けの選手がコートインする瞬間、都市景観の映り込む観客席からコートへの映像をクレーンカメラで一連の流れとして映し出す
HGP_04	レシーブ、アタック、ラリー	0:08:16	コートサイド(南側)クレーン	トス、アタック、ブロックの選手	観客席、スクリーン、コート、ネット、	オールトアドミラルティビル	パン/トラッキングクレーン	外れレシーブをリカバリーしてアタックへの一連の動き
HGP_05	サーブを待つ選手	0:19:50	ネット下	サーブを待つ選手	観客席	内閣府建物上部(屋根と煙突)	ベテスタル	サーブを待つ選手と観客スタンドの背景に内閣府の入居する建物の屋根と煙突を映し出す
HGP_06	ネット上の攻防	0:27:57	ネット上	ネット上のボールを打ち合う選手たち	ネット、審判台、コート、観客席	ホースガーズ、ロンドンアイ	フィックス	ネット上の攻防をネット上部設置カメラで映し出す。リブレイ、スローモーション
HGP_07	タイムアウト明け	0:31:20	西側スタンドメディア席上部	コートインする選手たち	観客席、コート、審判台、ネット、	ロンドンアイ、ホースガーズ、セントジェームス公園、セントジェームス公園(湖)、王立学会、ロンドンの街並み遠景	ティルト	タイムアウト明け選手がコートインする瞬間。
HGP_08	第2セットから第3セットへ	0:37:14	ホースガーズ上部	なし	観客席、センターコート	セントジェームス公園(湖)、王立学会、ロンドンの街並み遠景	フィックス	第2セット状況をテロップで紹介、その背景に競技会場と都市景観が映し出される

5.6. 事例調査 2_市街地マラソン競技会場

5.6.1. 競技と競技会場の特性

各国代表選手が男女別の開催日に 42.195 kmを走り順位を競う競争競技である。発着点はバッキンガム宮殿とトラファルガー広場を結ぶ王室パレードなどが行われる大通りザ・マルであり、市内中心部にあるビックベン、セントポール大聖堂、リーデンホール市場などを3周半する。招致計画時はメインスタジアムを発着点にした東ロンドン地区を通り、市内部を周回するコース設定だったが、東ロンドン地区には、競技する選手の背景に映し出すのに目ぼしいランドマークをなかったことやメインスタジアムを発着する際の運営面での調整などもあり、大会2年前に市内ランドマークを周回するコースへと変更した。

5.6.2. 調査結果および考察

(1) 調査結果および考察

市内中心部をそのまま競技会場としたため、常に競技する選手の背景には周辺都市景観が映し出される。抽出映像は11か所となった⁸。

チケット保持者だけが観戦できるスタート地点から、市民が自由に観戦できる場所の最初がトラファルガー広場を抜ける場所になる。チャールズ1世像の横に設置したクレーンカメラによる滑らかなカメラワークで選手と都市景観をシームレスに映し出す。スタート直後のアドミラルティ・アーチを塊となって走り抜ける選手たちをクレーンカメラのハイアングルでカメラポジションで捉える。選手が近づくとつれて、クレーンカメラのカメラポジションは徐々に下がり、ローアングルで映し出す背景にはビッグベンが遠景で見える。選手たちは街路樹の緑が美しいノーザンバーランド通りに抜けていくときには再びハイレベルのカメラポジションで映し出す。ハイアングル→ローアングル→ハイアングルというカメラワークはクレーンカメラならではの連続の映像となった(MLL_01)。ビッグベンを背景とした折り返し地点は、周回コースのレイアウトの中でもスタート直後の一周目(半周)だけ、ウェストミンスター橋の途中に設置した。ビッグベンはもちろんのこと、スタートから間もない選手たちはまだ一群であり、迫力ある映像を映し出すことが出来た。クレーンカメラによる撮影場所であり、選手の折り返しとは逆の動きのカメラワークとなり、向かってくする選手たちの背後にウェストミンスター橋およびその下のテムズ川の流れを映し出し、折り返した後は走り抜ける選手の背中越しにビッグベンの全景と国会議事堂をフレームに映し出すカメラワークとなった(MLL_02)。2周目以降にこの折り返し地点はなくなり、選手たちはウェストミンスター橋のたもとを曲がる周回コースとなった。クレーンカメラも橋のたもとに移動し、選手を映し出した。周回コースの距離調整の折り返し地点であるが、マラソン競技の最も印象的な映像を生み出した場所である。

バッキンガム宮殿前にあるビクトリアモニュメント噴水のラウンドアバウトを走る選手をまず正面から捉える。背景にはバッキンガム宮殿が映り、走り抜ける背面をクレーンカメラが映し出す。ここでもハイアングル→ローアングル→ハイアングルという都市景観と選手視線をシームレスにクレーンカメラが繋ぐカメラワークとなる(MLL_03)。

マラソン競技の発着点であるバッキンガム宮殿前の大通りザ・マルの映像は選手を正面から映し出す。選手が走るコースを挟み込むように仮設観客席が設置され、ビクトリアモニュメントやバッキンガム宮殿などの都市景観を縁取り、映し出していた。また、赤く

舗装されたザ・マルの沿道には大会期間中、巨大な英国旗、五輪旗が掲揚され、レッドカーペットと形容された。(MLL_04)。

セントポール大聖堂の周辺は南側側面から正面へ回るコースが設定されており、選手と並走するバイクカメラの映像から、大聖堂正面に設置したカメラが選手を正面から映し出す映像へとスイッチする。建築家クリストファーレンによるバロック建築の大聖堂前の広場には、選手を応援する観客が旗を振り、正面ファサードと共に映し出される。その前を選手は横切りシティー地区へと向かう(MLL_05)。

テロップには「BANK OF ENGLAND」と出ているが、金融街バンク(Bank)地区の中心地であり、イングランド銀行と旧王立取引所の前に広場を曲がるコース設定である。ともに建物のファサードにはコリント式の柱頭が装飾され、旧王立取引所前の広場にはウェリントン公爵騎馬像が建ち、多くの観客と共に映し出される石造りの建物の間を選手は走り抜けていく(MLL_06)。

伝統的な市場の姿を残すリーデンホール市場はアーケードが設置されており、選手は石畳のコースを走り抜ける。アーケードに設置したカメラで選手の正面のハイアングルで捉え、走り抜ける選手の頭上、そして後ろ姿へ移動していく様子をロールのカメラワークでダイナミックな映像として映し出す。周回するときや別の集団の選手を映し出すときは選手を追走し、ドリーのカメラワークで流れゆく伝統的な装飾の市場内を走る抜ける映像を映し出す(MLL_07)。

周回コース東端はロンドン塔の前の折り返し地点である。折り返し地点の正面にクレーンカメラを設置し、選手を正面から捉え、折り返した後ろ姿を映し出す。選手の背景にはテムズ川によって開けた都市景観の中に、外観が完成した直後のシャードが映し出されている(MLL_08)。

2 周目以降のコースにおいて、選手の背景に映し出されるビッグベンのシーンでは、選手はウエストミンスター橋のたもとを曲がり、ビッグベンの横を選手は走り抜ける。ウイNSTONチャーチル像の建つ、パーラメントスクエアガーデン付近の路面に設置された固定カメラ(MLL_02 とは逆のアングル)はローアングルで選手とその背景のビッグベンを同じ画面で捉え、その高さの対比からランドマークの大きさがより際立つ。このように市内中心部を 3 周半する周回コースを選択したことでコンパクトな競技会場を実現しただけでなく、市内ランドマークを背景にした都市景観の映像をあらゆる角度から何度も映し出すカメラワークが可能となった(MLL_09)。

2 周目以降のトラファルガー広場の映像は空からのヘリコプターのカメラによるもので、広場に建つ英国旗帽子を被ったネルソン提督の下を選手が走り抜ける。コース内ではカメラマンを乗せたバイクが選手に並走することで臨場感のある映像(ハイアングルからローアングルまで)を映し出すことが出来るが、上空のヘリコプターのカメラからも空撮としてコースの周辺環境や観客の賑わいを映し出すことを可能とした(MLL_10)。また、選手が先頭集団、2 位集団へと分散すれば、ランドマークや都市景観を映し出す機会が増えることも周回コースの特徴と言える。

ギルドホール(GUILDHALL)の広場を直角に曲がり、観戦エリアのない細い道へ向かって選手は走り抜ける。カメラは選手を正面から捉え、直角に曲がる時にパンのカメラワークをし、走り抜ける選手の後ろ姿を映し出す。選手の背景にギルドホールを映し出すことはなく、個別にゴシック様式の建物を紹介した。ロンドン五輪におけるマラソン競技における特徴として、選手は細いコース、直角に曲がる場所、石畳などの路面など、好記録を狙う競技コースとは言い難かったが、数々の市内のランドマークを巡るコース設定にすることで、印象に残る都市景観を映像として映し出した(MLL_11)。

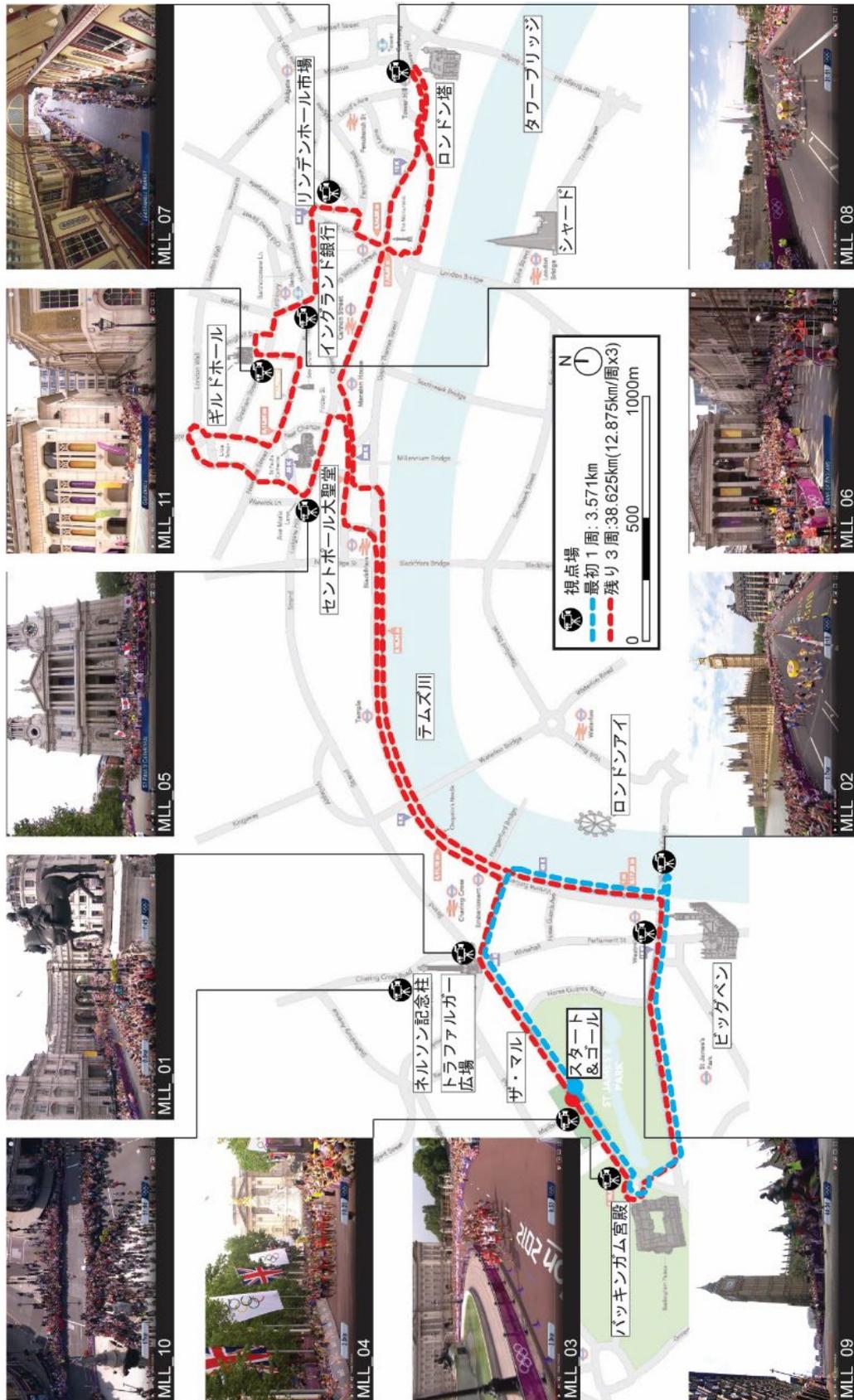


図 5-13 マラソン競技会場のカメラポジションと映し出された映像一覧

表 5-7 マラソン競技会場のカメラポジションとカメラワークの解説

映像番号	映像名称	映像時刻	視点(カメラポジション)	選手の様子・動き	競技会場の要素	都市景観・ランドマーク	カメラワーク	映像の概要
MLL_01	トラファルガー広場前	0:04:54	トラファルガー広場	正面、側面、背面の一回	沿道フェンス	アドミラルティアーチ、チャールズ世像、ビッグベン遠景、ノーサンバーランド通り、街路樹	ベデスタル/バン/クレーン	ハイアングル→人目線→ハイアングルへのクレーンによる選手のシュート。スタート直後のため選手の境が走り抜ける
MLL_02	ビックベン	0:08:15	ウエストミンスター橋	正面、側面、背面の一回	ウエストミンスター橋歩道フェンス	ビックベン、国会議事堂、テムズ川、ウエストミンスター橋	バン/ベデスタル/クレーン	一周目のみの折り返し点。選手の折り返しとは逆の動きのカメラワーク。最後はビックベンをフレームに捉える
MLL_03	ハッキンガム宮殿	0:12:39	ピクトリアモニュメント噴水前/ラウンドアバウト	正面、側面、背面の一回	ピクトリアモニュメント噴水前のラウンドアバウトフェンス	ピクトリアモニュメント噴水、ハッキンガム宮殿	バン/ベデスタル/クレーン	選手を正面から捉え、走り抜ける背面をクレーンカメラが捉える
MLL_04	ザ・マル(ハッキンガム宮殿)	0:13:36	ザ・マル	正面の一回	客席/沿道フェンス、仮設観客席	ザ・マル、ピクトリアモニュメント遠景、ハッキンガム宮殿遠景	ドリー/クレーン	赤く舗装された道路、英国旗、五輪旗が並ぶ
MLL_05	セントポール大聖堂	0:24:54	大聖堂前道路	正面、側面、背面の一回	沿道フェンス、セントポール大聖堂階段	セントポール大聖堂	バン/テイルト	セントポール大聖堂の側面から正面へのカメラスイッチ
MLL_06	イングランド銀行	0:30:30	バンク交差点	正面、側面、背面の一回	沿道フェンス、王立株式取引所前広場	王立株式取引所、ウェリントン公像、ジェームスヘンリー像	バン/テイルト	とあるが王立株式取引所
MLL_07	リーデンホール市場	0:31:50	市場アーケード天井	正面、側面、背面の一回(ハイアングル)	沿道フェンス	リーデンホール市場、アーケード天井、石畳	バン/テイルト/ローレル/ドリー(バイク)	アーケード天井に設置カメラで選手をハイアングルで捉える。後続集団もバイクのドリー映像
MLL_08	ロンドン橋	0:35:03	ロンドン橋横道路	正面、側面、背面の一回	沿道フェンス	ロンドン橋、シャード遠景、オーロラローズ教会	ドリー/バン/クレーン	ドを遠景に捉える
MLL_09	ビックベン	0:47:40	ウエストミンスター駅交差点	正面(ローアングル)	沿道フェンス	ビックベン	フィックス	ローアングルカメラの直前をビックベンを背景とした選手が走る
MLL_10	トラファルガー広場空撮	0:54:00	上空(ヘリコプター空撮)	側面(上空)	沿道フェンス、トラファルガー広場	ネルソン提督柱、	バン	英国旗陣子のネルソン提督の下を選手が走り抜ける。空撮
MLL_11	ギルドホール前	1:46:59	ギルドホール前広場	正面、側面、背面の一回	沿道フェンス、ギルドホール前広場	ギルドホールと側道	バン	観戦エリアのない側道を選手は走る。テロップ(GUILDHALL)

(2) 市内ランドマークや指定眺望点を巡るマラソン競技のルート設定

本節では歴史的、文化的に重要なランドマークを巡るようなマラソン競技のルートによって開催都市のロンドンの都市景観をカメラワークで映し出していたことを確認したが、他にも市内中心部における指定眺望点(Assessment Point)を図示した LVMF の図面⁹に、マラソン競技のルートを重ね合わせたものを作成した。ロンドンの都市景観を保全する指定眺望点として、テムズ川沿い、ビッグベン近くのウエストミンスター橋付近などにもいくつも点在し、マラソン競技のルートのカメラポジションに重複している。

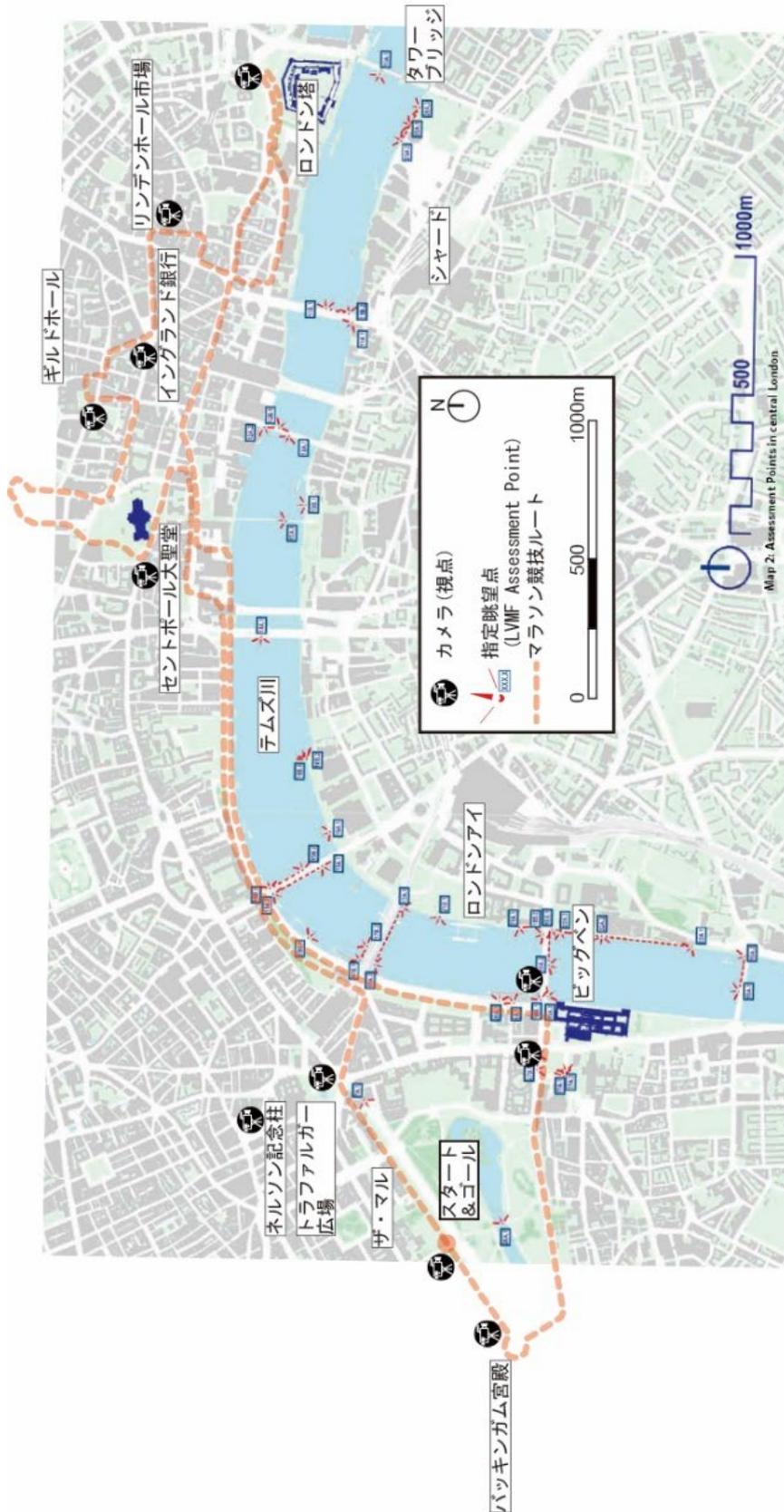


図 5-14 マラソン競技ルートと市内中心部における LVMF 指定眺望点

5.7. 事例調査 3_グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技、クロスカントリー競技)

5.7.1. 競技と競技会場の特性

五輪競技の中で唯一、男子女子選手の区別はなく、人馬が一体となって点数や時間を競う採点競技である。馬場馬術、障害馬術、総合馬術(馬場、障害、クロスカントリー)が、それぞれ個人戦と団体戦で実施された。ロンドンで一番古い王立グリニッジ・パークは世界遺産にも登録されている。園内の広大な芝生に観客 2.3 万人収容の仮設の馬場アリーナを建設し、隣接する英国登録建造物クイーンズハウスの正面に観客席の一部を開き、馬場を中心に U 字型平面観客席を建設した。馬場馬術競技と障害馬術競技は主にこの馬場アリーナで実施した。また、広大な芝生、池もあり、緑豊かで高低差のある敷地条件を活用し、全長 6 キロのクロスカントリーコース(28 か所の障害物)も設置した。総合馬術のクロスカントリー競技は公園全体のコースで実施し、観客もコース周辺の所々に設置した仮設の観客席や芝生の上に座り観戦した。



図 5-15 グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技、クロスカントリー競技)のカメラポジションと映し出された映像一覧

表 5-8 グリニッジ・パーク馬術競技会場(馬場競技、クロスカントリー競技)の
カメラポジションとカメラワークの解説

映像番号	映像名称	映像時刻	視点(カメラポジション)	選手の様子・動き	競技会場の要素	都市景観・ランドマーク	カメラワーク	映像の概要
GRP_DR-01	馬場馬術A: 競技馬が走行	0:07:05	馬場(観客席直前側)	正面	馬場	クイーンズハウス、カナリーウォーフ	パン	選手と競技馬が走行しながらカメラに向かってくる
GRP_DR-02	馬場馬術: 休憩中、競技会場紹介	1:15:36	ケープル(上空)	なし	入場ゲート、入場コンコース、売店、馬場、観客席、電光掲示板、審判席、観客スタンド、VIPラウンジ屋根	テムズ川、グリニッジ大学、海洋博物館、クイーンズハウス、カナリーウォーフ高層ビル群、ロンドンの街並み	テイルト/パン	テムズ川対岸からケープルカメラでクランダウンコース上をカメラが走る。
GRP_DR-03	馬場馬術: 表彰式	3:52:56	表彰台前設置カメラ	金メダリスト、銀メダリスト、銅メダリスト	馬場、表彰台、フェンス	クイーンズハウス	フィックス	表彰式の様子
GRP_SJ-01	障害馬術A: 競技紹介	0:00:31	クイーンズハウス	なし	馬場、観客席、記録事務所、ケープルカメラ用柱	グリニッジ天文台、ウルフ像	フィックス	競技紹介テロップと共にグリニッジ天文台が遠景として映る
GRP_SJ-02	障害馬術A: 次の選手への移行	0:06:34	観客席(短辺)上部	次の競技に向かう入馬が点景	馬場、観客スタンド、コンコース、電光掲示板	クイーンズハウス、海洋博物館、グリニッジ大学、テムズ川、カナリーウォーフ高層ビル群、ロンドンの街並み	フィックス	次の競技の入馬が馬場を移動する背景にクイーンズハウス、カナリーウォーフ高層ビル群、ロンドンの街並みなどが映る
GRP_SJ-03	障害馬術B: リブレイ	0:08:28	障害付近のカメラ	馬の脚	障害物、馬場、電光掲示板	クイーンズハウス、カナリーウォーフ高層ビル群	フィックス	リブレイ、スローモーション
GRP_CC-01	総合馬術(クロカン): 障害物 "The moon" を飛び越える	0:09:21	障害物 "The moon" の前	ジャンプ後ろ姿、	コース、障害物、フェンス、観客エリア	樹木、カナリーウォーフ高層ビル群、ロンドンの街並み	フィックス	障害物名 "The moon" のテロップ、馬どころゆえ、飛び越した後も障害物越しに都市景観をしっかりとカメラが映し出す
GRP_CC-02	総合馬術(クロカン): 灌漑	0:21:53	障害物 "崖" の前	ジャンプ横姿、	障害物、コース、	カナリーウォーフ高層ビル群、ミレニアムドーム、テムズ川、ロンドンの街並み	フィックス	灌漑を降りる入馬が灌漑ラッパ間に後景となる都市景観がしっかりと画面内に収まる
GRP_CC-03	総合馬術(クロカン): 線の中を走る選手	0:51:28	ケープル(上空)	小さく点景	コース、障害物、フェンス、観客エリア	ミレニアムドーム、テムズ川、ロンドンの街並み	パン	木々を抜けて(後景に)都市景観、芝生コースに出てくる。
GRP_CC-04	総合馬術(クロカン): アリーナへ入場	2:14:45	ケープル(上空)	小さく点景	VIPラウンジ、観客スタンド、馬場、観客席、電光掲示板、入場コンコース、入場ゲート、	クイーンズハウス、海洋博物館、グリニッジ大学、テムズ川、カナリーウォーフ高層ビル群、ロンドンの街並み	ドロー/テイルト	アリーナへ入って行く際に開いたの都市景観を映し出す
GRP_CC-05	総合馬術(クロカン): 池障害	2:54:00	池端	正面、横、後ろ姿	コース、障害物、観客スタンド	池、芝生、樹木	ペダスタル/パン/トラッキング/ドロー	池を通過する選手を追いかける

5.7.2. 調査結果および考察

抽出映像は馬術 3 競技から 11 か所(馬場馬術 3、障害馬術 3、総合馬術クロスカントリー5)となった¹⁰。

馬場馬術は採点競技ゆえ、馬場アリーナ内の馬場の南側に設置された審判ブース前で審判ヘアピールした演技が重要となる。それゆえ、馬場南側のカメラは審判ヘアピールする人馬の選手を正面から捉える。馬場アリーナの北側に観客席は設置していないため、人馬を正面から捉えるカメラアングルでも、その背景にあるクイーンズハウスのファサードを映し出し、柱頭にコリント式の装飾が施された列柱のバルコニーを映し出した。(GRP_DR-01)。同様のアングルは表彰式でも表れている。表彰台を設置する場所を馬場北側に設置することでメダルを授与される選手の喜びの表情の奥にもクイーンズハウスのファサードが映し出されている(GRP_DR-03)。

公園上空に 2 本のケーブルカメラを設置したことで、都市スケールの中における競技会場の位置付けを映像内として映し出すことも可能にした。ケーブル 1 本目はクイーンズハウスやグリニッジ大学の中心をシンメトリーに貫く公園の軸線(グランド・アクシス)上空に渡されている。競技の合間の会場紹介映像であるが、競技会場の隣地を流れるテムズ川の対岸からケーブルカメラは走り出し、グリニッジ大学、クイーンズハウス、そして馬場アリーナまでを映し出す。馬場アリーナは仮設建築物であるが、同軸線上に建設されていることで、既存の周辺建築物と同列に位置付けられていることがわかるカメラワークを実現した(GRP_DR-02)。

障害馬術では、クイーンズハウス上部に設置されたカメラから、馬場アリーナのある北側に向けたアングルで、馬場全体と観客席を競技紹介テロップと共に映し出した。カメラは、満員の観客席の先に映るグリニッジ天文台を背景に映し出した(GRP_SJ-01)。

馬場アリーナの南側観客席上段からのカメラは、馬場と観客席と北側を開放した場所から背景に都市景観を映し出した。障害馬術は、次々と人馬の選手がコースを巡回する競技特性ゆえ競技会場および周辺環境を何度も映し出すことが可能となった。ロンドン市を一望できるのはロンドンの街並みが平坦な地形であり、市内の南東部に位置する同敷地自体が高低差のある場所であることに加え、仮設競技会場の観客席の上段にカメラを設置したからでもある(GRP_SJ-02)。

また、障害馬術ではアリーナ馬場内の障害物自体にもカメラを設置している。そのカメラからは、障害物を飛び越える瞬間の馬の脚とその背景にあるクイーンズハウスと都市

景観を捉えた。時間の積み重ねで生み出された都市景観とスポーツ競技に掛ける一瞬を同じ画面に収めることで静と動の対比を映し出した (GRP_SJ-03)。

総合馬術クロスカントリー競技は広大な芝生、池もあり、緑豊かで高低差のあるグリニッジ・パークの敷地特性を余すところなく活用した。王立公園を敷地とした競技会場での躍動感のある映像がこの競技における五輪景観の特徴となっている。

市内を一望できるウルフ将軍像の建つ展望台の東側に設置した障害物はクロスカントリー競技映像の見どころであった。三日月を模した障害物を人馬の選手が飛ぶ後ろ姿は、テムズ川対岸カナリーワーフ高層ビル群や遠景として映し出されたロンドンの街並みに向かって飛んでいるように映し出した (GRP_CC-01)。同様に高低差のある地形を活用したコースには、崖を飛び降りる障害物を設置した。高い場所から飛び降りるといふ障害物はコースの難所であり、何人もの人馬の選手は戸惑い、落馬した。この難所に挑む瞬間の映像の背景には白い幾何形体の大屋根のミレニアムドームやメイン会場となるロンドン東部地区の都市景観を映し出した (GRP_CC-02)。

公園上空に渡したケーブルカメラの 2 本目は公園東側上空を南北に渡るものであった。この公園の特徴である緑豊かな森林の中に設置したコースの中を駆け抜ける人馬の姿を上空のあらゆる角度から追いかけた。選手に並走するカメラは地上に設置されたレーンカメラもあったが、ケーブルカメラによる上空からの映像は、樹木の陰を走り抜けていた人馬が、突然、開けた芝生のコースに出てくるといふ人馬ならではのスピードに相応しいカメラワークを実現した (GRP_CC-03)。

公園の軸線(グランド・アクシス)上空に渡されたケーブルカメラは、公園の中での馬場アリーナの位置付けを意識させる映像を映し出した。クロスカントリーコースの一部を馬場アリーナ内に設置したが、馬場アリーナに入場するために、南側観客席の下部の入場トンネルから走りこんでくる。このトンネルの位置付けは公園の軸線を仮設競技会場の計画設計に取り込んだもの(詳細は後述)であり、観客席の下を抜けた人馬の入場と共にケーブルカメラも馬場上空に移動する。馬場アリーナ内で障害物を飛び越える人馬の上空からの映像にはクイーンズハウス、グリニッジ大学などのロンドンの都市景観を背景に映し出した (GRP_CC-04)。

敷地であるグリニッジ・パークにはボート遊びのできる人工池があり、池の中を人馬が走り抜けるコース設定をしている。人馬は池の中をカーブするコースと池の中に設置された障害物を走り抜ける。水しぶきを上げて疾走する人馬の姿を捉えるのはクレーンカメ

ラのカメラワークである。池に飛び込む人馬の姿を正面から、遠浅の池の曲がりながらの走り抜ける人馬を横から、そして、池の中の障害物を飛び越える人馬の後ろ姿、という一連の流れをシームレスに捉える (GRP_CC-05)。

5.8. 小結

都市景観を競技する選手の背景に映し出すために計画・実現された競技会場において、カメラポジションの計画論(どのように見せたのか?)と、中継映像の調査分析論(どのように見えたのか?)を統合的に考察する。カメラを設置位置(カメラポジション)からのカメラワークによって映し出された映像、すなわち、中継映像に占める選手の姿が背景にある都市景観や競技会場と比較してどのように映し出されるかをカメラの分類によって考察した。

シーン型五輪景観を生み出す競技会場に多用される定点カメラであるが、選手と都市景観の関係は、選手とカメラの距離による。すなわち、選手とカメラが近距離にある場合、画面に選手の姿が大きく映し出され、選手がメインの中継映像となる。逆に、選手とカメラが遠距離にある場合、画面に映し出される選手の姿は小さくなり、都市景観がメインの中継映像となる。また、都市景観が映し出されている映像に選手が入り込んでくる(出ていく)例もある。シーン型、シークエンス型にも活用できるが、シーン型で背景に都市景観を映し出すには、観客席を開放もしくは低層化する、また選手の足元などのローアングルに設置するカメラの映像で上空に都市景観を映し出す必要がある。

また、シーン型五輪景観であるが、カメラワークとしてアリーナ競技会場からの映像であるために選手の背景となる都市景観の視対象であるランドマークなどが限定される。さらに、ビーチバレーボール競技はサーブ、レシーブ、トス、アタックという攻撃パターンや、馬場馬術や障害馬術などの馬術競技のように選手が次々と繰り返し行われる競技では、カメラアングル内の映像が類似してくるので、アリーナ内にある様々なカメラポジションのカメラをスイッチングしつつ、それぞれのカメラ自体もあらゆる角度(ロー&ハイアングル、上空から)などのカメラワークで選手とその背景の都市景観を映し出している。

例：HGP_02, HGP_05, HGP_06, GRP_DR-01, GRP_DR-02, GRP_SJ-03,

- 競技会場と実施競技：ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場(シーン型)、グリニッジ・パーク馬術競技会場_馬場競技(シーン型)、同_クロスカントリー(シークエンス型)、市街地マラソン競技会場(シークエンス型)

シーン型五輪景観の競技会場についてであるが、競技選手の背景に周辺都市景観を映し出すために、観客席の形状の一部を開放化、低層化する必要がある。通常、観客席は観客が選手の迫力ある競技をなるべく近くで観戦するために、横に広がり、また観戦視野角

を確保するために高層化する傾向があるが、カメラによって映し出す競技映像には周辺都市景観が映し出されることを遮る壁となってしまう。それゆえ、調査事例となった2つのアリーナ型競技会場の観客席の形状は計画した。グリニッジ・パーク馬術競技会場のアリーナ北側には観客席が存在せず、そこから周辺都市景観を取り込んだ。また、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場の北側、南側、西側アリーナ観客席は2層だが、東側観客席だけは1層分のみとし、近景から遠景まで都市景観を取り込んだ。市内中心部に位置する競技会場は、隣地の周辺建物を近景、その奥にある建物、高層ビルなどを中景と遠景として重層的な都市景観を映し出しやすい。

例：HGP_01, HGP_03, HGP_04, GRP_DR-03, GRP_SJ-02,

シーン型五輪景観を生み出す競技会場では視点としてのカメラの位置が動かない原則を元にするれば、設定されるカメラポジションも重要である。会場全体を映し出すために、観客席上段の後方にカメラポジションを置くことで、背景としての都市景観が自ずとそのアングルには映し出される。選手と競技場(馬場やコート)は小さくなるので競技中の映像というよりも、競技の合間(競技前後、選手交代、タイムアウト)などに活用すれば周辺都市景観を競技会場の背景に映し出すことが可能となる。また、競技会場の上空に渡したケーブルカメラからの映像は競技会場や敷地の内部と外部を行き来することが可能となり、競技会場だけでなく周辺都市景観も一緒に上空から映し出すこととなる。周辺の都市環境における五輪競技会場の位置付けを確認することが可能となる。

例：HGP_07, HGP_08, GRP_SJ-01, GRP_SJ-02

また、ビーチバレーボール競技のようにその競技特性が都市景観を映し出すカメラワークに与える影響がある。その影響を最大限に活用するのが2024年にフランスの首都パリで開催される五輪である。パリ五輪ではビーチバレーボール競技会場をパリ市内のランドマークであるエッフェル塔の足元に建設予定であり、ビーチバレーボールをローアングルから捉える映像には常に背景にあるエッフェル塔という高層構築物が映し出すことになるだろう。

次に、シーケンス型五輪景観であるが、そのカメラワークの特徴としては、市街中心部を競技会場とする際、選手の背景となる都市景観は次々と場面転換する映像となる。バイクカメラのように選手と並走しながら競技する選手と背景の都市景観を映し出す。選手と同じ目線で競技速度もゆっくりと並走する場合、選手と都市景観を一緒に画面の中に

捉えることが可能となる。同様にコース沿いに設置したカメラは動きのある競技選手を適切なカメラワークで捉え、次の場所にあるカメラへと次々スイッチしていくことになる。定点カメラの連続でも、選手の背景にある都市景観が次々と場面転換する映像となる。

例：MLL_03, MLL_04, MLL_06, MLL_09, GRP_CC-05,

シーケンス型五輪景観を生み出す競技会場として、市街地などをその競技形式を周回コース(マラソン競技)や繰り返し(総合馬術クロスカンントリー競技)を選択することでカメラワークは大きく変わる。周回や繰り返しの競技形式だと、選手の走り抜ける場所を何度も映し出すことになる。バイクカメラで選手に並走する場合や沿道に設置した定点カメラから選手を映し出した場合、その背景の都市景観を何度も映し出すことが可能となる。クロスカンントリー競技の場合は一定の間隔で人馬が競技を実施しているが、マラソン競技の場合、先頭集団、後続集団など分散する際には、沿道の定点カメラのスイッチングの対応だけでなく、複数台のバイクカメラを並走させることでそれぞれの集団とその背景の都市景観を映し出す機会が増えることになる。また、この周回コースによる競技を複数回映し出すことは、ライブ中継かつスポーツという不確定要素の多い競技中継の撮影条件を補完することにもつながる。

例：MLL_05, MLL_07, MLL_08, MLL_11, GRP_CC-01, GRP_CC-02,

最後にシーケンス型五輪景観というシームレスな都市空間の映像を選手の背景に映し出すためには、選手を追跡するカメラが必要となる。市街地を競技会場とする場合、追跡カメラとして採用されているのが、バイクカメラ、ヘリカメラ、ケーブルカメラ、そしてクレーンカメラである。それぞれの特徴を考察として以下に整理する。

バイクカメラはシーケンス型五輪景観を映し出す際に最もふさわしい。選手と並走でき、最も選手に近い場所のカメラポジションで選手と同じ目線で都市景観をシームレスに映し出すことが可能となる。バイクカメラを虫の目線とするならば、ヘリカメラによる映像は鳥の目線である。コース上空に飛ぶヘリコプターに設置されたカメラの映像は都市空間の中を走る選手を上空から映し出す。上空からの映像は都市空間そのものを競技会場とするなかで競技する選手を映し出す。

バイク(の荷台)に乗ったカメラマンが競技する選手に並走する形で撮影する方法のため、選手をほぼ同じ目線で画面の中心に捉え、その背景にある都市景観は前後もしくは左右に一連の流れとなって映し出される。また、選手を正面から捉え、並走すれば、都市

景観はパースペクティブに背景に流れ、選手を背後から画面に捉え、並走すれば、迫りくる都市景観をカメラは映し出す。競技する選手の背景にシークエンスな流れのある都市景観を映し出すことが可能となる。シークエンス型での活用が主になり、都市景観は選手の背景に自然と映し出される。

- 競技会場と実施競技：市街地マラソン競技会場(シークエンス型)

ケーブルカメラ(ヘリコプターカメラも含む)も一連の流れをシームレスに映し出すことに相応しいが、その映像は競技する選手を映し出すのと同時に競技会場を設置した敷地の都市軸などを意識させることも可能となる。ケーブルに設置したカメラからの映像なので直線的な動きのカメラワークとなり、都市軸などケーブルを設置した場所と動きの意味を映像から映し出すことが可能となる。の周辺都市環境(軸線など)の効果的な演出方法が得られる。グリニッジ・パークの馬術競技会場のクロスカントリーコースは公園内を縫うように設定され、そのコースの一部は仮設の馬場アリーナも通過する。その際、馬場アリーナへの入場口は敷地である公園の軸線(グランド・アクシス)上にあり、人馬が馬場アリーナに走りこんでくる姿を上空に渡されたケーブルカメラから捉えた。敷地である公園の軸線上は、クイーンズハウスやグリニッジ大学の中心をシンメトリーに貫いており、同軸上に設置した馬場アリーナは仮設建築物ながらも同列に配置されていることを、上空に渡されているケーブルカメラからの競技映像で意識させている。

クレーンカメラより更に上空からの映像となり、画面に映し出される選手の姿は小さくなる。鳥の目線による中継映像には、画面には競技会場と都市景観が大きく映し出される。更にカメラが吊り下げられるケーブルの設置位置が都市環境や敷地環境などの軸線に沿っているのならば、敷地のある都市環境をより意識した映像が映し出すことが可能となる。シークエンス型での活用が主となるが、上空からの映像に都市景観を映し出すためには、観客席を開放もしくは低層化する必要がある。

- 競技会場と実施競技：グリニッジ・パーク馬術競技会場__馬場競技(シーン型)、同__クロスカントリー(シークエンス型)、市街地マラソン競技会場(シークエンス型。ヘリコプターカメラも含む)

クレーンカメラは、シーン型五輪景観で考察したように、原則定点カメラではあるが、クレーン部が動くことで、上下前後左右とシームレスな映像を撮影することが可能である。

前後左右の動きは他のカメラワークで補完できるが、上下移動、また上下前後左右をシームレスに滑らかに動くカメラによる映像はクレーンカメラならではの映像を生み出す。それは選手のアイレベルの映像と選手の上空の映像の間を行き来できることから、競技会場である都市空間における競技する選手の位置付けを確認することができる。

また、クレーンカメラは地面に固定したクレーンの土台を軸に回転するアームの先に設置されたカメラを操作して、選手を映し出すので、カメラワークは回転軸を中心に回転しながらの上下前後左右の動きとなる。上下の動きは、地面と上空の間となり、虫と鳥の間、選手視線と都市視線の間を一連の動きとして映し出す。前後の動きは、定点カメラのようにカメラと選手の距離の変化によって、画面に映し出される選手と背景の都市景観の割合も変化する。左右の動きは、前後の動き同様に、選手とカメラの距離を変化させるもので、画面に映し出される都市景観の映像が移り変わる。以上、上下前後左右の3つのカメラワークで解説したが、実際の動きの土台の軸を中心に複合的なもの(斜めなど)によって選手と都市景観を映し出す。シーン型、シークエンス型にも活用できるが、シーン型で背景に都市景観を映し出すには、観客席を開放もしくは低層化する必要がある。また、上下への動きが可能である特性を生かし、選手の足元などのローアングルからカメラの映像で上空に都市景観を映し出す必要がある。

- 競技会場と実施競技：ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場(シーン型)、グリニッジ・パーク馬術競技会場__クロスカントリー競技(シークエンス型)、市街地マラソン競技会場(シークエンス型) 例：MLL_01, MLL_02, MLL_10, GRP_CC-03, GRP_CC-04,

¹ 前掲、OLYMPIC MARKETING FACT FILE (2020 EDITION), pp. 30

² 前掲、進士五十八(1986), 「5. まとめ」, pp. 87

³ 岡本太郎(2005), 日本の伝統, 光文社, 「中世の庭」, pp. 194

⁴ 前掲、西沢文隆(1975), 「借景」, pp. 324-330

⁵ 土工学大系 13 景観論(1977), 彰国社, 「2. 景観体験と景観の操作(篠原修)」, pp. 75

⁶ 前掲、篠原他(2021), 「日本庭園の様式：枯山水の庭」, pp. 334

⁷ 五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:ビーチバレーボール 女子予選プールC チ

エコ VS オーストリア 開催日：2012/7/2 開催場所：ホースガーズパレード

<https://www.youtube.com/watch?v=kiFA1p-a9hA>

⁸ 五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:マラソン(男子) 開催日：2012/8/12(大会 16 日目) 開催場所：市内中心部(ザ・マル発着)

<https://www.youtube.com/watch?v=gFNfvY775Qo>

⁹ 前掲、London View Management Framework(2012), pp. 18-19

¹⁰ 五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:馬術 開催日：2012 年の以下の日付 開催場所：王立グリニッジ・パーク

五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:馬場馬術競技(8/9)

<https://www.youtube.com/watch?v=2VdW-19jBIk>

五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:障害馬術競技 A(8/8)

https://www.youtube.com/watch?v=QABaq8Qw_Es

五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:障害馬術競技 B(8/8)

<https://www.youtube.com/watch?v=4A0AhuJ4rU4>

五輪チャンネル・ロンドン五輪公式動画:総合馬術競技クロスカントリー競技(7/30)

<https://www.youtube.com/watch?v=mpMD0t-vqCk>

第6章

五輪景観の創出・発信のためのプロセス

- 6.1. はじめに
- 6.2. 計画検討期間(1997年～2003年)
- 6.3. 招致活動期間(2003年～2005年)
- 6.4. 開催準備期間(2005年～2011年)
- 6.5. 競技会場建設期間(2011年～2012年)
- 6.6. 大会開催期間(2012年)
- 6.7. まとめ

6. 五輪景観の創出・発信のためのプロセス

6.1. はじめに

本章では、前章までで得られた考察の流れ、1章：ロンドンの都市特性、3章：五輪景観を生み出す競技会場に至る大会コンセプト、4章：五輪景観を生み出す競技会場の敷地選定と観客席のデザイン、5章：五輪景観を生み出す競技会場のカメラポジションとカメラワークを期間ごとにまとめる。すなわち、五輪招致を検討した計画検討期間から選手が競技会場で競技する大会開催期間までの計画・実現プロセスにおいて、どの段階で、誰が、何をすべきであるかという要領で、「都市景観を映し出す五輪」から「五輪景観を生み出す競技会場」へとコンセプトが発展し、計画がより具体的になる中で、「五輪景観」の創出・発信のための計画プロセスの中でどのように一貫通貫しているか整理した。

ここで、改めて、プロセスを区分割けして検証する理由を確認する。開催都市は五輪招致が決定すると開催に合わせて大会のインフラ整備を限られた時間の中で実行しなければならない。しかし、五輪はスポーツイベントであるが、同時に地域の様相を大きく変える都市開発の側面を持つ。であるならば、招致決定してからの7年というのは、都市開発の計画と実現を実現する時間としては短い(序章の背景で説明したように、ロンドン五輪以降、IOCは開催都市決定を選挙方式から対話方式へと変更している)。また、開催費の多くは開催都市の自治体や開催国の政府の公金活用に頼っており、それゆえ、責任の所在もあいまいになる。五輪開催という明確な締め切りが設定されることは、様々な思惑から進展しなかった都市開発を推し進めるという良い面がある一方、五輪開催が免罪符となり、間に合わせるため多額の費用を掛かってしまうという悪い面が出てしまう。それゆえに、大会から計画から実現に向けた経緯を期間ごとに検証していくことは非常に重要であると考えた。

特に、五輪計画の根幹となる招致計画を策定する時期の、計画検討期間と招致活動期間においては、発行されたロンドン五輪招致計画にまつわる公式資料をまとめ、「都市景観を映し出す五輪」に関する記述と概要を整理した。

6.2. 計画検討期間(1997年～2003年)

ロンドン五輪でのコンセプトの根幹になる「都市景観を映し出す五輪」という考え方は、BOA(英国五輪協会)がロンドン市での開催を検討し始めた計画検討期間から既に構想されていた。以下、計画検討期間内の時系列に沿って解説する。

1990年代初頭に、BOAはIOC委員からの助言でロンドン市での開催を決定し、五輪開催の可能性を検討する委員会を設立した。この検討委員会設立から、招致委員会設立までが計画検討期間(1997年～2003年)とするが、ロンドン市や英国政府への五輪開催への情報共有と支援を求める段階であった。ただ、ロンドン市での夏季五輪招致の成功の可能性を検討する資料には既に「都市の性格」¹として検討項目としている。またこの時期はロンドン市内のどの地区をメインスタジアムにするか、選手村の場所などを検討し、まとめていた。しかし、国内の情勢や、IOCが選択する開催都市の傾向(同じ大陸から2大会連続で開催都市が誕生しない)などへの読みから、ロンドン市は立候補する大会を2012年の夏季五輪へと定める。

2000年に発行されたロンドン五輪計画の根幹となるBOAレポートには、東ロンドン地区ストラトフォードを選手村やメインスタジアムを含むメインパークと計画し、市内中心部に計画する競技会場の敷地として王立公園であるリジェンツパークやハイドパークを選定していた。この頃から既にロンドン市の資産である「都市景観を映し出す五輪」の輪郭が浮かび上がっている。

また、総合エンジニアリング会社 Arup(アラップ)によるロンドン五輪の実現可能性を検証したレポートに掲載されているように、英国政府の観光政策に対して寄与するという招致計画を作ることで政府の協力を確約する。Arup レポート内の8章「費用対効果の定量化(Quantified cost and benefits)」²では、ロンドン五輪を招致したことによる効果について検証し、特に「観光産業の発展(Growth in tourism)」について言及していた。

以下に、この計画検討期間に発行されたロンドン五輪招致計画にまつわる公式資料をまとめ、「都市景観を映し出す五輪」に関する記述と概要を整理した。

6.3. 招致活動期間(2003年～2005年)

つづく、2003年に招致委員会が設立されてから2005年の招致成功までを招致活動期間(2003年～2005年)とする。ロンドン招致委員会は、明確なコンセプトとして「都市景観を映し出す五輪」を打ち出し、立候補都市申請書や招致ファイルを作成した。そこには、ロンドン市内の特徴的な場所を競技会場の敷地とし、提案内容も具体的に表現していた。以下、招致活動期間内の時系列に沿って解説する。

招致委員会の設立当初、IOCが発行したIOCレポートを読み込み、テレビを意識した五輪の開催を目指しているIOCの思惑に対応する形で、大会コンセプトとして「都市を映し出す五輪」と、そのコンセプトを具現化するために、競技会場の敷地を立候補都市申請書や招致ファイル内に記述した。

策定した招致計画のなかには、競技会場の敷地として、世界遺産である王立公園(グリニッジ・パーク馬術競技会場)やセキュリティの厳しい首相官邸裏の広場(ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場)を選定し、招致計画の目玉となった。また、招致ファイルには、更に具体的に敷地特性のある競技会場だけでなく、その背景に映し出されるランドマークに言及し、さらにその映像は世界中の視聴者に向けたものであると提案している。

シーン型五輪景観を生み出す競技会場の敷地として、王立公園や広場など適切な規模の公共空間を選定したことに注目する。これらの敷地には軸線や歴史背景などの特性があり、その敷地特性を積極的に取り込むことで、形態的にも意味的にも開催都市ロンドンへ繋がる文脈のある競技会場が計画されている。また、シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場の敷地としては、世界的な観光都市として様々なランドマークが点在する市街地そのものを敷地とし、それらを巡る競技会場とした。

以下に、この招致活動期間に発行されたロンドン五輪招致計画にまつわる公式資料をまとめ、「都市景観を映し出す五輪」に関する記述と概要を整理した。

6.4. 開催準備期間(2005年～2011年)

招致を成功してから、実際に競技会場を建設するまでを開催準備期間(2005年～2011年)とする。この記事になると競技会場の、特に観客席の形状と、その配置を含めた検討がより具体的になり、周辺都市景観やランドマークへの指向性のある競技会場が提案される時期である。それらの計画は、建築事務所が会場毎に「競技会場計画概要書」としてまとめられる。以下、開催準備期間内の時系列に沿って解説する。

招致計画を元にした招致活動により開催都市の権利を獲得した直後から、7年後の大会開催に向けた実現と向き合うことになる。特に招致計画は招致を獲得するために、壮大な理想を掲げた計画になる傾向があり、限られた時間の中で理想と現実の狭間で実現可能な問題に直面することになる。特にロンドン五輪における競技会場の敷地は、世界遺産の馬術競技会場、首相官邸裏のビーチバレーボール競技会場などの特徴ある場所を選定したため、現実問題として、常に代替地を視野に入れながら計画を進めていた。例えば、原状回復を厳守しなければならない、王立公園を競技会場とするために、建築士はプラットフォームによる馬場を提案し、敷地規模などの制約から観客席の一部を開放もしくは低層化したことで、結果的に周辺都市景観への指向性を持つ形状になり、都市を見せるコンセプトがより明確化した。逆に、「都市景観を映し出す五輪」を実現するためには、映し出される周辺都市景観に魅力が欠けているという理由で、メインスタジアムをゴールとするコースから市内中心部を周回するコースへと開催2年前にして、競技会場敷地を変更した市街地マラソン競技会場の例もある。これらの例は都市景観を映し出す五輪には競技会場とその敷地選定が重要であったこと示している。

また、競技会場計画が具体的になるにつれ、OBSは組織委員会などにカメラポジションとカメラワークに関しては、競技会場を含めた大会計画を定期的にチェックしている。OBSは競技会場を含めた大会の映像の構成を策定する。それゆえ、競技会場の形態とその配置は、明確なランドマークへの指向性を持つことが重要となる。

シークエンス型五輪景観を生み出す競技会場としては、市街地にフェンスを設置することで競技会場とし、観客の見守る中を選手が走り抜ける。そして、景観的には、シーン型もシークエンス型五輪景観を生み出す競技会場からの映像景観は、LVMFで示された視点やランドマークを含んだ歴史的、文化的価値のある眺望景観との重なりがみられた。

6.5. 競技会場建設期間(2011年～2012年)

大会開催の1年前に、実際の競技会場を建設し、競技実施運営を確認するテストを兼ねたプレ大会のために競技会場を建設し始める頃から大会開催までを競技会場建設期間(2011年～2012年)とする。この頃になると、建築事務所が建設のための図面を作成し、それを元に敷地で会場を建設する。図面には、敷地内で競技会場の観客席が、周辺都市景観への指向性を持つ形状とその配置として記述されている。会場周辺環境を含む図面、敷地内での競技会場の配置を指示した図面(全体)と、競技会場内の一部に拡大した図面(部分)には、カメラポジションの指示も入る。以下、競技会場建設期間内の時系列に沿って解説する。

大会から1年前である2011年には、プレ大会に向けた仮設競技会場の建設および撤去がある。プレ大会のための競技会場は観客席の規模は本来のものより小さい。そして、2012年が明けると、既に競技会場敷地のある各行政自治区から建築許可の申請および承認されているため、いよいよ、敷地において建設作業が始まる。しかし、競技会場の敷地となる市内中心部の公園や広場などは多くの市民が日常的に活用しているので、敷地とその周辺を、建設現場や資材や機材置き場として使用するには、住民説明会などでの丁寧なコミュニケーションが不可欠となる。また、ロンドン市内や、敷地周辺は常時に様々なイベント、特に五輪開幕に向けた文化五輪イベントなども開催されるので、敷地そのものだけでなく、敷地への資材や機材搬入出への影響が出る。開幕直前の限られた時間で建設するには、夜間での作業などを視野に入れる必要があった。

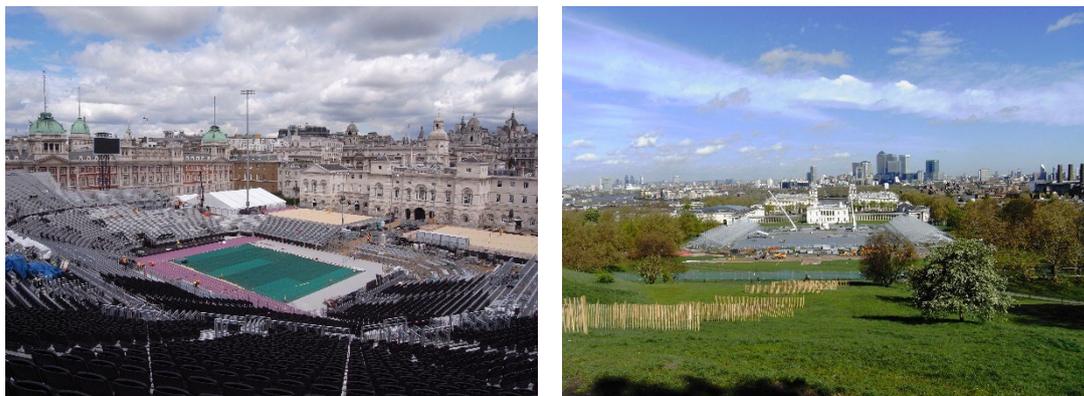


図 6-1 建設途中の様子
ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場(左)、
グリニッジ・パーク馬術競技会場(右)

6.6. 大会開催期間(2012年)

そして、五輪が開幕した後の大会開催時期には、カメラが競技する選手の背景に都市景観を映し出す五輪という、不確定要素の多いスポーツ中継において、競技する選手の背景に都市景観を映し出すために、その不確定要素の軽減が重要となる。そのために、繰り返し競技や、周回コースを設定することで、異なる選手や異なるプレーを映しながらも、その背景には周辺都市景観を映し出す機会を創出した。同時に、競技会場の観客席の形状を開放もしくは一部低層化し、開催都市の象徴となるランドマークへ指向性のある配置にしたことで、競技中継でありながら、都市景観を映し出す機会を増やした。

6.7. まとめ

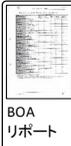
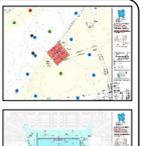
以上、「五輪景観」の創出・発信のための計画プロセスにおいて、一貫通貫している要素を期間ごとに整理したが、なぜ、五輪開催の計画から実現に掛けての長期間において、様々な関係者の関与する中、貫くことが可能だったのか。そして、貫くためにはどのような方法がとられたのか。その理由と方法を本章のまとめとする。

まず、各時期において一貫通貫できたのは、前提である五輪の意義を問い直したからであると考えられる。五輪開催を再開発の手段(東ロンドン地区再開発)としつつも、同時に、五輪中継を通して開催都市の魅力を発信する機会(ロンドン市内中心部の都市を映し出す競技会場)として捉えていた。それまでの五輪開催は戦後復興のような都市の再開発の手段としての意味合いが強かったが、インフラが整った都市で、それでも五輪を開催するという現代的かつ本質的な問いに対して、開催都市であるロンドン市や招致委員会は正面から向き合った。その答えとしてロンドン市は、五輪開催を都市の魅力を発信する機会と捉え、開催都市の固有の魅力(都市景観など)を活用した「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトにたどり着いている。そして、そのコンセプトを実現するための具体案として、競技会場を、都市景観やランドマークに指向性のある観客席の形状とその配置で計画・実現し、また、それを映し出し、発信するためのカメラポジションとカメラワークを計画・実現した。

このコンセプトと具体的な手法を、招致計画検討から大会実現までの長期に渡るすべての期間において、共通認識として様々な関係者間で共有され、すなわち、計画の拠り所となった。これが「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトの一貫通貫を可能にした要因であったと考えられる。

最後に、計画検討期間から大会開催期間までの主な出来事において「都市景観を映し出す五輪」にまつわる言説をまとめた。また、これらを図示すると以下のようにもなる。

表 6-1 五輪景観の創出・発信に向けた期間別の検討内容

五輪景観の計画・実現に向けた主な関連資料			発行される資料内の記述、表記などから、都市を意識した競技会場に関する言葉の変遷考察
3章 大会コンセプト立案	4章 競技会場デザイン	5章 カメラワーク	
<p>計画検討期間 (1997年～2003年)</p>   	他		<p>◆招致成功の指標 (Appraisal of successful bids : The winning cities for 1996, 2000, 2004) (1998/11/16) BOA(英国五輪協会)はロンドン五輪の招致成功を検証するために、過去の五輪(アトランタ五輪1996、シドニー五輪2000、アテネ五輪2004)の事例を検証する資料を作成した。項目として「都市の性格(City Characteristics, pp.6-7)」という3つの都市の性格を比較検討している。 ◆BOAリポート (BOA Report) (2000/12/15) BOAが作成したロンドン五輪の初期の計画書、競技会場の敷地候補地の一覧には Regent ParkやHyde Parkなどロンドン市全域などをしていている。 ◆アラップリポート (Arup Report) (2001/3/13) 総合エンジニアリング会社Arup(アラップ)はロンドン五輪の実現可能性を検証したリポートに作成した。8章「費用対効果の定量化(Quantified cost and benefits)」では、ロンドン五輪を招致したことによる効果について検証し、特に「観光産業の発展(Growth in tourism)」について言及。 開催約15年前から、ロンドンにおける五輪開催の可能性についてBOAが主導し、検討を開始している。直近の招致成功都市の特徴を把握し、競技会場を計画し、開催都市であるロンドン市の資産である都市を舞台にした五輪という大会コンセプトを構想していたことが伺える。また、都市を舞台にした五輪はアラップリポートで言及したように、観光政策に寄与する提案にもなり、英国政府の支援を取り付けた。</p>
<p>招致活動期間 (2003年～2005年)</p>   	他		<p>◆五輪調査委員リポート (Olympic Games Study Commission Report) (2003/7) IOCは高騰する開催費を検証する資料を作成。テレビ中継を意欲した五輪として、「五輪放送の拡大と発展は、世界的な大会へと押し上げ、大会の情熱とドラマと壮大さを、世界最大数の視聴者のリビングルームへ届ける」の記述している。 ◆立候補都市申請書:1次審査 (Response to the questionnaire for cities applying to become Candidate cities to host the Games of the XXX Olympiad and the Paralympic Games in 2012) (2004/1/15) ロンドン五輪招致委員会がIOCに招致立候補の意志を表明する「立候補都市申請書」には、「都市を昇せる、という表現と、それを具現化する競技会場として市内中心部の王立公園や市内広場など注目度の高い場所を競技会場の敷地を記載している。 ◆招致ファイル:2次審査 (London 2012 Candidate City: Candidature File Official bid file of London for the Summer Olympic Games in 2012) (2004/11/15) 1次審査を終ったロンドン五輪招致委員会が作成した招致ファイルには、大会ビジョンを体现するテーマとして、以下のように、都市を映し出す五輪の計画により具体的に記述している。 ・IOCとオリンピック・ムーブメントへの支援」として、テレビ中継を意欲した五輪開催・「コンパクトで、象徴的な、交通の便の良い会場」として、街のアイコンであるランドマークを背景とした競技会場 開催約9年前に設立したロンドン五輪招致委員会が策定した招致計画のなかで、IOCが推進するテレビ中継を意欲した五輪を支持する大会コンセプトとそれを具現化する競技会場の敷地を選定した。ロンドン市のランドマークでもあり、世界文化遺産である王立公園(グリニッジパーク馬術競技会場)や市内中心部の首相官邸裏の広場(ホースガーズパレード・ビーチパレーボール競技会場)など特徴ある場所を敷地とする競技会場は、招致計画の目玉となった。</p>
<p>ロンドン五輪2012 決定(2005/7/6)</p>	他		
<p>開催準備期間 (2005年～2011年)</p> 	他		<p>◆競技会場計画概要書: Design and Access Statement for the London 2012 Equestrian and Modern Pentathlon events Greenwich Park (2009/11)、Design and Access Statement for the London 2012 Olympic and Paralympic Games Beach Volleyball and Road Events at Horse Guards Parade, St James' s Park and The Mall(2010/10) 招致成功後に、発行される競技会場の概要書は建築事務所がLOCOGを代表し、制作する。各敷地内で都市景観を映し出す競技会場の配置とその形状が決められている。 開催約7年前に招致に成功すると、組織委員会と建築事務所は競技会場を本格的に検討し始める。そのなかで、観客度が都市景観への指向性を持つ形状とその配置により、敷地の抱える課題に対し、常に代替地を視野に入れながら計画を進めていた。逆に、映し出される周辺都市景観の魅力が欠けているという理由で、開催の約2年前にコースを変更したマラソン競技会場の例もあるなど、都市を映し出す五輪というコンセプトがより明確化されていた。</p>
<p>競技会場建設期間 (2011年～2012年)</p>  	他	他	<p>◆図面: beach volleyball, horse guards parade, Enlarged Venue Plan Overlay & Operations Arena Seating Bowl Level, Detailed Design, Drawing No.POP-A-O-BV-XX-HGP-PL-200, rev.B03 (図面_全体) (2010/2/26)、equestrian & mod.pen., greenwich park, Site Plan Overlay & Operations Detail-Arena Area, Detailed Design, Drawing No.POP-A-O-EQ-MZ-GRP-SP-00-100, rev.B08 (図面_部分) (2009/12/16) など 競技会場を建設するために必要な建築設計施工図面を建築事務所が作成、発行する。会場周辺環境を含む図面、敷地内での競技会場の配置を指示した図面(全体)と、競技会場内の一部に拡大した図面(部分)には、カメラポジションの指示も入る。 開催の約1年前には、建築事務所が競技会場敷地のある各行政自治体から建築許可の申請・承認の資料とともに、施工図面を作成する。また、市民が利用する公園や広場を敷地とするため、建設実施前には、住民説明会において注目度の高い場所を競技会場敷地とする意義など、丁寧なコミュニケーションが不可欠となる。また、夜間での建設作業などを視野に入れるなど、開幕直前の限られた時間で建設する必要がある。</p>
<p>大会開催期間 (2012年)</p>			<p>五輪が開催すると、カメラがシーン型競技会場内から競技する選手の背景に周辺都市景観を映し出し、選手と並走するシークエンス型競技会場でも、同様に映し出す機会を創出した。 スポーツ中継という、不確定要素の多い中継において、様々なアングル、繰り返しによる撮影の機会を創出するための競技会場の計画・実現することで、競技する選手の背景に都市景観を映し出すことを可能とする。</p>

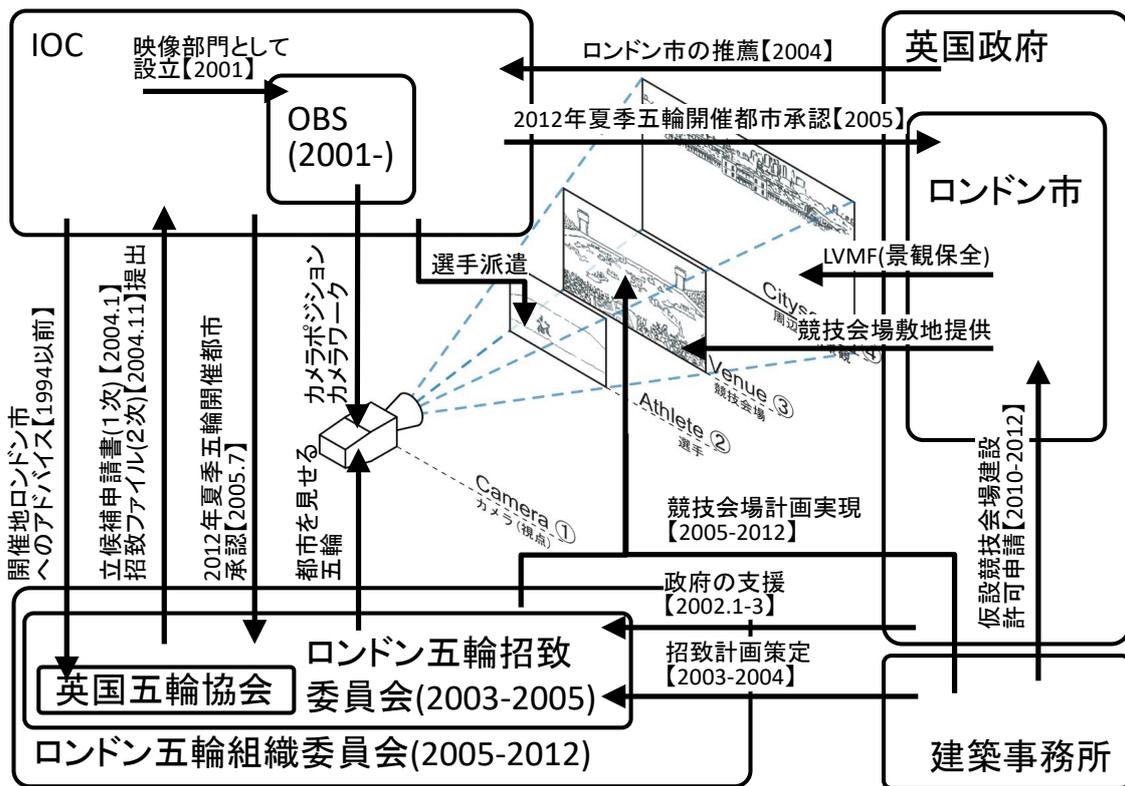


図 6-2 「五輪景観」の創出・発信に至る関係者の関与とその経緯

¹ Appraisal of successful bids : The winning cities for 1996, 2000, 2004, City Characteristics(1998), pp.6-7

² 前掲、Arup リポート, pp.6

第 7 章

結論

- 7.1. 各章の要点
- 7.2. 限られた時間の中で多くの関係者をまとめる大会コンセプト立案
- 7.3. 都市構造の特徴を余すところなく取り込んだ競技会場計画
- 7.4. 建築のナカからソトの都市景観を映し出す競技会場計画
- 7.5. 今後の五輪における競技、放送に貢献する五輪景観

7. 結論

本章では、本研究の結論として以下のようにまとめた。まず、ロンドン五輪では、その五輪招致を目指す都市（ロンドン市）と国（英国政府）の五輪委員会が立案する招致計画において、「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトが共有され、これが、大会招致や競技会場の選定から計画・設計（とりわけ観客席の配置や形状）、そしてカメラポジション・カメラワークの設定に至るまで、「都市景観を映し出す五輪」、そして「五輪景観を生み出す競技会場」へと具体的に発展していき、一貫通貫していたことで、限られた時間における各計画プロセスにおける関係者の拠り所となった(7.2.)。くわえて、招致の早い段階から広場や公園、そして眺望景観など都市空間の構造の特徴を読み込み、それを積極的に各競技会場の計画・設計に活かした(7.3.)。また、ロンドン五輪では競技会場内にカメラを設置し、ソトである周辺都市景観を競技する選手の背景に映し出していた。これは「自撮り」による「映える」都市景観の中継映像を生み出す競技会場を計画・実現していたと言える(7.4.)。そして、最後に、開催都市の象徴的な景観を取り込んだ注目度の高い映像としての「五輪景観」が、とくにマイナー競技や、都市文化のなかで育まれてきたアーバンスポーツ等の新競技の普及促進という点において、今後有用性が増してくることを展望した(7.5.)。

以下、本研究の結論を反映した五輪景観ダイアグラムを図示する。その後、各節において結論の詳細をまとめる。

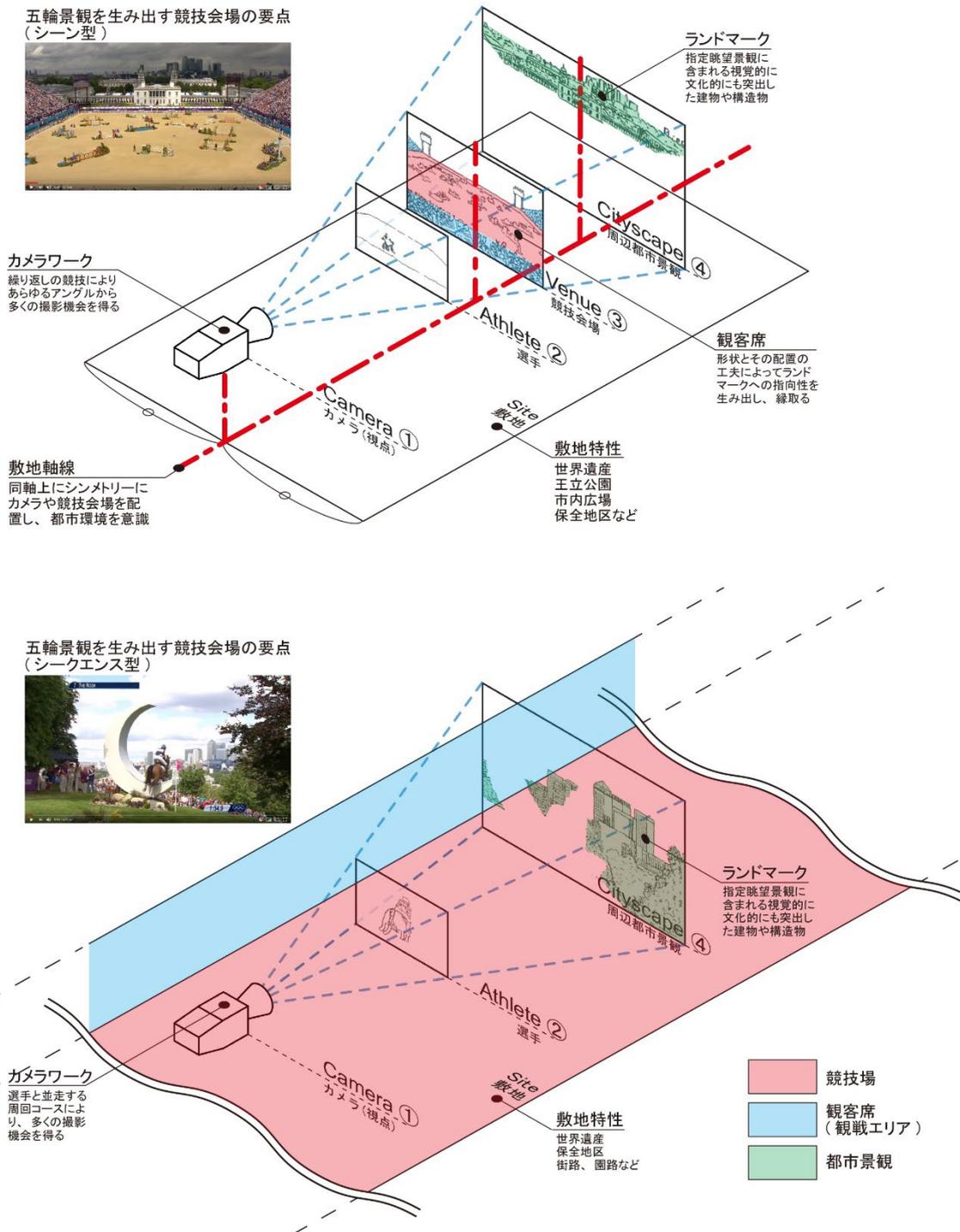


図 7-1 五輪景観の創出・発信に向けたダイアグラム

7.1. 各章の要点

それぞれの事象の要点をまとめる前に、前章までの要点を以下にまとめる。

序章では、五輪招致・開催にかかる費用などの課題とともに、大会のテレビ放映権料が高騰していることから IOC は映像を意識した五輪を推進していることを解説した。このような五輪の現代的な課題と思惑を巧みにとらえたのが 2012 年のロンドン五輪を紹介した。

また、研究目的は、ロンドンの都市空間の構造と「五輪景観」との対応関係や、関係者の役割に着目し、ロンドン五輪における大会招致から実施のプロセスのなかで、いかにして「五輪景観」という概念が生み出され、競技会場の計画・設計、そしてテレビ中継のなかで、それが実現したのかを解明すること、とした。そして、五輪の開催計画や競技会場の計画・設計、都市開発、都市景観、カメラポジション・カメラワークの決定に至る一連のプロセスに着目した研究はないことを整理し、ここに本研究の新規性を見出した。

第 2 章では、まず、借景を代表する景観研究における五輪景観の位置付けを整理し、次に、様々な周辺都市環境との調和を実現している競技施設の実例を挙げ、空間的構造を概観した。そして、五輪競技会場を研究対象として、選手、競技会場、都市景観の各要素をテレビカメラによって重層的に映し出す映像を「五輪景観」と定義し、公式記録動画等から、まず「都市景観を映し出す競技会場」を抽出し、更にロンドン眺望保全計画の指定眺望景観に重なり、ランドマークも映り込んでいる競技会場を「五輪景観を生み出す競技会場」として抽出した。

第 3 章では、大会招致から実施計画立案の段階において、「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトがいかにして生まれ、それがロンドン五輪における各競技会場においてどのように反映されたのかを、過去の五輪大会との比較や、ロンドン五輪の全競技会場の特徴把握から解明した。招致検討期間には、大会コンセプトとロンドン東部ストラトフォード地区をメインパークとして敷地選定をした。また、公式記録写真等において、背景に都市景観を取り込んだ競技会場が既存のロンドン眺望保全計画において保全対象となっている、すなわち都市の歴史的・文化的価値が認められる「五輪景観」に相当するものを抽出し、事例調査の対象をここから選出する。

第 4 章では、「シーン型五輪景観」に該当する五輪競技会場の計画から実現に至る経緯において、開催都市ロンドンや競技団体、そして建築設計関係者が、敷地の空間的特性や周辺の都市景観をいかに読み取り、それを競技会場の建築計画・設計のなかで、いかに

「五輪景観」を生み出したのかを明らかにした。前提として、都市保全に取り組んできたロンドンの強みとして、都市を象徴する景観や、競技会場程度の敷地規模を持つ公園や広場の存在があった。その上で、大会コンセプトの構想とそれを具現化するための競技会場敷地の選定を行い、競技会場の周辺都市景観のランドマークへの指向性を持った観客席の形状や配置といった建築計画・設計レベルでの工夫が行われた。

第 5 章では、競技する選手と競技会場の背景に映し出された都市景観について、カメラがどこから、どのようにして映し出したのか、公式記録動画におけるカメラポジションとカメラワークの調査・分析から解明した。その際、借景技法によって景観を繋ぐという社会的意義の観点から五輪景観の構造を読み解いた。招致計画期間から開催準備期間にかけて、OBS と設計事務所が調整し、計画したカメラポジションとカメラワークによって、シーン型およびシークエンス型五輪景観を生み出す競技会場において、様々な競技特性の映像に対して異なるカメラワークで競技する選手とその背景の都市景観を映し出していた。

第 6 章では、前章までの知見を踏まえて、五輪の招致から開催、そして競技実施のプロセスにおいて、「五輪景観」の創出・発信のための計画プロセスを一気通貫した理由と方法をまとめた。その結果、インフラが整った都市で、それでも五輪を開催するという現代的かつ本質的な問いに対して、ロンドン市は、五輪開催を都市の魅力を発信する機会と捉え、開催都市の固有の魅力を活用した「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトにたどり着き、その具体案として、競技会場計画・実現と、それを映し出し、発信するためのカメラポジションとカメラワークを計画・実現している。

第 7 章では、本研究の結論として、まず、招致計画において、「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトが共有され、これが、大会招致や競技会場の選定から計画・設計、そしてカメラポジション・カメラワークの設定に至るまで、一気通貫していたことで、各計画プロセスにおける各関係者の拠り所となったことを確認する。さらに、招致計画から広場や公園、そして眺望景観など都市空間の構造の特徴を読み込み、それを競技会場のナカに設置したカメラで、競技する選手の背景にあるソトの都市景観を映し出す各競技会場の計画・設計に活かしていることも整理する。そして、マイナー競技や、都市文化のなかで育まれてきたアーバンスポーツ等の新競技の普及促進という点において、今後有用性が増してくることを展望する。

7.2. 限られた時間の中で多くの関係者をまとめる大会コンセプト立案

ロンドン五輪では、その五輪招致を目指す都市（ロンドン市）と国（英国政府）の五輪委員会が立案する招致計画において、「都市景観を映し出す五輪」という大会コンセプトが共有され、これが、大会招致や競技会場の選定から計画・設計（とりわけ観客席の配置や形状）、そしてカメラポジション・カメラワークの設定に至るまで、一貫通貫していたことで、各計画プロセスにおける各関係者の拠り所となった。各時期において一貫通貫できたのは、五輪開催を再開発の手段（東ロンドン地区再開発）としつつも、同時に、インフラが整った都市では、テレビ中継を通して開催都市の魅力を発信する機会（ロンドン市内中心部の都市を映し出す競技会場）として、五輪を捉え直していたからであると考えられる。そこで、開催都市の固有の魅力（都市景観など）を活用した「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトにたどり着き、その具体案として、競技会場を、都市景観やランドマークに指向性のある観客席の形状とその配置で計画・実現し、また、それを映し出し、発信するためのカメラポジションとカメラワークを計画・実現した。このコンセプトと具体的な手法を、招致計画検討から大会実現までの長期に渡るすべての期間において、共通認識として様々な関係者間で共有されたことが「都市景観を映し出す五輪」というコンセプトの一貫通貫を可能にした要因であったと考えられる。

（1）五輪景観の創出・発信するための関係者の役割

本研究で探求してきた五輪景観を生み出す競技会場を計画・実現するために必要なプロセスモデルを関係者である4者、IOC、組織委員会、行政（政府、開催都市）、建築事務所、の立場から整理する。

まず、大会組織委員会である。五輪景観を生み出す大会と競技会場を計画・実現するためには招致計画を立案する時期が非常に重要になる。組織委員会の前進になる招致委員会は主に政府、開催都市、開催国の五輪協会から構成されるが、その開催都市の都市インフラが十分に整備している中で五輪を招致するのならば、その五輪開催は都市の再開発を筆頭とした利益を生み出すイベントとして捉えるのではなく、プロモーションの重要な機会であることを認識する必要がある。

招致に成功すると、その瞬間から大会開幕までの“7年”という締め切りに向けて計画を実現する必要がある、十分な検討する時間もままならずに実現してしまうことがある。また、限られた時間の中で実現するための経費もかかる。さらに招致計画段階における開

催への費用は IOC や開催都市の市民への安心材料として計算するために安く見積もっていることが実現段階になって露見するのは多くの招致に成功した都市で見られる。それゆえに招致計画を入念に立案することが重要になる。

しかし、開催都市の負担軽減を後押しする方式が IOC から提案された。開催都市を決定するプロセスが従来の選挙方式(ロンドン五輪 2012 はこの方式)から大きく変わり、立候補都市は招致計画だけでなく、IOC との対話も非常に重要になる。しかし、これは選挙方式でも優れた案と言うのは開催都市や国家にとって良いことを五輪に求めるのではなく、主催者である IOC にとっても利点がある提案(ロンドン五輪では招致ファイルに五輪憲章やオリンピック・ムーブメントへの寄与を明確に提案していた)を考えれば、対話方式もその時点で IOC 求めている点をうまく引き出しつつ、開催都市への利益となる招致案を立案できると考える。しかも、開催都市の決定する時期もこれまでの 7 年と言うルールも撤廃され、時間に余裕を持って、招致計画から実現計画へ移行し、計画に向き合うことが可能となる。

次に建築事務所は、招致計画から関与するが、IOC や IF などが要望する競技会場の質や要求する観客収容人数などの設計と条件や、注目される大会の持続可能性を実現するための競技会場計画(既存施設活用、仮設競技会場の新設、明確な後利用計画のある恒設施設の新設)を満たしつつ、大会組織委員会が考える、開催都市における競技会場を含めた、五輪関連施設の位置付け、すなわち大会コンセプトを具現化することが求められるだろう。競技会場は単に選手が競技を実施し、観客が観戦する場所だけではなく、競技会場そのものが大会コンセプトのメッセージになっているというような考えを招致計画の段階で招致委員会に集まる関係者とともに議論していくことが重要になると考える。

そして、開催都市であるロンドン市の五輪への関与であるが、五輪招致を望む都市には、五輪を招致することが再開発の機会を生むと考えているが、五輪招致がその都市の再開発にうまく寄与した例は、既に再開発計画があり、そこに五輪を招致することでその計画を早まった。まさに五輪招致と実現が触媒としての機能するのを期待するべきである。同様に成熟した都市において五輪を招致する意義とは問い直し、既に開催都市に誇れる都市の価値(ロンドンの場合は LVMF など指定されていた都市景観など)を、五輪という世界が注目するイベントにおいて発信する機会と認識する必要がある。そのためには日頃から自らの都市における価値が何であるかを認識していることが重要になる。

最後に、IOC の関与である。招致が決める際に IOC は決める側であるが、近年の立候補

都市の減少を受けて、今後の持続可能な大会開催と運営を実現するために招致プロセスをこれまでの選挙方式から対話方式に変更した。2032 年夏季五輪の開催地としてオーストラリアのブリスベンがこの対話方式で決まったが、立候補都市が次々と辞退し、最後の 2 つの都市として残ったパリとロスアンゼルスで 2024 年と 2028 年で開催権を分け合ったように既に対話は始まっていた。今後もこの対話方式で招致都市を決定していくのならば、IOC も立候補都市の世界に誇れる価値をソトの目線で指摘し、招致計画立案、そして決定してからも共に磨き上げていくことが、開催都市にとっても五輪招致が単に都市再開発をもたらすものとは異なる利益をもたらすと認識するだろう。そして、それがひいては持続可能な五輪開催となり、4 年ごとに世界の都市に一流のアスリートが集まり、世界の人々をテレビなどのスクリーン内で繰り広げられるスポーツの熱戦で結びつけ、平和をもたらすという五輪開催当初の思想に立ち返る機会になるはずである。

(2) プロセスモデルを計画・実現するために必要なこと

前節では、各組織におけるプロセスモデルを整理したが、五輪が都市スケールではなく、もはや国家スケールのスポーツイベントになっている今日の状況を振り返ると、実現に向けて多くの関係者が関わる前段階、すなわち初期計画としての IOC に五輪招致へ立候補の意志を示すための資料としての立候補申請書と招致計画の位置付けが重要であると言える。その点、2012 年の夏季五輪に立候補したロンドン市は当初から、明確なビジョンを描いていたと言える。市内東部地区の再開発と共に、市内のランドマーク、公園、広場などを都市の資産として、認識し、競技会場の敷地や背景として活用すると明言していた。また、それら都市の資産を活用した五輪計画は、持続可能な五輪開催と共に、映像を意識した五輪を目指していた IOC の目論見と合致しており、開催によって得られるものを自らの要望だけでなく、IOC にとっても利点のあるものとして招致計画を立案していたことが、激戦と言われた 2012 年の夏季五輪の招致レースに勝利を収めた結果であり、それがそのまま大会を成功に収めた理由となった。

ただ、他の立候補都市がそうであるように、五輪開催権が得たいために、招致計画は多分に開催費用などの金額も低く見積もるだけでなく、野心的、壮大かつ理想論を振りかざす傾向がある。しかし、ロンドン五輪は、その初期計画を実現していくのに、当初の壮大かつ理想の計画を維持しつつ、実現していくための鍵が組織運営であると考えた。それぞれの業界で意識の高い関係者が登場するだけでなく、組織の縦割りの意識から抜け出し、

横断的に思考し実践する意識がなくてはならない。そのためのチームビルディングやコミュニケーションスキルを求めた。例えば、ロンドン五輪において、大会組織委員会と大会関係者全体にまたがって、プロジェクト・プランニング・マネジメント（PPM）として統合するチーム設立がカギとなった。

「適切な人が適切な問題について議論し決断を下すために、適切な時に適切な場所にいることが大切である。」というのが、このチームのスローガンであった。公式レポートには、関係者の組織内の縦割りの思考を打破するために結成されたチームの意義や、関係者の意識改革だけでなく、それを促すための仕組みづくり、組織づくりなど、このチームが実施したことなどの詳細が「ステークホルダーとの一体的な取り組み(Integrated working with stakeholders)」¹として記載してある。同様に、五輪計画・実現する際に必要な組織などについても公式レポートの「統合的に実現する(Integrated delivery)」²として言及するなど、大会計画立案および、それを実現するためには適切な組織づくりが必要である。

7.3. 都市構造の特徴を余すところなく取り込んだ競技会場計画

本節では、招致委員会が、招致の早い段階から広場や公園、そして眺望景観など都市空間の構造の特徴を読み込み、それを積極的に各競技会場の計画・設計に活かした経緯を以下にまとめる。

まず、都市空間の構造の特徴の読み込みであるが、五輪景観を生み出す五輪競技会場の計画・実現のためには、前提として、観客に見せるべき、あるいは世界に発信すべき、開催都市の歴史や文化を象徴する都市景観の価値が共有され、保全されている必要がある。また、このような景観を望む視点場が、競技場の面積要件を満たす敷地規模を持つ公園や広場であることも重要である。これは、まさに中心部に大規模な公園・緑地を有し、同時に都市保全に取り組んできた街並みを残すロンドンの強みであったと言える。同時に市街地そのものをコースとすれば、競技する選手の背景には開催都市の都市景観が映し出されるのは自明であるが、映し出られるランドマークなどの歴史的、文化的な重要度を把握しておく必要がある。ロンドン五輪の競技会場の特徴として、競技する選手コートや馬場の周囲を観客席で囲うのではなく、観客席の一部を開放したり低層化したりする競技会場であった。IOC や IF の要望する観客収容人数との兼ね合いがあるだろうが、開放すればほど開催都市の都市景観を映し出すことが出来る。その観客席をすべて開放した競技会場が、都市そのものを競技会場とした市街地コースと言えるだろう。

このような開催地特有の都市の特徴を積極的に取り込んだのが、ロンドン五輪競技会場の建築的特徴であったが、五輪開催規模の肥大化に伴い、仮設競技会場を活用するメリットは経済的側面³や環境的側面だけでなく、他にも施設立地・建設の潜在的な候補地の拡充や五輪景観の創出可能性を高めることにも繋がることになった。その結果、期間限定で周辺環境に負荷をかけない仮設建築物は敷地としての都市公園、王立公園、さらには市街地そのものを五輪競技会場とした。また、都市保全のある都市で五輪のような都市型イベントを開催する利点としては、映し出される美しい景観の存在だけでなく、保全された都市軸や敷地軸があることで、仮設の簡易な建築物だとしても、シンメトリーに配置することで象徴性を取り込むことが可能となる。また、仮設建築物だからこそ、敷地与条件に深く取り込んだ建築物になりえたと言える。

本研究では日本庭園における借景構造を五輪景観分析の枠組みとして参照したが、西洋の公共空間の特徴であるシンメトリーの都市構造において、前庭(競技場)、塀・垣(観客席)、借景(周辺周辺景観)を取り込むというのは、和と洋の借景構造の融合といえる。

また、本研究では景観をシーン型とシーケンス型と分けて考えたが、シーケンス型五輪景観は、街路をコースとする一般的なマラソン競技と同様に、選手の背景に都市景観が映り込むことになるので、五輪が生み出す景観とは言い難い。一方で、シーン型五輪景観は、多くの競技を同一都市で短期間に実施する五輪ならではの景観となる。すなわち、マイナー競技や新採用競技の普及促進のために注目度の高い場所を敷地とした競技会場において、競技する選手の背景に都市景観を映し出すことになる。

その上、五輪景観を構成するカメラによる視点やランドマークなどの視対象の存在は、五輪期間中の放送と五輪後にアーカイブされる映像体験によって、都市プロモーションという五輪の新たな役割を見出すことや、開催都市の都市環境の価値を高めることにつながる。また、ロンドン五輪では、相対的にマイナー競技である馬術やビーチバレーの競技団体が、競技への注目度を高めるような五輪景観を生み出す競技会場を歓迎したように、競技の普及促進という点においても効果が期待される。それゆえ、競技会場の注目を集める手段として保全されている都市構造を敷地とすることが大会や競技促進における重要なコンテンツになっている、すなわち「都市保全が促進を生み出した(Urban prevention for promotion)」といえる。

7.4. 建築のナカからソトの都市景観を映し出す競技会場計画

このように、近年、建築をプロモーションの手段として捉える傾向が見られる。それはインターネットメディア、特にソーシャルネットワークサービス、通称 SNS の台頭により、「SNS 映えする建築」が求められている。建築におけるメディアの優位性が叫ばれているが、その方法を示したのが本研究の成果であると言える。しかも、五輪という世界が注目するイベントに寄り添うメディアを意識した五輪競技会場といえば、スターアーキテクトを起用したメインスタジアム(アテネ五輪 2004 や北京五輪 2008 の例など)を想起させるが、それとは異なる「SNS 映えする建築」としての五輪競技会場としての建築とその映像の事例を示した。これは、建築を単体と捉えているのではなく、都市景観のような周辺環境の一部として捉えていることを問い直している。

また、この競技会場のナカに設置したカメラで、競技する選手の背景にあるソトの都市景観を映し出す手法は、スマートフォンを手にした腕を伸ばし、インカメラで自らとその背景を「映えるように」映し出す「自撮り」という撮影手法と類似している。近年は動画撮影が手軽になり、「自撮り棒」や「ジンバル(手ぶれ補正ツール)」などで、自らを被写体に観光地などで動画や写真を映し出す人を多く見かけるが、ロンドン五輪は 2012 年の時点で「自撮り」による「映える」都市景観を中継映像として生み出すための競技会場を計画・実現していたと言える。

また、近年、莫大な設備投資が求められる五輪開催は敬遠される傾向にあり、また、そのような開催に向けた投資を行えるのは限られた先進都市に限られてしまう。すなわち、十分な都市インフラが整った都市開催に限られてしまう。2020 年東京、2024 年パリ、2028 年ロスアンゼルス、2032 年ブリスベン、とインフラが整備された先進都市での開催予定が続いている。そのような先進都市における新しい競技会場計画としては仮設建築物による競技会場というのは理にかなっている。

7.5. 今後の五輪における競技、放送に貢献する五輪景観

そして、最後に、開催都市の象徴的な景観を取り込んだ注目度の高い映像としての「五輪景観」は、マイナー競技や、都市文化のなかで育まれてきたアーバンスポーツ等の新競技の普及促進を推し進めるだけでなく、今後も技術革新をしつづけるカメラなどの撮影装置や、スマートフォンなどの視聴環境にとって、今後有用性が増してくることを展望した。

(1) 新採用競技のアーバンスポーツとその競技会場への五輪景観の貢献

2021年に開催された東京五輪では、アーバンスポーツが注目された。持続可能な五輪開催を目指すIOCは、若い世代を取り込むためにスケートボード、スポーツクライミングなどのアーバンスポーツを新競技として採用した。とくに都市の文化として誕生し、成長してきたアーバンスポーツも市街地そのものを競技会場とするので、周辺環境も含めて映し出すという五輪景観の概念や存在は、競技特性や魅力を最大限に引き出すのではないかと考える。また、アーバンスポーツだけでなく、新採用競技の普及促進という点においても、五輪景観を構成する開催都市を代表するような競技会場敷地のカメラによる視点やランドマークとなる視対象の存在は、五輪期間中の放送、そして五輪後にアーカイブ化される映像を通じて、競技への注目度を高めることに貢献することが期待される。



図 7-2 東京五輪に新しく採用されたアーバンスポーツ競技会
自転車 BMX フリースタイル競技会場(左)、
スポーツクライミング競技会場(右)

(2) 技術革新をしつづける撮影装置や視聴環境にも貢献する五輪景観

本研究はカメラポジションとカメラワークの観点から五輪景観の成り立ちを考察してきたが、進化し続けるカメラ機材によって映し出される、新たな競技映像としての五輪景

観が生み出されるのも期待できる。

現在も、既にカメラは選手をあらゆるアングルから被写体として撮影し、その背後に開催都市の都市景観を映し出しているが、競技する選手の安全、集中などに配慮し、距離を置いている。しかし、カメラの小型化に伴い、より臨場感のある競技映像を映し出すために、競技器具の一部にカメラが設置されたりしている。そうであるならば、近い将来、選手にカメラが設置されるならば、そこから見る映像景観にはどのような都市景観が映し出されるだろうか。

また、本研究では、都市を俯瞰的に見るためのカメラとして、クレーンカメラ、ケープカメラなどを取り上げたが、ドローンによる中継映像も安全性などの条件が担保されれば、市街地でも建物の高さの空間を縦横無尽に飛び回り、選手の表情が見える距離を飛び、その先に俯瞰した都市景観を映し出すことが可能となるだろう。

また、技術革新が続くのは視聴環境においても同様である。2003年に発行された五輪開催の持続可能性を検証するIOCレポートには「五輪はテレビを通してリビングルームへ届ける」とあったが、今後はスマホなどデバイスは更なる技術革新が進み、それに伴い視聴環境も変化し、五輪はリビングルームから手のひらへ、となるのが日常になる日は近い。だとするならば、限られた画面サイズに映るわかりやすい競技スタイル、短い競技時間で勝負が決まるという競技が新しく採用されていくと考えられる。事実、間のスポーツと言われる野球やソフトボールは延長戦にタイブレーク方式を採用し、競技時間の短縮を果たしてるにもかかわらず、ロンドン五輪2012から五輪競技から除外された⁴。このように、3時間近くにおよぶ間のスポーツに対して、東京五輪から採用されたスポーツクライミング競技は短い時間⁵での競技を繰り返し行われた。7人制ラグビー、バスケットボール3x3も、短い時間の競技時間を繰り返し行う。スマートフォンによる動画視聴の時間とその環境を考えれば、新採用競技の短い競技時間は親和性が高い。スマホ視聴の主役である若い世代には訴求力のある競技選択と考えられる。手のひらのスクリーンで、短い時間で、しかもタップすれば次の画面に切り替わる視聴環境で、五輪競技の中継映像を映し出すのならば、開催都市が瞬時に把握できるランドマークや都市景観が映し出される五輪景観を採用することが非常に重要になると考える。

¹ 前掲、公式レポート 3 巻(2013), pp.110-111, “ステークホルダーとの一体的な取り組み(Integrated working with stakeholders)”として、ロンドン五輪を計画・実現するための組織のあり方、取り組み方の意識について以下のように言及している。

ステークホルダー・リレーションは、定期的な IOC および IPC のプロジェクト・レビューの内容をまとめ、必要なコミュニケーションを促進し、またすべての主要なデリバリー・パートナーとの関係を管理する責任を負った。これには、当初は LOCOG やロンドン五輪 2012 プログラム全体のスケジュール、リスク、問題を管理することが必要でした。

LOCOG とロンドン五輪 2012 プログラム全体のプロジェクト・プランニング・マネジメント (以下、PPM) を統合するという決定が重要でした。「適切な人が適切な問題について議論し決断を下すために、適切な時に適切な場所にいることが大切である。」というのが、このチームのスローガンであった。

LOCOG と政府との間に必要な関係は、時間とともに成熟していった。政府の担当者を組織委員会の中に組み込むことで、主要関係者間の信頼とコミュニケーションの文化が生まれた。

計画の初期段階での大きな課題は、大量に発生したの文書を意味のあるものに変換することでした。まず、この膨大な情報を上級職員が容易に理解し、対応できるような形で提示し、さらに、これらは、明確さを維持し、それらの対応を確実に記録、追跡、対応できるようなシステムに適合させる必要があった。

この戦略では、プロセスからリスクや問題に焦点を当て、大会運営が計画よりも実行モデルに重点を置くことで、半自主的に運営できるようにすることが必要でした。主なリスクと問題は何か？ どのようなアクションが現在発生し、もしくは発生する必要があるか？そして、誰がその担当するのか？これらの情報はすべて 1 ページの文書にまとめられ、LOCOG と政府の上級職員が集まる会議の議題となった。

LOCOG と London 2012 のために PPM を統合したことによる、もう一つの重要な成果は、すべての関係者間で、誰が関係者にいるのか、なぜ彼らは重要なのか、の意識を高めたことです。それ以前は、組織内に縦割りの考え方があったが、大会を可能な限り効果的に実施するために、私たちが望む統合的な計画アプローチを可能にするために、これを打破する必要があった。

PPM は、すべての利害関係者間で統合された計画を確立し、プログラムを成功裏に終わ

らせるために必要な政府、IOC、IPC との良好な関係を確立するために不可欠な役割を担いました。そのためには、政府内で信頼される人物が率いる経験豊富なスタッフが必要であり、将来的にはできるだけ最高経営責任者の近くに位置づけられるべきものであった。

(略)

統合的 PPM 組織の最終的な利点は、ロンドン 2012 の経済的レガシーに積極的な関心を持つことができるようになったことである。組織が首相に質問し、議題にすることができたのは、以下のようなものでした。「大会期間中、誰が経済的なレガシーを管理しているのか？関連する官庁は十分な仕事をしているのか？どのようにまとまっているのか？」政府と組織委員会にまたがることで、このような重要な問題を中心的な計画に取り入れることができた。

² 前掲、公式レポート 3 巻(2013), pp. 127, “統合的に実現する(Integrated delivery)”として、ロンドン五輪を計画・実現するための要諦を以下のようにまとめている。

--リーダーシップ：これに時間をかけること。大会組織委員会が大会に至るまでに経験するさまざまな局面で、リーダーシップが何を意味するかを理解する。刺激を与え、力を与え、認める。これは長い道のりである。毎年 2 倍の規模になることを考えると、管理職と中間管理職のチームが優れたリーダーである必要があり、彼らが組織の発展に合わせて他のメンバーを育成することができる。

--大会を実現するために実現組織を構築する：大会の準備期間である 7 年の間に、計画段階と実施段階を経て、組織は劇的に変化する。招致担当者と新しい担当者を融合させ、専門家を招聘する。これは、パートナーや関係者にとって重要な信頼となります。計画に対する信頼と信用は、大会前の準備段階でも最も重要です。

--高スキルのまとめ役：組織委員会は、すべての実現にむけた中心であり、プロセスを通してまとめ役として、すき間を調べ、最適なパートナーシップを特定し、関係を仲介する。IOC 以外に素晴らしい大会を実現することに気を配る人はいない。他の多くの人は他のことを気にしつつ、実現していますが、組織委員会は指揮者になる一つのことに集中します。

--官民連携：大会を開催する上で非常に重要である。大会組織委員会はこれを支持し、この 2 つの組織が幸せに共存できるような仕組みと環境を作り出さなければならない。

--内外の関係や連携は運用可能なものにしなければならない。特に、大会期間中に競技を実現するために、職員を部門別チームから会場別チームに動員し、訓練し、配置するためには、大会の運営要件を反映した適切な組織構造を持つことが必要である。この「ひと

つのチーム」によるアプローチこそが、継続的に実現する唯一の方法である。物理的にも比喩的にも、できるだけ早くひとつのチームを作り、計画、テスト、準備の段階を経て、それを実現に移す。

³ 前掲、Pound, Richard (2003), 表紙裏の扉頁 3.1 Review, Olympic Games Study Commission, Report to the 115th IOC Session, p.10, (Olympic review, April 1911, pp 59-62 の仏語原書)

⁴ 2020 年の東京五輪では日本において人気スポーツであり、開催都市による採用競技ということで野球とソフトボール競技が実施された。しかし、正式に五輪競技に戻ることはなく、2024 年のパリ五輪で実施されず、それ以降の五輪でも再採用は決定していない。

⁵ スピード競技に至っては 10 秒である。

参考資料

資料 1__都市景観を映し出す競技会場の映像分析

資料 2__ロンドン五輪レガシー現地調査 2018 概要

資料 3__ロンドン五輪レガシー現地調査 2019 概要

参考資料

資料 1__都市景観を映し出す競技会場の映像分析

ロンドン五輪における IOC による公式記録映像(五輪チャンネル)を解読し、全競技会場 36 か所から、競技する選手の背景に「都市景観を映し出した競技会場」として以下の 15 か所を抽出した。それぞれの競技会場の主な競技映像にどのような都市景観が映し出されていたのか映像分析を行った。

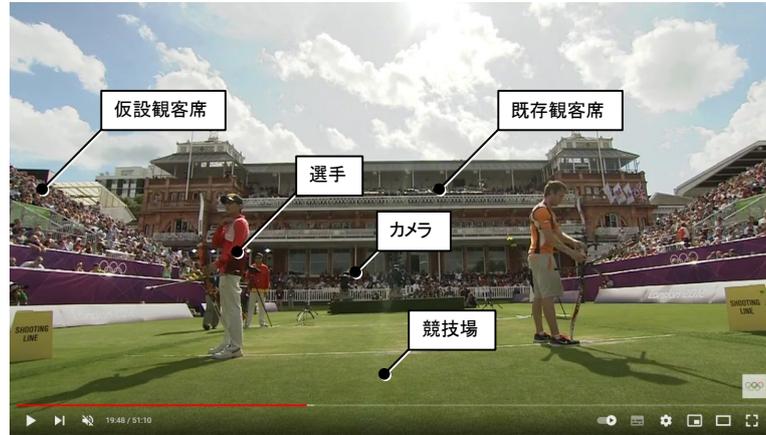
シーン型 都市景観を映し出す競技会場

		
<p>Archery Lord's Cricket Ground</p>	<p>Beach Volleyball Horse Guards Parade</p>	<p>Canoe Sprint & Rowing Eton Dorney</p>
		
<p>Cycling, BMX Olympic Park BMX Track</p>	<p>Equestrian, Jumping & Dressage Greenwich Park</p>	<p>Hockey Olympic Park Riverbank Arena</p>

シーケンス型 都市景観を映し出す競技会場

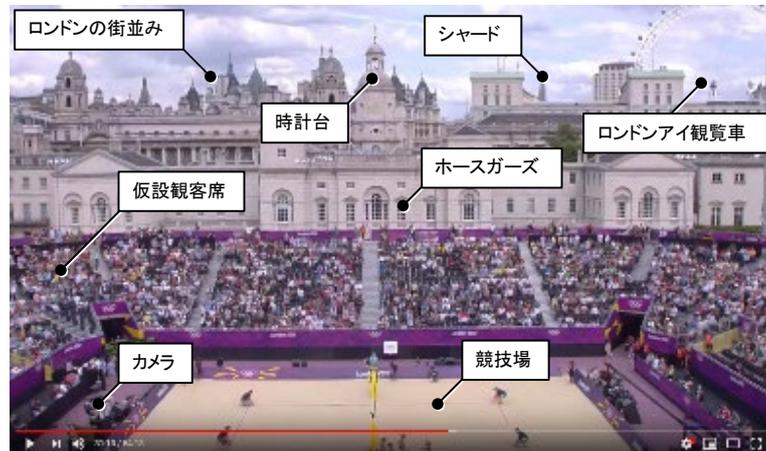
		
<p>Athletics, Marathon The Mall (London's streets)</p>	<p>Athletics, Race Walk The Mall (London's streets)</p>	<p>Cycling, Mountain Bike Hadleigh Farm</p>
		
<p>Cycling, Road The Mall, Hampton Court Palace, etc</p>	<p>Equestrian, Eventing(Cross-Country) Greenwich Park</p>	<p>Modern Pentathlon Aquatics Centre, Greenwich Park, etc</p>
		
<p>Open Water Swimming Hyde Park</p>	<p>Sailing Weymouth and Portland</p>	<p>Triathlon Hyde Park</p>

アーチェリー シーン型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Archery
競技会場名	Lord's Cricket Ground
概要	クリケット競技の聖地、ロード・クリケット場に屋外型仮設競技会場を設置した。既存観客席スタンドの上部に浮かぶ幾何学形態のメディアセンターとレンガ造のビクトリアン観覧席を結ぶ線を挟み込むように観客席を設置したことで、敷地の軸線を意識しつつ、クリケット場内外の周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	敷地中央軸の軸線上にある観覧席ビクトリアンパビリオンに設置したカメラからメディアセンターを正面に映し出す
競技会場の形状とその配置	敷地中央軸の軸線を挟み込むように観客席を設置することで、メディアセンターを正面に周辺都市景観を縁取った
主なランドマーク、周辺都市景観	Media centre, Victorian Pavilion, etc

ビーチバレーボール シーン型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Beach Volleyball
競技会場名	Horse Guards Parade
概要	王室の式典などが実施される市内中心部の広場、ホースガーズパレードに屋外型仮設競技会場を設置した。東側観客席を低層化したことで、周辺都市景観として、近景のホースガーズ、中景のロンドンアイ観覧車、遠景のシャードなどのロンドンのスカイラインを重層的に映し出した。
主な視点(カメラポジション)	敷地中央軸が走る西側観客席の上段に設置したカメラから東側の観客席上空から望む周辺都市景観を映し出す
競技会場の形状とその配置	敷地中央軸をシンメトリーにし、東側観客席を低層化することで、そこから周辺都市景観を縁取った
主なランドマーク、周辺都市景観	●Whitehall Court, ●Horse Guards, ●The London Eye, ●Shell Centre tower, ●The Shard, etc

カヌー&漕艇 シーン型 都市景観を映し出す競技会場



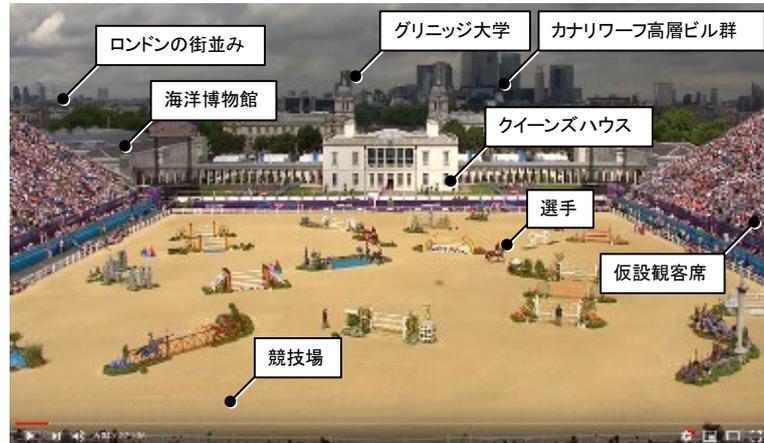
競技名	Canoe Sprint & Rowing
競技会場名	Eton Dorney
概要	自然保全地区にあるイートン校内の漕艇用湖のゴール付近に20000人収容の仮設観客席を建設し、それに加えて立見席として10000人収容可能とする競技会場である。スタート地点には観客席もなく、より多くの周辺都市景観を映し出している。
主な視点(カメラポジション)	競艇と並走して、競技する選手を映し出す。主に並走するカメラは沿岸からであり、ボートカメラ、ケーブルカメラ、上空からのカメラも競技する選手とその背景に周辺都市景観を映し出す。
競技会場の形状とその配置	仮設観客席は水路を挟んでゴール付近にされる。しかし、映像の多くは競艇を横からのアングルのために、ゴール付近に近づくと観客席が周辺都市景観を映し出す壁になってしまう。
主なランドマーク、周辺都市景観	Dorney Lake, Eton College Rowing Centre

自転車BMX シーン型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Cycling, BMX
競技会場名	Olympic Park BMX Track
概要	五輪メインパーク内に建設した恒設の屋外型BMXコースを挟み込むように6,000人収容の仮設観客席を設置し、そこから恒設の自転車競技会場ベロドローム、仮設のバスケットボールアリーナなどの五輪関連施設と周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	コース内に設置されたカメラで、コースを走り抜ける選手たちを映し出した。高所であるスタート地点の正面やゴールゲートの背景に隣接するベロドロームの曲線美が映し出される。
競技会場の形状とその配置	BMXコースを挟み込むように仮設観客席を設置し、その先にはベロドロームや仮設バスケットボールアリーナなど近隣の五輪関連施設が映し出される。
主なランドマーク、周辺都市景観	Velodrome, Olympic stadium, Orbit Tower, etc

馬術馬場 シーン型 都市景観を映し出す競技会場



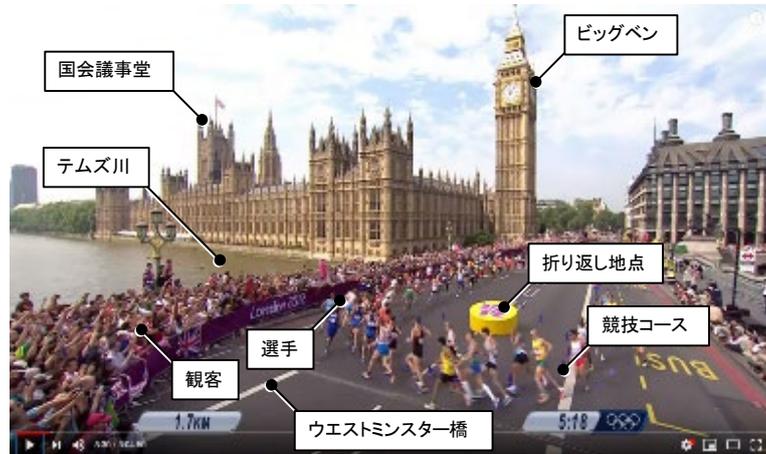
競技名	Equestrian, Jumping & Dressage
競技会場名	Greenwich Park
概要	緑が豊かで高低差のある王立公園は世界遺産に登録されており、敷地の軸線には周辺建造物がシンメトリーに並び、同軸上に屋外型仮設競技会場も設置した。競技場北側を開放することで近景のクイーンズハウス、中景のカナリワーフの高層ビル群、遠景のロンドン市街地の街並みなどを映し出した。
主な視点(カメラポジション)	南側観客席上段にカメラを設置し、開放してある北側の周辺都市景観を映し出す。
競技会場の形状とその配置	馬場の北側を開放することで、観客席は馬場を中心にU字型プランの形状で配置し、北側の都市景観を映し出す指向性がある。
主なランドマーク、周辺都市景観	●St Paul's Cathedral, ●Maritime Greenwich, ●The Queen's House, ●Tower Bridge, ●Millennium Dome, ●The Shard, ●Canary Wharf, etc

ホッケー シーン型 都市景観を映し出す競技会場



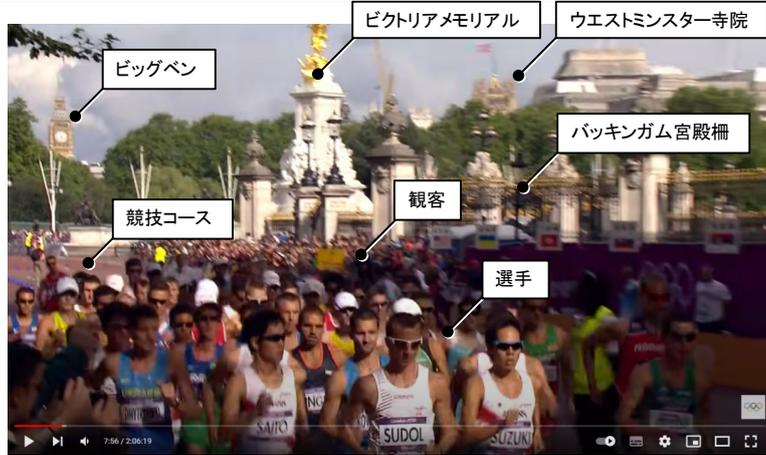
競技名	Hockey
競技会場名	Olympic Park Riverbank Arena
概要	五輪メインパーク内に16,000人収容の屋外型仮設競技会場を建設し、南側観客席を低層化することで、メーンスタジアム、オービット展望台、コッパーボックスなどの五輪関連施設と周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	競技会場の南側観客席を低層化し、また、南側にメーンスタジアムやオービット展望台が見えるために、北側観客席上段に設置したカメラで周辺都市景観を映し出した。
競技会場の形状とその配置	仮設競技場を囲うように観客席を設置するが、南側観客席を低層化することで、周辺都市景観への指向性を生み出した。
主なランドマーク、周辺都市景観	Olympic stadium, Orbit Tower, ●Canary Wharf, etc

マラソン シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



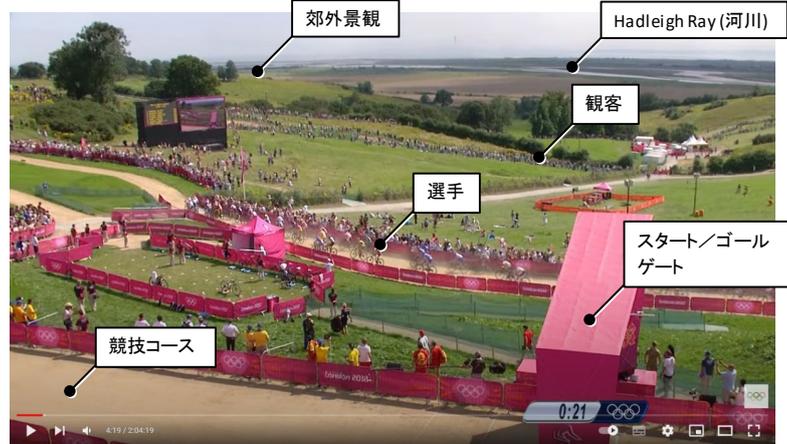
競技名	Athletics, Marathon
競技会場名	The Mall (London's streets)
概要	市街地を周回する仮設コースを設置し、市内の主要ランドマークを選手と並走しながら、その背景に映し出した。セントポール大聖堂、バッキンガム宮殿、ロンドンアイ観覧車などの近景、中景、遠景として映し出した。ビッグベンの前に折り返し地点を設置してクレーンカメラを映し出した。
主な視点(カメラポジション)	選手と並走するバイクカメラによって競技する選手とその背景の都市景観を映し出すが、コース上のランドマークとなる建物や景観の周辺にもカメラを設置して周辺都市景観を映し出した。
競技会場としての街の特性	市内中心部にマラソン競技会場として設置しているため、選手の背景には様々なランドマークや都市景観が次々と映し出された。また、スタート・ゴール地点であるザ・マルの沿道の両側には1,620人収容の仮設観客席を設置し、バッキンガム宮殿やクイーンビクトリアメモリアル(噴水)を背景に映し出した。
主なランドマーク、周辺都市景観	●St Paul's Cathedral, ●The London Eye, ●The Shard, ●Buckingham Palace, ●Queen Victoria Memorial, Tha Mall, ●Tate Modern, etc

競歩 シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Athletics, Race Walk
競技会場名	The Mall (London's streets)
概要	バッキンガム宮殿前のザ・マルを周回する仮設コースを設置し、周辺都市景観を映し出した。マラソン競技と比較して、設定されたコースの範囲はバッキンガム宮殿周辺のみであり、ビクトリアメモリアル噴水やウェリントンアーチを映し出していた。
主な視点(カメラポジション)	選手と並走するバイクカメラによって競技する選手と、周回コースはほぼバッキンガム宮殿であるために、ザ・マルなどのコース沿道にカメラを設置し、周辺都市景観を映し出した。
競技会場としての街の特性	周回コースはほぼバッキンガム宮殿周辺であり、ザ・マルの沿道の両側には1,620人収容の仮設観客席を設置し、バッキンガム宮殿やクイーンビクトリアメモリアル(噴水)への指向性を生み出した。
主なランドマーク、周辺都市景観	●Buckingham Palace, ●Queen Victoria Memorial, Wellington Arch, Tha Mall

自転車マウンテンバイク シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Cycling, Mountain Bike
競技会場名	Hadleigh Farm
概要	ロンドン市郊外であるエセックス州の高低差のある敷地に観客数20,000人の屋外型自転車競技会場を設置し、周辺景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	競技コースの沿道に複数台のカメラを設置し、選手とその背景に緑豊かな英国の郊外の風景を周辺景観として映し出した。
競技会場としての街の特性	高低差や起伏の激しい自転車競技の周回コースであり、観客はその沿道において立ち見で観戦する。一方でスタート/ゴール付近にメディア用の取材および放送用の仮設スタンドを設置した。
主なランドマーク、周辺都市景観	Hadleigh Castle Country Park

自転車ロード シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Cycling, Road
競技会場名	The Mall, Hampton Court Palace, etc
概要	ロンドン市郊外と市街地を周回する仮設コースを設置し、周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	自転車の乗って競技する選手に並走するバイクカメラからと、沿道に設置したカメラから選手とその背景に周辺都市景観を映し出した。
競技会場としての街の特性	沿道がそのまま観客席になっている。ザ・マルの沿道の両側には1,620人収容の仮設観客席を設置し、バッキンガム宮殿やクイーンビクトリアメモリアル(噴水)への指向性を生み出した。
主なランドマーク、周辺都市景観	●Buckingham Palace, ●Queen Victoria Memorial, Wellington Arch, The Mall, Hampton Court Palace

馬術クロスカントリー シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



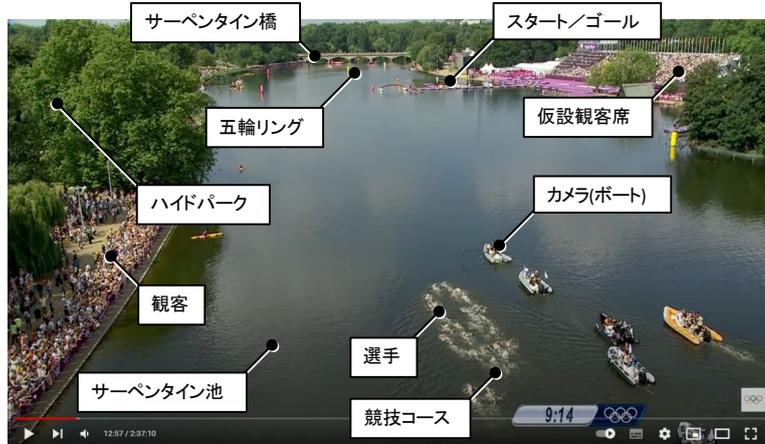
競技名	Equestrian, Eventing(Cross-Country)
競技会場名	Greenwich Park
概要	世界遺産である王立公園内を周回する全長6kmの仮設クロスカントリーコースを設置し、敷地内外の周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	コース沿道に設置したカメラが主に競技する人馬と背景となる都市景観を映し出した。敷地である公園の軸上に設置したケーブルカメラも競技する人馬と敷地の都市の中での位置付けを映し出した。
競技会場としての街の特性	仮設の馬場アリーナもコースの一部であるが、観客は主に公園の敷地内で立ち見で観戦する。高低差と起伏の激しいコースの沿道からは敷地内外の都市景観を映し出した。
主なランドマーク、周辺都市景観	●St Paul's Cathedral, ●Maritime Greenwich, ●The Queen's House, ●Tower Bridge, ●Millennium Dome, ●The Shard, ●Canary Wharf, etc

近代五種(レーザーラン) シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Modern Pentathlon
競技会場名	Aquatics Cntr, Greenwich Park, etc
概要	五輪メーンパーク内の屋内型競技会場でフェンシング(Copper Box)と競泳(Aquatics Centre)を実施した。また、世界遺産である王立公園の敷地に建設した仮設競技会場では、馬術と射撃&ラン競技を実施し、周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	射撃&ラン競技はアリーナ外を選手が走るので、その沿道にカメラを設置する。また射撃やランの一部をアリーナ内で実施するので敷地軸線上に設置されたケーブルカメラから競技会場の都市における映像を映し出した。
競技会場としての街の特性	高低差のある王立グリニッジパークで実施されるのは射撃&ランの周回コースであり、コースの一部であるアリーナ内に設置した射撃競技台は、アリーナの一部で開放された北側に向かって選手は撃っている。
主なランドマーク、周辺都市景観	●St Paul's Cathedral, ●Maritime Greenwich, ●The Queen's House, ●Tower Bridge, ●Millennium Dome, ●The Shard, ●Canary Wharf, etc

水泳遠泳 シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Open Water Swimming
競技会場名	Hyde Park
概要	王立公園内の池のほとりに2,600人収容の屋外型仮設競技会場を設置し、周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	競技場となる池で競泳する選手に並走するボート上からのカメラ、池の岸からのカメラ、ケーブルカメラ、そして上空からのカメラから都市景観を映し出した。特に水面に近い視点からの映像だと選手の背景に都市景観を映し出しやすい。
競技会場としての街の特性	ハイドパーク内のサーペンタイン池を競技場とし、池の水中を周回するコース設定とした。池のほとりに仮設観客席は設置したが、そこからの映像や、観客席によって縁取られる映像に都市景観が映し出されることはない。また、池の周辺に立ち見での観戦も可能とした。
主なランドマーク、周辺都市景観	Serpentine Pond

セーリング シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Sailing
競技会場名	Weymouth and Portland
概要	英国南部の世界遺産でもあるジュラシック海岸線を競技会場として、周辺景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	主に、競泳するボートを上空からのヘリコプターカメラで映し出し、並走するボートカメラ、もしくは、地上からのカメラによる映像で周辺景観である海岸線が映し出された。
競技会場としての街の特性	海洋上を競技会場とするが、観客席は海岸線となる。ヘリコプターカメラからの映像では、選手の周囲に海面のみが映し出され、地上からの映像では選手の背景に水平線のみが映し出される。一方で選手と並走するボートカメラからは美しい海岸線の景観が映し出される。
主なランドマーク、周辺都市景観	Jurassic Coastline

トライアスロン シークエンス型 都市景観を映し出す競技会場



競技名	Triathlon
競技会場名	Hyde Park
概要	王立公園内の池でスイム、市内中心部まで周回するバイク、公園内を走るランのための仮設競技会場を設置し、周辺都市景観を映し出した。
主な視点(カメラポジション)	スイム、バイク、ランでは、選手に並走するボートとバイクカメラが主な視点になる。また、コース沿道に設置したカメラによって競技する選手の背景に周辺都市景観を映し出す。他にも上空のケーブルカメラなどが選手を都市的視点で映し出した。
競技会場としての街の特性	スタート/ゴール/トランジション地点に2,600人収容の仮設観客席を設置したが、主な観戦場所はコースの沿道に立ち見観戦する。公園外ではバッキンガム宮殿を周回するバイクコースであり、公園内では池を周回するスイムコースと池の周囲を周回するランコースとなる。
主なランドマーク、周辺都市景観	●Palace of Westminster, ●Buckingham Palace, ●Victoria Memorial, Serpentine Pond, Wellington Arch, etc

資料 2__ロンドン五輪レガシー現地調査 2018 概要

調査期間：2018/11/24(土)～12/3(月) 合計 10 日間

調査場所：英国・ロンドン市・市内各所を視察

◆2018/11/24(土)：

日本・羽田空港から英国・ヒースロー空港へ午後到着

午後：ヒースロー空港から地下鉄でロンドン市内中心であるキングスクロス・セントパンクラス駅へ移動。キングスクロス・マスタープラン周辺を視察

◆2018/11/25(日)：

レンタルサイクルを利用し、ロンドン五輪マラソン周遊コースを視察

バッキンガム宮殿→ザ・マル(大通り)→トラファルガー広場→ロンドン・アイ(大観覧車)→テムズ川沿い→セント・ポール大聖堂→ギルド・ホール→イングランド銀行→リンデン・ホール・マーケット→タワー・オブ・ロンドン→モニュメント塔→テートモダン→ビックベン→バッキンガム宮殿

◆2018/11/26(月)：

グリニッジ公園視察、東ロンドン大学において文献調査

午前：王立グリニッジ公園(Royal Greenwich Park：馬術会場跡地)視察

午後：東ロンドン大学・ドックランズキャンパス(University of East London, Docklands Campus)図書館においてロンドン五輪招致資料を調査

◆2018/11/27(火)：

ロンドン市内 2 大再開発地区視察

午前：ロンドン五輪メインパーク跡地であるストラトフォード地区(Stratford)にあるクイーン・エリザベス・オリンピック・パーク(Queen Elizabeth Olympic Park)、視察。アライズ・アンド・モリソン・アーキテクト(Allies and Morrison Architects、以下 A&M 事務所)にイマッド・スレイビー(Emad Sleiby)氏による案内

午後：キングスクロス地区再開発計画(Kings Cross Masterplan)視察。A&M 事務所のアンティ・サンダース(Antje Saunders)氏による案内

◆2018/11/28(水)：

A&M 事務所などでヒアリング調査

午前：A&M 事務所の創業者グラハム・モリソン(Graham Morrison)とボブ・アライズ(Bob

Allies)氏にロンドン五輪レガシーやキングスクロス再開発計画について話を伺う

午後：A&M 事務所の五輪担当建築士だったエディ・テイラー(Eddie Taylor)氏とリアン・パターキン(Lianne Peterkin)氏に当時の話を伺う

夕方：ロンドン五輪でビーチバレーボール会場を担当建築士チン・ライ(Chin Lye)氏に当時の話を伺う

◆2018/11/29(木)：

ロンドン市内の交通インフラ視察

午後：地下鉄クロスレイル(Cross rail)新線、トッテナム・コート・ロード駅(Tottenham Court Road Station)視察。担当建築士リズ・ペイン(Liz Payne)による案内

午後：ハイ・スピード2(High Speed2:HS2)新線導入による改修工事の始まるユーストン(Euston)駅を視察。アラップ(Arup)構造技師マイク・ヘイウッド(Mike Heywood)氏による案内

◆2018/11/30(金)：

ロンドン五輪招致建築士ヒアリング調査、ロンドンブリッジ駅視察、会場跡地視察

午前：ロンドン五輪招致チーム立ち上げから関わった建築設計者のデレック・ウィルソン(Derek Wilson)氏に当時の話を伺う

正午：改修工事を経て、開業したロンドンブリッジ(London Bridge)駅を視察。電気設備技師であるデレック・フロスト(Derek Frost)氏による案内

午後：ホース・ガーズ・パレード(Horse Guards Parade：ビーチバレーボール会場跡地)広場を視察

◆2018/12/1(土)：

終日フリー、Heyward Galleryなど視察

◆2018/12/2(日)：

午前、英国・ヒースロー空港から羽田空港へ帰国

◆2018/12/3(月)：

午前、日本・羽田空港着

◆上記の現地調査は、本研究において貴重な情報を得る機会になっただけでなく、以下の媒体にまとめられている。

日経 XTECH ウェブ連載 ロンドンに学ぶ「五輪後の街づくり」 (2019/5/17～9/6 計 7 回)

第 1 回 レガシー計画で大変貌、ロンドン五輪会場跡地の今
五輪スローガン「次世代への継承」が都市再生の起爆剤に

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/040500001/>

第 2 回 五輪レガシー計画は失敗?! 立案者に真意を聞く
五輪大会計画と後利用計画の両立の難しさ

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/040500002/>

第 3 回 「大会後も稼ぐ五輪」という発想、都市景観を観光資源に
仮設競技会場の敷地選定がロンドン五輪の成功につながった

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/040500003/>

第 4 回 相互乗り入れで一極集中に対応、地下鉄整備に見る五輪レガシー
市内主要駅舎担当者に聞く (前編) トッテナム・コート・ロード駅

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/070100005/>

第 5 回 駅ナカ施設も誕生、交通インフラがロンドンの街を変える
市内主要駅舎担当者に聞く (後編) ロンドンブリッジ駅、ユーストン駅

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/071600006/>

第 6 回 21 世紀の IT 拠点に、大変貌遂げるロンドン中心部
磨かれた都市、キングス・クロス地区を歩く (前編)

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/080900007/>

最終回 都市を「磨け」、東京が目指すべき五輪レガシー
磨かれた都市、キングス・クロス地区を歩く (後編)

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/080900008/>

2019 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(選抜梗概 7022) (北陸 2019/9)

「五輪景観」を創出するための競技会場計画の設計手法とそのシティプロモーション ロ
ンドン五輪における市内中心部を敷地とした競技会場をケーススタディとして
pp. 49-52

建設通信新聞掲載(2019/9/18)

「森記念財団都市戦略研 ロンドンに学ぶオリンピック・レガシーの軌跡」

資料3_ロンドン五輪レガシー現地調査 2019 概要

2019年11月25日~2019年12月3日まで英国ロンドンを中心において実施したロンドン五輪に関するヒアリング調査で得られた結果を以下に記します。

◆2019/11/29

Chris Jopson(ロンドン五輪招致計画競技会場策定建築士)へのヒアリング調査

インタビューで得られた事実:

- Derek Wilson氏と共にロンドン五輪招致計画競技会場を計画した
- アーチェリー会場は当初メインパーク内にあった
- メディアセンターは当初メインパーク南側(メインスタジアム近く)にあったが、地中にクロスレイル地下鉄新線が通ることになり、北側(実現敷地)に移動した
- 招致計画では3つのマスタープラン。五輪大会時、レガシー時、招致不可時
- ザハ競泳場が当初、最終形規模の3倍だった理由。水球会場も同施設内にあったため。最終案として水球は仮施設で対応
- メインパーク内の競技会場の4つもロンドンの都市景観を取り込む設計にしていた。1つはホッケー会場でロンドン市内中心部に向かうスタンドだけ低く設計している。
→追加調査:メイン会場内でロンドンにいることを意識させる計画案とはホッケー会場以外では?(Derek Wilson氏によるとメインスタジアムも両脇にロンドンの街並みが遠景で臨めると言及)
- Doug Arnot(ロンドン五輪の Games Operation Director)がマラソンコース変更の決定を主導したのではないかと、しかし多くのステークホルダーが絡んでいる組織で一人が決定するという事はない。
- 見せる大会に OBS との共同作業があるはずという問いに対して“Broadcast design manual”というものがIOCのアーカイブにあるはず。
- ロンドン五輪大会を最初に調査したと言われている David Luckers 氏の構想から街を見せる大会というコンセプトはあった。

◆2019/11/26

Eddie Tayler(ロンドン五輪競技会場建築士/調査員の元上司)

インタビューで得られた事実:

- Jason Prior(キンクロ都市計画も担当)と Bill Hanway(Aecom 建築士)という二人のアメリカ人建築士がロンドン立候補を強くプッシュしていた→追加質問：この二人はロンドンに何をしていたと思う？ロンドンに何を期待していたと思う？
- 見せる大会に対してはOBSの権力というのは非常に強力で、多少いじめられていた感じ→笑いながら回答。その真意は敬意はあるがねというニュアンス。
- Venue bookは主要関係者にだけ配られていたらしい。非売品だが実在した。

◆2019/11/26

インタビュー対象者：Richard Brown(元ロンドン市長アドバイザー)

インタビューで得られた事実：

- ロンドン五輪にはロンドン市東部とロンドン市中心部の2つの側面がある
- ロンドン市は誰にアピールするのか？人か？テレビか？アスリートか？
- ロンドン五輪はRebrandの機会。ブランドの再構築
- バーミンガムやマンチェスターを経てロンドンで開催権を勝ち取った。IOCの当時の傾向として大都市を開催都市として選びたがっていた
- ロンドン東側は常に貧しい地区と言われていた。Lee Valleyにはオリジナルのプランがあった。カナリワーフやドックランドの再開発はロンドン東部地区開発の第1期として、五輪により東部地区開発は第2期と言える。
- ロンドン東部に注目を集める機会でもあった
- IOC最終プレゼンのイメージ動画でのロンドンとパリの違い。開催地組織委員会、国際競技連盟(IF)、開催地の市民⇄IOCや国際メディアでのアピールポイントを変えていたのではないか？
- 街の象徴的な場所や建物を見せるのではなく、次世代への五輪というコンセプトを打ち出していた
- 街の象徴的な場所や建物を見せていたらしい。
- 当時の英国首相トニーブレアは3日間もIOC最終プレゼンの開催地シンガポールに滞在してロビー活動をしたらしい
- 何をみせるか？英国は新しい英国を見せたがった、しかし世界は古い(歴史ある)英国を見たがっている。ソトの人間が捉えるロンドンは違う。
- 世界遺産のユネスコやイングリッシュヘリテッジは背景となる都市景観の変わりよう

に危機感を覚えている→追加調査：提供してくれたリンク先記事を読む

- Jason Prior 氏に近いところにいるとのこと。

◆2019/11/29

インタビュー対象者： Derek Wilson (ロンドン五輪招致計画競技会場策定建築士)

インタビューで得られた事実：

- 会場候補地を考えてロンドン招致委員会を説得して回る
- グリニッジ馬術会場はロンドン市を見せるためにU字型として、開放的なプランにした。クイーンズハウスがあった理由もあるが、都市を見せる競技会場プランが一番大きな理由であり、観客席のU字型は蹄型でもある。
- Derek Wilson 氏たちが立案した計画に対して専門家である ESG や Arena などが実現的かどうか検証したらしい
- Gilbert Felli 氏という IOC 建築士にプレゼンをして、好感触、好意的な反応があり。
- 限られた予算の中で、まちを見せる(あるものを活用する)というアイデアが生まれた
- メーンスタジアムですらロンドン市を見せるというアイデアが具現化している
- 当時のロンドン市長ケン・リビングストン氏や建築家リチャードロジャース氏にプレゼンしたら、まちを見せるというコンセプトはすぐに理解してくれた
- ギリシャは別にしてグリニッジ馬術会場はクイーンズハウスのお陰で世界最古の競技会場と言える
- Arup レポートに利益を上げる(Profit)、という項目。五輪は何かを生み出す
- 仮設会場の全会場の中でも割合を最終プレゼン(シンガポール)にいる上司に数値だけ伝える。仮設会場の採用率がパリよりわずかに多かった
- Derek Wilson 氏は当時 HOK+Lobb に所属していた
- 毎週木曜日に定例記者会見を実施。メディア向けに大会コンセプトを説明(同席していたのが PR 担当 John Zerafa 氏)
- 大会が終わり、皆好き勝手無いこと言っているけれど Mike Lee の著作は信頼に値するとのこと
- Mike Lee 氏亡き後、Vero Communications を継いだのは奥様の Dame Heather Rabbatts 氏
- 五輪計画をブラッシュアップしてもらった陰の立役者(unsung heros)として以下の3

人がいた。CABE のようにアイデアをより良いものとするために批評してくれる人たち。

- Nicolas Selota 氏@ODA (TATE modern director)
- Richard Burdett 氏@ODA (Architectural Critic, professor of Urban Studies at the London School of Economics and Political Science (LSE) and the director of LSE Cities and the Urban Age project)
https://en.wikipedia.org/wiki/Ricky_Burdett
- Paul Finch 氏
<https://www.architectsjournal.co.uk/paul-finch/272.bio>
- Thomas Heathwick を全体デザインアドバイザーとして起用を提案

◆2019/11/29(1回目)

インタビュー対象者： Jae Wong Bang (ロンドン五輪競技会場建築士／調査員の元同僚)

インタビューで得られた事実：

- 東京五輪の札幌マラソンの話から IOC との調整について話を伺う。平昌五輪でも同様のことが起こり、ビッグエアー(スノーボードジャンプ)も新競技として招致確定後に採用された。現場はどこに設置させるか思案したとのこと。
- 新競技採用に関しては観客収入と広告収入から賄い、差額が出たら IOC がカバー
- OBS(Olympic Broadcasting Service)は以下の3つの部門からなる。
 - テクニカル部門：放送、配線、カメラ配置など機能するかどうか調整など
 - プランニング部門：運営、電機技術、など
 - プロダクション部門：カメラ技術統括、など
- 映像の脚本はプロダクション部門のプロダクション部長が作る。どのように見せるか(how to show)、どこを見せるか(where to show)、いつ見せるか(when to show)、といういわば映像の脚本を考える人
- ロンドン五輪マラソンコース変更では運営と見えをチェックした。Peter Richardson 氏の下でマラソンコース変更の距離測定するなどサポートする役割をしていた
- Agenda2020 の存在。他の都市でも競技会場を開催できる、ゆえに IOC は東京五輪に

対してマラソン札幌案を押し進められた。

- ロンドンレガシー計画に対して良いコミュニケーションを取っていた
- Arena という会社が馬術会場の鉄パイプをリサイクルして、ゴルフ大会に再利用していた。

◆2019/12/2 (2回目、2019/11/29に続き追加インタビュー)

インタビュー対象者： Jae Wong Bang (ロンドン五輪競技会場建築士／調査員の元同僚)

インタビューで得られた事実：

- Jae 氏と平昌五輪との関り：2011年に平昌五輪の開催が決定。当時はロンドン五輪組織委員事務所でその報を知る。2013年7月末(ロンドン五輪から1年)に英国およびA&Mを離れ、8月初日に韓国、平昌五輪組織委員会入り。その間、わずか2日間の週末。
- OBSマニュアルというものが大会ごとに制作されている
- 競技の放送時間を決めるのはアメリカ時間と開催都市時間のプライムタイム(ゴールデンタイム)を基準にして決める。
- 放送にとって大切なのはライティング、照明。
- 招致成功後に開催都市がOBSに大会計画を見せ、そこから見せ場(画角)などを考える
- 停電や故障に備えて2つの発電所、電力供給源を確保する
- Host City Contract というものが存在するらしい
- 力のある3つの組織：OBS(IOCにお金を上納する)、組織委員会(開催を実行する)、IOC(スポンサーを取りまとめ開催都市にお金を払う)
- アメリカのTV局NBCがOBSの50%以上のスポンサーになっている。その影響力
- 国際競技団体はそれぞれの団体のスケジュールで動き、そちらを優先する。なぜなら五輪よりもスポンサー収入があるから
- 開催都市の組織委員会(OCOG)はIOC、OBS、IFの下に位置する
- OBSは独立組織だが、トップはIOC委員でもある
- 開催都市組織委員会が見え方を提案するも、決定権はOBSにある
- ロンドン五輪マラソンコース変更はマラソン団体、IFFA国際陸連が主導して決めた

のではないか？

- 五輪はたくさんの利権や組織が絡むので、コミュニケーション能力(communication skill)や調整能力(coordination skill)が大切。
- 韓国(日本を含めたアジア圏)⇔英国(欧州)の働き方、組織論、意思決定論について：ロンドン五輪と平昌五輪の2つの大きな組織で働いた経験から、韓国は官僚的、ヒエラルキーがある。物事を決めるのに時間がかかる。一方でロンドン五輪は競技会場担当長(Venue Managers)の権限が大きかった。能動的に動いていた→追加調査：競技会場担当長(Venue Managers) List を Jae 氏に請求する。少なくとも私の研究対象である4会場だけでも知りたい
- 競技会場担当長(Venue Managers)は2年前ぐらいに決定する
- Jae 氏は平昌五輪組織委員会に Technical adviser として入る。しかし、ロンドン五輪の経験から様々なことを知っている、繋がりがあるゆえ、IOC がオーバーレイ担当者として推薦。また IOC としても彼を守った(後ろから刺されるのを防ぐ)
- OBS は6か月ごと計画をチェックする。
- 組織委員会のすぐ下に FA(Functional Area)部門がある。会場インフラ部門、スポーツ部門、セキュリティ部門などがある→追加調査：ロンドン五輪公式レポートにこの組織図があるはず。チェックする
- Jae 氏は会場インフラ部門下のオーバーレイ担当だったが、組織委員会トップにも直に話ができる関係性を作っていた
- OBS はクライアントである BBC などの放送局を連れてきていた
- Peter Richardson 氏は4年半ロンドン五輪に関わっていた
- Jae 氏は平昌五輪組織委員会に入ってから、あらゆる資料を AAM から手に入れプレゼンしたらしい→追加調査：Jae 氏に請求。OBS の各種情報。A&M からロンドン五輪大会の画像(私も持っている?)。Technical menu for venue design
- Jae 氏は Una Daisy に代わり、ロードサイクル競技施設のカバーした。Jae 氏はロンドン五輪時にどこかの競技会場1つを担当するのではなく、全体を見渡す役割をし、誰かのサポートや臨時の担当者となり陰で支えていた。いわゆる便利屋。それゆえロンドン五輪大会についての全体を薄く広く知っていた。
- The Mall のスタートとゴール地点は他競技(競歩やサイクリング競技)と同じ位置
- HGP のテストイベントでは3000席規模の収容(大会時には15000席)。なぜその規模

で試用したのは、FOP(field of play : 競技スペース)をテストしたかったから。

- 大切なのは Segregation(境界線)であり、FOP を中心に FOH(front of house : 観客エリア)と BOH(back of house : スタッフエリア)が囲む。さらに FOH には PSA(pedestrian searching area : 一般的なゲート、空港のセキュリティゲートをイメージ)が外部とつなぐ。ダイアグラムを図示→追加調査 : Jae 氏に Operational diagram を請求。
- オーバーレイチーム(A&M も Team Populous として)が図面を制作、更新作業を継続。
- ロンドン五輪制作図面の最終版は OB8 であり、A&M がそのメンバーとなったのは OB5 ぐらいからではないか？
- IF からの要望で重要だったのは競技会場の収容人数
- とにかく五輪は政治的である
- 平昌五輪組織委員会に入る前にしたロンドン五輪のプレゼンで、彼らを説得し、披露し、利益を与え、貢献するという能動的な動きが大切だったと振り返る
- Grant Thomas : IOC の会場インフラのアドバイザーであり、IOC Evaluation committee(IOC 評価委員)
- Guy Lodge : Derek Wilson 氏の後任としてオーバーレイ責任者に就任。大会後 James Bully 氏と共に新しい会社を立ち上げる

以上

引用文献および参考文献

引用文献および参考文献

◆五輪公式資料

- 1) An assessment of site options for an olympic village for the xxxth olympiad bid by london(draft), London Planning Advisory Committee, 1998 年
- 2) Appraisal of successful bids: The winning cities for 1996, 2000, 2004, City Characteristics, BOA, 1998 年
- 3) BOA report, British Olympic Association, 2000 年
- 4) Future Host Election, IOC, <https://olympics.com/ioc/future-host-election>
- 5) Games of the XXX Olympiad in 2012, Report by the IOC Candidature Acceptance Working Group to the IOC executive board(IOC 立候補都市調査報告書), IOC, 2004 年
- 6) Greenwich Park in the London Borough of Greenwich, Planning application no. 09/2598/F, London Borough of Greenwich, 2010 年
- 7) Horse Guard Parade in the London Borough of Westminster, Planning application no. 10/09157/FULL, London Borough of Westminster, 2010 年
- 8) IOC Annual Report, IOC, 2020 年
- 9) London2012 Venues, LOCOG, 2013 年
- 10) OFFICIAL REPORT OF THE GAMES OF THE XXV OLYMPIAD BARCELONA, Vol.1-5, COOB'92, 1993 年
- 11) OFFICIAL REPORT OF THE CENTENNIAL OLYMPIC GAMES : ATLANTA, Vol.1-3, ACOG, 1997 年
- 12) OFFICIAL REPORT OF THE XXVII OLYMPIAD : SYDNEY OLYMPIC GAMES, Vol.1-2, SOCOG, 2001 年
- 13) OFFICIAL REPORT OF THE XXVIII OLYMPIAD: ATHENS, Vol.1-3, ATHOC, 2005 年
- 14) OFFICIAL REPORT OF THE BEIJING OLYMPIC GAMES, Vol.1-4, BOCOG, 2009 年
- 15) OFFICIAL REPORT OF THE LONDON 2012 OLYMPIC GAMES, Vol.1-3, LOCOG, 2013 年
- 16) OLYMPIC CHARTER, IOC, 1998 年

- 17) Proceedings of the 21st NATIONAL EQUINE FORUM, NEF, 2013 年
- 18) Response to the questionnaire for cities applying to become Candidate cities to host the Games of the XXX Olympiad and the Paralympic Games in 2012(2012年夏季五輪立候補都市申請書), LOCOG, 2004 年
- 19) Technical Manual: Design Standards for Competition Venues (競技会場設計基準編), IOC, 2005 年
- 20) Technical Manual: Media Written and Photographic (メディア編), IOC, 2005 年
- 21) 図面 equestrian & mod. pen., greenwich park, Site Plan, Overlay & Operations, Detailed Design, POP-A-O-EQ-MZ-GRP-SP-00-001(Rev.B09), LOCOG, 2012 年
- 22) 図面 beach volleyball, horse guards parade, Enlarged Venue Plan, Overlay & Operations, Arena Seating Bowl Level, Detailed Design, POP-A-O-BV-XX-HGP-PL-02-200(Rev. 03), LOCOG, 2012 年

◆五輪公式映像

都市景観を映し出した競技会場の競技映像は IOC によるロンドン五輪の公式記録映像(五輪チャンネル)を解読した。

- 23) Archery: <https://www.youtube.com/watch?v=LqUh6NcWODw>
- 24) Beach Volleyball: <https://www.youtube.com/watch?v=kiFA1p-a9hA>
- 25) Rowing: <https://www.youtube.com/watch?v=x6wHZNWF7pA>
- 26) Cycling BMX: <https://www.youtube.com/watch?v=iMaABzjQXQQ>
- 27) Equestrian-Show jumping & Dressage:
https://www.youtube.com/watch?v=QABaq8Qw_Es
- 28) Equestrian-Show jumping & Dressage:
<https://www.youtube.com/watch?v=2VdW-19jBIk>
- 29) Equestrian-Show jumping & Dressage:
<https://www.youtube.com/watch?v=4AOAhuJ4rU4>
- 30) Hockey: <https://www.youtube.com/watch?v=1VfHfTd5XBQ>
- 31) Athletics, Marathon: <https://www.youtube.com/watch?v=gFNfvY775Qo>
- 32) Athletics, Race Walk: <https://www.youtube.com/watch?v=qAALNtJakOk>
- 33) Cycling, Mountain Bike: https://www.youtube.com/watch?v=3J_rGPcSs0w

- 34) Cycling, Road: <https://www.youtube.com/watch?v=QNp3Ymg8f28>
- 35) Equestrian-Eventing(Cross-Country):
<https://www.youtube.com/watch?v=mpMD0t-vqCk>
- 36) Modern Pentathlon: <https://www.youtube.com/watch?v=cLxguQKbBM8>
- 37) Open Water Swimming: <https://www.youtube.com/watch?v=rzfye6QSA0Q>
- 38) Sailing: <https://www.youtube.com/watch?v=chF00lQIl94>
- 39) Triathlon: <https://www.youtube.com/watch?v=TGi3HqYrWHE>

◆五輪全般

- 40) 石坂友司, コロナとオリンピック 日本社会に残る課題, 人文書院, 2021 年
- 41) 矢ヶ崎紀子, ロンドン五輪前後の英国インバウンド戦略に関する一考察, 大学院紀要 51(国際地域学), pp.61-76, 2014 年
- 42) Brunet, F., The economic impact of the Barcelona Olympic Games,1986-2004
Barcelona: the legacy of the Games 1992-2002, Miquel de Moragas i Miquel Botella, 2002 年
- 43) Cornelius, M., Fernau, J., Dickinson, P., Stuart, M., Delivering London 2012:
Procurement, Proceedings of the Institution of Civil Engineers: Civil
Engineering 164(5), pp.34-39, 2011 年
- 44) Fava, N., Tourism and the city image: the Barcelona Olympic case, 6th
Conference of the International Forum on Urbanism (IFoU), TOURBANISM,
pp.1-10, 2012 年
- 45) Hone, D., Higgins, D., Galloway, I., Kintrea, K., Delivering London 2012:
Organisation and programme, Proceedings of the Institution of Civil Engineers:
Civil Engineering 164(5), pp.5-12, 2011 年
- 46) Lee, Mike, The Race for the 2012 Olympics, Virgin Books, pp5, 2006
- 47) Luckes, David - Oral evidence, Q109, Select Committee on Olympic and
Paralympic Legacy, Oral and written evidence, House of Lords, pp.587, 2013 年
- 48) London Olympics 2012, London Olympics 2012 Cost and Benefit (Summary),
ARUP in association with Insignia Richard Ellis, 2002 年

◆五輪と競技会場

- 49) 榎文彦, 特別寄稿「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」, JIA MAGAZINE 295, pp.010-015, 2013年
- 50) 東垣純平, 阿部浩和, 夏季オリンピック開催後の会場施設の現状: オリンピック・レガシーに関する研究, 観光・都市政策, 都市計画, 学術講演会・建築デザイン発表会, pp.493-494, 2015年
- 51) May, P., et al., Temporary Olympic Structures, INGENIA (Royal Academy of Engineering), Issue 51, pp.2-7, 2012年
- 52) Nimmo, A., Wright, S., Coulson, D., Delivering London 2012: Temporary venues, Civil Engineering Vol.164, pp.59-64, 2011年
- 53) Pennington, P., London 2012 legacy: Design and reuse of temporary equestrian platforms, Proceedings of the Institution of Civil Engineers: Civil Engineering, 167 (6), pp.33-39, 2014年
- 54) MEDIA, 「Trooping the colour」 www.atkinsglobal.com/en-gb/media-centre/features/trooping-the-colour, ATKINS,

◆五輪と都市

- 55) 尾崎正峰, オリンピック招致と都市, 一橋大学スポーツ研究, 26: pp.41-46, 2007年
- 56) 押田 丈治, 都市づくりとの関係から見たメガイベントの動向に関する研究—博覧会とオリンピックに注目して—, 建築学会学術講演梗概集, pp.863-864, 2007年
- 57) 坂井文, インクルーシブ・デザインの都市環境への展開手法に関する一考察 ロンドン・オリンピック・パラリンピック開催を契機とした環境整備に着目して, 日本建築学会計画系論文集 第80巻 第709号, pp.669-676, 2015年
- 58) ニリオ・オリンピア, 都市とオリンピック: 都市の美学と新たな景観, <特集>都市と建築の美学, 美学 66巻 1号, pp.21-29, 2015年
- 59) 根田克彦, イーストロンドンにおけるオリンピック・レガシーと都市計画, 日本地理学会発表要旨集 2016年度日本地理学会秋季学術大会, pp.100178, 2016年
- 60) 根田克彦, イーストロンドンの都市再生と立候補ファイルにおけるオリンピックレガシー計画, 日本都市計画学会 都市計画報告集 No.16, pp.158-168, 2017年
- 61) 三ッ谷洋子, オリンピックとまちづくり—2012年ロンドンオリンピックを例に, 法政

- 大学スポーツ健康学研究, 法政大学スポーツ健康学部, pp.57-63, 2010年
- 62) 村木美貴, ロンドン・オリンピック・パークの土地利用における主体間と計画間連携に関する一考察, 日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.50 No.3, pp.602-607, 2015年
- 63) 山寄一也・岡村祐, 「平昌冬季五輪における競技会場・施設の招致から開催に至る変遷 主会場である平昌五輪プラザと江陵五輪パークをケーススタディとして」, 2018年度日本建築学会大会学術講演梗概集(7066 東北), 2018年
- 64) 吉野薫, ロンドン五輪と都市の再生(特集 国際的なスポーツイベント開催に伴う経済効果と施設設備), 不動産研究 57(2), 日本不動産研究所, pp.41-50, 2015年
- 65) Abrahams, T., et al., Eastside Story, The Olympic Park, The Architects' Journal, 2012年
- 66) Bulley, J., et al., London 2012 legacy: A sustainable model for delivering large sports events, Civil Engineering Vol.168, pp.89-96, 2015年
- 67) Epstein, D., et al., Delivering London 2012: Sustainability strategy, Civil Engineering Vol.164, pp.27-33, 2011年
- 68) Nel-lo, O., The Olympic Games as a tool for urban renewal: the experience of Barcelona'92 Olympic Village, Olympic Villages: A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences: International Symposium, International Olympic Committee, pp.91-96, 1997年
- 69) Nimmo, A., Frost, J., Shaw, S., McNevin, N., Delivering London 2012: Master planning, Civil Engineering Vol.164, pp.13-19, 2011年
- 70) Stephen Essex, Brian Chalkley, Olympic Games: catalyst of urban change, Leisure Studies, Volume 17, Issue 3, pp.187-206, 1998年

◆五輪とレガシー

- 71) 金子史弥, 2012年ロンドンオリンピック・パラリンピックの「レガシー」をめぐる政策的言説の創造と政策実践の展開: 大ロンドン市における「スポーツ・レガシー」に関する取り組みに着目して, 一橋大学スポーツ研究 33, pp.16-33, 2014年
- 72) 舛本直文, 本間恵子, 無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化, 体育・スポーツ哲学研究 36 巻 2 号, pp.97-107, 2014年

- 73) 中井検裕, 村木美貴, 英国都市計画とマスタープラン—合意に基づく政策の実現プログラム, 学芸出版社, 1998 年
- 74) 山嵯一也, 日経 XTECH, ウェブ連載「平昌がつなぐ五輪レガシー」(計 6 回), 2018 年
連載第 1 回: オリンピックパークが 2 つ? 平昌で五輪レガシーを考える :
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00175/00001/>
- 75) 山嵯一也, 日経 XTECH, ウェブ連載 ロンドンに学ぶ「五輪後の街づくり」(計 7 回),
2019 年
連載第 1 回: レガシー計画で大変貌、ロンドン五輪会場跡地の今 五輪スローガン
「次世代への継承」が都市再生の起爆剤に
<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00690/040500001/>
- 76) Daothong, J., Stubbs, D., London 2012 legacy: creating a more sustainable future for London and beyond, Proceedings of the Institution of Civil Engineers - Civil Engineering, Volume 167, Issue 6, pp.3-12, 2014 年

◆五輪とメディア

- 77) 國井 洋一, 2020 年東京オリンピックマラソンコースの動画像による景観分析, ランドスケープ研究, 80 巻 5 号, pp.615-620, 2017 年
- 78) ジャン ボードリヤール(Jean Baudrillard), 今村 仁司 (翻訳), 塚原 史 (翻訳): 消費社会の神話と構造 新装版, 紀伊國屋書店, 2015 年
- 79) 杉本厚夫, 観戦学の視座 —多様化する観戦の楽しみ方— 特集 みるスポーツを考える, 体育の科学/日本体育学会 編 65(10):2015.10, pp.710-714, 2015 年
- 80) 杉本厚夫, "スポーツを「観る」ことと「見る」ことの相克 —駅伝・マラソンを事例として—", スポーツ社会学研究, 25 巻 1 号(特集: 一流スポーツをみる (観る/見る) ということ), p.35-47, 2017 年
- 81) 高木真一 他, カメラワーク情報をベースにした映像の特徴解析に関する検討, 情報処理学会研究報告オーディオビジュアル複合情報処理, 2003 巻 24(2002-AVM-040)号, pp.43-48, 2003 年
- 82) 田中彰 他, イベント駆動型カメラワークによる動的シーンの効果的映像化, 情報処理学会研究報告コンピュータビジョンとイメージメディア, 2000 巻 33(1999-CVIM-121)号, pp.73-80, 2000 年

- 83) トンプソン, リー, スポーツとメディアの相互変容, 体育の科学 / 日本体育学会 編
66(5):2016.10(特集 スポーツのもつ力), pp.335-339, 2016 年
- 84) トンプソン, リー, 史上もっとも成功したメディア・イベントーアメリカにおける
2016 年リオ五輪のテレビ放送ー, スポーツ社会学研究, 25 卷 1 号(特集: 一流スポー
ツをみる (観る/視る) ということ), pp.21-33, 2017 年
- 85) 橋本純一, "特集: 一流スポーツをみる (観る/視る) ということ 特集のねらい" 特
集: 一流スポーツをみる (観る/視る) ということ, スポーツ社会学研究, 25 卷 1 号,
pp.19-20, 2017 年
- 86) 平山賢治, ロンドン五輪はどう観られたか? (オリンピックとメディア 2012), ぎゃら
く (521), 2012-11, 放送批評懇談会, pp.26-31, 2012 年
- 87) 松本英士, ロンドンオリンピック 国際信号制作, 映像情報メディア学会誌, Vol.67,
No.1, pp.58-61, 2013 年
- 88) 山寄一也・岡村祐, 五輪景観を構成するカメラワーク、選手、競技会場、都市景観の
関係性、ロンドン五輪における市内仮設競技会場のケーススタディ, 日本建築学会技
術報告集, 26 卷 64 号 pp.1143-1148, 2020 年
- 89) Billings, A., Olympic Media, Routledge, 2008 年
- 90) Billings, A., Olympic Television, Routledge, 2017 年
- 91) Billings, A., Brown, N., Brown, K., Guoqing, Leeman, M., Ličen, S., Novak, D.,
Rowe, D., From Pride to Smugness and the Nationalism Between: Olympic
Media Consumption Effects on Nationalism Across the Globe, Published online:
Mass Communication and Society, volume16, issue 6, pp.910-932, 2013 年
- 92) Shuhua Zhou, Bin Shen, Cui Zhang & Xin Zhong, Creating a Competitive
Identity: Public Diplomacy in the London Olympics and Media Portrayal, Mass
Communication and Society, Vol.16 Issue4, pp.869-887, 2013 年
- 93) Tang Tang&Roger Cooper, Olympics Everywhere:Predictors of Multiplatform
Media Uses During the 2012 London Olympics, Mass Communication and
Society, Vol.16 Issue4, pp.850-868, 2013 年
- 94) Jiang, Q., Celebrity Athletes, Soft Power and National Identity: Hong Kong
Newspaper Coverage of the Olympic Champions of Beijing 2008 and London
2012, Published online: Mass Communication and Society, volume16, issue 6,

pp.888-909, 2013 年

- 95) McGillivray, D., Frew, M., From Fan Parks to Live Sites: Mega events and the territorialisation of urban space, *Urban Studies*, 52 (14), pp.2649-2663, 2015 年

◆スタジアムと競技会場

- 96) 江口隆志, 北九州スタジアム(ミクニワールドスタジアム北九州)の取り組み, 特集スポーツ～スポーツで「つながる」～, *Civil Engineering Consultant*, Vol.277, pp.010-013, 2017 年
- 97) 小林至, 武藤泰明, プロ野球ビジネスのダイバーシティ戦略 改革は辺境から。地域化と多様化と独立リーグと, *PHP 研究所*, pp.155-159, 2019 年
- 98) 仙田満, 金箱温春, 広島市民球場, 建築雑誌増刊作品選集 2011, 日本建築学会, pp.184-185, 2011 年
- 99) 橋本純一, ポピュラー・スポーツとスポーツ観戦環境～近年のスタジアム/アリーナの建設政策を中心に～, 『信州大学環境科学年報』第 36 号 信州大学環境科学研究会, pp.35-42, 2014 年
- 100) 橋本純一, スポーツ観戦環境の設計(I)～モダンスタジアム・デザインの変遷と具体例～, 『信州大学環境科学年報』第 39 号 信州大学環境科学研究会, pp.1-6, 2017 年
- 101) 橋本純一, スポーツ観戦環境の設計(II)～伝統的スタジアムと欧州先進スタジアム建設～, 『信州大学環境科学年報』第 40 号 信州大学環境科学研究会, pp.47-56, 2018 年
- 102) 橋本純一, スポーツ観戦環境の設計 (III) ～変容するスポーツ・ベニューとその未来～, 『信州大学環境科学年報』第 41 号 信州大学環境科学研究会, pp.72-79, 2019 年
- 103) 橋本純一, 都市におけるスタジアム/アリーナの機能と意味 (I) ～モダンからポスト・モダンへ～, 『信州大学環境科学年報』第 42 号 信州大学環境科学研究会, pp.36-44, 2020 年
- 104) John, G., Sheard, R. and Ben V., *Stadia: The Populous Design and Development Guide*, Routledge, 2013 年
- 105) John, G., et al., *Olympic Stadia: Theatres of Dreams*, Routledge, 2019 年

- 106) A Stadium for Bordeaux
<https://www.herzogdemeuron.com/index/projects/complete-works/351-375/367-nouveau-stade-de-bordeaux.html>, accessed 2021.08.31
- 107) PNC Park (Pittsburgh stadium), <https://populous.com/project/pnc-park> ,
accessed 2020.11.09

◆都市景観

- 108) イーフー トゥアン(Yi Fu Tuan), トポフィリアー人間と環境, 小野有五(翻訳), 阿部一(翻訳), せりか書房, 1992 年
- 109) 岡村祐, 英国ロンドンにおける新・眺望景観保全計画の基本的枠組み, 日本建築学会技術報告集, 16 巻 32 号, pp.329-334, 2010 年
- 110) 西村幸夫, 都市保全計画—歴史・文化・自然を活かしたまちづくり, 東京大学出版会, pp.417-479, 2004 年
- 111) London View Management Framework, Supplementary Planning Guidance, Greater London Authority, 2012 年

◆景観と借景

- 112) 土工学大系 13 景観論, 彰国社, 1977 年
- 113) 伊藤ていじ, 古都のデザイン 借景と坪庭, 淡交社, 1965 年
- 114) 上原敬二, 借景とヴィスタ, 造園学雑誌, 2(1), pp.121-127, 1926 年
- 115) 岡本太郎, 日本の伝統, 光文社, 2005 年
- 116) 篠原他, 景観用語事典 増補改訂第二版, 彰国社, 2021 年
- 117) 進士五十八, 「借景」に関する研究, 造園雑誌 50(2), pp.77-88, 1986 年
- 118) 西沢文隆, 庭園論 I:人と庭と建築の間 (西沢文隆小論集 2), 相模書房, 1975 年
- 119) 本中真, 借景(日本の美術 5), 至文堂, 1997 年

◆都市景観と映像

- 120) 神谷文子, 浦山益郎, 北原理雄, 「主題要素の写され方からみた都市景観写真の構図に関する研究: 欧米 10 都市の観光ガイドブックを事例として」, 日本建築学会計画系論文集 65 巻 528 号, pp.179-186, 2000 年

- 121) 姫野由香, 佐藤誠治, 小林祐司, 「観光画像からみた景観特性の解析に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集 67 巻 559 号, pp.187-193, 2002 年
- 122) 宗方淳, 大井尚行, 平手小太郎, 安岡正人, 「スライドを用いた都市景観評価に視野設定が及ぼす影響に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集 68 巻 563 号, pp.69-75, 2003 年

◆SDGs

- 123) 平本督太郎, 図解でわかる SDGs 「17 の目標」と「自分にできること」がわかる本, メイツ出版, pp.18-19, 2021 年

謝辞

本論文をまとめるにあたる多くの方々のご支援とご指導を頂いた。以下、研究に至る経緯と共に記し、感謝いたします。

本研究のきっかけをつかんだのは、ロンドン五輪開会式のリハーサルを見たメインスタジアムの観客席であった。ボランティアパフォーマーによる「産業革命」の演技のクライマックス、熱せられた鉄の5つの輪が火花とともに重なり五輪リングとなった瞬間、私が携わった数々のロンドン五輪プロジェクトの経験も1つにつながった。そして、携わっていたにもかかわらず、そのコンセプトの本質を理解してなったことに気づかされた。その思いは大会が開幕し、多くの英国人選手が金メダルを獲得するにつれ、確信に代わる。20世紀には都市開発ありきで計画・実現する五輪と言うスポーツイベントを、ロンドンは自国の文化を発信する機会として捉え、21世紀版にアップデートして世界に発信した。英国の持つ大局観に打ちのめされた私の敗北感に似たその感情は、日本への帰国を決意させた。

まず、当時の勤務先であるアライズ・アンド・モリソン・アーキテクト(現・アライズ・アンド・モリソン)に感謝したい。その前の勤務先を解雇され、ロンドンで途方に暮れていた私を拾ってくれた建築事務所では、ロンドン五輪招致計画の模型制作、レガシー計画、そしてグリニッジ・パーク馬術競技会場現場監理を担当する機会を得た。それら現場での経験が本研究の基盤となっている。博士研究を開始すると、ロンドンへの現地調査では当時の同僚たちにヒアリング調査という形で再会を果たした。彼らからは、新たな事実、関係者へ紹介、そして数々の貴重な資料の提供を頂いた。

12年間の英国・ロンドンでの建築士生活を終え、2013年1月に日本へ帰国すると、今度は東京で五輪を開催することが決まった。しかし、これまでの五輪同様、東京も招致成功後、数々の問題が露呈する。そのたびに、私はロンドン五輪での経験を様々な場所で、インタビュー、レクチャー、寄稿というかたちで伝えた。博士研究を経て、振り返ると、それらは私の建築士としての経験をただ伝えたものであったが、これらも本研究のきっかけとなった。

これらを元に博士研究は出来ないだろうか？このような私の漠然とした相談に対して、首都大学東京大学院(現・東京都立大学大学院)・観光科学域の助教(現・金沢工業大学工学部環境土木工学科講師)の片桐由希子さんは、准教授である岡村祐先生を紹介してくれた。片桐さんの慧眼がなければ本研究の始まりはなかった。南大沢のキャンパスに通う日々が始まった。

指導教官である岡村祐先生は、数々のロンドン市の眺望景観に関する論文を執筆されており、建築と都市を主に活動してきた私に景観という視座を与えてくださった。先生との議論がなければ、ロンドンで生活していた当時、平坦なロンドンの街並みを一望できるあの丘からの眺めに特別な意味があることを知ることもなかっただろう。他にも研究の基礎、調査の仕方、論文の書き方、プレゼンスライドの作り方など、それまで我流で身に着けたOJTによるスキルを、アカデミックのスキルへご指導、ご鞭撻頂いた。

同様に、観光科学域の清水哲夫先生からは観光に寄与する五輪の計画・実現という計画学、川原晋先生からは五輪開催における都市に与える影響をまちづくりの観点から、鋭く、丁寧に、そして根気強くご指導、ご鞭撻頂いた。また、建築科学域の小泉雅生先生には、建築の都市環境における新たな役割について、ご指導、ご鞭撻頂いた。

そして、ロンドンから東京へ帰国し、生活の基盤を築く時期に博士論文をまとめると言い出した私に付き合わされる家族には感謝しかありません。

本論文をまとめるのに、ロンドン五輪から10年の時間が経ってしまった。コロナの影響で自由な移動を制限される日々だが、いつの日か、ロンドンで支援を頂いた皆に御礼を伝えに、そして、あの夏の日ことを思い返しながら、現地を訪れたい。

2022年3月
山寄一也